

【完結】 デジモンクロニクル——旧世界へ、シンセカイより。

行方不明

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

D・C・2018 三大ターミナルの悲劇：未解決。

本来D・C・2003に解決したはずの悲劇。

それが未だ終わっていない。何事もなかったように続いている。

そんな世界で、堂本コータとドルモンは生きていた。

だからこそ、今この時を以て物語は■■■する。

これは、大いなる正義の物語。

これはデジモンペンデュラムXのオマケ漫画『デジモンクロニクル』の二次創作です。

デジモンクロニクルのストーリーを主軸に、ゼヴオリューション要素やオリジナル要素を加えて再構成したものになります。

9 / 2 完結しました。

目次

プロローグ	1
序章：旧デジタルワールドの皇帝	
第一話く旧世界く	5
第二話く未知との遭遇く	14
第三話く崩壊する旧きモノく	23
第一章：ベルサンデイの白き聖騎士	
第四話く新世界く	33
第五話くどんぶらこつこどんぶらこく	40
第六話く洞窟に潜む者く	47
第七話く誰が敵かく	54
第八話くレジスタンスく	60
第九話く投げ込まれた火種く	68
第十話く止まらぬ争いく	74
第十一話く空より来る絶望の騎士く	81
第十二話くニセモノの戦いく	89
第十三話くこの期に及んで奇跡よ起きろく	97
第十四話く諦めるな、突き進めく	103
第十五話く新たな場所に向けてく	113
第二章：ウルドの感染源	
第十六話く過去世界く	120
第十七話くトウエニストく	127
第十八話く赤の到達者く	134
第十九話く想いの生まれる場所く	141

第二十話	乙女(笑)	148
第二十一話	再会	155
第二十二話	風の噂	163
第二十三話	魔法世界の英雄	170
第二十四話	レジスタンス	178
第二十五話	武者	185
第二十六話	友情の行方	194
第二十七話	蛇鉄封神丸	203
第二十八話	Legend Arms	211
第三章：スクルドの悪魔		
第二十九話	未来世界	220
第三十話	アポイントメント	228
第三十一話	都市の在り方	236
第三十二話	レジスタンス	245
第三十三話	個か全か	253
第三十四話	地下水路大疾走	260
第三十五話	理想にこそ強きは宿る	268
第三十六話	合流	276
第三十七話	空中秘密基地	283
第三十八話	何事にも終わりはある	291
第三十九話	悪魔の叫び	299
第四十話	意味なき進化	308
第四十一話	希望の光	317
第四章：NEWデジタルワールドの死		
第四十二話	終末の時	326

第四十三話	〜 黙示録の竜	334
第四十四話	〜 現在位置	341
第四十五話	〜 ダークエリアの事情	350
第四十六話	〜 絶望の騎士、再来	357
第四十七話	〜 偉大なる吸血鬼	365
第四十八話	〜 真実	373
第四十九話	〜 リブート	380
第五十話	〜 かつてからの進撃	390
最終章：深世界の敗北者		
第五十一話	〜 デジモンクロニクル	400
第五十二話	〜 開戦	410
第五十三話	〜 変異進化	417
第五十四話	〜 再戦	425
第五十五話	〜 巡り巡って自分へ還る	432
第五十六話	〜 遅れてくる者は	439
第五十七話	〜 軌跡によつて奇跡は起こる	446
第五十八話	〜 最後の壁こそ、究極の敵	454
第五十九話	〜 創世	462
第六十話	〜 歴史の証明者たち	470
第六十一話	〜 見えなくともそこに在る	477
第六十二話	〜 それが世の道理	483
エピローグ		489

プロローグ

D・C・2003 NEWデジタルワールド中枢

どことも知れない、空間。

天は遙か遠く、地は果てしなく、しかし、見える風景はどこまでも機械的。ああ、これが生命溢れる世界の一部だとは誰だっと思わない。

見れば誰しもがこう思うだろう。まるで機械のような箱庭だと。

そこは日が沈んだ直後に電気を点けずにいた部屋のように、仄かに薄暗い。

だが、しかし。そんな場所で、光るものがあつた。しかも、二つ。まるで星の輝きのように明滅するそれらの光は、たびたび激しくぶつかり合つて止まない。

光り輝いた瞬間に確かに見えるのは、黒と白。黒と白がぶつかり合っている。いや、戦っているのだ。

白と黒、それはどちらも人型で、あるいは戦士か——否、聖騎士だ。

黒い聖騎士がその手に光の剣を持って果敢に切り込む。白い聖騎士が未来を読むかのようにそれに応じる。

「ふっ」

「はっ」

また、技がぶつかり合う。

彼らのどちらが繰り出すどれもが、相手の命を刈り取るための必殺の一撃。それなのにどちらが傷つくことも決してない。

まさに永遠を錯覚する、戦闘という名の舞踊。

そう見えるのは、この光景が互いに命を燃やす決戦だからこそその光景だからだろう。

彼らは自らの信念で以て戦っているのだ。自らの信念はたかがこれくらいで折れるものではない、と証明し続けているのだ。敵の信念の込められた必殺を、こんな柔いものは必殺足りえないと、証明し続けているのだ。

どれだけの能力があらうと、どれほどの強者たらうと、この戦闘の

中には混ざれまい。この戦いは希少でさえ言い足りぬ一部の強者が、更に己を研ぎ澄ますことで、実力差を、常識を、ありとあらゆる壁を乗り越えた末の奇跡の一戦なのだ。

「らあつ」

「はあつ」

これはまさに頂上決戦だ。

だが、ああ、しかし。どれほどの戦いだらうと。始まりがあれば終わりがある。

往々にして、それは唐突に。

黒い聖騎士が駆ける。

「■■■■■■■■■■——！」

死を切り裂き未来を切り拓いた黒金の太剣が、万を斬る。

世界を、空間を、敵を、信念を、斬る。

己の相棒との日々を、己の信念を、託されたものを、その全てを込めて斬る。

「っ、■■■■■■■■■■——！」

未来を知り動く白い聖騎士を無理矢理に越えて、その一撃が刻まれる。

ああ、果たしてそれは白い聖騎士に限界が来ていた結果だったのか。それとも、白い聖騎士の対応力を凌ぐ一撃だったのか。はたまた白い聖騎士の知る未来さえも切り裂いた奇跡の一撃だったのか。

幾度となく繰り返された必殺の一撃が、ようやく必殺の名を冠する。

たった一撃だ。されど、この史上最強の決戦に終焉をもたらした、大いなる一撃だ。

「……なるほど。これが結末か」

振り抜かれた黒金の太剣が、白い聖騎士を切り裂いて——それが、決着。

ああ、これが、これこそがこのクロニクルの結末。

崩れ落ちていく白い聖騎士を眺めながら、黒い聖騎士は天を仰ぎ見る。機械的なまでの天がその目に映って、その無粋さに苦笑った。

「ああ、勝ったぞ……俺たちは未来を掴めたんだ。なあ、■■■。お前との約束通り、俺は——」黒い聖騎士の呟き。そこには万の想いが込められていた。

ああ、だがしかし。悲しいかな、この結末こそが契機だった。

——この結末は、認められません。

唐突に、声が聞こえた。

機械的で、女性的な、声が。

「な、に？」意味がわからないとばかりに、黒い聖騎士が呟きを漏らす。ああ、きつと彼は、否——彼らは間違えてしまったのだ。選択を、対応を、結末を、必死に激動の時代を生きた彼らは間違えてしまったのだ。

いや、あるいは彼らは哀れにも前提からして勘違いしてしまっていたのかもしれない。選択や対応を間違える以前に、初めから間違ったレールの上になっていたのかもしれない。

どちらにせよ。

我武者羅に突っ走ってようやくたどり着いた、望んだ結末が切欠とはまた皮肉でしかないか。

——『ふざけるな。なんだこの結末は』

声が聞こえた。

どこからか生物的で、男性的な、声が。

——この結末では、いけません。

——『ふざけるな。こんなもので納得がいくものか』

声が重なる。

そして。

——再起動ホストコンピュータ《イグドラシル》の名において、世界をリブートします。

——『ふざけるな。今度こそ、我々は——』

そして、聞こえてきた声、その内容。

それは黒い聖騎士が断じて認められることではなかった。

「っ。待て、イグドラシル——！」

声を上げる。だが、黒い聖騎士の想いはどこにも届かない。

世界の電源が切れる。まるでパソコンを強制的にシャットダウンしたかのように、世界のありとあらゆる感覚が黒で落ちる。「すまん、しくった。■■■■……」黒い聖騎士はここにはいない者に謝る。

やがて、黒い聖騎士も黒に呑まれた。

D. C. 2018 人間世界？

ああ、またこの夢だ。

■■■■は静かに思う。いつから見始めているのか彼は覚えていないが、何度も見ていることだけは覚えている夢。

どこか、何か変な生き物がたくさんいる異世界としか言いようがない世界、そこで自分が生きている夢。

その世界はコンピュータの中のような光景がいくつもあり夢の中にしては凝っていて、夢というよりは一昔前のSFの仮想世界のようにさえ思える。

そこで生きている生き物も、妙に凝っている。機械、虫、ドラゴン、恐竜、動物、人、神、天使、悪魔——さまざまな存在が同じ規格の生物として生きていて、節操のない漫画のようにさえ思える。

ああ、そんなごつちや混ぜの変テコなビックリ面白世界だから、そんな世界に生きれる夢というのなら楽しいと思えるはずなのに。

何故だろうか、どうしてだろうか、■■■■はどうしてもその夢が悪夢だと思うのだ。内容も覚えていないのに。

そして、今日も彼は目を覚ます。夢の中へと、目を覚ましていく。

序章：旧デジタルワールドの皇帝

第一話く旧世界く

D. C. 2018 旧デジタルワールド

「……何があつたんだ？」

彼は目を覚まし、第一声を呟く。

今、彼は病衣で荒野に突っ立っている。ちなみに言うとも目を覚ましたという表現通り、気がつけば彼はここにいた状態であつた。

目を覚ました瞬間に草木の一つも生えていないような荒野に突っ立っていたら、誰だつて混乱するだろう。その例に漏れず、「ここはどこ？」と彼は混乱状態にあつた。

「なぜだ……オレは……あれ、オレは？」

つーか、自分に関する記憶さえない。

ここはどこ以前に、「私は誰？」状態だつた。もはや記憶喪失の定番、テンプレビンゴ確定である。

「……うーむ」

幸いなことに服はあり、スリッパもある。

ああ、本当に幸いである。彼はそう思い込むことにした。

さて、どうするかなあ、と腕を組んで彼は考え込んだ。なにせ右を見て荒野、左を見ても荒野、前を見ても荒野だ。どうしようもない。さらに、上を見れば昼間だというのに視界を覆うほどの巨大な星が一つだけ見えて、ここが地球ではないことを思い知らされる。

途方に暮れるしかない。

「……」

途方に暮れて、腕を組んで考える。

「……」

考える。

「……」

考えた。

そして、その結果。

「ぐう」

彼はダウンした。^{眠っ}

いや、決して眠ろうとして眠ったのではなく、気絶するように突然に眠ってしまっただけなのだが。

もしかしたら、限界を超えた時点で脳みそが強制停止したのかもしれない。

まあ、この状況で自発的に眠れたのなら、糞度胸と言うしかないが。

「……………」

そして、眠っていた彼は不意に気づいた。

自分が誰かに声をかけられていることに。

「……………」

続いて、彼は感じた。

自分が誰かに揺すられていることを。

「……………」

やがて、彼は感じた。

自分が誰かに腹を殴られていることを。

さすがにここまでくれば彼とて、覚醒する。腹に感じる痛みを無視して、ゆっくりと目を開ける。

「あれ、真っ暗だ」

そして、彼は目の前が真っ暗だったことに気がつく。

頭が万力で締められたかのようにギリギリと痛い。身体が金縛りにあつたかのように重い。

そこまで認識して、彼はやっと気づいた。

「ふっ」

笑いが堪えられない。

彼は自分の為すべきことがやっとわかった。己のすべてを賭けて、やるべきことが。

だから、彼は全身全霊で——。

「どらあっ」

——目の前をぶん殴った。

「ぐへらっ」

鈍い声が彼の耳に届く。

気がつけば彼の視界は開け、頭にあつた痛みは引き、身体に乗っていた重さはなくなった。

自由になつた身体、明るい視界を彼は享受する。まあ、見える光景は眠る前と何にも変わらないのだが。

いや、違うものが一つある。

それは。

「……痛い」

それは。

「何してんだよっ」

「うるせー、起きなかつたんだから仕方ないだろー」

それは、青紫色の獣竜がいるということか。

おおよそ人間の世界には存在しないだろう生き物がいる。

「起きないだけで人の上に乗って噛み付くやつがあるかつ、今度からそれやめろドルモン！」

それは、ドルモンと呼ばれるデジモンだ。

「えー。いちいち文句あるなあ、コータ」

「コータ？」

「ん？　どうかしたかー？」

「あ、いや。何でもないぞ？」と言いつつ、コータは首を傾げた。

おかしい。

コータは首を傾げる。

目の前の生き物がドルモンということ、自分の名前がコータということ、この世界がデジタルワールドという世界で、ドルモンはデジモンというこの世界の生物であること、彼と自分はパートナー関係になつていること——先ほどまで知らなかったことが、まるでずっと前から知っていたようになっていた。

ああ、おかしい。気持ち悪い。おかしいことをおかしいと思えない気持ち悪さを、コータは感じていた。まるで読んだことのない本の内容を知っているかのような、得体の知れない感情を抱いてしまつていた。

「おい、コータ。本当に大丈夫か？」

「大丈夫だ。ちよつと記憶に混乱があるだけで……」

「それ大丈夫じゃないよなあっ！」

ドルモンにガクガクと肩を揺すられるが、コータは笑って誤魔化すしかない。

「何を覚えてるんだっ」

「何を覚えているんだ？」

「それは俺のセリフであーっ。おい、コータしつかりしろっ」

ドルモンの揺さぶりが激しさを増す。

激しかった。あんまりにも激しすぎて、もはやコータは何も考えられなくなっていた。そんな最中で、僅かに思うのは、何か身体の奥底から熱いものが込み上げてくるということだけで。

「まさか俺のことまで忘れてないよな？ なっ」

「大丈夫大丈夫……」

「おっ？」

「無事に限界が——」

「はっ？」

そして、コータはゲボロブファア。

とても熱くて臭いものが身体の奥底から解き放たれたのだった。目の前のドルモンに向けて。

「うがーっ、目が、鼻が、うわー、目が、鼻が、うわー」

「ゲボツ、ウエツ、ウエエエエ……」

「まだ出すんかいっ、ちよ、いい加減やめろ。俺に吐くな、地面に吐け、俺はゲロ袋じゃないいいいいいい！」

ああ、そうして事が収まったのはこの十分後のこと。

ドルモンの毛皮にゲロの匂いが染み付いてからのことだった。

そんなこんなで、コータとドルモンは荒野を歩いていった。

ちなみに、今現在のコータの服装は先ほどまでのものとは違う。ジャケットとズボンという、どこにでもあるような一般的なものだ。なぜかドルモンが持っていた。

まあ、一方のコータは受け取った時に匂いを嗅いだりしたのだが。

「なんかやつぱりゲロ臭い気がする」

「そんな訳無いだろうがっ」

「っーか、なんでドルモンが持ってたんだよ」

「知るかっ」

話しながら、歩く。歩くが、徒歩での移動スピードなどたかが知れているもので。

見渡す限りの荒野に変化が訪れるのは、まだまだ先になりそうだった。

「……ダメだ。これじゃあ時間かかりすぎる。こんな荒野ずっといるなんて嫌だし、そうだ。コーター！」

「……一応聞くけど、なんだ？」

「背中に乗れ。俺が走るっ」

自信満々にドルモンは自分の背中を指差した。

「ヘイツ、その彼女ー乗っていかないっ？」とでも言いたいかのようだ。アクションが古い。

まあ、どんな言い方だろうとコータは乗車拒否するのだが。

「嫌だよ」

「なんでだっ」

「お前の背中、臭いじゃんか」

「お前のせいだよなあっ」

わーんっ、と涙ながらにドルモンはコータに噛み付いた。

どうでもいいが、やはり臭い。口臭か、それとも毛に染み込んだ飛沫の匂いか、それはともかく。

「痛い！ 重い！ 離せーっ」

「お前が背中に乗るって言うまで離すもんかーっ」

「おいばかやめろ齒に力を込めるな顎に力を入れんな、頭が千切れるっ」

「乗るって言えー！」

そんなこんなで、コータはドルモンの背中に乗ることになる。

「よっし、掴まってるよ」

「……」

「コータ？」

「ああ、うん。しっかりと掴まってるよ」

やはり、臭い。が、さすがにこれ以上の頭部へのダメージはさすがにシヤレにならないので、コータは口から出そうになった言葉を飲み込んだ。

そして、次の瞬間にドルモンが走り出す。自転車並みのスピードで駆けていく。

さすがに速い。疲れないし、尻を上にな下に叩きつける乗り心地にさえ目を瞑れば最高だった。

「ドルモン、もう少し丁寧に頼むわ」

「おっしや任せとけ。おりやあああああ！」

「違う違う、まてまてスピードを上げるなあつ。尻が死ぬ、あああああああああああ！」

日が傾き始めた中で、コータの悲鳴が世界に響き渡る。

まあ、誰もいないような荒野だ。その悲鳴を聞いたものなど、ほとんどいない。

そうして、ドルモンが頑張った甲斐があつたのだろう。

「尻が痛い。おのれ、調子に乗りやがってえ」

「ははっ。コータ情けねーなっ。痛っ、殴るなよっ」

「覚えてろ……」

日がとつぷりと暮れた頃、彼らは幅三メートルもないような、小さな川の辺で休むことができていた。

「うぐ、明日までに治るよなあ？」

尻が痛んで座ることができないから、コータは寝転がって上を見る。

空には相変わらず巨大な星が一つだけ輝いていて、幻想的だった。他の星が何一つ見えないという点、ある意味では不気味であったが。

「……オレの知る世界とは違うんだよなあ」と呟いたコータを、ドルモンが上から覗き込む。その目は、どこか遠慮の光があつた。

「そういや、コータは……記憶が混乱してるって言ったけど。その、あの、どこまで覚えてるんだ？」

「ああ、ま、あんまりな。正直に言えばまだいろいろと混乱してる」
「……それは」

「ちゃんとお前のことは思い出してるぞ？ 何度もドルモンって呼んだら？」

「っ、うるせー。わかってるよっ」

ドルモンが焦ったようにコータの視界から外れた。その声にはどこか羞恥と喜色があつて、コータは静かに笑う。

「なんでオレがこの世界にいるのかって、それは思い出せないけど」

「あれ、そんなの初めからわかってなかっただろ？」

「……そう、だったか？」

「おう。それを知るためにも、俺たちは旅してたんじゃないか」

「ああ、そう言えばそうだった気もするな」

一つ一つ知識を学んでいくように、言われれば、気づけば、思い出す。思い出すからには知っているはずなのに。

何とも言えないもどかしさだけがあつて、コータは口を結ぶ。

「もしかしたらコータも、影響を受けたのかなあ」ドルモンは不安そうに言う。

「影響？」

「ああ、だって今のデジタルワールドは普通じゃないだろ？ コータは本来はここにはいない人間だし、影響が出たっておかしくない」

「影響……」

デジタルワールド。デジタル的な理に支配される、人間の世界とは別次元にある異世界。自分はある日突然、なぜかこの世界に来てしまった——というのを、コータは何となく思い出した。それからあまり日が過ぎていないことも。

「こそ、影響。さっきだって、吹っ飛んでったんだし」

「吹っ飛んでった？」

「あつ、やべ」

何か聞き捨てならない言葉があつた気がして、コータはドルモンに

詰め寄る。

ドルモンは目を泳がしていた、のだが、逃げ切れないと見るや諦めて話し始める。

「ほら、襲われたんだよ。いつものように」

「いつものように。って、そう言えば確かに毎日毎日戦っちゃあ戦つてを繰り返してたな……」

「それで、ほら。コータは敵の技を受けて吹っ飛んでったんだ」

「……それだけか？」

「え？」

何か隠している気がする。コータはさらにドルモンに詰め寄った。

「……」

「……」

静かになる。

「ま、まあ、大したことじゃないからあつ」

そして、ドルモンは誤魔化した。

コータは「はあ」と溜息を吐く。まあ、ドルモンの反応からしてあまり大したことではないのだろう、と無理矢理に自分を納得させた。それくらい信頼は——やはり何か気持ち悪いが、それでも信頼はあるのだ。

ちなみに、ドルモンの誤魔化した内容は、ただ単にコータを吹っ飛ばした犯人がドルモンだったというだけの話である。

いつものように襲撃者に襲われた時、彼は咄嗟に無理な機動で動き、結果として背中に乗っていたコータを弾き飛ばしたのだ。そして、そのまま戦いに明け暮れたというのが事の顛末である。

「……そう言えば普通じゃないんだよな。今のここは」誤魔化されてやったついでに、コータはふと呟いた。

「そう。もう終わっちゃった世界だからね……」

ドルモンとコータは空を見上げる。

巨大な星が見えた。ああ、そこそは新世界。もう終わった世界である。こことは違う、始まったばかりの世界。

だが、それでも。この世界をもう終わったものだと、コータは言

いたくなくて。

「まだ終わってないさ。終わるもんか。そうだろ？」コータは言い聞かせるように呟く。

「……そうだね。そうかもね」ドルモンも同意した。

辺りがしんと静かになる。

どちらも声を発しなくて、静かな時間だけが過ぎていった。

「そろそろ休むか」

「おー」

やがて、どちらからということもなく二人は同時に休む体勢に入った。

明日に、否、いつかに備えるように二人は身体を休めて眠りにつく

——はずだった。

「……気づいてるよな？」

「おう、どうするコータ？」

そんな二人に何かが迫る。

まだ今日は終わらない。

第二話く未知との遭遇く

慌ただしい音が近づいてくる。明らかな足音。それも、一つではない。

何者かが、近づいてきている——！

「ドルモンっ！」

「おうっ」

コータとドルモンはすぐに立ち上がって、警戒するように音の方向に目を向けた。

夜の闇の中、うつすらと何かが見えた。だんだんと近づいてきている何かが見えた。だが、まだよく見えない。

とはいえ、生き物が外を認識する方法は視界だけに収まらない。例えば、聴覚。コータとドルモンの耳は、確かに音を捉えていた。足音と共に聞こえる、虫のような羽音。

ああ、ここまで来ればコータもドルモンも何が近づいてきているか、わかっていた。

「っ、クワガーモンだっ」

クワガーモン。成熟期と呼ばれるレベルの、巨大な赤いクワガタのようなデジモンだ。

ちなみに、ドルモンは成熟期の前の成長期と呼ばれるレベルで、言ってしまうえば格下である。戦うのは分が悪い。だが。

「どうする——！」

「仕方ない、やるぞっ」

だが、ここは荒野で、付近にある川は浅い。隠れる場所はない。逃げる時間もない。

自分たちを狙わないということも、あ・り・え・な・い。だって、ドルモンは抗体持ちなのだから。

だから、戦うしかない。現実逃避する時間はない。生き残りたいのなら、ありえない可能性を妄想するよりも、僅かな可能性に全力で賭けるしかない。

それを、コータもドルモンも知ってわかっている。

「初撃、こつちから行くぞ。甲殻は硬い。同じ場所に全力で叩き込んで貫く」

「おう。メタルキャノン」ッ」

瞬間、ドルモンの口から吐き出されたのは、鉄球。生物的にはありえない現象だが、デジモンは地球の生物の範疇で語れる存在ではない。

それぞれの種に特徴があつて、特殊な能力を備えているものもいて、その特徴や能力を武器とするのがデジモンだからこそ。

「おらあつ、おらあつ、おらあつ、おらあつ」

絶えず吐き出され続ける鉄球。

そのどれもが、寸分違わずに一直線に飛んでいく。

「――！」

それは、まるで意図していなかったとばかりに、クワガーモンの腹に吸い込まれるように入ってしまった。鉄球はクワガーモンの腹に当たる度、碎ける。

それでも、続ける。

これが最初にして最後の好奇。逃す馬鹿はいない。

「おらあつ、おらあつ、おらあつ、おらあつ」

ドルモンは体力の続く限り、クワガーモンの腹に鉄球を吐き出し続けた。

「――！」

クワガーモンがいい加減にしろとばかりに動き出す。

「つ、ドルモン！ 引くなつ」

「おうようつ」

だが、ここで引いては勝ち目がなくなってしまう。

だから、ドルモンは引きたい気持ちを抑えて、鉄球を吐き出すことに専念する。

そして、数分後。

「……………」

地に伏したのはクワガーモンの方だった。

コータとドルモンは何とか生き残ることができたのだ。

ああ、何とか、本当に何とか生き残れたとしか言えない。

なにせ、クワガーマンはまだ死んでいない。ドルモンの全力をもつてしても、気絶させることしかできなかつたのだ。トドメを刺すだけの能力と体力もない。

なので、彼らのやるべきことはクワガーマンが起き上がる前に逃げ出すことなのだが。

「こ、コーたあ……」

「つく、おまえ、重いんだよ……！」

「ひでえよおー」

さすがに人一人を背負って走れるほどの獣竜だから、かなり重い。どちらも疲れているので、なおさら重い。

コータはドルモンを背負って歩くが、はつきり言いつて遅い。その足は生まれたての小鹿のように震えていて、息は興奮した変質者のように荒く、その速度はナメクジに例えても良いほどに遅い。

「つくうううううー」力を込めて、一歩一歩着実にコータは歩く。

そんな彼の目の前を、とても腹立つことに、二足歩行の猫が呑気そうに横切った。

「……は？」

「痛っ。ひどい、落とすなよっ。おい、コータ？ 聞いてんのか？ おいつ」

ドルモンの抗議の声も届かない。

コータは目の前にいる猫——正確には、猫のようなデジモンに驚いていた。まあ、二足歩行で歩く猫がいたら、人間ならば誰だつて目を奪われるだろうが。

「……あの」

猫が声を発する。

そこでようやく、ドルモンも目の前の猫に気づいたらしい。コータもドルモンも、猫の一挙一動を注視する。

「助けてくれて、ありがとう……にゃ」そして聞こえてきた言葉は、意味不明だった。

「は？」

いや、もちろん言葉の意味はわかる。

だが、コータもドルモンも目の前の猫を助けた記憶などない。二人は首を傾げた。

「えっと、クワガーモンから助けてくれたからにや」

「……あぁっ！」

「もしかして」

聞けば、クワガーモンに襲われていたのはこの猫だったらしい。ということとは、何もしなくてもコータたちが襲われた可能性は低かったということだ。

無駄に疲れてしまった、とコータたちは肩が重くなった気がした。

いや、まあ、このご時世では貴重である友好的な相手を助けられたのだから、全くの無駄ではなかったのだが。

「ニーはメイクーモンっていうにや！」

「メイクーモン……う？」

聞きなれない名前に、コータはドルモンを見る。

ドルモンは首を横に振った。どうやら、知らないらしい。

「おっと、オレはコータ。よろしく」

「俺はドルモンだ。よろしくなっ」

「っ。よろしくにや！」

コータたちから差し出された手を、メイクーモンは本当に嬉しそうに握った。というか、ちよつと泣きそうになっている。

「ど、どうかしたのか？」

「うっ、ニーはずっと……みんなから襲われてたから……こんなに優しくしてくれるのが……初めてでっ。すっごく暖かいのにや……」
得がたい宝物のように、メイクーモンはコータたちの手を掴んで離そうとしない。

何となく気恥ずかしくなって、コータたちは空いている手で自分の頬を掻いた。

「ま、まあ、それはいいけどさ。とりあえず移動しないか？」

「にや？」

「後ろのが起きると困るし……」

コータが後ろで倒れているクワガーモンを指差す。

メイクーモンの毛が逆立った。今の今まで忘れていたとばかりに。

「わかったにゃ」

「じゃあ、行こうか。そろそろ休んだだろ。ドルモン」

「えー。おんぶしてくれよー」

ドルモンが情けない声を上げる。だが、それが不可能なのは先ほどのことでわかりきっている。

どうしたものかとコータが悩んだその瞬間に、意外なところから声が上がった。メイクーモンだ。

「じゃあ、お礼にニーが運ぶにゃ」

「え、持てるの?」

「運べるにゃ?」

言うが早いか、メイクーモンはドルモンを軽々と持ち上げた。ちなみに言うと、メイクーモンはドルモンよりもずっと小さい。人を背負って走れるドルモンと比べて、メイクーモンは人に抱かれる程度の大きさだ。

そんなメイクーモンが、ドルモンを軽々と持ち上げている。違和感しかない。

「な、なあ、一応聞くけど、成長期だよな?」驚きを隠さず、コータが聞く。

「成熟期にゃ」

「……」

まさかの格上だった。というか、クワガーモンと同格だ。

じゃあ、なんでさつきは逃げていたんだ。ドルモンとコータは内心に湧き上がる疑問を抑えられなかった。

曰く「怖いからにゃ」とのことだが。まあ、力があるからといって戦いに向く性格をしているかというとまた別の問題なのだろう。コータたちは無理矢理にそう納得することにした。

「じゃあ、行こうか」

「にゃっ」

何はともあれ、コータたちは歩き出す。夜中の移動は避けたかった

のだが、仕方ない。少なくともあのクワガーモンに感知されない場所まで行かなければならなかった。

「そういや、なんで襲われてたんだ？」

移動しながら、コータたちは話す。

「わからない、にゃ」

「わからない？」

「にゃ。いつもいつもなんでか襲われるにゃ」

「……それは変だな」担がれているだけのドルモンが声を上げた。

「変？」

コータもメイクモンも彼が何を言いたいかわからなくて、首を傾げる。

自分以外の誰もかわかっていないことにドルモンは呆れながらも、語れる優越感を若干覚えて口を開いた。

「だって、お前はX抗体を持っていないだろ」

「えっ」

X抗体——それは、文字通りにXウイルスに対する抗体。ドルモンも持っているモノ。それを持っているか持っていないかで、今のデジモンは何もかもが違う。

持っていないものはXウイルスに対する恐怖を、そして一刻も早く手に入れなければならないという焦燥を。

持っているものはそれを奪・わ・れ・る・恐怖と、奪いに来るものとの終わらない戦いを。

持っていないなければならないが、持っていれば持っていたで厄介事が舞い込む。それがX抗体。

今のご時世、それを持っているだけで襲われる。持っていないものは基本、襲うことはあっても襲われることはない。

で、あるのに。

「ニーはそのX抗体は持っていないにゃ」

メイクモンは持っていないという。

「えっ、大丈夫なのか？」

「にゃ。デジモンを削除ころすするXウイルス——。世界中に蔓延す

るそれも、なぜかニーは関係ないみたいにや」

「ええ……そんなことあんのかあ？」ドルモンが不思議そうに首を傾げる。一方で、やはりメイクーモン自身もわからないようで、首を振った。

「わからないにや。初めは、関係ないから抗体持ちと間違われて襲われると思ったにや」

その言い方はつまり、そういうこととは関係なく襲われているということだ。

「しつかし、メイクーモンも運がないよなあ」ドルモンが呆れたように呟いた。

「にや？」

「今時、この旧世界じゃX抗体を持っていないデジモンは希少種だけ？」

世界に蔓延するXウィルスで、全デジモンの九十八パーセントが死滅している。残りの約二パーセントがX抗体に進化したわけで、この旧世界に置・い・て・い・か・れ・た・デジモンの中で抗体を持たない通常デジモンのまま生きていられたものは、それこそ数えられるくらいだろう。

そんな希少なデジモンに何度も襲われているというのだから、運がないというよりもいっそ作作的なものさえ感じる。

「うーん。メイクーモンには何か、あるのかもしれないな。なっ、コータ？」

「ああ。もしそれを広められたら、世界ももう少しマシになるのかもしれないけど……」

「力になれそうになくてごめんにや」

「いやいや」

結局、スツキリとしないモヤモヤだけが残ることになった。

メイクーモンは空を見上げる。そこには、相変わらず光り輝いた巨星だけがあつて。

「ニーはあそこに行きたいにや。あの新世界に」

会話の中で今までの苦労を思い出したのか、疲れたようにメイクー

モンは呟いた。

「新世界に？」

「ニーは気づいたにや。なぜか、X抗体持ちには襲われないことに」
「……それは」

今、X抗体を獲得したデジモンは新世界に次々と移動している。

まあ、当然だ。誰だって、ウイルスが蔓延する世界にはいたくない。今、この世界に残っているのは運良く未だウイルスに罹っていない者や、訳あって新世界へ行きたくないという偏屈な者だけだ。

「でも、新世界は抗体持ちじゃないデジモンだっているぜ？ それに——」

「ドルモン！」

「うっ、だってそうだろ……」

ドルモンの茶々に、メーカーモンは泣きそうになりながらも言った。それでもいいから、と。メーカーモンだって、本当はわかっているのだ。

デジモンという存在そのものが少ない旧世界よりも、新世界の方がずっと過酷なことは。なにせX抗体の奪い合い、Xウイルスに対する生存闘争は新世界の方に場所を移したのだから。

「……じゃ、一緒に行くか？」それでも決意を鈍らせないメーカーモンに、ドルモンは笑って言った。

「にやっ？」

「なあ、いいだろ。コータ？」

ドルモンの言葉に、コータは苦笑って頷く。

彼らの厚意に、メーカーモンはまた泣きそうになった。それでも、涙は流さない。代わりに笑う。

「うんっ、よろしくにやっ！」

涙ながらの笑顔だった。

思わず、コータは笑う。担がれているドルモンも、笑う。

「ところで、行き方は知っているのか？」

「……」

先行きが不安だった。

*
*
*
*
*
*
*

第三話く崩壊する旧きモノく

何だかんだ言って、メイクーモンは新世界への行き方を知っていた。

ある場所から新世界へと渡っている者を見たらしい。

ならなんで行っていないかというところ、行こうとした直後にあのクワガーモンに襲われたからだ。

というわけで、次の日。

何とか数時間ほど眠って体力回復することができた後、コータたちはその場所へと向かって移動していた。

そこは山の麓、大小さまざまな四角い石を積み上げて作られた、遺跡。水路のような細かい溝がいくつも走り、中心の広場に繋がっている。まるで儀式場にも思えるそこは新世界と旧世界を繋ぐ場所——新世界へ渡った誰かしらが後続の者たちのために残した、抜け穴。

「ここにや」

「ここに……」

「へえー」

見れば、確かに何らかの见えないエネルギーが空へと打ち上げられているようにも思える。この流れに乗れば、空の向こうの新世界へと行けるのだろう。

コータたちはそれぞれの顔を見る。全員が頷いた。

そして、意を決してその流れに乗る——！

「君たちには通行許可は出ていないはずだろう」

だが、その瞬間のこと。空から声が、否、声と共に誰かが降ってきた。

高速で落下してきた誰かは、その勢いのままに地を砕く。遺跡が崩壊し、土煙が舞い上がり、肌で感じ取れたエネルギーの流れがなくなった。

その意味は。

「っ、何すんだっ」

壊されたのだ。道の一つを。

その事実を怒りを顕にし、ドルモンは目に入る土埃など知ったことではないとばかりに、そこにいるだろう誰かを睨みつける。

「なるほど、なかなか威勢がいい。それに良い目をしている」

そして、土煙が晴れる。

そこにいたのは――。

「だが、ダメだ。君たちを向こうに行かせる訳にはいかない」

そこにいたのは、偉大なる白き皇帝だった。白と金の鎧を着込んだ、皇帝竜。その者は、デジモンという存在の最高峰。成熟期の上にある完全体――を、さらに超える究極^最強^強体。

この世界で余りにも有名な存在。偉大なる者の一人。

「っ、インペリアルドラモン――」

「――パラデインモード！」

だから、この場の全員がいろいろな意味で驚愕するしかなかった。伝説の中の存在が目の前にも、自分たちの邪魔をするために現れたことも、その伝説に語られる白き大剣を持っていないことも――そして、その身体が今にも崩れそうなほどに朽ちていたことも。

何もかもが驚く要素しかない。

「余のことは気にしている余裕があるのか？」

「っ、なんでオレたちの邪魔をするんだっ」

「それがイグドラシルからの要請だからだ」

コータの問いに、インペリアルドラモンPMは淡々と答える。

「君たちは何を知っている？」

「……!？」

「何も知らないだろう。この世界は危機に陥っている」

「っ、そんなことは知っている――!」

ドルモンが威勢良く答えた。

ああ、そうだ。この世界は危機に陥った。

このデジタルワールドはあらゆる世界に作り出された多様な世界観がそのまま写し取られたかのように、多様性に富んだ世界だった。

そんな世界が、否、そんな世界だからなのだろう。どんなコン

コンピュータにも容量があるように、世界にも容量がある。多様性に富むということとは、その分だけ多くのものがあるということだ。だから、容量不足になることだってある。

さて。自分の使っているコンピュータが容量不足になった時、人はどうするか。要らないデータを削除するか、より大容量の新しいものに買い換えるか。

どちらにせよ、そのまま放置ということはありえないだろう。

それが個人や企業のコンピュータならば、まだいい。だが、世界なら？ つまりはそういうことだ。

このデジタルワールドは容量不足による世界の危機が訪れ、それをホストコンピュータホストコンピュータがこの世界の神が解決した。すなわち、デジモン要らないデータの削除と新世界大容量への移し替えの創造によって。

こんなことは、誰もが知っている。だということに。

「……やはり何も知らないのだな」

インペリアルドラモンPMは呆れたように、あるいは当然だと言いたいかのように言い切った。

「イグドラシルの要請により、お前たちを削除する」

インペリアルドラモンPMが構えた。徒手空拳だ。

その場の全員が圧力に押された。ああ、余りにも桁違いの実力、存在。その差を前に、誰もが気圧された。

伝説に名高き、世界最高峰の剣のひと振りを持っていない？

身体は朽ちていて、明らかに弱っている？

それが何だ。そんなことで、目の前の偉大なる者の一人との差が埋まるはずがない！

「っ、コーター！」

だが。

「ドルモン！」

だが。

「いけるな」

「いくぞ」

だが、気圧されながらも勇気を振り絞る者が二人。

そんな彼らの姿の前に、何もできないメイクローモンは震えた。辛くて、苦しくて、震えた。

「行くぞっ」

「おうっ」

ドルモンが駆ける。その背に、コータは飛び乗った。

「……ほう」

インペリアルドラモンPMは動かない。それは余裕からか。

侮られている今のうちに勝利を手繰り寄せなければ。

コータは適当な石を手にとった。ぶん投げた。

形振り構えるはずがない。この状況下では、出来ることは何でもしなければならぬ。何をしても負けるのだから、何かをすることで奇跡を起こすのだ。

インペリアルドラモンPMに当たった石は、しかし、何の意味もない。

「えいつ」

再び石が投げられる。

「なるほどな」インペリアルドラモンPMが頷いた。直後、彼は自分の鎧にそよ風が当たったような気がした。

石に隠れるようにして放たれたドルモンの渾身のメタルキャノンだ。

だが、渾身の一撃も意味はない。

躲されないために石に弾を隠すという狡い手は気づかれて、しかも、インペリアルドラモンPMは気づいた上でわざと何もしなかった。そして、ドルモンの全力は届かなかった。

勝ち目が、ない。ドルモンでは、コータでは、彼に届く武器がない。

「さて」

インペリアルドラモンPMが動き出す。

一撃を喰らえば、そこで終わる。コータとドルモンは慌てて距離をとった。

「逃げる者をいちいち潰すのも面倒だ。……よし」インペリアルドラ

モンPMの右腕に白い砲筒が現れる。

「まずいつ。ドルモン、逃げろ——！」

ドルモンが背に乗るコータの指示を聞くよりも早く、絶望が放たれる。

「ギガデス」

放たれたのは、星さえ砕く一撃。

それが、星の表層を走るように放たれる。威力だけの直線の攻撃だと侮ることなかれ。コータたちに躲せるような柔い攻撃をするほど、インペリアルドラモンPMは落ちぶれていない。

放たれた一撃が、コータたちの視界を白に染める。五感すべてが役に立たない、そんな刹那の瞬間に彼らを感じたのは鈍い痛みだった——。

「まさか折れていた者が立ち上がるとは」

地面に倒れ伏したコータたちは、少し驚いたようなインペリアルドラモンPMの声を聞いた。

そこで、ようやく自分が生きていることを知る。驚きだった。自分たちが生きているのが。痛みを堪えてコータは起き上がる。

見れば、ドルモンの腹には大きな石がめり込んでいて、それがドルモンの腹に当たったから射線から外れることができたのだ、と気づけた。

そして、この場でそれができるのは一匹しかない。

「に、にやー……」

そう、メイクーモンだ。

「聞こう。なぜ立ち上がった？」

「にや……ニーは……昨日、助けてもらったから……生まれて初めて優しくしてもらえたから……だから、今度はニーが……」

「なるほど。本当に良い。君たちのような者が生まれたことは驚きでしかない。そして、それを掴まなければならないというのも……本当に酷い話だ」

インペリアルドラモンPMが右腕の砲筒をメイクーモンに向ける。

先ほどのような幸運は二度は続かないだろう。きつと、今度はそう

いう不測の事態さえ想定して放つはずだ。

メイクーモンは目を瞑った。

「っ、ドルモン！」

「ああ、わかつてるよっ。くっそう、いってー……！」

ドルモンが立ち上がり、その腹にめり込んだ石を取り除く。

そして、ドルモンは笑った。その背に、コータは飛び乗る。

「いくぞ」

「おうっ」

ドルモンは駆け出した。

ああ、そうだ。勝ち目など知ったことではないのだ。彼らよりも強い相手などいくらでもいて、それが彼らを全力で獲りに来る。

生きるためには、生き続けるためには、その誰にも勝たなければならぬ。だから、勝つのだ。

人によつては戯言だと笑うこの道理を押し通し続けなければ、万に一つの奇跡を起こし続けなければ、今のこの世界では生きることすらできない——！

「……これは」

インペリアルドラモンPMが僅かに瞠目する。

ドルモンが変わっていた。否、それは光だ。進化の光。デジモンが次のレベルへと進む際の光。

内に溢れた強さに耐えられるように外見^{テクスチャ}を貼り換える、デジモンという種の進化。

「おおおおー！」

空を飛んでいた。

地に縛られる常識に囚われない、それを表すかのように生えた雄々しく翼。それはドルモンの進化の結果。

ドルガモンという成熟期デジモンの表れ。

「進化、か」

それが出来る彼らを眩しそうに見ながらも、しかし、インペリアルドラモンPMは淡々と右腕の砲筒を頭上の彼らへと向ける。

ああ、そうだ。星さえ砕く威力を地表に向けて全力で放てたはずが

ない。だから、これが――

「失策だったな。『ギガデス』」

――全力だ。

放たれた一撃がコータたちに迫る。

だが、それでもコータたちは引かない。当たれば即消し炭になる一撃を前に、彼らは引かない。

運命の振り子が揺れる。

「ドルガモンツ」

賽が投げられる。

「おうよっ」

天運が彼らに味方する。いや、彼らが天運を掴んだのか。

星さえ砕く一撃を、ドルガモンは当たる直前に躲した。余波で自分が消し飛ばないギリギリの範囲で、彼らは運良く躲せた。

運によって生きることができた。なら、あとは耐えるだけの話だ。

余波による身体が引き裂きさかれそうな苦痛の中を、耐えて耐えて突き進むだけだ。

「オレたちが生きる邪魔をするなあツ。ドルガモンツ！」

空からドルガモンが強襲する。

純粋なメタルキャノンの進化技を、放つ。メタルキャノンよりも巨大で重い鉄球が放たれる。

「『パワーメタル』ウツ！」

放たれた一撃がインペリアルドラモンPMの頭を捉える。

甲高く盛大な音がした。その頭の金の装飾が砕け、彼の顔に僅かな傷をもたらしていた。

「まさか、余が一撃を食らうとは。余も鈍った……いや。若者の業績をそう切り捨てるのは無粋であるか。見事、という他ない」

ああ、コータたちのやったことは偉業に等しい。伝説に一矢を報いたのだから。

だが、それでも足りない。望む結果にはほど遠い。

「そんな君たちに敬意を表そう。ここからは、君たちは余の敵だ」
「っ」

インペリアルドラモンPMの放つ圧力が増す。

まるで磔にされたようにコータたちは動けなくなる。あまりにも絶望的なこの状況——それでも、生存を放棄しない。

なにかないか、と思考を巡らせる。

「やあやあ。まさかまさかこうなるとはねえ。ちょうどよかったですよお」

何者かの声が聞こえたのは、その瞬間のことだった。

コータたちは目を見開いた。

「し、ま……」

インペリアルドラモンPMの腹に、腕が生えている。

いや、インペリアルドラモンPMが腕に貫かれているのだ。

身体が朽ちているとはいえ、不意打ちとはいえ、姿の見えぬ誰かがあの偉大なる者に致命傷を与えている——！

「つく……ここまでか……」インペリアルドラモンPMはその場に倒れ込んだ。ああ、それは一つの死だ。

その姿をコータは酷く嫌悪しながらも、犯人を見る。そこにいたのは、ローブを着込んだ何者かだった。フードを被っているために、姿は見えない。

だが、その姿は噂に聞くあのデジモンを思わせる。

「まさか、デーモン？」

七大魔王と呼ばれる強大な究極体デジモンの内の一人、デーモン。噂に聞く、普段はローブを着込んだ姿で活動するというそのデジモンと、目の前の存在はよく似ていた。

「はっはっは。面白いですねえ。まま、確かにい！ 私は悪魔^{デーモン}であることに違いはありませんからねえ。悪魔さんと呼んで下されば」

「お前、一体……」

ドルガモンが警戒するように、コータの前に立つ。

「っ。怖いにやー」

メイクーモンが走ってコータの背後に隠れた、のを悪魔は目敏く見つけたらしい。

「おやおやおやおやあ。まさかまさかねえ。なるほどなるほどお。お

もっしろいことになってますなあ」

「にゃー……」

メイクローモンを意味ありげに見つめた悪魔は、そのまま踵を返した。その様子に、連戦かと身構えていたコータたちは肩透かしをくらった。

「まま、悪魔さんは邪魔者を殺りに来ただけですし。しっかし、さすがは偉大なる者の内の一人。殺ったところで刺さった剣が消えるわけではない、と。死にかけの老害にやっとなドドメをさせたと思ったんですがねえ」

本当に忌々しそうに、悪魔はインペリアルドラモンPMの死体を見る。

そこには憎悪にも似た色が見えて、その強い感情に思わず部外者であるはずのコータたちが身構えてしまう。

「ああ、失礼。それでは悪魔さんは次の仕事で忙しいのでこの辺で失礼しますが」

何かに気づいたように、悪魔が言う。

「ここ、壊れますから。死にかけがいなくなりましたし、私もちよっかいかけますしねえ」

「はっ..」

「それでは」

悪魔が消えた。初めからいなかったように、どこかへと消えた。

そして、その次の瞬間のこと。

「なっ」

「はっ?」

「に、にゃーっ!?!」

地面が揺れた。大地が砕けた。

まるで世界が終わるかのように、否、世界が終わるのか。

この旧世界が崩れていく。世界の崩壊に巻き込まれるように、あるいは重力に引かれるように、コータたちは空へと舞い上がった――。

D・C・2018 NEWデジタルワールド——ベルサンデー

ターミナル――

デジモンが、死んでいく。

X抗体を持つデジモンも、持たないデジモンも、等しく死んでいく。殺されていく。

――

白い聖騎士が、右腕の剣を振るう。

そして、また一つの命が終わった。

第一章：ベルサンデイの白き聖騎士 第四話く新世界く

D・C・2018 NEWデジタルワールド——ベルサンデイ
ターミナル——

それは新世界の一角、とある荒野エリアにおける出来事だった。
機械的な鎧を身にまとった竜戦士——ウオーグレイモンX抗体が、
そこに訪れたのは。彼は訳あって一人でここに来た。

その訳とは、一言で言えば会談だ。

「――」

「……」

「アウツ、アウツ」

「こ、こらっ。大人の話に茶々を入れるんじゃないぞっ」

相手は、X抗体を持たない普通のデジモンたち。
半機半人のデジモンと紫色の花のデジモン、二体が主だ。あとはオマ
ケというか、置いていくわけにもいかないから連れてきたとばかりの
赤ん坊と世話役オヤジ。

彼らは新世界創造時にこの世界に連れてこられた、いわばこの世界
の正当な住人たちだ。

そんな彼らを相手に、ウオーグレイモンX抗体は自身の思いを訴え
ていた。

「頼む、睨んでないで聞いてくれ。このままじゃオレたちデジモンは
全滅してしまう。もう争い憎み合っている場合じゃないんだ」

「今更勝手なこと言わないでよ！ この危機を招いたのは貴方たち
じゃないのー！」

だが、彼らはウオーグレイモンX抗体の言葉など聞く耳持たず、と
いった体だった。ブロッサモンが強くウオーグレイモンX抗体を非
難する。

「貴方たちがここに逃げてきて、ここも旧世界と同じように汚染して
くれたせいです」

「っ、それは違うー！」

「何が違うって言うのよっ」

「事の始まりはイグドラシルがXプログラムを発動したことにある。この世界が汚染されたのも、イグドラシルがX抗体を持つデジモンを狩り始めたからだ。連中はX抗体デジモンを駆逐する際、抗体の内部にあったXプログラムをこの世界に解き放ってしまった。であれば、イグドラシルこそが我々の共通の敵ということじゃないのか？」

ウォーグレイモンX抗体は拳を叩き合わせる。そこには殺された仲間の無念があつて、元凶たるイグドラシルへの憎しみがあつた。

「生きるためにも力を合わせなくちゃ行けない。君たちもそれがわかってきているから来てくれたんだろう？」

「はっはっはっは」

笑い声。だが、それは決して愉快だから来るものではなくて。その声の主であるアンドロモンは、そんなウォーグレイモンX抗体を嘲笑っていた。

「なかなか面白い話だ。だが、それが真実である証拠がどこにある？」

「それはっ」

「貴様の言い分は都合の良い敵を作ることと矛先を自らから逸らそうとしているようにしか思えん。イグドラシルが元凶だと？ ロイヤルナイトは動いていないのに？」

「っ、それはっ、だけどXプログラムを発動したのは……——」

「そうだ。イグドラシルだ。だが、それはもう過去のこと。今起きている事態がイグドラシルの思惑であると考えるところこそ、早計だ」

アンドロモンは嘲笑う。短慮に過ぎるウォーグレイモンX抗体を嘲笑う。

確かに、ウォーグレイモンX抗体は短慮なところがあつた。

イグドラシルがXプログラムにより多くのデジモンを削除したのは事実だ。だが、それと今の危機的事態が結びつく証拠がない。今ある事実は何者かにX抗体デジモンが狩られ、その抗体内部にあったXプログラムが解き放たれ、この新世界も汚染されてしまった、その一点だけなのだから。

ウォーグレイモンX抗体は憎しみから、イグドラシルが犯人だと決めつけてしまっていただけだ。

まあ、状況的にはそう思っても仕方ない部分は多々あるのだが。

「そもそも貴様の論はブロッサモンのそこから論点をすり替えている。貴様らは不法侵入者だ。貴様らのせいで危機に陥った。それに対する弁明をしていない。狡い手だ」

「っ、そんなつもりは——」

「なら、よほど頭がお花畑だということか。やはり我々と貴様らは違う。我々が貴様らX抗体デジモンと手を取り合うことなどないと知れ」

「っ、頼む。確かにオレの意見には穴があったかもしれない！ でも、オレたちは力を合わせないといけないんだ。昨日の旧世界の崩壊も見ていただろう！ きつと近いうちに何かが起こる！ その時のためにもっ」

「戯言を。しぶとく生き残るのは貴様らの特権。自分たちが生き残るために我々を利用しようとしているその魂胆など見え透いている。消えるのは貴様らX抗体デジモンだけだ。我々には関係ない」

「っ、それは——」

アンドロモンは、いや、この場にいる者たちは誰もが勘違いをしている。それがわかって、ウォーグレイモンX抗体は声を上げた。

だが、すべては遅かった。

「——っ！」

ウォーグレイモンX抗体が上空を見上げる。

そこにいたのは、白い聖騎士だった。今この世界であらゆるデジモンを削除して回っている、バケモノだった。

「逃げろっ」

ウォーグレイモンX抗体が叫ぶ。だが、遅い。

白い聖騎士が右腕の狼の籠手を振るう。その口から現れた剣を振り抜いた。

「え、は……っ？」

何が起こったのかわからないとばかりに、アンドロモンは声を上げ

る。彼が最期に見たのは、両断された自分の身体だった。

「……………」

白い聖騎士が再び剣を動かす。だが、剣が再び振られるよりも早く――。

「っ、おおおおおおおおおー！」

ウォーグレイモンX抗体が駆ける。

これ以上殺させないとばかりに、その腕を振るう。その腕に装備したドラモンキラーが白い聖騎士を狙う。

だが、

「……………」

だが、

「っ」

だが、ウォーグレイモンX抗体の攻撃は白い聖騎士の左腕に阻まれた。

突撃に合わせて振るわれた白い聖騎士の左腕、それがウォーグレイモンX抗体を殴り飛ばしたのだ。凄まじい力によって、弾き飛ばされたウォーグレイモンX抗体。

そんな彼を気にすることなく、文字通り顔の周りを飛んだハエを払っただけかのような気楽さで、白い聖騎士は行動を続行する。

その剣が、残るデジモンたちを狙う――！

「ほう」

再度、振るわれた斬撃。

だが、この場にいる誰も死ぬことはなかった。

「――」

ウォーグレイモンX抗体が、身を呈して彼らを庇ったからだ。

「貴方、どうして……………」

「つく、か……………さっさ、と……………逃げろっ」

呆然とするブロッサモンを、ウォーグレイモンX抗体が怒鳴りつける。

その言葉に突き動かされたように、ブロッサモンは動き出した。

「誰も、殺させないぞ……………！ おおおおおおおおおおお！ ガイ

ア——」

ウォーグレイモンX抗体が地面にドラモンキラールを突き刺した。瞬間、地の底より炎が上がる。大地のエネルギーが地面を突き破って登ってくる。

巨大な火球に収束したそのエネルギーを、ウォーグレイモンX抗体は放つ——！

「——フォース」

放たれた火球。

それを、白い聖騎士は冷ややかに見つめていた。

「無意味だ」

白い聖騎士が左腕を振るう。その竜の籠手から、砲塔が現れる。

「〃■■■■〃」

放たれたプラズマ。

それはウォーグレイモンX抗体の全力の技とぶつかり合う。ああ、だが、しかし、押されているのはウォーグレイモンX抗体の方だ。

それは彼自身もわかっている。

だから。

「あああああああああ！　「ガイアフォース」！」

だから、命を使い切るつもりでもう一発。

二発の火球がプラズマとぶつかり合って、混ざり合い、弾ける。

弾けたエネルギーが熱を伴う衝撃波となって辺り一帯を吹き飛ばした——。

「……何があつたんだ？」

コータは目を覚まし、第一声を呟く。

見れば、彼の周りにはドルガモンとメイクーモンが倒れていた。

辺りを見渡す。そこは草原だった。命が広がる、穏やかという言葉が似合う草原だった。空は青く、雲が緩やかに流れていって、自然溢れる場所だった。

「ここは、まさか——」

すぐにコータはピンときた。

こんな場所、旧世界にあるわけではない。ここは過去・現在・未来の三つの世界で構成される新世界——NEWデジタルワールド、その現在世界にあたるベルサンディターミナルだ。

「まさか、あの崩壊に巻き込まれて……？」

コータが愕然と呟くと、その背後で声が上がった。

見れば、メイクーモンとドルガモンが手を合わせて踊っていた。

「にやーっ、にやーっ！」

「お、おう？ おおう？」

いや、ドルガモンはメイクーモンに付き合わされているだけだったか。

「やったやったにや、新世界にやー！」

まあ、メイクーモンは念願が叶ったのだから、この喜びようもむべなるかな。

「さあつ、新世界の第一歩にやー！」

何はともあれ、意気揚々とメイクーモンは歩き出す。

その後ろをコータとドルガモンは苦笑いしてついて行った——のだが。

「うぐるあああああー！」

咆哮。それは背後から聞こえてくるもので。

「……」

「……」

「にやあー……」

コータたちは天を仰ぎ見た。

その背後から襲い来るのは、赤い肉食型恐竜——ティラノモンと呼ばれる成熟期デジモン。しかも、一目散に自分たちに向かって来ている。

ドルガモンのX抗体狙いか、メイクーモン狙いか、まあ、どちらにせよ。

「やるぞ！」

「おう……」

結局、戦わなければならないのだ。

いや、戦うことは別にいいのだが。コータとドルガモンが少しくらい休みたいと思うのは、まあ、自然な心情だろう。シヨックを受けているのはメイクーモンだけだ。

「にやああああ……」

メイクーモンは頭を抱えている。

そんなメイクーモンを尻目に見つつ——コータたちは駆け出した。

第五話くどんぶらこつこどんぶらこ

コータとドルガモンはティラノモンたちの残骸の上で荒い息を整えていた。

その後、どこからやって来たのかさらに数が増えて、結局両手で数えるくらいの相手と戦うことになってしまったのだ。

数十分かけて、息絶え絶えになりながら、コータたちは何とか最後の一体を倒し終えたのである。

ちなみに、メイクモンは怖いのだろうか、最初の一体の死骸の影で隠れ続けていたりする。まあ。それでいて、やはり申し訳なきがあつたのだろう。隠れながらも石を投擲することで相手の気を逸らすという隠密攻撃をしてくれたのだから、割とありがたい役割をしてくれた。

「つつか、れたあ……」

「コータあ、早く移動しようぜー」

「にゃー……」

コータたちは疲れた身体を引きずって、移動していた。さすがにティラノモンの残骸の上で休む気にはなれない。いろいろと目立ちし。

幸いにして近くに川が見えたから、そこへ向かうことにした。

「川、川かあ。昨日のこともあるから、何だかなあ」

「そう言うなよ。人間の世界の話だけど、川から流れてくるものにはいろいろと良いものがあるんだぞ」

「コータ、いろいろって何があるんだにゃ?」

「えっと、大きな桃とか……桃とか……もも、とか?」

言っておきながら、それしか思い浮かばなかったコータである。

「桃しかねーじゃんかっ」

「うるさい、他にももつと——」

ドルガモンのツツコミに、コータは必死に頭を働かせる、と。

「あつ、本当に桃が流れてきてるにゃー!」

メイクモンが川を指さして叫んだ。

見れば、ピンク色の丸い物体と白色のちよつとてつぺんが尖り気味の丸い物体が川をどんぶらこつことどんぶらこつこと流れていた。

「……まじか」

「マジだな。採ってみようぜ、コーター！ メーカーモン！」

「にやつ！」

呆然としているコータを差し置いて、ドルガモンとメーカーモンは川へとダツシュ。

そして、川を流れている桃を収穫する――。

「アウウウ……」

「はえええ……」

なんとその桃はデジモンだった！

いや、ドルガモンとメーカーモンはともかくとして、コータはそんな気がしていたのだが。

見れば、ボコモンとトコモンである。

「おい、大丈夫かー？」

ドルガモンがツンツンとつつき、起こそうと試みる。

「にゃー……」

一方で、トコモンたちがX抗体持ちでないことに気づいたメーカーモンは、コータの後ろに恐る恐る隠れた。

そして、ついに彼らが目を覚ます。

「アウ？ アウ！」

「ほにゃにゃ……むっ。どこはそこ、誰は私！」

「……」

まあ、起きてすぐふざけられるくらいには、トコモンもボコモンも元氣そうだった。

「いやあ、助かった助かった！」

「アウ！」

そして、数分後。

コータたちはトコモンたちと自己紹介を交わしていた。

「どうして川を流れてたんだ？」

「ふむ、コータよ。それがな、爆発で吹っ飛ばされてな。いやあ、落ち

た先が川で助かったわい！」

「アウー」

最後まで一緒にいた仲間^{フロッサモン}は衝撃によって死亡、自分たちも命からがら助かっておいて、元気なものである。

薄情だと非難するべきか、死を理解していないのだと哀れむべきか、大物だと呆れるべきか。

「それで、そちらは？」

ボコモンが聞いたのは、未だコータの後ろに隠れているメイクモンである。

聞かれて、そろりとメイクモンは僅かに顔を覗かせる。

瞬間、ボコモンとトコモンの顔が険しくなる——！

「っ、おいー！」

もしかして、とコータが怒鳴った。

すると、ボコモンたちはハツとして正気を取り戻したかのように首を振って、ぎこちなく笑った。

「いやあ、すまんすまん」

「アウ……」

「ふむ、聞いたことも見たこともないデジモンじゃのー。どれ」

ボコモンはその胴体の腹巻から、本を取り出した。そこそこ大きい本だ。というか、どうやって入っていたのだろうか、と気になるサイズだった。

「ふむ、ふむ……」

ボコモンは取り出したその本のページをペラペラと捲る。

「何だ、それ？」 気になったドルガモンが背後からその本を覗き見ると。

「見ちゃ行かんっ」

ボコモンは焦ったように本を閉じ、隠した。

「これはデジタルワールドのことが詳しく書かれている。もの知りブック」、誰にも見せられん！」

「なんだよー。ケチー」

「ケチと言われてもダメじゃっ」

どうやってもボコモンはその本を見せようとしないので、先にドルガモンが根を上げた。ドルガモンがようやく諦めたのを見て、ボコモンは再び本を開く。

「ふむふむ、なるほどなるほど。成熟期デジモンのメイクーモンのうにゃっ」

「お前さんが何を危惧しているのかはわかった。そして、それは正しい。が、わしとこのトコモンだけは特別じゃ」

それはつまり、ボコモンとトコモンはX抗体を持っていないのに、メイクーモンを襲わないということだ。

その言葉に安心したように、メイクーモンがコータの後ろから恐る恐る出てくる。だが、その顔にはやはり不安があつて、ほんの少しの疑問もあつた。

「ちよつと待っておれ。いくぞ」

「アウツ！」

メイクーモンが何かを言うよりも早く、ボコモンとトコモンは川へと向かう。誰もが彼らの行動に口を開けて呆然としていると——ボコモンたちは、川に手を入れた。

そして、手を洗い始めた。

「よし、次は口じゃ。ガラガラガラ……ぺっ」

「アウー！ アウアウアウアウアウ……ウツ！」

さらに、うがいまでした。

「……」

「これで大丈夫じゃ！」

「アウー！」

自信満々に、ボコモンたちはメイクーモンの前に立つ。

一方で、メイクーモンは暗い顔——具体的に言えば、騙されたと思っている顔だが、そんな顔で彼らを見ていた。

「なんにゃ？」

「〴〵もの知りブックにはこう書いてあつた。すなわち、手洗いうがいが予防の一步！ わしらはそうすればいい、と！」

「アウー！」

力強く答えるボコモンとトコモン。

メイクモンは「にやっにやっ、にやっ」と壊れたように笑った。コータとドルガモンはそつと距離を取る。

そして、メイクモンはボコモンに近づき――。

「ひーどーいーにゃー!」

「あががががが」

メイクモンはボコモンを抱えて、まるでシェイカーのように思いつきり振り始めた。

「二ーは病原菌じゃないにゃー!」

「そそそとうとうわわわいいいいってっててももももも」

「アウー……アウアウ」

トコモンがやれやれとばかりに首を振った。

「うつつ。ひどいにゃあ……」

「手洗いうがいは基本じゃぞ?!」

「そんなの知らないにゃーっ」

「勝手にそれ以上のことが分かると勘違いしたのはそつちじゃろう!

なんでここまでガツカリされないといけんのじゃー!」

ボコモンは涙ながらに叫ぶ。

ちなみに、二人以外はもはやどうでもいいとばかりに少し外れたと

ころで戯れていた。

そんなこんな、で。

旅は道連れとばかりに、コータたち一行にボコモンとトコモンが追加されることになっていた。

「別にいいけどさ」

まあ、コータたちとしても殺伐とした時代の中で、こういった殺伐としない仲間が増えるのはありがたい。コータたちは別に戦闘狂でも修羅でもないのだから。

「人間との冒険! 心躍るのうー!」

「アウアウ」

「殺伐とすぎてるけどなー」今までを思い返したのか、ドルガモンが

思い起こしたように呟いた。

まあ、事実である。

御伽噺のような冒険譚を夢見るボコモンには悪いが、コータたちの旅路はほとんど殺伐オア殺伐なもの。ちよつと油断すれば、

「見つけたアああああつ！ X抗体、よこせえええええ！」

すぐにこうして誰かしらに襲われる旅だ。

現れたのは、緑色の鬼とゴブリンモンの部下の子鬼たち。

彼らは誰もが通常デジモンで、やはりX抗体が欲しいのだろう。となれば、狙いはドルガモンだ。

「『パワーメタル』！」

「ぐはっ」

開幕、鉄球がオーガモンの腹にのめり込む。

オーガモンは腹を抱えてうずくまった。耐えた辺りそこそこ強いのだろうが、まあ、ドルガモンには関係ない。

「おらあつ、『パワーメタル』！」

二発目がオーガモンの頭をぶち抜く。

もはやそれだけでオーガモンは息絶え絶え、このリーダー格を落とそうとする鮮やかな手口にゴブリモンたちもどうしたらいいのかわからず、オロオロしている。

「あれ、どうなのかのー」

「まあ、うん。間違っではないけど、まあ、うん」

「アアウ」

「にゃー……」

コータたちは呆れたようにドルガモンを見る。

まあ、確かに襲われたのを返り討ちにしているだけで、別に卑怯なこと何もししていない。ちよつと実力と頭に差があつて、見苦しい戦いになっているだけだ。

「うぐぐ、このおおおおお！ どいつもこいつもおおおおおおおおおお！」

「あ、立ち上がった。すげえ」思わず、コータが呟いた。

オーガモンはドルガモンの攻撃を二度も無防備に受けておきなが

ら、それでも立ち上がったのだ。そりゃあ、外野は感嘆する。内野としてうんざりするだろうが。

「ぬ、おおおおおおおおお！」

「――！」

「……！」

「かかか！」

「るあああー！」

まるで理性をなくしたようにオーガモンたちは震え叫ぶ。

嫌な予感を、その場の全員が抱いた。

「――！」

統率を失ったただの獣たちが、勢いのままに一斉に駆ける。そこにはX抗体を狙うという意思さえ感じられなくて。

「にやああああー……」メイクーモンが頭を抱えて弱々しく鳴いた。

結局、ドルガモンが頑張ることになる。

ボコモンとトコモンの応援を背に受けて、コータとメイクーモンの補助をもらい、彼は喉がガラガラに痛くなるまで鉄球を吐き出し続けたのだった。

第六話く洞窟に潜む者く

日が昇った直後の心地良い朝。

コータたちは草原を川の上流へと向かって歩いていった。昨日は疲れから、ゴブリモン&オーガモンの死骸の傍で眠ることになってしまった彼らだが、死骸の傍というのも匂いや感情を置いておけばなかなか寝心地が良い方らしい。

全快し、調子の良い自分の身体を前にして彼らは朝から微妙な気分になっていった。

「そう言えばコータたちの旅に目的はあるのかの?」

「ああ、うん。一応は」

そう言うと、「ほほう」と興味深そうにボコモンがコータを見た。いや、ボコモンだけではなく、メイクーモンやトコモンもコータを見ている。

「オレがなんでこの世界に来ちゃったのか、そのワケを知りたいんだ。……特にやることもないし」

「なるほどのう。訳、か。しかし、時空の穴に落ちただけ、なんてオチかもしれないぞ?」

「それならそれでいいよ。いや、あんまり間抜けなオチは嫌だけど」

例えばの話として。

公園の砂場とかに誰かが掘った落とし穴が偶然にも時空の穴と繋がってしまって、それに引っかけたこの世界に落ちこちてきた——とか。

コンビニへと向かっていたらトラックに轢かれた——とか。

そんな物語のギャグみたいな理由でなければ、コータは何でも良かった。

何もない彼にとってそれだけが、いや、それと生きることだけが今の目的なのだ。

「ふむう。元の世界に帰ろうとは思わんのか?」ボコモンの言葉に、そう言えばとドルガモンが反応した。

「帰っちゃうのか……?」

「にゃー……」

見れば、メイクモモンもドルガモンと一緒に道端のダンボールに入られた子犬のような目をしていた。

思わず、コータは頬を掻く。

その横で、トコモンが呆れたように「アウ」と溜息を吐いた。

「いや。今のところは帰る気は起きてないなあ。なんでだろうな。記憶が混乱しているから郷愁の念が起こらないのかな？」

「むっ、お前さん記憶が？」

「ああ、うん。数日前から。何の前触れもなく記憶が混乱し始めてるから、びっくりしたよ」

「いや、びっくりしたのはこっちだあ！ 目を離した隙に相棒が記憶喪失って心臓に悪いわっ」

があっ、とドルガモンが吠えた。

そこについては何とも言えないので、コータは苦笑うしかない。

「まあ、旅の目的はわかった。それで、今はどこに向かっておる？」

「えっ、先に歩き始めたしボコモンはどこかに行こうとしてたんじやないのか？ オレはてつきり……」

「なんでわしが決めなくちやいかんのだ」

つまりは、一番初めに歩き始めたボコモンの方角に向かって歩いていただけで、目的地もなく彷徨っていたということか。

コータとドルガモンは天を仰いだ。猫が「にゃー」と力なく鳴いていて、妙に静かだった。

「ええい！ 昨日からわしばかりを悪者にしくさつてえ！」

「ア、アウアウアウ」トコモンが溜息を吐くように呟いた。

「そこまで言うなら、いいぞ案内してやろう！ デジモンたちの集落にのうー！」

「にゃ？ そんなのあるのにゃ？」

「おうあるとも！ まあ、群れで暮らしている成長期たちの集落じやし、そこまで規模は大きくないがの」

自信満々にボコモンは言った。

そして、「あっちじゃー！」と遠くに僅かに見えた森を指差す。

「一応聞くけど、X抗体デジモンの集落だよな？」コータが聞いた。「いや？」

「……」

行けるわけがない。今や通常のデジモンはメイクラーモンとしても、X抗体持ちのドルガモンとしても、どちらの理由からしても鬼門だからだ。

「あのさ——」

呆れたように、コータが口を開く。

すると、ただの冗談だと言いたいかのようにボコモンは肩を竦めていた。

そして、天が光った。

「えっ」

光が、落ちてくる。

流星のようなその光は、そのまま遠くの森に突き刺さる——！

「おい」

「な、なんじゃ？」

「集落、なくなっただぞ」

「のじゃなあ……」

一瞬で、遠くに見えていた森は火に包まれて消えた。

僅かに見えたのは、空から火の森の中へと降り立った白い聖騎士で。

「……」

その様子に、ボコモンは眉を顰めた。

「あれって、昨日ボコモンが言っていた……？」

「やはり、時間はないみたいじゃなあ。見つからないように急いでいくぞ」

見つかったら終わりだ。そう言外に言いたいかのように、ボコモンに緊張感が増した。

その様子に全員が頷いて、走り出す。

幸いにして、気づかれなかったのだろう。コータたちは無事に草原のエリアの外へと移動することができた。数時間ほど移動した結果

か、行く手には切り立った崖、そして壮大な滝が見える。

辺は切り立った渓谷になっていた。

「なるほど、これなら最悪隠れられるな」天然の迷路となっている彼方此方を見ながら、ドルガモンが感心したように呟いた。

「まあ、さつきみたいにも無言を言わず薙ぎ払われたら終わるけどな」

「……コータ意地が悪いぞ」

「考えたくないやー」

「まあ、その時はその時じやのう」

あんな長距離からの範囲攻撃を躲す、あるいは防ぐ手段などこの場の誰も持っていない。頑張ってドルガモンの中距離戦がせいぜいだ。

長距離攻撃されたら、それこそ終わりだ。いや、まあ、そもそも地力が違いすぎるから、戦いになってしまったらその時点で終わりなのだ。

「しかし、あれが……」

「……？ コータ、どうかしたのか？」

「いや。何か違和感が……気のせいかな」

ドルガモンに歯切れ悪く返したコータは、しかし、その後も仕切りに首を捻っていた。

「まあ、何かあったんじゃない。着いたぞい」

ボコモンが指差したのは、先ほど見えた滝だった。

水煙が湧き上がる滝の麓で、ボコモンは自慢げにドヤ顔をしている。

「ここは……？」

「ふっふっふ。わしのこの『もの知りブック』に書かれておる、いざという時の隠れ家じゃー！」

「大丈夫なのかそれ」

本に載っている時点で、一般に知られているだろう。隠れも何もあったものじゃない。

何となく微妙な気分になったが、コータたちはドヤ顔なボコモンに先導され、滝の後ろに隠された洞窟に入る――。

「つく、君たちは……」

「なっ、なんじやお前さんはっ」
だが、先客がいた。

コータたちの思いとしては、「ああ、やっぱりね」とそんな気分である。

トコモンの「アウ……」という小さな呟きが洞窟に響いて、それが全員の気持ちを端的に表していたのだった。

「オレは……つく。がっ……はあっ、はあっ」名乗ろうとした先客はしかし、荒い息をして名乗れない。

傷だらけだった。身体のうちこちに裂傷や火傷があつて、見るからに痛ましい。

その姿に、コータたちは驚いた。

「ウォーグレイモン……生きとつたんか」

「む……君、たちは……あの時の」

洞窟にいたのは、ウォーグレイモンX抗体だった。

あの時、ポコモンとトコモンがいたその場で唯一襲撃者に反抗したデジモンである。だが、やはり力に差があつたのだろう。

命からがらに逃げ出せたとばかりの姿だった。

「おい、大丈夫か？」

「うぐ、あ、ああ。すまない、みつともないところを見せた」

「いや、そんなことは……」

ウォーグレイモンはドルガモンに答えるが、誰がどう見ても痩せ我慢だ。

コータたちは顔を見合わせる。

「ちよつと待ってろ」

やがてどちらとなく頷いて、コータとドルガモンは洞窟を出た。

「薬草の類、あるよな？」

「あると思う。けど、俺たちが今までいた旧世界とは植生が違うから、わからないかも……」

コータたちは足元を見る。僅かに生える植物だが、やはり見慣れないものが多い。目当てのモノを見つけられそうになかった。

あれだけ自信満々に出ておいて、恥ずかしいことになってしまいそ

うだった。

「手当たり次第持っていくかー?」

ドルガモンが最終提案をする。

コータがその提案に頷きかけた、その時のことだった。

「全く仕方ないのうー!」

現れたのは、もの知りブックをその手に持ったボコモンだ。

「ウォーグレイモンはトコモンとメイクーモンが見ておる。ほれ、さっさと探すぞい」そう言ったボコモンは川の傍に群生していた植物の葉を千切って、コータたちに見せつけた。

「これが薬草じゃ。あ、葉の部分だけじゃぞ。茎や根は傷口には毒に近い。絶対に持っていくでないぞ」

「お、おう」

「わ、わかった」

ボコモンのおかげで何とかかなりそうである。というか、もの知りブックの効果が凄まじい。サバイバルの必需品になりそうである。

まあ、相変わらず見せてくれなければ、どこで手に入れられるのかさえ教えてくれないのだが。

そして、その数分後。

「これだけ集めればいいよな、コータ?」

「そうだな」

両手いっぱい薬草となる葉を抱えたコータとドルガモンの姿がそこにはあった。

「まあ、量は申し分ないじゃろうな」

「なんだよ、実はダメみたいな言い方は」ドルガモンが少し不満げに言う。

「その薬草はデジソウと言ってな。どこにでも生えている代わりにそこまで強い効果があるわけではないのじゃ。テクスチャを修復する——デジモンの表面の傷を塞ぐ程度で、仲間で治せるというわけじゃない」

「……絆創膏みたいなもんか。じゃあ、もつと効果が良いものを」

コータがそう言うと、ボコモンは首を振った。そんな都合の良いも

のはこの辺には生きていないし、そもそも簡単に手に入るものではない、と。

「旧世界ならば、あるいは文明の名残として回復プログラムくらい遺っていたかもしれないが……——」

わざわざ今すぐにそこまでするほど急務というわけでもないし、そもそも旧世界は崩壊している。

結局、これしかないのだ。

コータたちはそこそこ急ぎめに、洞窟に戻る。すると、

「つく、ぐうううう……がつ」

中からくぐもった悲鳴が聞こえた。

まるで声を出すのを耐えているような、苦痛に満ちたウォーグレイモンX抗体の声だ。

「コーター！」

「おうっ」

これは、敵襲だ。

洞窟が形を保っていることを考えれば件の白い聖騎士ではないだろうが、洞窟にいるのは怪我^{ウォーグレイモン}人と戦闘能力^{トコモ}のないほぼほ^{メイクラーモン}役立たずだ。

ドルガモンとコータは慌てて洞窟に戻った。

そして、はやる気持ちを抑えて入口からそつと中を覗き見る——！

「アウツ！ アウツ！」

「つく、がつ、や、やめる……つくう！」

「にやにやにや……や、やめて方がいいにやー」

「アウツ！ アウツ！」

「ぐおおおおおお！」

だが、そこにあつたのはトコモモンが楽しそうにウォーグレイモンX抗体の傷を突き、激痛にウォーグレイモンX抗体が叫び、メイクラーモンが止められずにオロオロとする光景で。

「……はあ」

敵襲かと思つて緊迫感と共にあつたコータたちは、ドツと力が抜けたのだつた。

第七話く誰が敵かく

薬草を両手に抱えて洞窟に戻ってきたコータたち。

一時期は無駄な緊迫感を覚えさせられた彼らだが、今は何とも平和なものである。

「ほら、薬草貼り付けるから怪我見せろ」

「……すまない」

「いいっていいって。ほらっ」ドルガモンが叩きつけるように薬草を叩きつけた。

「つぐう！」

ウォーグレイモンX抗体の苦悶の時間はまだ終わらない。

ちなみに、トコモンはボコモンからお説教されている。

「いいかのう。下手したら件の聖騎士に見つかってたかもしれんじやぞ」

「アウアウ」

「ウォーグレイモンが子供のイタズラと耐えてくれたからまだしも……って、おい、聞いておるのか！」

「アウ？ アウ！」

「なんじゃとー！ それは言うてはならんじやろがい！」

まあ、その効果はなさそうだったが。

何はともあれ、数十分後。

ウォーグレイモンの傷に薬草を貼り終わり、ようやく話ができるようになる。

「そうか。まさか人間が召喚されてるとは」

「思わなかったって？」

「ああ。伝説でも人間が召喚されるのは、外敵や侵略などの事態解決が善なるデジモンだけでは困難な場合だけだ。今回のように規模は大きくとも内輪での話だからな、召喚する意味が……な、い？」

ウォーグレイモンはそこで黙り込んだ。

「どうかしたのか？」訝しげに、コータが尋ねる。

すると、ウォーグレイモンX抗体は険しい顔で口を開いた。

「オレは今の凄惨な世界はこの世界の神イグドラシルのせいだと考えている。そもそも、事の始まりはイグドラシルなのだからな」

「いやっ、そうかもしれないが、何から何までイグドラシルを悪者にせんでも良くないかっ。アンドロモンたちにも散々と言われたじやろう！」

悲鳴のようにボコモンがウォーグレイモンX抗体に抗議した。

やはり、神がこの事態を引き起こしていると言われたら納得できないのだろう。

「確かにアンドロモンには否定された。けれど、この事態に静観する理由がない。イグドラシルなら、何とでもできるはずだ。ロイヤルナイト子飼いの騎士たちもいるんだからな」

「うっ、それは……」

「だから、静観しているのはこの事態をむしろ望んでいるからと考えられる」

言い返すことができず、落ち込んだようにボコモンは押し黙った。

そんなボコモンの姿を前に、少し気まずそうにしたウォーグレイモンX抗体は「ここまで言って難だが——」と続きを話す。

「そう思っていたのは今の今までだ」

「というっ？」

「ああ、今コータを見て思ったんだ。動かないんじゃなく動けないんじゃないかって。だって、イグドラシルは人間を召喚する側だ。イグドラシルが何を企んでしようと、今の時勢で人間を召喚するメリットはない」

いかに人間とデジモンの冒険譚が神話や伝説で語られようと、それでも人間にできることなどたかが知れている。

イグドラシルがデジモンにとって敵であり、さらに何かをしようとしているのならば、わざわざ不確定要素である人間を招き入れる必要はない。駒にするにしても、イグドラシルには人間以上に優秀な部下がいる。

それなのに人間が召喚されているということは、つまりイグドラシルが動けないということではないのか？ そう、ウォーグレイモンX

抗体は思ったのだ。

「……」イグドラシル黒幕説の否定に、ボコモンの顔が思わず明るくなる。

「まあ、オレは短慮なところがあるみたいだし、今のオレの論は乱暴だとは自分でも思う。それなら、コータが自分でこの世界にアクセスしたとか、別世界の管理者……ホメオスタシスやイリアスがコータを超越したとか、そっちの方がずっと説得力がある」

「……」否定の否定に、ボコモンの顔が暗くなった。追い打ちとばかりに、コータとドルガモンも同意する。

「確かに。オレの記憶が混乱しているのも——」

「コータがアクセスをしくったからって考えれば辻褄が合うな。ホストコンピユータ世界の管理者みたいな大物に召喚されたのなら、そんなことにはならないだろうし……!」

推測に憶測を重ねる乱暴さだが、それでも一応の辻褄は合う。

答えがわかったわけではないが、ヒントは見えた気がして、コータとドルガモンの表情は明るく照らされた。

「へー。よかったのう」

「アウアウ」

その傍らで、自分の信奉するイグドラシルをボロクソに言われたボコモンは真つ暗になっていたのだが。

「まあ、黒幕がどうかは置いておくにしても、オレたちには倒さなければならぬ敵がいる」

「それは、あの?」

「そうか、君たちも見たのか。ああ、そうだ。あの白い聖騎士——あのバケモノは、オレたちX抗体持ちもそうでない者も関係なく削除して回っている。しかも、恐ろしく強い。悔しいが、オレだけではとても勝てない」

そう言ったウォーグレイモンX抗体は自分の身体を見た。傷だらけの身体だ。そんな身体を見れば、彼も思い出す。

ほとんど何もできずに負けた、あの戦いを。

「そして、おそらくはレジスタンスたちを含めても同じだと思う。実

力という点ではオレともう一人がツートップだからな」

「レジスタンスにやー？」

何かを察したのか、メイクローモンが声を上げた。そこにはほんの少しの期待が含まれている。

「ああ、X抗体持ちで作り上げた、あの白い聖騎士やイグドラシルに對抗するための組織だ」

「っ、そんなに天国みたいな組織があるにやんて——！　ぜひ連れて行って欲しいにやー！」

メイクローモンがウォーグレイモンX抗体の手を取る。キラキラとした期待に溢れた目でメイクローモンは彼を見た。

一方でなぜそんな反応をするのかわからなくて、ウォーグレイモンX抗体は困ったようにコータたちを見てしまうのだが。

「ああ、メイクローモンはなぜかX抗体を持たないやつに襲われるらしいんだ」

「X抗体を持っていないのには？」

「不思議だろ？　まあ、X抗体持ちには襲われられないらしいから、そうなってるんじゃないかな」

コータが説明すると、ウォーグレイモンX抗体はなるほどと頷いた。

「来てくれるのはありがたい。戦う力があるかどうかはともかくとしても、オレたちはバラけちゃダメだと思うからな」

もちろん、ひと所で固まるのは一網打尽のリスクを負う。

しかし、ウォーグレイモンX抗体は思うのだ。リスクを恐れて分散していれば、各個撃破されるだけだと。自分たちが滅ぶ時間を稼ぐことにしかならないと。

あのバケモノから逃げ切ることなど不可能なのだ。そうであるのなら、少しでもリスクを冒して生き残る可能性を増やす。

ウォーグレイモンX抗体は、いや、ここに生きる誰もが同じことを考えていた。だから、レジスタンスなんて組織ができたのだ。

「こんなぐう時世に組織ができるなんてなー」コータの呟きに、ドルガモンが答える。

「ああ、思いも寄らなかつた。誰も彼もが自分が生き残ることで精一杯だからな」

「そうしなければ、生き残ることすらままならない。あれはそれだけの脅威なのさ」ウォーグレイモンX抗体はそう言うと、顔を顰めながら立ち上がった。

そして、「レジスタンスの場所まで案内する」と洞窟から出ようとする。

そうなると慌てるのはコータたちだ。

「おい、大丈夫なのか？」

「ああ、問題ない。まだ完全回復はしてないが、傷自体は塞がっている。移動くらいなら行ける」

「そ、そうか」

そんなにすぐ行く意味はあるのか、とコータたちは思うのだが、ウォーグレイモンX抗体は急ぎたいようだった。

新しく得られた仲間を嬉しく思い、だからこそ、早く連れて行きたいと思っているのだろう。もしかしたら、案外に、アンドロモンたちにボロクソに言われて断られたことを内心で気にしていたのかもしれない。

恋人に振られて傷心中の異性に優しくしたらコロツと行くアレと似たようなものである。

「ぼっかもーんっ！」

とはいえ、そんな彼の阿呆を見てられない者も当然いるわけで。

怒りに震えたボコモンが、トコモンをぶん投げる。

「アウ——!?!」

「なっ」

トコモンがウォーグレイモンX抗体の傷口にクリーンヒット。傷が開いた。

「う、ぐおおおお……」痛みを堪えるウォーグレイモン、

「ア、ウウウウ……」とトコモン。

そんな彼らの前に、トコモンは仁王立ちした。

「お前さんは無茶のしどころさえ分からんのか！」

ボコモンが怒鳴る。

「いや、だが、しかし……——」

「口答えするなっ。正座せんかいっ」
「う」

ウオーグレイモンX抗体にも思うところがあるのだろう。素直に説教を聞く。

己の半分以下の背丈の成長期デジモンに正座させられる、情けない怪我人の姿がそこにあった。

「コータ、今のうちにまた薬草取りに行かぬ？」

「そうだな。話長引きそうだし……」

「今度はニーも行くにや」

まるで子供を叱るお母さんのような意外なボコモンの一面を見ながらも、巻き込まれては堪るかとかコータたちは洞窟を抜け出す。

「どこに行くんじやい」

いや、抜け出そうとした。

「お前さんたちも何そのまま放っておこうとしとるんじやっ」

ボコモンのあんまり怖くない眼光がコータたちを貫く。

「え、いや。あのくらいなら大丈夫かなーって。な、ドルガモン？」

「おお。あのくらの怪我でも動けなけりや洒落にならないし。な、メイクーモン？」

「ニーに言われても困るのにやー！」

「うるさいわっ。お前さんらも無茶のしどころがわからんやつらじやな！ そういうやつらに限って大事な時に動けんくなるんじやい！」

結局、コータたちも正座することになる。

ちなみに、いつの間にかトコモンはいなくなっていて、ボコモンに唯一説教されなかった。

「アウー！」

一人勝ちである。

第八話くレジスタンスく

で。

「……あそこだ」

ボコモンの説教の次の日、ボコモンのお許しも出たことで、コータたちはウォーグレイモンX抗体に連れられてレジスタンスのアジトへと来ていた。

あの滝から数キロ離れた場所から始まる大森林地帯を抜け、やって来たのはあの滝のあった場所とはまた別のまた溪谷地帯。

溪谷↓森↓溪谷と景色が代わり映えしないためにあまり感じないが、実に数十キロメートルはあろうかという大移動であった。

まあ、そんな距離をコータやトコモンが一日で駆け抜けられるわけではない。ほぼほぼドルガモンとウォーグレイモンX抗体が頑張ってくれたおかげである。

「あそこって言っても、全然見えないんだけど」

「ま、すぐにバレるような場所には作らないさ」コータの問いに、ウォーグレイモンが答えた。

レジスタンスのアジトは、先の滝の裏の洞窟と同じように天然の迷宮を利用して作られたものなのだろう。荒野地帯の岩壁にわかりにくく見えた小さな穴、そこが入口らしい。

「あのバケモノは来てないな?」

先行したウォーグレイモンX抗体が辺りを確認する。

そして、コータたちを手招きした。コータたちは急いで彼の元へと走る、のだが。

「入口ってどこに?」

どこにも入口らしいものは見当たらない。先ほどの目印であった小さな穴は本当にただの小さな穴で、何か仕掛けがあるようなこともない。

コータたちが首を傾げている、と。

「ふっ」ウォーグレイモンX抗体が自慢げに笑う。彼はそのままその小さな穴に手を差し込んだ。

そして、次の瞬間のことだった。

コータたちの前には入口なのだろう、ぽっかりとした大きな穴が現れた――。

「どうだ？」

「いや、どうだって言われても」とコータがガツカリと肩を落としてウォーグレイモンX抗体を見る。

「なに？ 何がダメだと言うんだ」

「思ったよりも大したことなかったなって」とコータ。

そして、「思いつきり物理じゃねーか！」ドルガモンがウォーグレイモンX抗体をしばく。

まあ、彼らの反応も仕方のないことなのだろう。

てつきり何かすごい仕掛けがあるかと思えば、まさかまさかでウォーグレイモンX抗体が岩壁にカモフラージュされた大岩を持ち上げるだけという。

いや、見上げるほどの大岩を持ち上げるウォーグレイモンX抗体の腕力は確かにすごいが、そういう話ではない。

「というか、そろそろ入ってくれ。地味にきつい……」

まだ完全には癒えていない傷が痛むのか、ウォーグレイモンX抗体が辛そうな声を上げる。

コータたちは「へー」と冷めた声でゆっくりと歩いて入ったのだった。

「ウォーグレイモン、心配してたんだぜっ。よく帰ってくれた！」

「しかも、新しい仲間もゲットしてくれたなんて！」

「わーいわーい。ウォーグレイモン無事だったー！」

アジトの中でコータたちを迎えたのは、ちよつとしたお祭り騒ぎだった。

ウォーグレイモンX抗体は人気があるらしく、そんな彼の無事を祝う者たちでごった返したのだ。

「しかし、思ったよりいっぱいいるんだな」コータが呟いた。

見れば、百に届くか届かないかという数のX抗体持ちのデジモンが

いて、組織の規模がわかる。

まあ、やはり力のあるデジモンは少なく、そこに世知辛さを感じさせるのだが。

「ああ。それはいいけど……なあ、コータ、あれはいいのか？」

「まあ、いろいろとあったんだ。放っておけ」

「ええ……ボコモンは——」

「おい、トコモン。あんまり失礼なことをするんじゃないぞ」

「アウー？ アウツウウー？」

「わかりやすく無視すんなよっ」

ドルガモンが叫ぶ。

まあ、コータもボコモンもトコモンも、あまり触れなくなかったのだ。

「にやー。X抗体持ちのデジモンがいっぱいいるにやー。ここじゃニーは襲われない……あれ？ ここは天国だったのかにやー？」

まるで酔っ払いのようにどこかにトリップしているメイクローモンには。

そんなメイクローモンはともかくとして、レジスタンスの面々の波から抜け出たウォーグレイモンX抗体がコータたちの元にやってくる。

そんな彼の顔にはどこか疲れたような、それでいて嬉しそうな様子があつた。

「大人気だな」コータがからかい混じりに言う。

「ありがたいことにな」ウォーグレイモンX抗体は肩を竦めて苦笑つた。

「それで、オレたちは——」

「ああ、放っておいてすまない。見ての通り何にもないところだから、自由にしていってくれて構わない」

「暴れるのは？」

「それだけはやめてくれ。というか、ドルガモン。君、わかっていつているな？」

それだけ言うと、ウォーグレイモンX抗体はコータたちに基本的なことを教えた。このアジトは天然の迷路で、出入口は複数ある。そし

て有事の際は戦える者が戦い、戦えない者はそこから逃がす。

「それでいいのか？ 戦えない者を逃がして、それで——」コータが口を開く。

だが、ウォーグレイモンX抗体が首を振ってコータの言葉を遮った。

「戦わない者じゃない。戦えない者を逃がすんだ。ここにいるのはX抗体持ちだ。その意味、わかるだろう？」

「……ああ、ごめん。悪かった」

自分が見当違いなことを言ってしまったことに気付いて、素直にコータは謝った。

X抗体はデジモンを削除Xプログラムころすに対する抗体。だが、それは誰でも得られるわけではない。訪れた死に身体を吞まれても、訪れた絶望に目を焼かれても、それでもなお生存を望んだ強き者が得られるモノだ。

つまり、X抗体を持っている時点で逃げ出すような軟弱者などいるはずがないという話である。

「ウォーグレイモン——！」

そうして話していると、誰かがウォーグレイモンX抗体を呼んだ。

やはりこのリーダー格というだけあって、忙しいらしい。

すまなさそうに、彼はコータたちを見た。

「ああ、いいよ。行ってこいって」

「すまない。また諸々の礼は君たちがここにいる間に必ずさせてもらう」

そう言つて、ウォーグレイモンX抗体はコータたちから離れていった。

「とりあえず疲れたな。あっちの人通りが少ないところで休もうか」

「そうだなー」

「アウ？ アウー」

「そう言うもんじゃないぞ、トコモンよ」

今日は一日がかりの移動だったのだ。

疲れもあつて、邪魔にならないようにコータたちはアジトの中の適

当な角の場所に腰掛ける。

「にゃあーん」

ほわほわとどこかに飛んでいつているメイクーンだけが、そのまま不気味に立っていたのだった。

コータたちがレジスタンスのアジトに来てはや数日経った。

初めの頃は、それこそ通常デジモンの三匹がいるせいか、ウォーグレイモンX抗体くらいしか話しかけてくれなかったのだが、数日も経てばもはやだいぶ慣れたものである。

「にゃー！ 今尻尾引つ張ったの誰にゃー！」

「うわ、メイクーンが怒ったー！」

「につげろー！」

メイクーンが精神性の幼いデジモンたちにおもちやにされるくらいは、彼らもレジスタンスに馴染んでいた。まあ、馴染んでいるというよりは馬鹿にされているだけなのだが。

「にゃーつ、くらえにゃー！」

「あははっ。くらえー」

「くらえー！」

メイクーンが走っている。

プロットモン 白い犬や岩の力士、ゴツモン トロピカルな花モといった数々のデジモンたちが

その後ろを追いかけていく。

時々、追いかける側が逆転したり、技の数々が飛んだり、まるで鬼ごっこのようなようだった。

「うにゃーつ！」

「追えー！」

「いけーつ！」

「ちよ、見てないで助けてにゃー！ コータあ、ドルガモン！ ボコモーン、トコモーン！」

まあ、基本的にメイクーンが逃げているのだが。

基本的にX抗体持ちはX抗体を持っていない同族よりも強い。それはX抗体によって潜在能力が引き出された結果だと言われている

が、いかに成長期とは言えそんな連中に追われている普通なメイクモンは堪ったものではない。

「むしろにまで助けを呼ぶとは、いい感じに追い込まれてるのう」

「アウアウ」

「まあ、でも、子供がじゃれあっているようにしか見えないし大丈夫だろう」

「俺としてはX抗体の時点で子供って言えない気がするんだけど……大丈夫かな」

毎日ボロボロになるまで追い掛け回されるメイクモンを、コータたちは生暖かい目で見るといった。

ちなみに言えば、心配しているのはドルガモンだけだ。

「しっかし、来た時から思うけど、意外に明るいよなー」コータがそう言った。

そう言った彼の目には楽しそうにメイクモンを追い掛け回すデジモンたちが映っていた。

彼らとて状況、時勢、あらゆるものが厳しい今に生き残っている者なのだから、少しくらいは自他共に厳しくなりそうなものなのに。

それなのに、彼らの表情は明るいのだ。そこだけ切り取れば、平和な時代だと思えてしまうほどに。

「それはそうさ。意外でも何でも無い」

そんなコータの呟きに答えたのは、機械の狼だった。

この数日で何度か見た顔だった。レジスタンスのリーダー格の一人で、ウオーグレイモンX抗体と並ぶ実力者らしく、いろいろなデジモンから頼られているのを見た。

「ああ、初めまして。挨拶が遅くなって悪かった。おれはメタルガルルモン。ウオーグレイモンが世話になった。改めて礼を言うよ。ありがとう」

メタルガルルモンX抗体は、丁寧な挨拶と共に手を差し出した。

その手を、コータは「コータだ。よろしく」と言って握手する。ドルガモンやボコモンたちもそれに続いた。

「それで、さっきのはどういう意味なんだ？」ドルガモンが聞く。

メタルガルルモンX抗体は頷いて続きを話した。

「ここにいる誰もが、今あるこの瞬間が得難いものだ知っている。世界は一步間違えれば死ぬ過酷な場所になったはずなのに、何の因果か、もう得られないはずの夢のような時間が再来した。だからそんな夢の時間に浸っている」

誰だって厳しいことを望まない。

いや、修行者などには厳しさを望む者もいるだろうが、そもそも今は災害のように唐突に訪れた厳しさで、そういった類いの厳しさではない。

「願わくば、この時間が……いや」

メタルガルルモンX抗体が首を振った。その顔に力はない。

それは、やはりこの夢のような時間は所詮は夢でしかないと知っているからこそその、夢から醒めた現実の厳しさを覚えているからこそ、顔だった。

「……何事にも終わりが来る。おれたちはあの悪夢のようなバケモノから未来を勝ち取る。だが、そうしたら、また何かが次に来る。悪夢に終わりはない。ひどいよな、こんな優しい時間は終わりがあるのにさ」

「それでも、いつかオレたちは未来を掴み取るんだ」話に割って入ってきたのは、ウオーグレイモンX抗体だ。

「そうだな。例えおれたちが無理でも、次が——」

「そこは自分たちが成すと言えよ」

メタルガルルモンX抗体の弱気な発言に、ウオーグレイモンX抗体が彼を小突いた。そして、どちらからともなく両者は微笑み合う。

両者の絆がわかるやり取りだった。

「つと、話している途中にすまない。客人だ」

本来の用を思い出したのだろう、ウオーグレイモンX抗体がメタルガルルモンX抗体にそう言った。

「客人？」

「ああ。やっぱりわかってくれる者たちはいたんだ」

ウオーグレイモンX抗体の言葉に、メタルガルルモンX抗体も察し

た。

つまり、ウォーグレイモンX抗体の言葉に賛同してくれる者がいたということである。

「それは良い報告だな。すまない、コータくん」

「ああ。話はまたの機会にしてください」

自分から話しかけておいてコータたちを置いてきぼりにしてしまったこと、そして話を打ち切ってしまうことに謝罪して、メタルガールモンX抗体はウォーグレイモンX抗体と共に入口の方に去っていったのだった。

第九話く投げ込まれた火種く

レジスタンスのアジトの入口付近、そこでウォーグレイモンX抗体とメタルガルルモンX抗体が客人と向き合っていた。

「初めまして、と言うべきかな？ 勇者殿」

「初めましてでいいと思うぞ。森の賢者」

ウォーグレイモンX抗体に森の賢者と呼ばれたのは、太樹ジュレのような姿をした完全体モデジモンだ。巨大な木と見間違うばかりの姿をしていて、どう見ても移動に適さない身体をしている。

どうやってここに来たのか、ウォーグレイモンX抗体たちは地味に気になっていた。

まあ、歩いてきたのだが。

「ここに来たということは協力の話を受けてくれるってことで、いいんだよな？」メタルガルルモンX抗体がそう聞けば、ジュレイモンは苦々しい表情をして答える。

「うむ。本当に、本っ当ーにつ遺憾じゃがな。それでも、あの聖騎士様を騙るバケモノに対抗するにはそれしかない」

「……そうか。いや、ありがたい」

手を組む、協力するという相手に対して尊大過ぎるジュレイモンの言葉に、ウォーグレイモンX抗体は内心に湧き出た感情を何とか飲み込んだ。

そして、そんなウォーグレイモンX抗体に苦笑いをしたメタルガルルモンX抗体は手を差し出す。その手は、掴まれることはなかったが。

「……具体的に作戦を詰めたい」メタルガルルモンX抗体がそう口にした。

「と、言うところ？」

「今度はこっちから、叩く。そのための作戦だ」

ウォーグレイモンX抗体の力強い言葉に、ジュレイモンが顔を顰める。そこには、彼らに対する露骨な嘲りの表情があった。

「冗談じやろう。あのバケモノは力だけはある。そのバケモノに戦い

を挑むじやと？ 冗談も大概にするといい」

「冗談なものか。いつまでも逃げ隠れてたんじやオレたちが負ける。わかってるだろう？」

「……勇者とは聞いていたが、まさか蛮勇の方であつたとは。わかつてないのはキサマらのほうじやろ。キサマのその怪我、大方あのバケモノにやられたんじやろ。手も足も出さずにやられた、違うか？」

「……」

「キサマらX抗体持ちは確かに強い。じゃがそれは従来のデジモンに比べての話。キサマらがどれだけ束になろうと、あのバケモノには届かない」

ジュレイモンは見抜いていた。ウォーグレイモンX抗体の力量を。たかが完全体デジモンであつても、それでも究極体に進化できなかっただけで、長い時を生きている経験だけはあるのだ。だから、他人の質を見抜くくらいは容易い。

そんな彼にわからないはずがないのだ。あの白い聖騎士の力が。そして、自分たちとの力の差が。

「……それでも、戦つて勝たなけりや未来はない」

絞り出したようなウォーグレイモンX抗体の言葉を、ジュレイモンは静かに聴いていた。

「そうか。てつきりもつと建設的な同盟だと思つていたのじやが……勘違うとは、儂も衰えたか」

そう言つたジュレイモンは鈍い音を立ててウォーグレイモンX抗体たちに背を向けた。

そんなジュレイモンの背中に、メタルガルルモンX抗体が声を投げかける。

「ご老体。貴方も本当はわかつてるはずだ。未来を掴み取るにはどうすべきなのか」

「……それでも儂には守るものがある。そやつらを望まぬ戦場に駆り出すことなどできんよ。自殺なら、キサマらだけでしてろ」

ジュレイモンは入口に立つ。入口の岩を開ける、とウォーグレイモンX抗体に目を向けた。

「……オレたちの行いが自殺というなら、殺されるのを待つアンタたちも自殺ってことじゃないか……——」再び絞り出したような、ウォーグレイモンX抗体の声。
「そうじゃな」

ジュレイモンは静かに苦笑って、小さく声を出す。

「まあ、俺はもう年老いた。その時は若いもんたちだけを逝かせはせぬよ。……生き残るのは、いつだって戦えるものじゃ。きつとキサマらは生き残れるのじゃろうな」

それは、どこか諦めたような言葉だった。あるいは、激励のような言葉だった。

ウォーグレイモンX抗体はもう何も言わなかった。ただただ黙って、入口の岩を持ち上げる。ジュレイモンはそこから外に出る——。
「つぐ」

——のだが、様子がおかしい。

何か苦しんでいるような。

「どうかしたのか？」怪訝に思ったメタルガルモンX抗体が声をかけた。

「い、いや。何でもない」

すぐに元通りの様子を見せたジュレイモンは、今度こそ外に出て帰っていく。

その後ろ姿を、ウォーグレイモンX抗体たちは複雑そうに見ていたのだった。

ニュースが入ったのは、その次の日のことだった。

普段とは違う慌ただしいさを肌で感じたのだろう、誰に起こされるでもなくコータたちは飛び起きた。起きてみると、多くのデジモンたちが集まってはざわついている。

そして、その中心にいるのはメタルガルモンX抗体で、険しい顔で周りのデジモンたちと何かを話し合っていた。

「なあ、どうしたんだあ？」

ドルガモンが適当にそこをウロウロ歩いていたパルモンX抗体を

捕まえて、話を聞く。

「あのね、抗体を持ってない奴らが攻めてきたの！」

「は？　なんで？」

「それがわかんないのよっ」

混乱したままだったが、パルモンX抗体は話してくれた。

今朝、日が昇るよりも早く、X抗体を持たないデジモンたちがここを攻めてきたというのだ。今、最大戦力であるウォーグレイモンX抗体が外に出て適当にあしらっているらしいが、あしらわれてもなおここに攻めるのを止めようとしならしい。

つまり、彼らは本当にその気でX抗体デジモンに戦いを挑んできているのだ。

「まずいのう」

「アウ……」

ウォーグレイモンX抗体一人で、敵側に怪我もさせずにあしらえるほどのだから、戦力は大したことはないだろう。だが、時間をかければかけるほど、あの白い聖騎士に見つかる可能性が高まる。

面倒な事態だった。

「いつそ殺るべきじゃないか？」コータの言葉に、ドルガモンも頷く。

「アタシもそう言った、っていうか、ここにいる大半はそうなんだけど……」

パルモンが言うには、メタルガルルモンX抗体とウォーグレイモンX抗体がその気がないらしい。

なぜ、とコータたちは首を傾げる。

「抗体持ちと従来のデジモンたちは、元々殺し殺されの仲だったでしょ」

意図してなかったとはいえXウイルスの散布、そこからのX抗体の奪い合い——抗体持ちと通常のデジモンたちの溝は深い。

そんな中でのあの白い聖騎士による無差別削除は、多少とはいえその溝を埋める事態だった。

だが、ここで両者が争えばその溝はまた深まることになるだろう。そうなると困るのは誰で、得するのは誰だ。

「つまり、ウオーグレイモンたちはこの襲撃の裏に抗体持ちと普通のデジモンたちが仲良くするのを阻止したいやつがいると考えているんだな？」

「思い通りにはならないぞってことか」コータの言葉に、ドルガモンが頷く。

なるほど、経緯はわかった。予想以上に難しい事態になっていることもわかった。

「そうなるかどうか……」

「まず、なんであいつらが襲ってきているのかを知らなきゃ……」

コータとドルガモンは考え込む。

そして、「あ」と顔を見合わせた。その視線は――

「ん？ な、なんじやお前さんらっ！」

――その視線は、ボコモンに向いていた。

「ボコモンは抗体持ちじゃないだろ？」とコータが言えば、

「じゃあ、聞き出してきてくれよ」とドルガモンが迫る。

「う、なんでじゃ。や、やめ、い、いやじゃ、いや、……なんでわしがああああああ！」

「アウト」

結局、ボコモンはトコモンに蹴り出されて行くことになった。

コータたちが入口のところへ行くと、酷かった。入口を塞いでいた大岩は奇襲だった初撃によって完全に壊れていて、もはやこのアジトの入口が丸見えだ。

「ほら、行ってこい！」

「うわーん」

ドルガモンがボコモンをぶん投げる。ボコモンは少し離れたところに見えた通常デジモンたちの波の中に消えていった。

「大丈夫かな」

「大丈夫だろ……あ、ウオーグレイモンの出した火球がちようど――」

コータたちは見て見ぬふりをした！

一方、ウオーグレイモンX抗体。

「ふっ、やあっ」

ウオーグレイモンX抗体は向かってくるデジモンたちをひたすら投げ飛ばしていた。それが一番相手に怪我をさせない方法だからだ。

あとは、時折威嚇で技にもならないほど小さな火球を投げつける程度である。

「さつきから言っているだろう！ これは罠だ！ 誰かがオレたちを嵌めようとしているんだっ」

「うるさい！」

ウオーグレイモンX抗体の言葉に聞く耳を持たないとばかりの反応だった。

最前列にいた紫きマッシュユモンのこたちが、一斉にその手の小型キノコ爆弾を投げつける。だが、たかだか成長期デジモンの技の速度などしれている。ウオーグレイモンX抗体は華麗に避けた。

そんな彼を狙うのは、赤色テトラノモの肉食恐竜だ。

「ッファイアーブレスッ！」

吐き出された火炎を、ウオーグレイモンX抗体は左手で払う。

厄介だった。勝ち筋も終わりも見えないこの状況そのものが。

「だから、聞いてくれっ。このままじゃあのバケモノが来る！ そうしたら、君たちだって危ないんだぞ！」

「うるさいうるさい！ お前らが始めた戦争だろうが！ お前たちがおいらたちの帰る場所を奪ったんだだろうが！」

「は？」その言葉に、思わずウオーグレイモンX抗体が固まる。

「お前たちが消えるのなら、別においらたちは死んだって構うもんか——！」

マッシュユモンの叫びと共に、一瞬だけでも固まったウオーグレイモンX抗体に攻撃が殺到する。

大岩が、炎が、雷が、キノコ爆弾が、水流が、彼らの放つあらゆる攻撃がウオーグレイモンX抗体を襲った——！

第十話く止まらぬ争い

その惨劇は、昨日の夜に起こった。

そこは森の中の集落。今という危険な時勢に対抗すべく、元来森林地帯に住む植物系や昆虫系のデジモンたち以外にも多くの種が集まって作られた集落だった。

彼らは力を合わせて暮らしていたのだ。

一瞬先に誰かが、それこそ己が死ぬかも知れないという時代。そんな時代においては、我が身可愛さにX抗体を奪いに行こうと単独行動する者は多い。そんな中でこの集落に集まった者たちは、自分たちは穏やかに細々と生きようとしている変わり者なのだ。

悪い言い方をすれば、この集落は変化した時代についていけなかった者たちの集まりだった。

そんな、いずれ時代に適合できずに飲まれて消える定めを持つだろうその集落で、惨劇は起こった。

それは集落中の反対を押し切ってレジスタンスとの話し合いに出かけた長老ジュレイモンが帰ってきて、しばらくしてからのことだった。

「う、があああああああああー！」

ジュレイモンが豹変したのだ。理性を失くし、ただただ暴れるだけの機械になってしまったのだ。

「な、え、どうしたんですかっ、長老！　う、うわあっ」

「正気に戻ってください！　お願いします！　いつもの優しい——あ、がっ」

「た、助けてくれっ」

「長老があ、長老があっ」

集落中の誰もがどうしたらいいかわからなかった。

だって、そうだ。こんなことは知らない。Xウイルスで死ぬのではなく、誰かに殺されるのでもなく、狂ってしまうことなんて誰も知らない。だから、戸惑い、逃げ惑う。

集落でもトップクラスの力を持つジュレイモンから逃げられる者など多くない。暴れるジュレイモンの攻撃によって、死傷者が多く出

た。

「つぐ」

「お、い？ どうし——」

「ぐがああああああああ——」

しかも、悪いことは続くものだ。

それはまるで病気が感染するように。

ジュレイモンと同じように理性を失くして暴れ始める者が出始めたのだ。ついさつきまで共に暮らしていた仲間が、自分を殺そうと暴れ始める。

逃げ惑うことができた集落の者たちは、必死にその身の理不尽を呪う。

敵に殺されたのならまだいい。どうしようもないこと^Xで死ぬのなら、まあ、諦めましょう。

「つく……」

だが、何のせいで、仲間が狂ってしまうのか。

「う……」

誰のせいで、仲間^Xに殺されなければならないのか。

「うわあああああ——！」

どうして、自分たちは仲間を殺さなくてはならないのか。

事態が収拾したのは、あと少しで夜が開けるかという時間帯だった。生き残ったのは、全体の二割にも満たない。暴走した者たちの破壊と戦闘行為で、集落は完全に崩壊していた。

「……………ふざけるな」

共に生きた仲間たちを手につけ、醜く生き残ってしまった者たちはもはや理不尽を呪うことしかできなかった。

そして、立ち上がる。何のせいでなど、わからない。どうしてなど、わからない。だが、誰のせいなのかだけは、わかる。

ジュレイモンは彼らに会うまで、いつも通りだった。彼らに会って帰ってきて、それでこうなった。

疲労と怪我に苦しみ、理不尽を呪うばかりの彼らには、それしか思いつかなかった。

生き残れた者たちの中には怪我と疲労で死のカウントダウンが始まっている者もいる。今、この怒りと憎しみをぶつけなければ、理不尽に狂ってしまいそうな者もいる。

だからこそ、彼らは動いた。湧き上がった感情を一刻も早く清算したいと。このいつ死ぬかもしれない時代、自分たちが死ぬ前に殺してやると。

焦りと憎しみと怒りと——さまざまな色が緋い交ぜになった激情を原動力に、彼らは突き進んだ。

幸いにして、場所だけはジュレイモンから聞いているのだ。詳しい入口がわからなくても、どうとでもなる。

「抗体を得ただけで生きられると勘違いしたあの死に損ないどもを討つ——！」

誰かが言ったその言葉と共に、生き残った者たちがどこかにアジトがあるだろう岩壁に向けて攻撃する。

誰もが予期しなかった戦争が、無意味に終わる戦争が、そこで始まったのだ。

そして、現在。

事態は思いの外悪くなっていた。

この事態に関係のない、さまざまな通常のデジモンたちがこの場に集まり始めていたのだ。

それは、純粹に風の噂で話を聞いたX抗体を憎む者たちであり、X抗体を奪おうとする者が火事場泥棒を働こうとしていたり、さまざまな理由でこの場に現れ始めたためであった。

そのために、場が混沌とし始めた。

「つく……！」

もはや、ウォーグレイモンX抗体の手だけでは足りず、他のX抗体デジモンも参戦している。

最悪のパターンだ。あの手加減はウォーグレイモンX抗体だから出来たのだ。他のデジモンたちにそれはできない。

これでは死傷者も出始めてしまうだろう。

そうすれば本当にX抗体と通常のデジモンの溝が深まることになる。その果てに待つのは、この世界を巻き込んだ戦争だ。

それだけは避けなければならぬ。この状況を引き起こした何者かの思い通りには絶対になつてたまるものか！ ウォーグレイモンX抗体はそう誓う。

だが。

「つあ、ガ……」

だが。

「ああ……いい、や、死にたく——！」

だが、もはやウォーグレイモンX抗体だけでは事は止まらないところまで来てしまった。

ついに死亡者が出る。

最初に死んだのは、パルモンX抗体だった。

「やった！ やったぞ！ オレたちでも勝てる！ あのちよつと強くなっただけで調子の乗つてる連中に勝てるんだ！」

それが、通常デジモンたちを調子づかせる結果となつた。

「お前らアああああ！」

それが、リーダー格に言われてしぶしぶと防戦していたX抗体デジモンたちの空気を変える。

「殺す——！」

「殺せ——！」

通常デジモンたちとX抗体デジモンたちが、本気でぶつかり合う。

これを、どう見るか。

憎悪と憤怒に駆られた戦争、生存闘争から最もかけ離れた行為だと見るか。それとも、これこそが世界の覇者たる種族を賭けた、真の生存闘争だと見るか。

「つ、やめろっ！」

「やめるんだっ！」

ウォーグレイモンX抗体やメタルガルルモンX抗体の声も届かない。

偏つていた戦線は引き戻され、敵味方問わず多くのデジモンが倒れ

た。命が、まるで水に濡れた和紙のように破れていく。

「この世界から出て行け——！」

「この世界はオレたちのものだ！ お前たちは選ばれてないだろうが——！」

「不法侵入する狼藉者がつ。潔く消えろ！」

「お前たちのいるべき居場所は旧世界だろう！」

×抗体を持たない、この世界の正当な住人たちが正論を感情任せに叫ぶ。

「僕たちは生きるんだ！ 死んでたまるか！」

「お前らは俺たちに死ぬというのか！ お前たちは俺たちの立場だったら死ぬのか！」

「この世界に来て何が悪いんだ！」

「ここが我々の新たな居場所だ——！」

×抗体を持つ、この世界に來た侵略者たちが暴論を感情任せに叫ぶ。

感情任せの言葉は善悪正誤をかき消して、ただただ言葉の本懐を成さずに戦場に溶けて消えていく。

「この——わからず屋ども——！」

誰かが叫ぶ。果たして、それはどちらの誰の言葉だったのか。

もはやそれすらもわからないほどに、事態は混沌としていた。

「つく。いい加減に——」

そして、こうなってしまった事態に対して、ついに強^{ウォーグレイモン×抗体}者が折れた。

その手に出したのは、巨大な火球。それは、彼の必殺技。

「——しろーっ。『ガイアフォース』ッ」

投げられた火球が、空を裂く。

誰もがその火球に呆然とした。特に、敵側である通常デジモンたちはその威力に正気に戻る。冷静な部分が勝てないと、その事実を思い起こさせ——

「そんなこと知るかつ。あれを殺すためにここに來たんだつ。命なんて惜しいもんか！」

——その冷静な部分を、誰もの中にある感情の部分が押し潰した。
あれでも止められなかった。

今、ウォーグレイモンX抗体とメタルガルルモンX抗体というこの場の二大強者は選択を迫られていた。

すなわち、自分たちも参戦するか否かだ。今は敵の攻撃を防ぎ躲すだけの二人だが、これ以上は時間の問題であることもわかっていた。

「っどうする——!」

残された時間を使い切るまで諦めないと、ウォーグレイモンX抗体たち二人は必死に考える。

だが、その時は意外な方向から飛んでくることになる。

「『ガイア——』」

「なっ」

「——フォーツス」

漆黒の火球がウォーグレイモンX抗体に向けて放たれた。

それを、その技を、ウォーグレイモンX抗体は知っている。自身の技と同じ名前を関する技を、ウォーグレイモンX抗体は受け流す。

空の向こう側へと消えていった火球を横目に、ウォーグレイモンX抗体は攻撃を仕掛けてきた相手を睨みつけた。

「ふん。どうした。X抗体を得て弱くなったか? 噂に聞くX抗体がこの程度とは」

「ブラックウォーグレイモン——!」

そこにいたのは、漆黒の竜人。

ブラックウォーグレイモンと呼ばれるウォーグレイモンの亜種だった。

「まさかお前が来るとは思わなかったよ」

「それはオレも同じだ。こんなくだらん場所に来る気はなかった」

「くだらない、だと……?」ウォーグレイモンX抗体が険しい表情で見る。ブラックウォーグレイモンはさも当然そうに答えた。

「ああ。くだらない。だろう? どいつもこいつも戦うべき相手すら見定められない、馬鹿しかない」

「それは——」

ウオーグレイモンX抗体が口を開こうとする。

「っ、ウオーグレイモンツ」

瞬間、メタルガルルモンX抗体の叫びに、ウオーグレイモンX抗体は慌てて対応した。

迫り来る漆黒のドラモンキラーを、彼は何とか自身のドラモンキラーで防いだ。そして、すぐに睨みつける。

だが、

「どうやらお前も知らないらしい。オレはお前のことを買いかぶり過ぎていた……いや、これはオレだからわかったことであるから、それも仕方ないのか」

ブラックウオーグレイモンの目には、失望だけがあつて。

ウオーグレイモンX抗体は呆気にとられる。

「まあいい。ここに来たのも何かの縁。何の役にも立てぬ、何も成せぬ、為すべきことの前で行動すらせずに思考だけ巡らせる愚か者。そんな愚鈍さを示すことしかできぬというのなら、ウオーグレイモンでいるなツ！」

「っ」

「さあ、積年の決着を……否、オレがお前にトドメをさしてやる」

そして、ブラックウオーグレイモンがウオーグレイモンX抗体に向かって攻撃を仕掛けた――。

第十一話く空より来る絶望の騎士く

戦火はコータたちさえも巻き込んでいた。

「トコモンはしっかりオレに捕まってるよっ」

「アウツ！」

トコモンを抱えるコータはメイクームンと共にドルガモンの背に乗って、戦場にいた。

もちろん、彼らも初めは観戦していた。だが、その最中で抗体を持たないデジモンたちに襲われ、仕方なく戦い始めたのだ。

コータたちはウォーグレイモンX抗体たちほど強くない。殺す気で来ている相手に余裕など持てるはずもない。生きるため、生き残るために、彼らは必死に戦い続けるしかなかった。

「右と左の前方！ その次に後ろだッ」

「おう！ パワーメタル”連打ッ！”」

コータの指示に従って、ドルガモンが攻撃する。

ドルガモンは攻撃に専念し、コータは索敵に専念する。この乱戦状況ではそれがハマるらしく、足でまとい付きであるはずの彼らは今の今まで怪我らしい怪我もなかった。

だが、それでも。

「つち。キリがない。……右斜後ろだッ」

「おう！」

次から次へと増える通常デジモンたち。彼らはX抗体デジモンに思うところがあるから、ここにいる。このベルサンディターミナル中に存在する、X抗体デジモンに思うところがある者たちが集まってきている。

対して、レジスタンス以外のX抗体デジモンはいない。X抗体デジモンに通常デジモンを狙う理由はない。つまり、参戦する理由がない。

増えるデジモンたちと、増えないX抗体デジモンたち。これが示すのは、このままでは数の差で押し切られるということだ。

「アウアウ？」

その時のトコモンが何と言ったか、コータには珍しくわかった気がした。

「逃げたくても逃げ道はない。逃げてる間にやられちまうよ」コータは苦笑い気味にそう言った。

「アウー」

「正面！ その後ろにもう一体！」

「おらあつー！」

ドルガモンの鉄球が正面から突撃してきた角を鼻先に生やしたサイのような鎧竜二体を打ち砕く。

モノクロモンが倒れ込む時には、ドルガモンは既に別の相手に攻撃していた。

……この場では、敵の生死を確認している余裕すらない。次から次に来る相手を捌き続けることしかできないのだ。

「……っ」

そしてその時。

コータが、いや、この場にいた全員が状況も忘れて空を見上げた。

その時、ウォーグレイモンX抗体は遙か上空でブラックウォーグレイモンと戦いを繰り返していた。

「らあらあああああ！」

「ふんんんんんんっ！」

ラッシュ。

ドラモンキラーとドラモンキラーのぶつかり合い。目に見えないほどに腕が動く。相手を貫くべく動かされた腕は、しかし、相手に防がれて届かない。

時折、蹴りが出される。それも蹴りで返される。

似た容姿に似た動き。高速で繰り返される技の応酬。もはや傍からではどちらがどう攻撃しているかさえわからない。

「なるほど。やはりX抗体とは名ばかりだな。抗体を持たないオレと互角とは」

「はっ。やっぱりお前は変わらないな。オレとしてはお前がX抗体

を得てない方が意外だった、よっ」

「ふん。強くなれるなら確かにX―進化も悪くない。だが、アレの思惑に乗るのは癪だ。そもそも強くなると言われても、今のお前を見ると疑問が残る」

「言ってくれるなあつ。嘘つきめ」

ウォーグレイモンX抗体の言葉に、ブラックウォーグレイモンは嘲笑って返した。もちろん、彼とてわかっているのだ。

ウォーグレイモンがX抗体を得て強くなっていることは。

「ふん。身体だけ強くなったところでどれだけの意味がある」

ウォーグレイモンX抗体の場合、X抗体を得て強くなったのはあくまで純粋な身体能力だ。ブラックウォーグレイモンはそれを知っている。

だから、言えるのだ。ウォーグレイモンX抗体は強くなっていない、と。

「オレがお前とどれだけ戦ったと思っている」

「……！」

「少しばかり姿形が変わった程度で、少しばかり動けるようになったところで、オレがお前に引けを取ると思うな——！」

ブラックウォーグレイモンのそこには長年の友情にも似た、しかし、それでいて全く違うものが垣間見えた。

変わってしまった世界で、変わってしまった自分で、しかし、変わらないものがそこに確かにあって。

思わず、ウォーグレイモンX抗体もニヤリと凶暴に笑った。

「ふん。やっと上辺が剥がれたか。相変わらずの優等生詐欺だな」

釣られて、ブラックウォーグレイモンもニヤリと凶暴に笑った。

示し合わせたように、どちらからともなく、二人は距離を取る。そして、その手に生み出したのはその身体の何倍はあろうかという超巨大の火球。

「『ガイア——』今この時だけは、ウォーグレイモンX抗体は状況も忘れた。

「『ガイア——』今この時だけは、ブラックウォーグレイモンは目論見

を忘れた。

そして、同じ名を冠する技が、彼らが戦いと共に磨き上げた誇りある一撃が放たれる。

「——フォース！」

「——フォース！」

大気中のエネルギーを凝縮した一撃が、負のエネルギーを凝縮した一撃が、ぶつかり合う。

威力は互角だった。X抗体純粋なスベックに差があるデジモンと通常デジモンなのに。それが示すこの意味は、果たして。

「っう——！」

「つく——！」

ぶつかり合って、弾ける。

その衝撃に吹き飛ばされて、二人は遥か上空から地上へと落ちていったのだった。

究極体の全身全霊のぶつかり合い。

その余波は戦場にも届いていた。平常時ならともかく、X抗体としても、通常デジモンとしても、疲労と怪我に塗れた今の状況でその余波に耐え切られる者などそう多くはなく。

その一瞬で、戦場が崩壊する。

紙吹雪のように、敵味方問わず吹き飛んでいく。

その中には、コータたちの姿もあった。咄嗟に全員で固まったのはいい。だが、全員がバラバラにならないことを優先する余り、彼らは踏ん張ることができなかった。

「ぐへっ」

そして、墜落。

コータたちはアジトの入口があった岩壁に叩きつけられ、そこでようやく止まることができた。幸か不幸か、ドルガモンがクッションになってくれたおかげで、メイクーモンを除く脆い面々が大変なことになることはなかった。

「いてて……大丈夫かー？」コータが声をかける。

「うぐ、うう、おう」

「アウー」

ドルガモンとトコモンが弱々しく声を上げた。だが、メイクーモンだけが返事をしない。

もしかしてはぐれたか、とコータたちが驚いて見るとそこには普通にメイクーモンが立っていた。

「何だ。いるじゃんかあ。心配させるなよ」

ドルガモンがメイクーモンに声をかける。だが、応えない。

コータたちは首を捻った。そう言えば、確か戦場に出てからはずっと静かだったな、と思い返して。

「にやあー……」

その時、メイクーモンはか細く鳴いた。悲しそうに鳴いた。……寂しそうに、泣いた。

その意味をコータたちが察することはなく。

「コロス」それがメイクーモンの声だとは、コータもドルガモンも思えなかった。

次の瞬間、メイクーモンの身体が怪しく光る。それは、進化の光だった。

メイクーモンが進化する。猫獣人の女戦士とでも言うべき姿に。メイクーモンの面影があるが、人型になったが故か、足や腕に僅かに装着する禍々しい鎧が故か、全くの別人のようにさえ見えて。

彼女こそが、メイクーモンの進化体——メイクラックモン ヴァイシヤスモード VMだ。

「……コロス」

メイクラックモンVMはコータたちに目もくれなかった。

一心不乱に駆けていく。その先にいるのは、先ほどまで戦場だった場所で動く者——ブラックウオーグレイモンだ。

「なっ」

驚きで目を見開き、ブラックウオーグレイモンはドラモンキラーでメイクラックモンVMの爪撃を防ぐ。

その時、彼は確かに見た。メイクラックモンVMの顔に、涙があつ

たことを。

「ナンデ……ナンデ……！」

「なんだ？」

「ナンデ、殺ス。ナンデ、殺サレル。ナンデ、恨ム。ナンデ、怒ル。ナンデ、死ヌ。イヤ。ナンデ、才前タチハ生キル——！」

「つち」

ブラックウオーグレイモンにとって、この場にメイクラックモンVMがいたのは予想外だった。だが、彼は思う。これは好機ではないのか、と。

そこに思い至った瞬間、驚きと思考で鈍っていたブラックウオーグレイモンの動きが精錬されたものになる。そしてそれは、メイクラックモンVMの動きを軽々と超える。

「ツク、ヌウ……アアアッ！」

メイクラックモンVMは死なないように耐えるので精一杯だった。

「ふんッ！」

一方で、ブラックウオーグレイモンの攻撃は苛烈さを増していく。その腕のドラモンキラーの動きはどんどん速くなり、やがてメイクラックモンVMの身体に多くの傷を残し始めた。

「——！」

「トドメだ」

ついにブラックウオーグレイモンが押し切る。

振り上げたドラモンキラーがメイクラックモンVMの顔面を貫く

「ドルガモンッ」

「『パワーメタル』！」

——その瞬間、ドラモンキラーに走る僅かな痛み。ほんの少し、軌道がブレる。

ほんの少しだけだ。だが、そのほんの少しが明暗をわけた。

「ッ——！」

メイクラックモンVMが対応する。暴れるようにして、無理矢理にブラックウオーグレイモンから距離をとった。

「ティマーとパートナーデジモン、か」

ブラックウオーグレイモンは睨みつける。メイクラックモンVMを守るように立つ、コータとドルガモンの姿を。

「何も知らない癖にそれを庇うか」

「何も知らないとか、教えなくせに言うなよ」コータが吐き捨てる。「なるほど。それも最もだ。しかし、真実はお前たちが背負うには重過ぎる。耐えられないのに背負われても困る。後で尻拭いする羽目になるのはオレたちなのだから」

ブラックウオーグレイモンの言っていることは、コータたちにも何となくわかる。コータたちだって好き好んで面倒を背負う趣味はないし、実際に自分たちが生き抜くので精一杯な自分たちが背負い切れないものを背負えば自滅するだけだということもわかっている。

だが、やはり勝手に測られ、決めつけられるのも癪に障るものだ。

「コータ……」

「わかっている。どうにかしてこの場を超えるぞ」

何とかして鼻を明かしてやる、とコータたちは意気込んでいた。

まあ、ブラックウオーグレイモンの鼻を明かしてやらなければ^{生き残る}最低限のことすらままならないのだが。

何にせよ、コータたちだけでは方に一つにしか可能性はない。であれば、メイクラックモンVMの力が必要だ。

「メイクラーモンもいいよな?」

コータはメイクラックモンVMに声をかける。彼はメイクラックモンVMという名称がわからないので、そのままメイクラーモンと呼んだが。

「……」

メイクラックモンVMは答えなかった。少し驚いたように悲しそうにしていただけで。

「……ゴメン、ニャ」

それはどういう意味だったのだろう。

そう言ったメイクラックモンVMは次の瞬間、コータを蹴り飛ばした。

「っ、コーター！」思わず、ドルガモンが叫ぶ。

蹴り飛ばされたコーターは真っ直ぐにブラックウオーグレイモンの元に飛び——

「だから言っただろう」

——冷たい目を向けるブラックウオーグレイモンにキャッチされた。

一方で、メイクラックモンVMはその隙に逃げ出していた。ブラックウオーグレイモンは眉を顰め、コーターを地面に落とす。

「いてえっ」思わず声を上げるコーター。

「大丈夫があっ」

そんな彼の元に、ドルガモンがやって来る。

ブラックウオーグレイモンはそんな彼らを気にすることなく、メイクラックモンVMが逃げ出した方角を見ていた。

「逃げられると思っっているとは」

メイクラックモンVMを追う気なのだろう。ブラックウオーグレイモンは足を動かし、しかし、すぐに止めた。驚いたように明後日の方角を見ている。

「このタイミングか——！」

直後。

争いの音を聞きつけて、来る。

絶望が、空から来る。

「……なるほど。少し遅れたか」

降り立ったのは、白き聖騎士。

この世界で最も有名な聖騎士の一人——と、同じ名を冠する者。

「まあいい。我が使命、果たす時」

——オメガモンAltairS、襲来。

第十二話くニセモノの戦い

現れたオメガモンAlter-Sを前に、ブラックウオーグレイモンは苦々しい顔を隠せなかった。

いずれ相対し、倒すべき相手ではあったが、今はその時ではない。それに目の前の相手よりも優先度が高くて、なおかつ手軽に倒せる相手が近くにいる。

「闇の塔から生まれたデジモンモドキ、か……」

だが、オメガモンAlter-Sにはそんなことは関係なかった。

彼はブラックウオーグレイモンを見、次にコータたちを見て、メイクラックモンVMが消えていったのだろう方角を見て、そして最後にブラックウオーグレイモンに視線を戻す。

「所詮は悪ぶっているだけのチンピラか。我が主の意にはそぐわない。削除する」

オメガモンAlter-Sが肩を竦める。

その姿に、ブラックウオーグレイモンは「仕方ない」と小さく呟いた。

同時に、オメガモンAlter-Sが動く。

「ふっ！」

オメガモンAlter-Sが大地が割った。凄まじい速さで踏み込んで、突き出した右腕。狼の籠手がブラックウオーグレイモンをぶん殴る。

ブラックウオーグレイモンは抗うことなくそれを受け——吹き飛んだ。

「逃げる気か」

あまりの手応えのなさに、オメガモンAlter-Sは冷静に分析した。

事実、それは正しい。

わざと攻撃を受けることで距離を取り、その勢いを利用して撤退の道を選んだのだ。

しかも、ブラックウオーグレイモンは吹っ飛ばされながらもコータ

たちを引つ掴んでいた。

「ッ、おいしいい！」

「あががががが！」

突然に高速でぶつ飛んできた相手に身体を掴まれ、一緒に吹っ飛ぶことになったコータたち。彼らは凄まじい空気抵抗にさらされて今にも飛びそうだった。いや、物理的に飛んでいるのだが、この場合は意識が飛びそうだったのだ。

「追ってくるか。だろうな。ふんっ」

ブラックウオーグレイモンは思いつき足を振り下ろす。

その先にあったのは、地面だ。しかも、ただの地面ではない。その下にあるのは、レジスタンスが使っていたアジトだ。

さて、中に空洞がある場所に上からとんでもない衝撃を加えればどうなるか。それは火を見るよりも明らかである。

崩落していく地面。足を器用に使って、ブラックウオーグレイモンはその碎け岩塊となった地面を蹴り飛ばしていく。もちろん、そんなのは子供騙しだ。攻撃にはならない。

鬱陶しさの余り、オメガモンAlter-Sはその背のマントを振るう。

超高速で振り回されたマント。粉碎される岩塊。オメガモンAlter-Sの視界が塞がれたのは一瞬。しかし、その一瞬で十分だった。

「は。姿形がオメガモンに類似し、本物と同等の力を持つと、オリジナルとは天と地の差だな。経験が足りん。所詮は敗北者の浅知恵だ」勝ち誇ったブラックウオーグレイモンの言葉。

岩塊を蹴飛ばしたのは目くらまし。その一瞬で、ブラックウオーグレイモンはオメガモンAlter-Sの前から姿を消していた。

咄嗟に掘った穴の中、岩塊と岩塊によって出来た隙間、そこにブラックウオーグレイモンたちは入り込むことで隠れたのだ。

「うう……頭いてえ……」

「うわあ……目が回るう」

一方で、究極体の超高度な駆け引きに巻き込まれたコータたちは目

を回してる。

そんな彼らの姿に、情けないとブラックウオーグレイモンは溜息を吐いた。

「時間がない。いい加減にしろ」そう言って、コータたちを睨みつける。

コータたちは痛む頭を押さえて、ブラックウオーグレイモンを睨みつけた。

「喚かないか。状況把握は悪くないようだな」

「……お前はあれに勝てるのか？」

コータの言葉に、ブラックウオーグレイモンは忌々しげに「単純に考えれば無理だな」と答えた。

「基本スペックが違う。先ほどは経験が足りないと言ったが、あくまでそれは逃げの経験値だ。直接的な戦闘における経験は腐るほどある」

「でも、負ける気はないんだろう？」コータがそう聞けば、

「わかってるじゃないか」とブラックウオーグレイモンは答えた。

格上だから勝てないと決めつけ、諦めるような軟弱さを持つ者はここにはいないということである。

「お前たちを助けたのは、お前たちが必要となるかもしれないからだ」
「なるほど。共同戦線ってことだな！」合点がいったとばかりにドルガモンが頷く。

「違う」

だが、ブラックウオーグレイモンは否定した。

「へ」

「徒党を組むのは合わない」

「そ、そんな理由——！」

コータたちの驚きを、ブラックウオーグレイモンはひと睨みで鎮める。

そして、忌々しそうに、本当に忌々しそうに話し始めた。

「お前たちが必要となるかもしれないのはこの先だ。この先に待つのは力ではどうにもできない。それこそ、偉大なる者や到達者どもの領

域。業腹だが、今のオレではどうにもできん」

「……？」

「ふん。わからないか。だが、残念だが……オレでは、お前たちに教えられない。自分たちで気づくか、それか教えられる者に出会うんだな」

「いやいやいやいや。散々思わせぶりなことを言っておいて勝手な——」コータはそう言いかける。その言葉は、途中で言えなかった。「だが、お前たちもいつか出逢う。オレがそうだったように」

そう言ったブラックウオーグレイモンは、思いつきり腕を振るう。僅かな穴が吹き飛び、瓦礫が上空に舞い上がった。それが向かうのは、今まさに無差別攻撃を仕掛けようとしていたオメガモンAlter—Sの下だ。

「行け。多少の時間は稼いでやる」

それが、ブラックウオーグレイモンの最後の言葉だった。

ブラックウオーグレイモンはコータたちを引っ掴んで、思いつきりぶん投げる。

「ああ、全くらしくない。が、力と強さこそがオレのすべてであるからこそ。——負けられん」

そして、一方の自身はオメガモンAlter—Sへと向かっていった。

「死にに來たか」

突撃してくるブラックウオーグレイモンを、オメガモンAlter—Sが迎え撃つ。

ブラックウオーグレイモンが繰り出したドラモンキラーを、難なく右腕の狼の籠手で防いだ。

「解せんな」オメガモンAlter—Sが呟けば、「だろうな」とブラックウオーグレイモンが嘲笑う。

「貴様の行動は不可解だ。貴様はすべてを知っているのだろうか？知っていて、このような行動をするというのか」

「……」

ブラックウオーグレイモンは答えなかった。

代わりに、作り出した小さめの火球を投球する。凄まじい速さで迫ったそれを、オメガモンAlter-Sは軽く躲した。

「なるほど弱い。貴様は闇の塔の残骸。カスデータによって心を持つただけのニセモノ。ニセモノに与えられた役割すら果たせない、失敗作。失敗作は失敗作らしく、屑らしい弱さだ」

心底どうでもいいとばかりに、オメガモンAlter-Sは左腕で殴る。

迫る左腕を、ブラックウオーグレイモンは屈んで躲した。

そして、

「ふん。否定はせん」

すぐさま蹴りを繰り出した。やはりあっさりと躲されたが。

「しかし、掘り起こされるのは不愉快でしかないぞ。オレの問題はもうケリはついている。世界にとっても、オレにとっても」

「だろうな。身に余ることを企てた愚か者が失敗したことだけは聞き及んでいるぞ。そのような創造主だから、貴様のような失敗作も産まれるのだろうな」

「……」

ブラックウオーグレイモンは、やはり答えない。

だが、まあ、代わりに繰り出された腕——正確にはそこに込められた、オメガモンAlter-Sを打倒せんとする純粋な感情が答えではあるか。

「一つ言えるとしたら。オレはオレ自身をさほど嫌ってはいない。同じように、オレはオレの大元もさほど嫌ってはいない。ライバル心はあるがな」

その両手に巨大な火球を作り出しつつ、ブラックウオーグレイモンは言う。

「……ほう？」それは意外だ、とばかりにオメガモンAlter-Sが笑った。

「だから、オレはあいつらを助けるんだろう。悪から生まれたものが悪であるとは限らない。オレはそれを知っている。オレを肯定してくれた、オレに向かい合ってくれたやつを覚えている。だからオレは

オレの道を往ける」

「……」

「どうしたオメガモンAlter—S。ずいぶんな顔をしているぞ？」

「——貴様」

ブラックウオーグレイモンはオメガモンAlter—Sを嘲笑う。まるで同族嫌悪が込められているような、無知な幼子を馬鹿にするような、笑いだった。

「ずいぶんとらしくないな、ニセモノ。同じニセモノのオレに感じ入るところでもあったか？」

「……確かにそうだ。私は我が主の想い、為すべきことに共感している。だが、ああ、認めよう。それはそれとして、私は貴様が——」

オメガモンAlter—Sはその両手の籠手から、それぞれ武器を出す。持ち主のやる気を反映したのだろう、その剣と砲塔は強い威圧感が込められていた。

「私は所詮、ニセモノにすぎず。その在り方を良しとするが故に、貴様が気に食わない。創造主に逆らった、貴様が」

「は。それはオレも同じだ。貴様らが気に食わん。だから、オレはここにいるッ」

言い切りながら、ブラックウオーグレイモンは巨大な火球——ガ
イアフォースをぶん投げる。

一方で、オメガモンAlter—Sはその左腕の砲塔を静かに向けた。

「グレイキャノン——！」

放たれたプラズマ弾が、火球にぶつかる。

そして。

ブラックウオーグレイモンのガイアフォースは、呆気なくグレイキャノンの前に敗れ去る。だが、そんなことは両者共にわかっている。

であれば、次だ。

ブラックウオーグレイモンはその背のブレイブシールドを、投擲し

た。

「む」

当然、オメガモンAilter—Sもそれに対応する。投げられたブレイブシールドを、右腕ガールソードの剣で両断する。

ああ、だが、その瞬間にブラックウオーグレイモンは次の行動に移っている。

「ブラックトルネード」ッ」

超高速で回転しながらの突撃。さながら竜巻のようなその攻撃は、ブラックウオーグレイモンの全力が込められていた。

疾い。周囲の空気を巻き込み、引き裂き、突き進む竜巻。

そのあまりの速さに、オメガモンAilter—Sは僅かに瞠目する。彼は咄嗟に反撃できなかった。

ガールソードにぶつかった竜巻を、オメガモンAilter—Sは力尽くで弾く。

「うおおおおおおおー！」

だが、即座に次が来る。二度目の竜巻。しかも、突撃し続けているせいで、スピードが上がっている。オメガモンAilter—Sは悟る。

躲しきれない、と。

「なるほど強い。X抗体持ちだった貴様の大元よりはずっと。だが、それでも——」

竜巻がオメガモンAilter—Sに激突する。聖騎士を貫かんと、その胸を削る。

だが、

「——貴様も敗者こちら側になることに変わりはない」

だが、

「さらばだ、偽物ホンモノ」

だが。

オメガモンAilter—Sには一手届かない。

次の瞬間、ブラックウオーグレイモンは衝撃と共に上空に叩き上げられる。彼が気を取り直すよりも、彼の身体が両断される方がずっと

早かった。

「届かない、か。まあ、だろうな。だが、覚えておけ。貴様らの思い通りにはならんぞ。世界は、勝者のものだからな」ブラックウオーグレイモンは嘲笑う。オメガモンAlter-Sを、その彼をして主君と崇める者を、嘲笑う。

負け犬の遠吠えのようにはしか聞こえない言葉と共に、彼はこの世を去ったのだった。

第十三話 この期に及んで奇跡よ起きろ

遙か上空でブラックウオーグレイモンとオメガモンAlter Sが戦っている。それを理解しながらも、コータたちは逃走していた。

自分たちは勝てないと、わかっているから。

「ドルガモン！ もっと急げって」

「わかってるよっ」

ドルガモンは全速力で駆けていた。実際、この十分足らずで数キロは移動できている。

戦場だった場所からはそこそこの距離がある。だが、それでも、コータたちは移動を続けていた。この程度の距離を移動したところで、あの白い聖騎士相手には意味がないと。

「って言ってもどこまで行けばいいんだろうなあっ！」

「隠られる場所までだ！ 近くにいると思われて長距離から面攻撃されたら終わりだ。逃げられたと思わせなきゃいけない！」

「それ結構無茶だろー」

ドルガモンは必死に足を動かした。足を動かすことだけに専念した。余計なことを考えて足が遅くなるくらいならば、その余計なことはコータに任せるべきだと理解していたからだ。

ああ、だからこそ。自分のパートナーがそう思ってくれているからこそ。

コータは焦っていた。この場を切り抜ける案が思いつかない。この場をやり過ぎせる場所が見つからない。あの偉大なる皇帝の時のような、悪足掻きの一つすらも見つからない。

何かをしようとしても、何もできない。何かすることこそが役目のに。

「――タ」

「つく……！」コータは苦悶の声を漏らした。

「――タ！」

「どうすればっ！」 必死に辺りを見渡し、頭を回転させる。

「——コータツ！」

「っ、ドルガモン？」

そこで、コータはようやくドルガモンに呼ばれていることに気がついた。

「大丈夫。リラックスしていこう！ ……気楽にな」

もちろん、それは全力を尽くさないということではないし、生存を放棄するということでもない。当然だが、命のかかった状況で気楽にいけるはずがないし、ここからリラックスなどできるはずもない。

それはドルガモンもわかっている。だが、それでも、ドルガモンはあえてそう口にした。

「……はは。無茶言うなよ」

だから、コータも笑って返す。

その時、彼らは身体が強張っていくのを感じていた。

彼らはこの感じに覚えがあった。圧倒的なまでの力。自分たちよりも遠く離れた実力を持つ強者の雰囲気。つまり、オメガモンA1 t e r—Sだ。

当たり前だが、今までで一番の強敵だ。弱っていない分、あの時の偉大なる皇帝よりもずっと強いだろう。

「ほう。逃げないのか」

目の前に降り立った死神を前に、コータたちは震えを押さえて立ち向かう。

「逃げるのは無駄だからね」

「なるほど。潔い」

「ブラックウオーグレイモンはどうしたんだ？」

時間稼ぎとして自分たちを逃がした彼のことを、ドルガモンは聞いた。わかりきったことではあったが、なんだかよくわからなくても助けられたということもあって、聞かずにはいられなかった。

「削除デリートした」

「——そっか」

コータもドルガモンも、何となく分かっていたからか。驚きはな

かった。怒りのような激情も沸かなかった。いや、目の前の強者を前に、そんな無駄な感情を覚えられなかったのか。

「削除する」

「っ、来るぞコーター！」

「おうー！」

迫り来るオメガモンAlter-Sを前に、ドルガモンは飛びず去る。

実力差がありすぎるから、視線を外すなどという愚行は犯さない。視界に収め続けられるように、何があっても対応できるように、動く。

ああ、でも。

「遅い」

「ぐ、あ——！」

「ぐっ」

速さが違う。

「弱い」

「ドルガモンっ！」

力が違う。

「脆い」

経験が違う。

ドルガモンがどれだけ回避行動を取ろうと、どれだけ防御行動を取ろうと、オメガモンAlter-Sはその尽くを上から振り伏せることができる。

「有象無象よりはマシという程度か」

オメガモンAlter-Sの右腕の剣が、ドルガモンの翼を両断する。

ドルガモンは見ていた。ちゃんと見ていた。それなのに防御するという行動も、躲すという行動も取ることができなかつた。気がついた時には、自分は切られていたのだ。

コータも見ていた。だが、見ていたがわからなかつた。オメガモンAlter-Sの速さを前にしては、何が起こっているのかを後追いで知るのが精一杯で、指示を出すのが間に合わないのだ。

「……！」

コータは拳を握り締める。初めの一撃で振り落とされたコータは、オメガモンAlter-Sの蹂躞を見ていることしかできなかった。必死に躲し、防ぐ、ドルガモンだが、やはり遅い。躲すよりも早く、防ぐよりも早く、攻撃が捉えてくる。一秒ごとに、致命傷が増えていく。

「ドルガモン——！」

ああ、そんなだから、ドルガモンが地に伏せるまで数秒と経たなかった。

その時の光景を、コータは見ていることしかできなかった。当然だ。それは、自分が役ただの人間に立ってない場所で。ただの人間が、人間を遥かに超える力を持つバケモノの戦いにおいて役に立てることなど何もない。

いつか、いつか来ることではあった。わかっているけど、コータは悔しくて仕方がない。憎くて仕方がない。

「——か」コータは呟いた。

その呟きに、オメガモンAlter-Sが反応する。

「——たまるか」

しかし、すぐに興味を無くして、オメガモンAlter-Sはその右腕の剣をドルガモンめがけて振り上げる。

「負けて……ッ、勝たせてたまるか——！」

その時、奇跡が起きた。

コータの願いに呼応するように、ドルガモンが進化する。

生き物が最短で進化する時、そこには死敗北がある。このままでは負ける。負ければ死ぬ。その圧倒的なまでの敗北の恐怖が、死の恐怖が、生き物に限界を超えさせる。もう一步を進ませる。それこそが生存本能の極致。

Xウイルス死に対抗するためのX抗体の獲得はそうだったものの先にある。であればこそ、X抗体を持つ者はそうだったものに優れる。

だから、これは奇跡ではあっても、必然ではあったのだろう。

「まだだあつッメタル——」

現れたのは、獣竜。頭に刃の角を生やし、赤と白の体毛、鋭い槍の尾を持つ、獣竜。身体と一体となっている数々の武器、何よりその巨躯。それ故に、最後の敵の異名を持つ者。

ドルグレモンという名の、完全体デジモン。

「——メテオ、オー！」

そして、放たれるのはその巨体の十倍以上の超高質量かつ超巨大な鉄球。その様はまさにメタルメテオ^{鉄の隕石}。

すべてを押し潰す鉄の星が、空より落ちる——！

「ああ、まだだな」

鉄の星が敵を粉碎する。最後の敵が放つ技にふさわしい、圧倒的なまでの破壊と衝撃が辺りを吹き飛ばす。即座にドルグレモンが来て庇ってくれなかったのならば、コータは吹っ飛んでいたことだろう。それこそ、いつかのように頭をぶつけて記憶喪失になりかねない。

それほどの威力のすべてが、もはや広範囲攻撃に含められるだろう技が、たった一人に向けられる。それが、オメガモンAlter—Sを襲う。

ああ、だがしかし。

「——な」

足りない。

今の時代は弱肉強食の死が当たり前にある時代だ。そんな時代においては生きていくことが、生きられることが、奇跡と言える。

であるのならば、世界はそこに生きる誰かの奇跡が集まって出来ていて、それ故に。

「この程度か、異分子」

奇跡の一つ程度でどうにかなるほど、世界は安くはない。

オメガモンAlter—S、健在。

「……これは」

「コータ……」

ドルグレモンの進化できたのはいい。

だが、完全体になっても、目の前の究極には届かない。この期に及んでもう一回進化できるなどという馬鹿な妄想のようなことはあり

えないし、つまり、詰みに近い。

「……」

「コータ」

「……行こう」

コータはドルグレモンの背中に跳び乗った。ドルガモンよりもだいぶ背が高くなって上り難くなったその巨軀に、コータは笑った。

気づけば、震えは止まっていた。

「万に一つの可能性が生まれたって思って、さ。いくぞ、ドルグレモンッ」

「ああ、そうだな。勝つぞ！ コータッ」

絶望も喉元を過ぎた。感覚は麻痺した。何もできることはない。

ああ、それでも何かする気は、諦めない気だけはある。だから、コータたちは最期に無謀をするのだ。

「最後の話はいったようだな」

ゴ丁寧に、オメガモンAlter-Sは待っていてくれた。

まるで観察するように、いや、あるいは何か狙いがあるかのように、この数分で彼は使命とまで言ったデジモン^{コータたち}の削除をしなかった。

「さて……では、私の使命を果たすでしょう」

「ドルグレモン——！」

「おおおおおおお！」

ドルグレモンが駆ける。コータ^{半身}を乗せて、力強く生を駆ける。

オメガモンがその左腕の砲塔をドルグレモンに向ける。適当に死を向ける。

そして。

「『ガイアフォース』ッ」

「『コキュートスブレス』ッ」

また一つ、奇跡はここに起きる。

第十四話く諦めるな、突き進めく

時は少しだけ遡る。

「……………」

その時、ウオーグレイモンX抗体は何かを聞いた気がした。

「……………」

だが、わからない。とてつもなく瞼が重くて、目を開けられない。そこでようやく、ウオーグレイモンX抗体は自分が目を閉じている——正確には気絶していたのだ、と気がついた。

「いい加減に起きんかいっ」

そして、衝撃。

まるで本の角でぶん殴られたような、ウオーグレイモンX抗体にとっては小石を投げられた程度の軽い衝撃に、ウオーグレイモンX抗体は慌てて目を覚ます。

「やっと起きたか寝ぼすけめ」

「アウアウ」

目の前にいたのは、不機嫌そうなボコモンと呆れ気味のトコモンだ。何やらいろいろあったのだろう。彼らは土で汚れていた。

「っ、君たちは……………そうだ、オレは……………」

「む、覚えてないのか？」ボコモンが怪訝そうにウオーグレイモンX抗体を見る。

見られて、ウオーグレイモンX抗体は頭を回し、そして思い出した。

あの時、自分のガイアフォースとブラックウオーグレイモンのガイアフォースによる衝撃によって吹き飛ばされたウオーグレイモンX抗体は、体勢を立て直してすぐに戦場へと戻ろうとした。

その時だ。

戦いの音を聞き分けたのか、ついにやって来たオメガモンA I t e

r | Sを見たのは。

逃げることもできず、ウオーグレイモンX抗体はそのまま戦いを挑んで、結果この様だ。

「死んでない。怪我也……………そこまでじゃない？ 奇跡だ」

驚きを露わにするウオーグレイモンX抗体に、トコモンは何か言いたげだった。

「ア——」

実際、何か言おうとした。

「やめんかつ」

すぐにボコモンに口を塞がれていたが。

「あいつは？」

ウオーグレイモンX抗体の言うあいつが誰か、そしてそれを聞いた意図など、わかりきったことだった。

ついでに言えば、ウオーグレイモンX抗体自身、それが愚問であることなどわかりきっていた。なぜならば、遠くから聞こえてくる轟音が、その意味を端的に示していたのだから。

「誰か戦っている、のか……？ 誰が」

「さあもう。コータか、それともあのデジモンモドキか」

「そんな言い方はやめてくれ。……でも、そうか。ブラックウオーグレイモンか。あいつなら確かに……——」

ウオーグレイモンX抗体は立ち上がった。

「どこに行く？」

「オメガモンAlter—Sのところだ」

「はあ」やれやれとばかりにボコモンは大きく溜息を吐いた。「わかっているじやろ。行ったところで勝ち目があるとは限らんし、そもそもブラックウオーグレイモンならばもうやられてるかもしれんぞ」

それでも、とウオーグレイモンX抗体は行こうとする。

そんな彼の足を、ボコモンが慌てて抱きついて止める。優しいことに、振り払われることはされなかった。

「待て待て待て待てい。考え直せ。今は引く時じゃ。散り散りになった仲間をまとめ直し、組織を立て直し、あのニセモノに対する備えをじゃな……」

「アウウウ」ボコモンの焦りようを、トコモンが笑う。

「ええい、お前さんは黙っとれっ！」

一方で、ウオーグレイモンX抗体はそんなボコモンを抱え上げる。

彼はボコモンを自分の目線の高さまで持ち上げ、諭すように笑った。

「そうだな。きつと君の言うことが正しいんだろう」

「じゃ、そうじゃろう！　じゃろう！」

「アウー……」

「でも、すまない。オレは短慮な馬鹿らしいからな」

自嘲しているようで、その実、全くしていないのは明らかだった。

ウォーグレイモンX抗体の笑顔に、ボコモンは何を言われたのかわからないとばかりに啞然とする。

「オレには何もない。あいつのように真実を知っている訳でもなく、推理する頭もない。X抗体を得てるのに、あいつと互角の勝負しかできないようなどうしようもないやつだ。でも」

「でもお？」

「オレにはオレの意地がある。ここがオレの踏ん張りどころってわけだ」

ウォーグレイモンX抗体はボコモンを優しく地面に下ろした。

ウォーグレイモンX抗体に啞然としているボコモンは、そのまま地面に転がって起き上がらない。

「いやいやいやいやいやいや！　そんな言葉で誤魔化されんぞ！　おい、おiiiiiiiiい！」

咄嗟に声を上げるが、もうウォーグレイモンX抗体は止まらなかった。

「ちよつと待ってくれ」

そして、そんな彼らの元に飛来するのはメタルガルルモンX抗体だ。

「無事だったのか！」

「心配かけたな。重傷者、戦力にならない者たちを避難させていた。オメガモンAlter-Sの襲来で戦闘は中断している。引くなら今のうちだ」

メタルガルルモンX抗体の言葉に、ボコモンがうんうんと頷く。

「そうだ、言ってみよう」とでも言いたげだった。

「だが、引く気はないんだろう？」

「わかってるじゃないか」ウォーグレイモンX抗体はニヤリと笑った。「よし。おれもいこう」メタルガルルモンX抗体も頷く。

「え」思わず、ボコモンが間抜けな声を上げた。

驚いたボコモンが見れば、その時にはウォーグレイモンX抗体たち二人は空の上で。

「な、なんでじゃー！　なんでどいつもこいつも大局を見極められないのじゃいー！」

「アウアウアウ。アウーア」

「うるさいわい！　ああああ、本来ならばこんな時に……ぬううううううう！」

「アウ」

後に残ったのは、思い通りに事が運ばずに地団駄を踏むボコモンと、そんなボコモンを呆れたように見るトコモンだけだった。

「アウー」

「ふん。わかつとるわい。あながち間違いでもなかろうということ
は」

ボコモンは険しい顔をしながら、トコモンに答える。

ああ、そうだ。ウォーグレイモンX抗体たちの愚行にしか見えない行動は、あながち間違いではないのだ。

「そうじゃ、それこそがX抗体なのじゃからな……はあ」

X抗体とは強き生命が獲得する、新たな進化だ。そして、進化とは誰でもできるものではなく、次の世代へと残るべき者が獲得するものだ。

事実、X―進化は死に臨んだ時、それでもなお生き残ろうとし、そして生き残る力を持った者たちが発現した新しい進化だった。

X抗体は持ち主の潜在能力を引き出す。そして、それ故に従来の種よりも強い。ああ、だが、X抗体の本質はそこではない。否、それが全てではない。

X抗体の本質の、最も強き恩恵。それは図らずも、彼らが最も望んだものにある。彼らはX抗体を獲得した時、強くなることを望んだか？　答えは否だ。そんなことでX抗体は得られない。それで得られ

るのは、他者からX抗体を奪う者だけだ。

自力で発現させる者は、強さなど望まない。力など望まない。ただ、目の前にある死に対抗することを望む。ああ、そうだ。死への対抗、生存への執着、それこそがX抗体の最も強き恩恵だ。

であるのならば、X抗体持ちたちは生き残るということに部分に対して、彼らは従来以上の嗅覚を発揮する。

ウォーグレイモンX抗体が、メタルガルルモンX抗体が、道理を横に置いてまで行く理由が、そこにある。

「アウアウ」

「それがわかっていいるのなら、って。わかっているても腹立つものは腹立つのじゃい！　なんでわしの言うこと聞かんのじゃー！」

「アウー」

こいつはもうだめだ、とばかりにトコモモンが息を吐く。

やはりボコモモンは地団駄を踏み続けるのだった。

そして、時は現在に戻る。

その時、オメガモンAlter—Sは先ほど倒したと思っていた有象無象の登場に僅かに目を見開いていた。

「さて、どちらの使命を優先するべきか……—」

一方で、ウォーグレイモンX抗体はオメガモンAlter—Sの胸を見る。そこに付けられた傷が誰によるものかなど、彼にはわかりきったことだった。そして、この場にその誰かがいないということが、何を示しているのかも。

「——いや、どうとでもできるか。しかし、生きていたとはな。それでここにいるということは、そういうことで構わないな？」

「構わなくない。オレたちがここにいる理由はただ一つ、生きるため」
力強い言葉だった。そこに込められた想いが、決意が、あらゆる感情が感じ取れる言葉だった。

言葉と同時に、ウォーグレイモンX抗体は腕を思いっきり振るう。

オメガモンAlter—Sは後退し、僅かに距離を取ることと躲した。

「あのモドキに対して怒っているのか？ まさかあのデジモンモドキに仲間意識があるとでも言うのか？」オメガモンAlter-Sの不可解そうな声。

「ないさ。オレたちは仲間にはなれなかった。それでも……——！
それだけの話だッ」

「解せんな」

ウォーグレイモンX抗体の言葉の何もかもがわからないと、オメガモンAlter-Sは首を振る。

一方で、ウォーグレイモンX抗体もわかってもらおうとは思わないとばかりに、攻撃を仕掛けた。ラツシュ。怒涛と言う他ない、連続攻撃がオメガモンAlter-Sを襲う。

オメガモンAlter-Sは冷静に、その右腕の剣でそれを捌いていった。

「おれのこととも忘れてもらっては困る」

そんなオメガモンAlter-Sを狙って放たれた、弾丸。メタルガルルモンX抗体の兵装の一つから放たれた弾丸の数々が、ウォーグレイモンX抗体を躲し、オメガモンAlter-Sだけを狙う。

「……鬱陶しい」

初めて、オメガモンAlter-Sが苦々しい言葉を発した。とはいえ、それは自らが劣勢になっっているからではない。

誰だって簡単にできる仕事があれば、いくら一つ一つが簡単だとは言っても面倒さに苛立つだろう。

それと同じだ。メタルガルルモンX抗体もウォーグレイモンX抗体も、単体ではオメガモンAlter-Sに敵わない。力を合わせたところで、それは変わらない。

それでも、時間はかかる。それがオメガモンAlter-Sには面倒なのだ。

「ふんっ」オメガモンAlter-Sが、同士討ちを狙うように射線をコントロールする。

「ウォーグレイモン！ 気にせずいけ！」

「おうっ、その手にかからない！」

だが、抜群のコンビネーションを持つウォーグレイモンX抗体たちは、オメガモンAlter-Sのそんな策など効かなかった。

「……！」

思い通りに行かない。上手くないかない。

オメガモンAlter-Sの苛立ちが最高潮に達する。そして、彼は一つの思考に至った。

すなわち面倒だからまとめて吹っ飛ばせ、だ。

「はっ！」オメガモンAlter-Sが力尽くでウォーグレイモンX抗体を吹き飛ばす。弾丸が自身を傷つけるのにも構わずに。

そして、オメガモンAlter-Sの右腕の剣が光り輝く。剣の中央に光が貯まる。

ウォーグレイモンX抗体たちは悟った。『それ』は、自分たちをまとめて殺せるだけの技だと。

だが、しかし。『それ』はウォーグレイモンX抗体たちにとっては自分たちを殺さんとする技ではあるが——この瞬間、オメガモンAlter-Sの頭から消えていた者にとっては千載一遇の『隙』でもあった。

「今だっ！」

「おう！　『メタル——』」

ああ、そうだ。

この場にいたのはウォーグレイモンX抗体たちだけではない。

負けそうになって、いつの間にかフェードアウトしていた者たちがいる。自分たちが混ざれない究極の戦いを前にして、役に立てないからと諦めるのではなく、逃げるでもなく、自分たちの力が必要になるその時が来るかもしれないと力を溜め続けた者がいる。

「いっけええええええええええ！」

ああ、そうだ。

オメガモンAlter-Sは見逃した。彼らは敵になりえないと、彼らではウォーグレイモンX抗体の足を引っ張るだけだと、彼らがこの戦いに混ざってくるのは合理的な考えではないと、頭から消していた。

だから、これが成る。

「——メテオ——！」

コータの掛け声と共に放たれた、鉄球がオメガモンAlter-Sを押し潰さんとする。

もちろん、オメガモンAlter-Sとて馬鹿ではない。その右腕の剣でもって、再び鉄の隕石を切り裂く——！

「〴〵コキュートス——」

そして、それはウオーグレイモンX抗体たちにとっての千載一遇の好機だった。

「——ブレス——！」

メタルガルルモンX抗体が吐き出した氷結の息が、オメガモンAlter-Sを氷漬けにする。無論、それは一瞬で碎かれる、が。

その一瞬で次が生まれる。

「〴〵ガイアフォース——」

ゼロ距離まで接近したウオーグレイモンX抗体が、次を生む。

X抗体を得たことで可能になった、ガイア己の最大火力技フォースの瞬間圧縮と放出。圧縮することで一点における威力を極限まで高めた技を、敵の胸に向けてゼロ距離で解き放つ——！

「——ZERO——！」

「つぐ——！」

これには、さすがのオメガモンAlter-Sも呻いた。だが、まだだ。オメガモンAlter-Sはまだ健在だ。

「この好機を逃すなっ。放て——！」

「〴〵パワーメタル——ッ！」

その時、オメガモンAlter-Sは背後から声を聞いた。咄嗟に、背後に迫る気配を振り向きざまにたった切る。だが、それは隕石とは決して言えないほど小さな鉄球で。

オメガモンAlter-Sは自分の失策を悟った。

「オレたちの勝ちだ——！」

「〴〵メタルメテオ——！」

三度放たれた鉄の隕石。それがオメガモンAlter-Sを押し

潰さんと迫る。

ああ、これで決着——

「オメガモンの名を舐めるな——！」

——とは、ならない。

なぜならば、ニセモノとはいえこの世界で最も有名な聖騎士であるオメガモンの名を冠するものだから。オメガモンとしての矜持が彼にはある。

「《ガルル——》」

身体を無理矢理に捻じ曲げて、もう一度だけ右腕を振るう。先ほど貯めたエネルギーを解き放つ。

「——ソード——！」

万物を寸断する剣となった右腕が、鉄の隕石を両断する。

「ああ、知ってたよ。お前なら、何度でもオレたちを超えることくらい」

その時、オメガモンAlter—Sはコータの声を聞いた気がした。

「その左腕の剣に何度煮え湯を飲まされたと思ってる——！」

ああ、そうだ。コータは知っている。目の前で自分のパートナーが、あの竜の剣によるオールデリートで殺されたことを、知っている。

だから、ああ、そうだ。だから、コータたちはすべてが終わるまで、何度だって食らいつくのだ。

そして、ついにドルグレモンとその背に乗ったコータがオメガモンAlter—Sに肉薄する。

「っ。だが、この距離ならばっ！」

ドルグレモンの技は中々長距離からの殲滅技だ。だから、接近した状態で放つことはできない。

そして、オメガモンAlter—Sの武器は右腕の剣だけではない。

選択を誤ったな、とオメガモンAlter—Sは手ぶらだった左腕の竜砲を向ける。

「オレたちを——」

「——忘れたな！」

否、向けようとした。

オメガモンAlter—Sは自分の両腕を掴まれる。もちろん、オメガモンAlter—Sにとっては一瞬もあれば振り払えるだけの力だ、が、その一瞬が勝負を決める。

「うおおおおおおお！」

そして、ドルグレモンがオメガモンAlter—Sの胸に向けて頭突きする。

抗ったすべての者たちによって積み重ねられた傷に、最後の一撃が下される。ついにその鼻先の刃が、オメガモンAlter—Sの胸を貫いた——！

第十五話く新たな場所に向けてく

その日、ウォーグレイモンX抗体は山の前で佇んでいた。

小さな山だ。山というよりは、丘というレベルか。まるで土を積み上げて固めたような、自然には決して生まれまいだろう色と形だった。

「……」

まあ、それも当然だろう。その山は、今日作られたものだからだ。そうだ、言ってしまうえば、それは墓だった。

一応、この世界においてデジモンの死体は放置が当たり前だった。やがて朽ちて何処かに消えるまで、ずっと死体は放置される。それが、常識だった。

そんな常識を打ち崩したのは、コータだ。死んだ者に対する供養、生きている者が死者と向き合う場所——墓の存在を、教えたのである。

結果、あの戦闘で亡くなった者たちの死体を、そしてオメガモンA l t e r — S に殺された者たちの死体を埋葬するため、レジスタンスの生き残り全員でこの山を作ったのだ。

一日で墓のための山を作るスケール感に、教えたコータは頬を引き攣らせていたのだが。

「……」

そして、この墓が完成したのはちょうど今から一時間前のことだった。

作っていた者たちは近くの場所に行って休んでいる。今ここにいるのは、ウォーグレイモンX抗体だけだ。彼は彼なりに思うところがあつて、ここに残っていた。

「お前は、何を知っていたんだ？」

コータに教えられた通りのことをウォーグレイモンX抗体は実感していた。墓は生者が死者と向き合う場所だということ。

そう、ここにはブラックウォーグレイモンの死体も埋葬されているのだ。

彼と深い関わりのあったウォーグレイモンX抗体だからこそ、気にかかる。彼が何を知っていて、何のために現れたのかが。

おそらく表層的にわかっている事実は、真実には程遠いのだろう。「まだ終わっていないんだな？」誰に確認するでもなく、ウォーグレイモンX抗体は呟いた。ずっと考えていたが、彼ではそれくらいのみわたりきったことしかわからなかった。

ああ、そうだ。あのオメガモンAlter-Sさえ、途中に過ぎないのだから。

あの時。オメガモンAlter-Sを倒した時。

疲労困憊なコータたちの目の前で、オメガモンAlter-Sの死体が消えた。光となって。

そして、後に残ったのは――

「君たち、誰？」

「俺たちは……？」

――後に残ったのは、記憶喪失のアグモンとガブモンで。

「君たちは……オメガモンAlter-Sの？」ウォーグレイモンX抗体が聞いても、彼らは首を傾げるだけだ。

「わからない。何か、夢を見てた気がする……」

「でも、何の夢だったか……それに、夢の中で俺たちは……？」

アグモンもガブモンも何もわからないようだった。嘘をついている様子は、ない。

この二匹がオメガモンAlter-Sだっただろうことは疑いようもない。だが、彼らとオメガモンAlter-Sが結びつかない。結局、記憶喪失の彼らを見捨てることもできずに、レジスタンスまで連れて行くことしかできなかった。

何だかんだで、先行き不安でしかない。

おそらくは尖兵でしかないオメガモンAlter-Sを倒すだけで、これだけの犠牲が出ている。黒幕に勝てるかどうか以前に、ここまですべて着けるかすらわからない。

でも、それでも。

「お前は、そのためにここに来たんだろう？」

ウォーグレイモンX抗体はそれだけはわかっていた。

具体的に何をどう考えていたかはわからないにせよ、ブラツクウォーグレイモンはその黒幕に至るまでの道のために来たということだけはわかっていた。

だから。

「……オレたちも止まらないからな」

だから、ウォーグレイモンX抗体は宣言する。

それから、彼は振り返らずに仲間の下へと帰っていった。

ウォーグレイモンX抗体が仲間の下へと戻った時、全員が疲れ切った感じで休んでいた。まあ、それでいて誰もが警戒を解いていないのは流石と言うべきか。

「さて、この後についてだが」とメタルガルルモンX抗体が口火を切った。

「……」

「……」

雰囲気は暗い。まあ、祝勝ムードとはいかないのが悲しいところであつた。

当面の脅威だつたオメガモンA l t e r Sを倒せたのは大きい。が、状況は依然として悪い。今回の一件で、多くの仲間を失った。通常デジモンとX抗体デジモンの間にあつた溝はさらに深まってしまった。

今回の件はやがてこのベルサンディターミナル全域に広がるだろう。

そうすれば、また戦争の焼き直しになる確率も高い。レジスタンスが悪いと決めつけて、レジスタンスに所属していないX抗体持ちが敵に回る可能性すらある。

しかも、それだけが問題ではないというのが、何とも言えない恐怖を掻き立てる。

「オレとメタルガルルモンは、まだ戦いを続ける。誰が敵なのか、どうすればいいのか、何もわからない。ただ、何も終わっていないことだけはわかる」

ウォーグレイモンX抗体の言葉に、誰もが不安そうな顔をした。

当然だ。あのオメガモンAlter—S以上の脅威、あのXウイルス並の天災、その再来が来る可能性が高いというのだから。

それこそが、最も大きな問題の一つだった。

「レジスタンスはほぼほぼ瓦解寸前だ。また、オメガモンAlter—Sに対抗するために組織にいたという者も多いだろう」ウォーグレイモンX抗体がそう言った。

「だからこそ、そのオメガモンAlter—Sを倒せた今だからこそ、ここで皆に問う」メタルガルルモンが言葉を引き継いだ。

彼ら二人の言いたいことを、生き残った者たちはわかっていた。

つまり、抜けるのなら今だと。

「……」

「……」

しかし、誰も何も言わなかった。それを言わなくても構わないとばかりに。ここで自分たちも逃げる気はない、とばかりに力強い目でウォーグレイモンX抗体たちを見た。

あの戦いを生き残った者たちが——恐竜が、半機半竜が、獣人が、狼が、力強く頷いた。

「ああ、戦いを続けよう。その先に何が待つのかはわからないけど。オレたちが生きられる世界を目指して、オレたちが否定されない世界を目指して——X抗体が要らない世界を、オレたちデジモンの元に取り戻そう」

その言葉に、力強く全員が頷いた。

話がまとまったところで、メタルガルルモンX抗体の先導の下、レジスタンスの面々はあのアジトが壊滅した時における避難場所へと移動を始めていた。

そんな中、ウォーグレイモンX抗体はコータたちと話していた。

「これからオレたちはみんなと協力しながら、探る」

ウオーグレイモンX抗体の言った“みんな”。それはレジスタンスの仲間だけを指しているのではないと、コータたちは気がついた。「さつきもそう言ってたな。でも、普通のデジモンたちは……——」
「わかってる。でも、だめだ。きつとオレたちだけでは解決できない。難しくても、厳しくても、やるしかないんだ。それができなきゃ、オレたちに未来はない。きつとこれはX抗体とか関係ない、デジモンの問題なんだ」

「そうか」

ウオーグレイモンX抗体の決意に、コータたちは何も言わない。

ただ——

「アウアウ」

「うんうん。いいのう」

——ただ、薄ら笑いをしているトコモモンや感極まった様子のボコモンがいただけで。

ちなみに、そんなボコモンたちにコータたちとウオーグレイモンX抗体は引いていた。

そして、話の邪魔をするなどばかりに、ドルグレモンに唾えられて離れたところに連れて行かれたのだった。

そんなドルグレモンたちを横目に、ウオーグレイモンX抗体はコータに向けて口を開く。

「それで、コータたちはどうするんだ？　もし、行くアテがないのなら

——

わかりきったことを、ウオーグレイモンX抗体は聞いた。

彼にとつてコータたちは一緒にオメガモンAlterSを倒した仲だ。生き残ったレジスタンスメンバーにとつてはウオーグレイモンX抗体たちと並んで英雄扱いされている上、その人となりもわかっている。同じ目的のために一緒に行動してくれるのなら、これほど心強い話はない。

「ごめん。行くところがあるから」

だが、コータは断った。

まあ、わかりきった話ではあった。だから、ウォーグレイモンX抗体は少し残念そうに「そうか」と言うだけだった。

「……もし、君たちのことが終わったなら、いつでも来てくれて構わない。君たちと過ごしたのは少しだけだけど、オレたちは仲間だ」そう言つて、ウォーグレイモンX抗体は手を差し出した。

「ああ、ありがとう」差し出された手を、コータは握る。

「おいおい、俺を忘れるなよ」その手の上に、戻ってきたドルグレモンが前足を置いた。

「忘れないさ。君のその頭突きはね。オメガモンAlter—Sさえ倒す頭突き！　つてね」

「そこは忘れろっ！」

笑いが起こる。

そして、いよいよとなった別れ際——

「おそらく、メイクモンは過去に跳んだ」

——ウォーグレイモンX抗体はそう言った。

ボコモンたちと共にドルグレモンの背に乗ったコータは、その言葉に「過去？　つてことは、ウルドターミナルか？」と聞き返す。

「そうだ。あの戦いに参加できなかった面々がウルドへと跳ぶ瞬間を見たらしい」

「……わかった。ありがとうな」

「礼を言うのはこつちだ。健闘を祈る」

「そっちな」

コータたちはウォーグレイモンX抗体と別れた。

ドルグレモンが「いくぞ！」と力強く地を蹴る。空を駆け昇る——

！

「本当にこれでいいんだな？」ドルグレモンが問えば、

「もちろんじゃない！　空の向こう、彼方の世界——壁を越えるつもりで昇り続ければベルサンディを出られる！　最も簡単な行き方じゃない！」とボコモンが力強く返答する。

そうして、コータたちはこの現在世界を出る。

ウォーグレイモンX抗体、メタルガルルモンX抗体、あのアグモン

とガブモン——レジスタンスの面々に見送られて、彼らは次の世界へと向かう。

向かうは、新世界の内の一つ。過去世界 “ウルドターミナル” だ。

D・C・2018 NEWデジタルワールド——ウルドターミナル——

荒野の道なき道を、小さな黄金の騎士が行く。

「うおおおおおおおおおー！」

居ても立ってもいられずに、走り抜ける。

「俺は、トウエニストなんだあああああー！」

音だけを残して、ただひたすらにまっすぐ前へと進んでいく。

その頭上を、猫のような獣の悲しき叫び声が駆けていった。

第二章：ウルドの感染源 第十六話〈過去世界〉

D・C・2018 NEWデジタルワールド——ウルドターミナル——

新世界における過去世界——そこは大陸に巨大な恐竜系デジモンたちが闊歩する、まさに楽園。現在のベルサンディターミナルとは別の意味で生命の溢れる場所、だった。

ああ、そうだ。過去形だ。

今やこの過去世界は地獄に等しい場所となっていた。それはX抗体デジモンが持ち込んでしまったXプログラムのせい——では、もちろんない。

過去の世界は元々、闘争心溢れる恐竜系デジモンたちがしのぎを削る世界。だから、他の二つの世界と比べて、Xプログラムに侵されるよりもずっと前から生存競争の激しい世界だった。

だから、過去世界に生きる者たちは新世界におけるXプログラムの蔓延の一件についても、「だから何？ どうせやることは変わらないでしょ」と他の二つの世界の慌てようを呆れながら見ていたのだ。

そんな、ある意味では強くてある意味では鈍い者たちが生きる過去世界が、Xプログラムの侵食にも負けなかった場所が、地獄となったのは数日前の話。

数日前、大陸中に響き渡った一つの轟音が始まりだった。

「ニャガアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

それは咆哮だった。

苦しむような、悲しむような、喜ぶような、憎むような、さまざまな感情が込められた、どうとでも捉えられるような叫び。

誰もがその声を聞いた。けれど、その声こそが始まりであったとは、誰も予期しなかっただろう。

そこから、地獄は始まった。

X抗体を持たないデジモンたちが、狂ったように暴れ始めたのだ。

狂気に囚われ自分を失った者が殺し、正気な者が狂気に耐えられず自分で殺す——まさに、どうしようもない。

ああ、まさに地獄だ。そこには何も無い。それは生存のための闘争ではなく、快樂のための暴走でもない、ただの暴力が蔓延する。

大陸中に暴力が蔓延すれば、もはや狂うことのないX抗体デジモンたちも他人事ではない。

「X抗体持ち！ てめえ、それをよこせ！ それさえあればオレは狂わない——！」

「誰がくれてやるか！」

「どけ、そのX抗体は俺様のもんだ！」

「お前の方がどけ！ そのX抗体は我がもらう！」

狂った者には見境なく襲われ、狂ってない者には今まで以上の必死さでX抗体を狙われる。

「……っ、抗体持ちじゃない。死ねッ」

「えっ、が——」

そんな中で、X抗体デジモンたちも自衛のために率先して普通のデジモンたちを殺すようになる。見敵必殺とばかりの事態が数多く起こる。

暴力的な殺しが横行するのが、今のここで。

Xプログラムによる唐突な死に怯える以前の方がマシだと、誰もが呟く。他者と自己の狂気、敵に怯える今、感覚を麻痺させられた者たちは誰もがそう呟く。

そんな世界で——

「これが今の世界か」

——異世界の英雄が、嘆く。

「暗く深き場所からの呼び声一つでこうなるのか」

黄金の槍を携えた“到達者”が、世界を見定める。

「もはや最短の解決は望めず。黒の到達者は率先して動き、白の到達者は静観し、その他の到達者は我関せず、偉大なる者は……いや、彼らを考えるだけ無駄か？ さて、我はどう動くべきか」

有名な聖騎士の一人に名を受け継がせる彼は、思考を巡らせる。

やがて、彼は風と共に歩き出した。

地獄が繰り広げられる大陸の片隅にある背の高い木々が生い茂る森、そこにメイクラックモンVMはいた。

「……」

メイクラックモンVMの目の前にあるのは、狂ったテイラノモンとモノクロモンの死体だ。凶爪に切り裂かれたのだろう。その身体には禍々しい三本の傷が付けられている。

彼らは狂い、目の前にいたメイクラックモンVMに襲いかかった結果、無残に殺されたのだ。

「……相手ガ違ウ」

吐き捨てるように、メイクラックモンVMは言った。当然だが、死体は答えない。

メイクラックモンVMは歩き出した。こんな使えない駒ではなく、もっと使える駒を探して。

そして――。

「見イツケタ」

――そして、見つけた。

力強く歩く、小さな黄金の騎士を。

「ガアアアアアアアアアアアア！」

汚い息を吐きかけるように、メイクラックモンVMは咆哮する。

唐突な咆哮だった。誰だって、突然の爆音には驚く。それと同じで、黄金の小騎士は驚いたように飛び跳ねた。

「なっ、なんだ!?!」

だが、小さくとも騎士の見た目をしているだけはあるのか、彼はメイクラックモンVMを視界に収めるとすぐに戦闘態勢を取る。

メイクラックモンVMは嘲笑うように、その前に立った。

「あ、アンタが元凶か?」

「……ヘエ。何故ソウ思ウ?」

「だって、オレはトウエニストだから、わかるっ！ アンタは臭い!」
「……」

その手を突きつけて、小さな黄金の騎士は吠えた。

一方で、メイクラックモンVMは不快な気分になるのを抑えられなかった。相手が生意気だからではない。相手が真実を見抜いているからでもない。ただトウエニストと語るのが、不快だった。

だから、その不快さを発散すべく、メイクラックモンVMは爪を構え――

「死ネ」

――そして、駆ける。

まるで曲芸師のように頭上を回転しながら飛び越え、背後に回る。そして、着地と同時に力の限り振り回された凶爪。

「うおっ」

だが、それをトウエニストは躲した。

……偶然だろう。地面に倒れ込むようにした躲し方に、メイクラックモンVMはそう結論づける。ならば、連撃だ。

上から、右から、下から、上から、両手を使って幾度となく繰り出される凶爪。だが、その爪撃をトウエニストは辛うじて躲し続けた。

「二二二二……！」

「うおおおおおお！」

おかしい。どう考えても、トウエニストは成長期くらいの実力で、完全体のメイクラックモンVMに敵うはずはないのに。

「……何故！ 何故何故ナゼナゼ――！」

「そんなの、決まってるだろ」

トウエニストが、笑う。

「オレが、トウエニストだからだあああああああああ！」

そして、一発。トウエニストの拳がメイクラックモンVMを捉えた――！

「グ、ニ、……」

そこで、メイクラックモンVMはニヤリと嗤った。

ああ、トウエニストは捉えたのではない。捉えられたのだ。その拳がメイクラックモンVMに掴まれる。

そうだ。躲されるなら、捕まえるまで。

「死、死ネ——！」

今度は、メイクラックモンVMの爪がトウエニストを捉える。身体に大きな傷を付け、トウエニストは吹き飛ばされる。

「ぐがつ」

致命傷だった。

今にも死にそうな彼は、気力だけで死に抗っている。だが、時間の問題であるのは明らかだ。

「まだだ……」堪えてなおも立ち上がろうとする彼を、さらなる苦が襲う。

死にそうになったことで抗う力が失せたのだろう。

「が、あ、こ、れは……はア？ アガアアアアア……！」

今まで何ともなかった彼を、狂気が襲う。

メイクラックモンVMはそんな彼を唾を吐き捨てるような目で最後に見た後、背を向けた。

「つく、ガアツアアア……トウエニストの、おレ、が……ア……！」
そして、ついに。

「ガアアアアアアアアアア！ チガウ、チガウ、ちがう、ちがう、違
うううう！ オレは——」

ついに？

「——オレはトウエニストなんだああ！ 狂気なんかで立ち止まっ
たまるかあつ！」

有り得ない事態が起こった。

驚愕のままにメイクラックモンVMが振り返る。

それは、進化だった。突き進む凶気にも似た正気が、本物の狂気を
振り払ったとも言えるのか。

「まだまだ終わらねえぞ！」

そこにいたのは、四足歩行の黄金の獣だった。

驚いて、メイクラックモンVMはその獣を見る。

「駆け抜けるつ。 Road T(w) o Decade！」 トウエ
ニストオオオツ」

負けぬとばかりに、トウエニストが叫びながら駆け出した。

「——！」一瞬で懐まで潜り込まれ、メイクラックモンVMは慌てて飛び跳ねるようにして躲した。あと一瞬でも反応が遅かったら、というところだった。

X抗体持ちでもないのに狂気に囚われないこと、その相手に傷つけられそうになったこと、そしてそれがトウエニストであること、すべてが苛立つ要因でメイクラックモンVMは表情を歪める。

メイクラックモンVMは決めた。この不快な相手を駒にしようなどとは考えない。ここで殺す、と。

「フッ——！」

周りの木々に飛び移り、トウエニストの視界から外れる。木々の枝のしなりを利用し、反発力によって飛び出した。

「ニヤガアア！」

そうだ。不意を突かれなければ、そして冷静に対処すれば、地力の差もあって勝てない相手ではない。確実に殺せる相手なのだ。

冷静に、冷徹に、メイクラックモンVMはその爪を振るう——！
その直前、彼らは枝が折れるように鳴り響いた音を聞いた。

「……ニヤ——」

悲しげな、メイクラックモンVMの声。

その視線の先にはもう、トウエニストは存在しなくて。

「やっと見つけたぞ——」

「——メイクーモン！」

数日ぶりに再会したコータたちの姿があった。

第十七話くトウエニストく

「よお、心配したんだぜ？ 一応は」

ドルグレモンの背中から降りつつ、コータがメイクラックモンVMに声をかける。

「……」

一方で、メイクラックモンVMは答えなかった。まるで話すことはないとばかりに。あるいは、話したくないのかもしれない。

「ふう。メイクラーモン、あいな——」コータが口を開いた、その瞬間のことだった。

「っ、コーター！」ドルグレモンが叫ぶ。

メイクラックモンVMがコータめがけて突撃したのだ。

咄嗟にドルグレモンがコータの前に飛び出した。そして。

「ぐはっ」

ドルグレモンは頭に痛みを感じた。メイクラックモンVMに頭を踏み台にされたのだ。

ドルグレモンの頭を踏みつけたメイクラックモンVMはそのまま勢いづけて上へと逃げた後、木々を足場にその隙間を縫うようにして森の奥へと消えていく。

「逃がすかつ。追うぞ、ドルグレモン！」

「う……おおー」

痛む頭を堪えて立ち上がったドルグレモンの背中に、コータは飛び乗った。

そして、すぐさま飛び立つ。だが、しかし——

「逃げられた」

——いかに群生しているのが背の高い木々だとはいえ、ドルグレモンの巨体では森の中を思うように進むことはできず、かと言って上空に上がれば木々によって目視することは叶わず。

結局、小回りの利くメイクラックモンVMに、まんまと逃げられたのだ。

メイクラックモンVMに逃げられた後、ドルグレモンとコータはボコモンとトコモンが待機する洞窟へと戻ってきていた。

現在世界でレジスタンスのアジトであった洞窟だ。まあ、もちろん、現在世界に比べて小さく狭いのだが。

過去、現在、未来——とある名前は伊達ではない。同時並行的に存在するため、正しい意味で時間としての連続性はないものの、地形など繋がりを思わせるものは存在するのだ。

もしかしたら新世界創造時に、この世界は月日が経てばこうなるだろう、という推測や推定でそれぞれの世界が設計されたのかもしれない。

何はともあれ、当面の拠点となりうる場所を簡単に見つけられたのは僥倖だった。

ちなみに、その可能性を提案し、当たりを付け、発見に多大なる貢献をしたのはボコモンである。正確に言えばもの知りブック^{チー}_本の力なのだが、その時のボコモンはとても誇らしげにドヤ顔していた。

とてもウザい。コータたちはそう思った。ついでに言えば、トコモんに噛み付かれていた。

「で？メイクーモンには逃げられた、と」
「アウ」

帰って来たコータたちを見ての第一声がこれだった。

もの知りブックから顔を上げたボコモンは呆れてものも言えないとばかりに、コータたちを見る。

「ついでにヘンテコなやつを連れてきた、と」

「連れてきたっていうか、ついて来たっていうか……」

「ヘンテコな奴は否定しないんだな、コータ」

「否定できないだろ」

「まあ、うん」

ボコモンに指摘されて、ドルグレモンとコータは背後を見る。

そこにいたのは、

「否定しろよ！オレはトウエニストであってヘンテコなやつじゃないぜー」

そこにいたのは、メイクラックモンVMと戦っていた黄金の獣だった。

ズバイガーモンと言う成熟期デジモンらしい。

「いやあ、そのトウエニストってのがよくわからん。どういう意味なんだよ」コータが聞けば、

「トウエニストはトウエニストだ」とズバイガーモンは自信を持って答える。

会話になっていない。

まさに、ヘンテコなデジモンだった。

ちなみに、コータたちが彼を連れて来たのは、彼がメイクラックモンVMを知っていること、今のこの世界の状況においてまともに会話できそうな相手だったこと、その二点があったからだ。

「トコモンとボコモンか。アンタたち、ベルサンデイから来たんだってな！ オレはトウエニストのズバイガーモンだ。よろしくなっ」

「おう、なんじやろう。地味にちよつと鬱陶しいタイプな気がするぞい……。まあ、よろしく頼むぞ」

「アウー！」

ズバイガーモンにボコモンとトコモンが挨拶する。

すると、ズバイガーモンの目が光った。

「おつ、その本は——」

彼が目ぎとく見つけたのは、ボコモンのもの知りブックだ。

ボコモンは慌て気味に「だめじゃーっ」と叫んで、もの知りブックを隠した。

「ちえ。ま、いいけどよ。でも、その本から感じたぜ。アンタもなかなかのトウエニストだな？」

「いや、ええつと……その……うう」

ズバイガーモンの言葉に、ボコモンは何も言えなかった。いや、何かを言いたいようではあったが、言えない理由があつて口に出せないような、そんなもどかしい顔をしていた。

まあ、ズバイガーモンにとっては、ボコモンの反応などどうでもいらしかった。彼はボコモンが同じトウエニストだと確信している

ようだったから。

「いやあつ、こんな時代でオレと同じトウエニストに出会えるなんてなあつ。いやあ、今日はすっげえ良い日だなー!」

何だかよくわからないが、同類に出会えたことが嬉しいらしい。ズバイガーモンはずいぶんとゴキゲンな様子で、その前足でポンポンとボコモンの頭を叩く。

一方のボコモンは少し恥ずかしそうにしながらもされるがままといった様子で、今までにはない光景だった。

「アウアウ……」

「へえー。ボコモンもあんな顔すんだなあ。なあ、ドルグレモン」

「それは、まあ、そうだけど。これ、俺たち後で大変なことにならないかなあ」

そんなボコモンを、ニヤニヤと笑いながらコータたちが見ていたのだった。

数分後、本の角で思いつきりぶん殴られたようなコブを頭に作ったコータたちは、気持ちだけ正座させられながらズバイガーモンと向かい合っていた。

「で、アンタらがあのバケモノと知り合いつてことでOK?」

「バケモノって言うなよ」

コータが苦言を呈する。同意するように、ドルグレモンも首を縦に振った。

だが、そんなコータの言葉を聞いても、ズバイガーモンは謝らない。その表情は複雑そうだった。コータたちが悪者に見えないからこそ、彼にはコータたちとメイクラックモンVMとが知り合いだというのが結びつかないのだろう。

「バケモノはバケモノだろ。どういう関係なんだ?」

「っ、お前な……!」

「……アンタらわかってるのか? アンタらがあのバケモノとどういう関係かは知らないけど、あのバケモノは今の状況の元凶だぞ」

「……」

ズバイガーモンの言葉に、コータたちは言い返せない。

コータたちも馬鹿ではない。記憶を掘り起こし、今のこの世界の現状を合わせて見れば、いい加減に気づく。

かつてメイクラックモンVMが未だメイクモンだった時、コータたちは「なぜかデジモンに襲われる」と聞いた。

ああ、それが間違いだったのだ。

襲われるのではなく、襲わせる。病気のように狂気を感染させ、伝染させる。それが、メイクモンの——メイクラックモンVMの特性。

故意かどうかなど関係なく、そんな傍迷惑と言っても言い足りないほどの災厄の特性を備えていたのだ。

「もう一度聞くけど、アンタらはあのバケモノとどういう関係なんだ？」

「……友人だ」

「旧世界で出会ったんだ。それから数日観ただけだけど、一緒に旅をしていた。その人となりもわかってる。だから、俺たちには信じられないんだよ」ドルグレモンがコータから言葉を引き継いで言った。

そうだ。コータたちには信じられない。

メイクラックモンVMはメイクモンとはまるで別人で。

さらに、コータたちはどうしてもメイクモンとして見てしまうから、頭では理解していてもこの元凶だとは思えないのだ。

「……なるほどなあ」

コータたちの言葉を聞いて、ズバイガーモンは考え込むようにして目を閉じる。少ししてカッと目を見開いた彼は、叫んだ。「わかつたぜ！」と。

「何が？」

「わかつたんだ？」

コータとドルグレモンは首を傾げる。

一方で、ボコモンだけが「はあ」と溜息を吐いていた。

「アンタらもそれなりのトウエニストだっということがなあ！」

「はっ。」

「え、ええ……」

「いやあ、最っ高じゃないか！ まさか隠れトウエニストだったなんてな！」

いきなりの豹変に、コータたちはついていけない。ちよつとだけ距離を取る。……すぐに詰められた。

「じゃあ、どうするにせよ、あのバケモノはアンタらがどうにかしないとな！」

「お、おう」

ズバイガーモンの言葉の真意を、コータとドルグレモンはその時に理解することはできなかった。

「よし、他ならぬトウエニストのためだ。オレの知ってることを教えてやるよ！」

そして、ズバイガーモンはコータたちに教えてくれた。

メイクラックモンVMは数日前にこの過去世界に現れ、この大陸に落ちてきたこと。時を同じくして、デジモンたちが暴走を始めたこと。メイクラックモンVM自身もX抗体問わずデジモンを狩りつつ、暴走するデジモンを増やしていること。

聞かたび、コータたちは嫌な予感を増していった。

「なるほど。……ちよつと複雑だけど、情報ありがとうな」

「いいってことよー」

一通り聞き終わったコータはズバイガーモンに礼を言うと、今度は我関せずとももの知りブックを読んでいたボコモンに視線を向ける。

その視線に、ボコモンはすぐに気づいた。

「なんじゃい？」

「……いや。ひとつ聞きたくてさ。今思ったんだけど」

話を聞いていてコータは思ったのだ。

メイクーモン——メイクラックモンVMの持つ特性はまるで病気みたいで。であれば、メイクラックモンVMは病気の感染源のようなものと考えられる。

そこに思い至れば、思い出すのはボコモンだ。

「ボコモンは知ってたのか？」

ポケモンはベルサンデーターミナルで出会った時に手洗いうがい
などという発言をした。それはつまり、知っていたということではな
いのか？

「……」

少し考えて、やがてポケモンは口を開いた――。

第十八話く赤の到達者く

コータの言葉を受けて、ポコモンは観念したように肩を竦めて口を開いた。

「知つとつたよ。もの知りブックに載っておったからの」

「もの知りブック万能すぎだろ」ドルグレモンの唾然としたツツコミに、ポコモンはふふんと鼻を鳴らして誇らしげにする。

一方で、問いただしたコータは「……そっか」と静かに言っただけだった。

「む、少し意外じゃな。もう少しなんとか言われるかと思ったぞ」

「……まあ、正直に言えば。でも、何だろう。思ったよりは冷静っていうか、むしろ、得心がいつて満足したっていうか……」

コータはしきりに首を傾げている。

彼としても、それを聞いた自分にはもう少し何かがあると思っていたらしい。

「まあ、あれだろ。ポコモンだってオレやドルグレモンに言わなかった理由があるんだろ？」

「まあもう。言ってもどうしようもなく、言ったところで意味もなく、そして何より危険じゃった」

「危険？」

首を傾げたドルグレモンに、ポコモンは頷く。その顔には何かを思いついて出しているような、後悔と未練の入り混じったような、複雑な表情が浮かんでいた。

「お前さんも薄々勘づいておるじゃろうが、あのメイクモンはいわば病気を運ぶ役目を持っていた。無意識の内に、の。そしてお前さんらと出会ったあの時が第一段階だとしたら、今は第二段階ということになる」

「それは、つまり、危険っていう意味は——」

メイクモンの役目は、広めること。

その人畜無害そうな人格で他者に付け入り、より広く行動する。自分自身にその意識はなく、知らないうちに広め、逃げ回り、さらに広

め続ける。それが役割だった。

その役割が第一段階。

では、第二段階は。

「詳しくはわからんよ。しかし、想像はできる。そうして広め続けたメイクローモンは世界の恐ろしさに触れ、自分の役割に目覚め、覚醒する。何かの切欠で次の段階へと進む」

「それが、今か！」

無意識だった今までとは違い、進化したことで自分の役割を知り、その役割に染まる。自発的に、広めるようになる。

それが現在進行形で行われている。

「第一段階の時点で自発的ではなかったのは、そうすることでは具合が悪かったのじゃろうな」

初めから自発的に動いていては、勘のいいものに気づかれ、対処される可能性がある。だから、多少の効率の悪さは目を瞑ったのだ。

問題は目を瞑ったのは誰であるか、という話だが。

そこまで話したボコモンは、コータを見つめる。その表情は真面目そのもので、コータにはその瞳に映る自分が見えた。

「さつき、そのトウエニストも言っておったじやろ。どうするのじゃ？」

「……それは」

「アレがもたらす狂気はX抗体デジモンには伝染らん。それでもアレが引き起こす事態は深刻で、X抗体デジモンさえも巻き込むじやろうな。さあ、どうする？」

「そ、それは……」

「そして、もうお前さんらの知るあやつはもうアレの中にはおらんじやろう。欠片程度は残っていたとしても。どうするんじや？」

「……」

コータには答えられなかった。

ドルグレモンも答えられなかった。

沈黙で静まり返る洞窟の中、トコモモンが小さく「アウアウ」と囁いたのだった。

コータたちが洞窟の中で過ごしている頃。
小さな赤い小竜ギルモンが草原を逃げ回っていた。

そんな彼を背後から追いついて回しているのは、ティラノモンや
深紅の魔竜グラウモンといったデジモンたち二体だ。そのデジモンたちは、血
走った目をしていて、口から唾を垂れ流している。

ああ、そうだ。狂気に殺されてしまったデジモンたちだった。

「うっ……誰か、誰か——！」

必死にギルモンは逃げる。X抗体を持っていた彼の知り合いは、
真つ先に殺された。ギルモンは何もできず、ただただ逃げていた。

「グルアアアアアアアアアア！」

「ひいっ」

ティラノモンから吐き出された火炎放射ファイアーブレスを、ギルモンは悲鳴と共に
避けた。

さて、格上二体から逃げ回ることができているのは見事だ。だが、
誰もが思うだろう。ギルモンはダメだ、と。

質が負けている。

数が負けている。

何より、心が負けている。

何が何でも逃げ切るという意思がない。格上がどうした、それでも
オレが勝つという意気込みもない。ただただ、怖いから逃げている。
そんな者がどうしてこの危機的状況を脱せられるだろう。

そんな者が生き延びられるほど、この世界は甘くはない——

「やれやれ。平時ならばそれも世界の理と見逃すところではあるが
……しかし、これも何かの縁だ」

——その時、ギルモンは風の音を聞いた。

直後、暴風が吹き荒れる。

目の前にあるものは生き物だろうと何だろうと吹き飛ばす、という
意思が感じられるほどの風が渦巻いた。

「う、うわあああああ！」

その風に巻き上げられて、ギルモンは天高く吹き飛んだ。

「あああああああ……ぐへっ」

そして、地面に叩きつけられる。

「うぐぐ……」

痛みにもうめきながら目を開ければ、その瞬間にギルモンは痛みを忘れた。それほどの光景が目の前にあった。

渦巻く風が天高く昇っている。土を巻き上げ、空を捻り、陽の光さえも巻き込んで、上空へと上がっていく風——微かに金色に輝く竜巻。

それほどの奇跡の光景が目の前にあって、さらにはどうなったのか テイラノモンとグラウモンの姿はない。

風と共に上空に巻き上げられたのか、風で吹き飛ばされたのか、はたまた風によって——。

「嘘。なんで」

ギルモンにはわかってしまった。

いつの間にか目の前に立つ背中、その人物がこの奇跡のような光景を引き起こしたのだと。そして、その人物こそはこの世に数人といない存在の一人であることを。

ギルモンの目の前に立つは、黄金の槍を携えた中世の騎士だった。

「哀れなるかな、呼ばれてしまった者たちよ。我にはもはやどうすることもできず」

中世の騎士がその黄金の槍を振るう。

風は止み、その一瞬で世界に静寂だけが残った。

「あ、あの……た、助けてくれて……ありがとう、うございしました」

未だ眩む中、それでも礼をとギルモンが頭を下げる。

そんな彼を中世の騎士は見えていなかった。

「……」

「あの？」

「……ああ。礼は受け取ろう。しかし、我によって其が助けられたのは唯の幸運に過ぎず。二度と無い事である」

「それは、はい」

ギルモンは俯いて答えた。

もちろん、彼もわかっているのだ。彼は逃げ出した者だからこそ、逃げ出した者に未来はないことをわかっている。今回のような幸運が何度も続くほど、世界は甘くない。どうしなければならぬか、彼もわかっている。

だが、それでも。

「僕は……」

「まあよい。我には関わりのないことなれば。しかし、見殺しにするのも良くはない。これだけは言おうか。未だ安全は来ず。故に」

「え？」

「逃げよ」

「え。逃、げ？」

「二度は言わぬぞ」

「ッ——！」

中世の騎士に睨まれ、ギルモンは駆け出した。一目散に、どこにあるかもわからない安全地帯を目指して走り出した。

そんな子供を横目に見ながら、中世の騎士はギルモンの向かった先とは反対の方向を向く。

そして、黄金の槍を構えた。肩より上に、自分の身体を弓とするように。

「フッ！」

一陣の風が吹いた。

風を引き連れて、黄金の槍が砲撃もかくやといった様子で突き進む。

そして、草原の遙か先にある森、その入口に着弾する。土煙や瓦礫と共に、凄まじい轟音と衝撃が撒き散らされた。

「さて、会うのは初めてか。伝達者」

風と共に声が来る。風と共に土煙が晴れる。

そこには中世の騎士が立っていた。そこは先ほどいた場所からずっと遠く離れていたはずなのに。

そして、粉々になった地面に突き刺さったままの槍を引き抜く彼は、先ほどの投擲を上手いこと躲すことができた者を見る。

「到達者ア！」

そこにいたのは、メイクラックモンVMだった。

一歩間違えれば殺されるところだったとあってか、騎士を睨んでいる。だが、実力の違いを知っているのだろう。襲いかかるなどという軽薄なことはしなかった。

「ここで其を殺しても事態は解決せず。しかし、見逃す意味もなし」
中世の騎士がその黄金の槍を構える。

今度はその両手で柄を持っている。それは先ほどのような投槍などという間違った使い方ではない、本来の使い方で使用されるのは明らかであった。

そしてその時、標的となるのが誰であるのかも明らかである。

「ガアアアア……オノ、レ……！」

逃げられないし、逃げられるはずもない。勝てないし、勝てるはずがない。

メイクラックモンVMは悟ってしまう。

だって、いくら特殊な能力があろうと、メイクラックモンVMはスベックとしては平均的な完全体デジモンだ。

対して、目の前の中世の騎士は到達者。究極体の中でもひと握りの伝説。その武を持ってして、歴史に名高き「偉大なる者」の領域に踏み込んだ者。

力という一点において偉大なる者と同格の、端的に言えば歴代最強の一角——！

「む」

風が吹いた。まるで微風のような、柔らかい風が。

「……い・ナ」

自分に何をされたのかわからなかった。メイクラックモンVMは、ただ微風を感じただけで。そして、たったそれだけで吹っ飛ばされた。

「ガッ、ツクウ、ニヤガ……グッ！」

遠くまで吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる。何度も何度も。

数秒と経ってようやく止まったが、その時にはメイクラックモンV

Mはもはや死にかけだった。

「今の一瞬で獲る気だったのだが。……新手という事か」

少し驚いたような、中世の騎士の声。

「カカカ！ そうとも！ まさか、かの到達者の一人とやりあえるとは。まさに光栄の極みだ！」

それに相対するのは、メイクラックモンVMが知らない声だった。否、知っている。この声の主は知らずとも、身体が、本能が、この声の主がどういう存在なのかを知っている。

メイクラックモンVMは顔を上げた。そこには自分を庇うように立つ、身の丈ほどの鞆に封じられた大太刀を持った武者がいて。

「ガアアアアアアア！」

そして、メイクラックモンVMは武者に領かれて逃げ出したのだった。

その後を追おうとする中世の騎士は、しかし、武者に道を塞がれる。ならば仕方ないと風を飛ばせば、それは大太刀によって防がれる。

僅かに騎士は瞬きした。

「是非もなし。然し、魔剣を鞆に収めたままとは」

「失礼は承知。だが、なかなか戦に恵まれんのでな」

「成程。舐められたものだ。戦う気はないと」

「そういうことだ。今しばらくこの遊びに付き合ってもらおうぞ。到達者——否、メイディーバルデュークモンよ」

そして、黄金の槍と鞆に収められた大太刀がぶつかり合う——！

第十九話く想いの生まれる場所く

夜。誰も寝静まる時間帯。

そんな時間にあつて、しかし、コータはアジトの中で横になつたままながらも起きていた。一人、物思いにふけていたのだ。

「……」

考えるのは、メイクラックモンVMのことだ。

そのことはコータにとつて、簡単に答えの出ることではなかった。いつそ寝てしまおうかと思つて目を閉じてても、眠気は訪れない。明日もある。今の世界では少しの寝不足が命取りになる可能性もあるのに、眠れなかった。

眠ろうと目を閉じてても、彼の頭の中は今の彼を悩ませるものが占領していて、とても休むことなどできなかつたのだ。

「……はあ」

横になつた状態で、何度目になるかはわからない寝返りを打つ。すると。

「いい加減にしろよお、コーター！」

小声で怒鳴るといふ器用なことをしたドルグレモンの尻尾がコータの頭を打つた。鈍い音が響き渡つた。

「ぐ、おおおおお……」

ドルグレモンの尻尾は槍がくつついている。地味に痛い。というか、頭が割れるかと思えたほどの痛みだった。

そして、痛みに悶えるコータをドルグレモンは啜えて、入口の方へと引つ張つていく。先ほどの小声といい、眠っている他の者たちに気を使っているらしい。

入口の辺りに着いて、ようやくコータは離される。

「なんだよいきなり」

コータは不満を露わにドルグレモンを睨みつけた。

対して、ドルグレモンも同じように不満げにコータを睨みつける。それはこつちのセリフだ、とばかりに。

「いきなりでも何でもないしつ何回寝返り打つんだお前はっおかげで

起きちやったよオレだけでよかったな起きたのボコモンが起きたら説教の嵐だぞきつとそんなにうるさくするなら付き合つてやらんこともないぞおい聞いてんのか!」

ドルグレモンは顔を迫らせて一息で言い切った。とても聞き取り難い。

その勢いに、思わずコータも「お、おう……ごめん」と唾然としてしまう。

「いや、っていうか、起きたというか起きてた——」

「起きちやったんだ!」

「いや、そんなギンギンに充血した目で言われても——」

「起きちやったんだ!」

「いや、だから——」

「起きちやったんだってばあ!」

涙目ながらに牙を剥かれたら、コータはまたも「お、おう……なんか、ごめん」と言うしかなかった。

「ごほんっ」話を変えようと、ドルグレモンが咳を一つ。

「わざとらしいな」

「うるさいわっ」

ガアツ、つと牙を剥かれたからコータは大人しく聞き役に徹することにした。不器用な気遣いに、その口は軽く弧を描いていたが。

「悩んでいるなら話してくれよ。パートナーだろ」

直球だった。気を遣って、遠まわしに聞くためにいろいろと言ったくせして、そのすべてを自分で台無しにする馬鹿がそこにいた。

「……ま、そうだよな」

その真^馬つ直^鹿ぐさがオレたちらしい、とコータは笑う。

そして、星を見上げながら彼は話し始めた。

「メイクーモンのことだよ」

「……それは、まあ、そんな気はしてたけど」

「ならわかってるだろ。どうするのがいいんだろうな」

「ええ、俺だつてそのことで悩んでんのに、わかんねえよお……」

羽と首をだらんと力なく下げて、ドルグレモンは情けなく言った。

役に立たねえなあ、とコータは笑う。だが、まあ、コータもドルグレモンも悩んでいるだけあって、二人にとっては簡単に結論の出せる話ではなかった。

メイクラーモンはメイクラックモンVMに進化し、世界を汚している。メイクラーモンの時は無意識だから仕方ないと詭弁もできた。だが、それもメイクラックモンVMに進化したことで故意となつていく。

「メイクラーモン……今は、メイクラックモンVMだったっけ？ あいつのやつてることは許せない。いたずらに命を踏み躪つて、狂わせて、命で遊ぶ行為だ」

「俺たちもそこまで正義感のある方じゃないけど、それでもなあ」ドルグレモンが溜息を吐いた。

ああ、そうだ。メイクラックモンVMの行いは正しく悪で、人並みの正義感しかないコータたちでも許せないものだ。

だから、悩ましい。

「命は、あんなもんじゃない。もつと輝かしくて、強くて、一生懸命なものだ。オレたちの生きる世界は、決してこんな世界なんかじゃない」空に輝く星を見て、コータはそう言った。

「そうだよなあ」ドルグレモンも同意する。今の、Xプログラムの時以上に狂わされたこの世界は決して認めたくないという思いが、二人にはあった。

……この世界を元に戻すことはできなくても、これ以上の拡大を防げると考えられる方法はある。だが、それは。だからこそ、悩ましい。

「でも——」

正義だ何だので、仲間を手にかけるのか。手にかかなかつたところで、それはメイクラーモンのためになるのか。

そもそもコータたちとメイクラーモンとの仲は何だと問えば、仲間あるいは友人と彼らは答えるだろう。だから、思ってもいない理想論やら正義感やらで切り捨てられないほどの絆はある。だが、一方で、その絆のために一緒に死んでやれるのか、殺されてやれるのかというところではできなかつた。

「——どうすればいいんだろうな」ポツリとコータが言う。

コータたちは今まで、ただただ生きていた。この弱肉強食の世界で、生きたいという本能——獣の戦いをしていたのが、彼らだった。彼らの今までは、たったそれだけの話だった。

だが、これは。

同じく生きるためではある。だが、本質が違う。彼らがメイクラックモンVMと戦うということは、自分の命を守るための、生存のための戦いではなくなってしまう。言うなれば、理性による善悪の生き方——人間の戦いで。つまるところ、正義のための行いだ。

「そういやブラックウオーグレイモンも言ってたよな」

ドルグレモンが思い出したように言った。

言われて、コータも思い出す。

あの時、ブラックウオーグレイモンは言った。

——「しかし、真実はお前たちが背負うには重過ぎる。耐えられないのに背負われても困る。後で尻拭いする羽目になるのはオレたちなのだからな」

ああ、それはこのことだったのだろうか。

確かに、コータも思ってしまった。自分が背負うには、重過ぎると。「本当、どうすればいいんだろうな」

何度目になるかもわからない、同じ言葉。

選択から逃げ出して、事を誰かに任せる？ それこそコータには出来そうもない。だが、選択したとして、結果を出すには足りないものが多すぎる。

メイクラックモンVMをどうにかする能力があれば、あるいはどうにかする信念があれば、それでいいのだろう。

しかし、そのどちらもがコータにはなくて。堂々巡りで悩んでいる。

「はあ」

そんなコータを見て、ドルグレモンは溜息を吐いた。

そして、彼は思いっきり身体を揺らして——次の瞬間、勢いに乗った尻尾がコータを吹っ飛ばした。

「ぐはっ！」

壁に叩きつけられて、コータは虫の息になる。

「あ、やべえ。加減間違えた」とは犯人の言である。

何とか息絶え絶えに起き上がって、コータはあっけからんとしている犯人を弱々しく睨みつけた。

「な、に、するんだ……！」

「いや、だってウジウジ……ではなくて、ぐるぐると鬱陶しいから」「死ぬわっ」

コータは怒りと共にドルグレモンをぶん殴る。まあ、それは自分の拳を痛めただけで終わったのだが。

「コータは考えすぎなんだよ。それこそ本能で生きていいと思うぞ」

「本能で、って。それで取り返しのかないことになったらどうすんだよ。目の前にある問題を考えず、場当たり的に望むなんて、それこそ——」

「別に適当にやれなんて言っていないぞ」

ドルグレモンは真っ直ぐにコータを見た。そこにはふざけている色はなくて、コータは自分が冷静になっていくのを感じた。

そして、わかった。

「答えはいつでも自分の中にしかないくて、自分の中から生まれるもんだ。自分で考えて作り出すもんじゃない。俺たちはいつだってそうやって生きてきただろ」

ああ、そうだ。

死にたくない、からここまで来た。生きていたい、からここまで来られた。たったそれだけの動機で、彼らは幾つもの自分たちと同じ、生きていたい命”を踏み越えて生きてきた。

その動機は彼らが自分で考えるよりもずっと先に生まれていた。それに従って、今まで生きていた。

「ああ、なるほどね。確かにオレたちらしいか」

「俺はどんな選択をしてもコータを見捨てない。嫌いにならない。だから、安心して行ってもいいぜ？」

「その言い方はオレがお前がいないとダメみたいでムカつくんだけ

ど」

「違うのか？」ドルグレモンは真顔で言った。

「……違わないな」

コータは思わず晴れやかに笑った。

「じゃあ、とりあえずメイクラックモンVMをぶん殴ろう。それでどうにもならなかったら、ふん縛って、その後考えようか」

「いきなり過激になったなっ！」

答えは初めからコータの中にあった。

コータはメイクラックモンを殺したくなくて、生きていて欲しくて、しかし、同じようにメイクラックモンVMも許せなくて、メイクラックモンVMが作り出した今の世界も嫌で、どうにかしたい。

それだけの話だった。

「ああ、ちよつと今までと違うからって変に考えちまった。そうだな。あれこれ難しく考えたって意味はないんだ。考え事するなら、もっと建設的に行かないとな」

「そうそう」

どんな選択をしようと、どんな結果になるかはその時にならないければわからない。選択の答えと物事の結果が違うことなんてことはよくあることで。

それをわかった上で、コータは本能で行くことを決めた。

そして、翌日。

「……眠い」

「眠たい」

落ちそうになる瞼を必死にこじ開けながら歩くコータとドルグレモンの姿があった。

そんな彼らを呆れたように見るのは、ボコモンたちだ。

「夜更ししとるからじゃ。いいか、ちゃんと睡眠は取りなさい！」

「アウアウ」

「そういうボコモンたちだって隈ができてるじゃんかー」

「誰のせいじゃと思っとるんじゃないー！ お前さんの寝返りがうるさ

かったからじやい！」

両手を挙げて威嚇するボコモンを、コータは笑って済ませる。

しかし、少し気になるのはボコモンが乗っている者——そう、ズバイガーモンだ。

「どこまでついてくるんだ？」とコータが聞けば、

「このご時世には珍しく、トウエニスト集団と出会えたんだからな！
せつかくだしついてくぜ！」とズバイガーモンは勢い良く答えた。

まあ、別についてくること自体に否はない。

そこはいいのだが。そう言えばと気になることがあって、ドルグレモンが声を上げる。

「そう言えば、さ。俺やコータ、あとボコモンはトウエニスト？　って
言われたけど。トコモンは？」

一人だけズバイガーモンから何も言われていないトコモンがトウエニストであるかどうか、ドルグレモンはそれが気になったのだ。

「うーん。あんまりトウエニストって感じじゃねえなー」とズバイガーモンが頷いた。

「あはははー！」

まさかの一匹だけ仲間外れ。それがちよつと面白くて、ドルグレモンは笑ってしまう。

「あはははは——痛いっ」

「ガウツ！　アウアウ」

そして、ドルグレモンは罰だとばかりに剥き出しの歯に噛み付かれたのだった。

第二十話く乙女（笑）く

ズバイガーモンという少し鬱陶しい仲間ができて、はや数日。元凶のメイクラックモンVMに何かあったのか、初期の頃の勢いが嘘のように狂気の感染は緩やかになっていった。

そのことに首を傾げながらも、コータたちは誰かが事を終わらせたなどとは考えず、メイクラックモンVMを探して大陸を彷徨っていた。

まあ、毎日の行動は似たようなものである。

例えば、今のよう——

「があああああああああああああ！」

「おおおおおおおおおおお！」

「らあああああああああああ！」

「うおおおおおおおおお！」

——奇声を上げながら迫り来る狂気デジモンたちを、毎日のように蹴散らしたりする。

ちなみに、最後の「うおおおおおおお！」はドルグレモンである。別に狂気に落ちたとかそんなんじゃないやなくて、それはただ単にいきなり地面の下から飛び出たことにびっくりして回避した時、思わず出た奇声だ。

まさか地面の下から三体のモグ^{ドリモグモン}ラが現れるなんて、ボーツと飛んでいたドルグレモンには予想できなかったのだろう。

「があ——！」

「オアアアアア！」

「ラアアアア！」

というか、振動も音もなくいきなり地面から強襲してきたことを考えるに、この三体は地面の下ですつと獲物が来るのを待っていたのだろうか。

狂ったデジモンにそれだけの知能があるとは思えなくて、地味にコータたちは気になった。まあ、気になったところでやることは同じなのだが。

がー！ うぷっ」

——何度目になるかもわからない奇声と異臭。

加害者は「だらしねえな。それでもトウエニストかよ！」と言っていて、被害者は口から異臭と汚物を吐き出しながら、お前さんのせいでと睨みつける。

結局、そんな被害者^{ポケモン}が口から汚物を出し切るまで、かれこれ一時間くらい移動が止まるのだった。

この間に再び襲われないのは奇跡と言ってもいい。

まあ、汚物の異臭のせいで狂気のデジモンとしても近づいてこないのかもしれないが。

「そう言うのは酷過ぎるじゃろー！ これでも乙女なんじゃが！」

そう、被害者は毎度のように語る。

そして、撒き散らした汚物と異臭から逃げるように移動するコータたち。

ポケモンは毎度のごとくドルグレモンの背中に乗ろうとするのだが、その度に押し切られてズバイガーマンに乗せられている。

なぜ押し切られているのか、とはコータとドルグレモンの疑問である。

ちなみに、トコモンはそんなポケモンを面白そうに見ている。ある意味、この状況を一番楽しんでいるのはトコモンであるかもしれない。いや、きっとトコモンだろう。

「アウ〜？ アウアウ！ アウア！」

「つく、お前さんいつか覚えとけよ……！」

「アウアア？ アウアウア！」

「お前さんはああああ！」

このやり取りも恒例となっていた。

毎度毎度繰り返し返すものだから、何となくコータたちにも意味合いがわかって来たような気がした。

訳すのなら、

——「あれ〜？ また乗るなんて無様を晒すのが好きなんだね！」

さっすが！」

——「つく、お前さんいつか覚えとけよ……！」

——「ええー？ 何言ってるか聞こえませーん！」

——「お前さんはああああ！」

といった具合だろうか。

まあ、コータたちの予想だが、あまり違ってもないだろうと彼らは確信していた。

「ははは。仲がいいんだな！」

一方で、そんなトコモンの言葉を理解しているのかいないのか、理解している上でその皮肉を理解していないのか、ズバイガーモンは呑気に笑っている。

やはりズバイガーモンを殺るしかない！ とそんな思考にボコモンがたどり着くのも時間の問題であった。

「お、コータ見てみるよー！」

そんな不毛な状況が続く中、ドルグレモンが思わず声を上げた。言われて、コータも気づく。仲間との会話以外の意識は周囲の警戒に充てていたから気付かなかったが、ドルグレモンの言葉で気づくことができた。

かなり遠くだが、見えた。

「山、か！」

小さくだが、確かに山が見えた。周囲に何もない荒野から見ているせいで距離感がまだ掴めないから、どれほどの大きさかどうかはわからないが、確かに山だ。丘とかそんなこともないだろう。

その光景の変化に、コータは僅かにテンションが上がった。さすがに、何もない荒野をずっと行くのは気が滅入ってくるからだ。

「ほう、あの山は——」

ボコモンがもの知りブックを取り出して調べている。

そして、言った。

「飛ばせば今日中に麓までたどり着けそうじゃな。山そのものは自然豊かとは言えないかもしれんが、周りを森で囲まれた山じゃ。隠れる場所の一つや二つはあるじゃろ。休むにも持って来いじゃ。どうす

る?」

どうする、とは即ち疲労覚悟で飛ばして安全な場所で休むか、体力を保ちつつこの荒野という危険な場所で今日を終えるか、という二択である。

少し考えて、コータはドルグレモンと頷いた。

「よし、行くか!」

「おう!」

コータとボコモンを背に乗せたドルグレモンが飛び上がる。

低空ながらも、勢いづけて突き進んでいく。

「オレも負けてられねえぜ! じっくりせえええええ!」

そして、それに触発されてズバイガーマンも駆けていく。しかし、やはりドルグレモンと違って他人を乗せるのに慣れていないのだろう。

ゆっくりと進むならともかく、全力ダツシユで背に乗る他人に良い乗り心地を提供するなど、性格も相まって出来ないのだから。

「うおおおおおおお!」

結局、またボコモンの悲鳴が響き渡ることになったのだった。

そんなこんなで、山の麓の森にたどり着いたコータたち一行。

全力で飛ばしてきた結果か、夕方には到着することができていた。

そして、森は酷く静かだった。狂気に陥ったデジモンたちがいる気配がない。

だが、気になるのは理性あるデジモンの気配もないということだ。隠れているのか、そもそもいないのか。何となく嫌な予感を覚えながらも、どうこうするという案もなく、コータたちは適当な場所を探す。ちようど良い場所が見えた。

ちようど上手く木々が入り組んだがあつて、あの物陰なら遠くからは見えないだろう。

「よし、じゃ行ってみようぜ!」

ドルグレモンがそう言つて、歩き出す。

コータたちもその後について行って――

「っ、な——」

——驚愕することになる。

第二十一話く再会く

見間違いだと思った。だが、見間違えるはずもない。

木々に隠れるようにしてそこにいるのは、メイクラックモンVMだ。

「メ——！」驚いてコータは声を上げた。……上げてしまった。

その声によって、接近に気づいたのだろう。メイクラックモンVMは驚いたように顔を上げて、すぐさま立ち上がった。そして、大きくジャンプ。逃走を開始する。

「逃がすかつ。ドルグレモン！」

「おうっ」

コータはすぐさまドルグレモンの背に乗って、追跡を開始する。

「ちよいと待たんかーい」

「アウー」

「待てよー！」

ボコモンたちを置き去りにして。

まあ、ボコモンたちも置いていかれるつもりはない。ズバイガーマンの背にボコモンが乗って、その背中にトコモンがしがみついて、彼らはメイクラックモンVMを追う、コータたちを追跡する。

「待てやー！」

「まてえー！」

一方で、先行するコータとドルグレモンがメイクラックモンVMを追いかける。

だが、先に行くメイクラックモンVMは一回も後ろを振り返ろうともせず、ただただコータたちから逃げていつている。

それが、コータたちには気に食わない。

「こうなったら——」コータは苦々しげに呟いた。

この森の中では小回りの利くメイクラックモンVMに対して、巨体のドルグレモンはあまりに不利。このままでは距離を取られる一方だろう。

そんな状況だから、目の前に迫る木々の枝を避けるの手間すら惜し

い。

だから、これは、そう。仕方ないのだ。少し申し訳なく思う気持ちもない訳でもないが、そこはそれ、コータはその感情に蓋をした。

そして、ドルグレモンに言う。

「薙ぎ払えっ！」

腕を掲げての号令。

ドルグレモンは「ええー」と引いていた。

「いいから、やれっ」

「メタルメテオ」オ！」

まあ、そんな彼としても焦れたい気持ちがあつたのだろう、素直に指示に従って必殺技を放つたのだが。

轟音、轟音、轟音、轟音、轟音——！

ドルグレモンの巨体を遥かに超える鉄の隕石が、森の木々を次々に薙ぎ倒していく。

「負けるかあああああ！」

「ぬわあああああ！ 馬鹿者共お！」

「アウアウー！」

下から聞こえてきた悲鳴二つと幼い笑い声は、コータたちには聞こえなかった。

一方で、順調に木々を薙ぎ倒していく鉄の隕石は、そろそろメイクラックモンVMに迫ろうとしていた。

まさか森の木々と吹っ飛ばしてくるとは思いも寄らなかつたのだろう。初めて後方を振り返ったメイクラックモンVMの頬は引き攣りついていた。

だが、メイクラックモンVMとしてもこのままで何もしないつもりはない。躲す、のはリスクが大きい。すでに巨大な鉄球が壁のように眼前に迫っているのだから。

であれば。

「ガアアアアッラシャアア！」

痛む身体を押して、メイクラックモンVMは腕を振るう。

確かに「メタルメテオ」は威力という一点においては高威力。超

重量かつ超巨大な鉄球が超光速で迫るのだから。

だが、その技の勢いも幾つもの木々を薙ぎ倒し、それらがクツションになっていることで減衰している。だから、これができる。

振るった腕が鉄球を殴る。

腕が碎けそうな痛みを感じながらも、メイクラックモンVMは踏ん張った。

そして――

「ガアツ、ガアツ……」

――吐き出された荒い息と共に、鉄球は止まった。

好機だ。メイクラックモンVMにとつては。

なにせ、『メタルメテオ』はデカイ。威力に全振ったために、その大きさは巨体であるドルグレモンでさえも遥かに凌ぐ。

つまり、先ほどまでは眼前の障害を消し飛ばしてコータたちの道を作っていた鉄球は止まってしまったために、今度はその巨大さでもって彼らの眼前を塞ぐ障害となっているのである。

「回り込むぞー！」

「わかってる！ コータしつかり掴まってるよ！」

同時に、コータとドルグレモンの焦るような声が聞こえた。

メイクラックモンVMは笑って、逃走を再開する――。

「逃がさんのじやい！」

「アウー！」

――のだが、メイクラックモンVMは忘れている。追跡者はコータたちだけではないことを。

「いっけえええええ！」

「アウー!?!」

その時、メイクラックモンVMは見た。とても綺麗な投球フォーム。人間世界のプロ野球投手もかくやといった動きで、ボールをぶん投げたボコモンの姿を。

「ニヤーツ!?!」

次の瞬間、桃色のボールがメイクラックモンVMの頭に直撃する。威力は大したことはない。顔を振れば、すぐさまボールもどこかに

吹っ飛んでいく。だが、どれだけ弱くても、大したことなくても、その一瞬を稼がれてしまった。

その一瞬、たった一瞬、それだけでメイクラックモンVMは負けた。「捕まえたぞ……！」

直後、背中に衝撃。

メイクラックモンVMは先ほどとは比にならないほどの衝撃に襲われ、前のめりに倒れこむ。立ち上がるうにも、とんでもない力で押さえつけられていて起き上がれなかった。

メイクラックモンVMは首だけを動かして後ろを見る。そこには、「よお」と笑うコータと、

「ぬぐぐ……！」メイクラックモンVMが動けないように、両前足を使って全力で押さえつけているドルグレモンの姿があった。

逃げ出そうとしているのだろう、メイクラックモンVMはもがいて暴れる。だが、全力で押さえつけてくるドルグレモンと完治していない身体がそれをさせなかった。

「さて……」

一方で、コータはどうしたものかと考えていた。

出会うという目的以上の捕獲まで出来たのは良い。だが、この後をどうするべきか。ドルグレモンだって体力に限りがある、いつまでも抑えられる訳はない。できるだけ早く、メイクラックモンVMをどうにかしないといけないのだ。

差し当たっては、まあ、会話だろうか。コータはメイクラックモンVMの眼前に移動し、その顔を見る。醜く歪んでいる酷い顔だ、とコータはそう思った。

「なあ、どうしてお前はそんなことになってんだよ。もうメイクーモンじゃないのか？ お前が世界をこんなにしてるとか、その面倒臭い特性とか、本当なのか？ 本当だとしたら抑えられないのか？」

何をどうやって聞いていいかわからなくて、コータは矢継ぎ早に思いついたことを聞いていく。

その後ろでボコモンが呆れたように肩を竦め、トコモンに怨みを晴らすとばかりに噛み付かれていた。

「……」

メイクラックモンVMは答えない。

答えないのだろうか、しかし、答えられないのではないかとも思えてしまつて。

「……言葉、通じてるよな?」

コータは少し自信なさげにドルグレモンを見る。

ドルグレモンだつてわかりはしない。だから、何とも言えずにボコモン——は、トコモンに噛み付かれて忙しいからズバイガーモンを見た。

「喋れるんだから、通じてると思うぜ。つーか、お前だつてトウエニストだろ。気にせず突つ走れ! そうすればきつと通じる!」

そして、訳のわからない激励をされた。

コータは溜息を吐きたくなる。だが、それを抑えてメイクラックモンVMに向き合い直した。真つ直ぐに見つめる。すると、メイクラックモンVMはバツが悪そうに目を逸した。

「……お前」

その姿にコータは何となく確信を抱いて、だが、その瞬間のことだった。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

突然に、メイクラックモンVMが咆哮する。

すると、遠くから地響きが聞こえてきた。同時に、木々が倒れる音も聞こえる。

コータたちは嫌な予感を抱いた。恐る恐る、前を見る。木々が、吹き飛んだ。

「げ——!」

そう言ったのは、誰だつたか。

現れたのはティライノモンに似た傷だらけの灰色の恐竜——マスターティライノモンと呼ばれる完全体デジモンで。さらに、取り巻きにティライノモンが五体。その後ろに、トリケラトプスのような完全体デジモンが二体。

トドメとばかりに、全員が狂っている。

「コーター！」

ドルグレモンの行動は早かった。

メイクラックモンVMよりもコーターを優先し、即座にコーターを咥えて背中に乗せ、飛び上がる。ズバイガーモンも同じようにしてボコモンとそれに噛み付いているトコモンを背中に乗せ、迫り来る群れから逃げた。

「……」

自由になったメイクラックモンVMはニヤリと笑って、逃走を開始した。

「っ、待て——！」

コーターが声を上げるも、無駄だ。メイクラックモンVMは森のどこかへと消えていった。

追うにも、メイクラックモンVMが呼んだのだろう狂気デジモンたちが立ち塞がる。しかも、完全体が三体もいて、そもそも楽観できる戦闘になりそうもなかった。

コーターたちは即座に意識を切り替える。メイクラックモンVMに逃げられたのは残念だが、今は目の前が重要だからだ。

「仕方ない。やるぞ——！」

「おう！」

見れば、ズバイガーモンが元気にマスターティラノモンに突撃していた。

ズバイガーモンがマスターティラノモンを引きつけてくれるなら、それはそれでいい。残りをやるだけだ。コーターは右前方を指した。

ドルグレモンは頷いて、そちらに向けて飛ぶ。わざとトリケラモンの前に出て、彼らを引き付けるようにして飛んでいく。

「うおおおおおおお！」

「だあああああああ！」

幸いにして、彼らに遠距離攻撃はないらしい。狂気でろくに働かない頭のせいで、彼らにできることは突撃することだけだ。木々を粉砕するほどの高威力、喰らえばひとまりもないことは明らか。

だが、それも、当たらなければ意味がない。

「しゃあ、いつくぞー！　メタルメテオが！」
ズバイガーモンたちからずいぶんと距離を取った。ここならば、余波はそこまで届かないだろう。

放たれた「メタルメテオ」がトリケラモンたちを押し潰す。

ああ、だが、目の前に死があつたとしても。

「うおおおおおおお！」

「だあああああああ！」

狂気に感染した彼らには、前に突撃することしかできない。

単純にして、故に全力。

完全体二体による無我夢中の突撃。それがドルグレモンの技を迎え撃つ――！

「があつ、うおおあああ……」

そして、鉄球が碎ける。その段階で片方が力尽きた。

だが、もう片方は。

「上昇しろっ」

コータの指示が、遅い。ドルグレモンがさらに高度を上げるよりもずっと早く、勢いで跳び上がったトリケラモンがドルグレモンに届く方が早い。

「まず――！」

そして、その時に銃声が響いた。

「はっ？」

「えっ？」

思わず、コータたちは眩く。

目の前で、トリケラモンが崩れ落ちた。

「ドルグレモンッ」惚けてはならない、とコータが声を上げる。ドルグレモンは慌てて銃声が鳴った方角を見た。

「ちよ、待ってくれ！　ボクは味方だ！」

「……っ？」

慌てたように、銃声を鳴らした主は両腕を上げて味方であることをアピールしている。

コータたちは首を傾げて、その者を見た。左腕に巨大な銃を持つ、

半機半竜。見慣れないデジモンだ。

「えっと、わからないか？」

わかるはずもない。見たことも聞いたこともないデジモンだからだ。

そんなコータたちの様子に若干ショックを受けたように肩を落として、そのデジモンは名乗った。

「キミたちに助けられたアグモン——今は、ライズグレイモンだ。安心してくれ。キミたちの仲間の元にもワーガルモン、あのガブモンが行ってるよ」

そう、彼こそはあのオメガモンAlter—Sから分離した片割れだった——。

第二十二話く風の噂く

ライズグレイモンに助けられたコータたちは、方が一を考えて少し慌て気味にズバイガーモンたちの下へと戻って行っていた。

そして、木々を潜り抜けた先で――

「おー。遅かったのう」

「アウ」

――呑気そうにくつろいでいるボコモンとトコモンを見た。

その姿を前にして、コータとドルグレモンの間にあった緊張感が一気に抜け落ちる。「はあ」という溜息を吐き出した。

「だから言っただろ？」己の言葉が信じられなかったことを不満そうに、ライズグレイモンは口を尖らせる。

まあ、信じられなかったことは事実なのでコータたちは「悪い」と素直に謝った。

なおも不機嫌そうなライズグレイモン。そんな彼を「まあまあ」となだめるようにやって来たのは、ジーパンを履いた人狼――完全体のワーガルルモンだ。ライズグレイモンと同じ、あのオメガモンA―t e r―Sの片割れだろう。

その隣には、土に汚れたズバイガーモンがいる。

「お前、なんでそんなに汚れてるんだ？」ドルグレモンが羽ばたきで土汚れを落としてあげながら、聞いた。

「更なるトウエニストになるために、特訓をつけてもらってたんだぜ」少し疲れた様子ではあったが、ズバイガーモンはまだまだ元気そうだった。

一方で、そんなズバイガーモンに苦笑いしつつ、ワーガルルモンがコータたちの下に来る。

そして、

「俺たちだっているいろいろとやさかしちゃってるみたいなんだから、信じられないのは無理もないよ」とワーガルルモンがコータたちを擁護した。

「それはわかってるけどさ。覚えてないからどうしても納得できない

んだよ」とライズグレイモンは答える。

未だ彼らはオメガモンAlter-Sだった頃のことを思い出せていないのだろう。自分たちが謎の存在であることを、わかっているのだ。

だから、ワーガルルモンは自分たちに信用がないことをわかってい

る。だけど、ライズグレイモンはそんな自分たちを信じて欲しいと思っている。

「俺たちもいろいろと頑張ってるんだ。でも、やっぱりどうしても俺たちはおかしくてね」

「おかしい?」コータが聞き返す。

ワーガルルモンは「ああ、見ていてくれ」と頷いた。すると、その瞬間にワーガルルモンが光り輝いた。ああ、その光は進化の光と同じ――だが、起きた現象は真逆。

光が収まった時、そこにいたのは獣の皮をかぶった爬虫類だった。

「は?」

「え?」

思わず、コータとドルグレモンはアホのように口を開けて驚いた。

そんな彼らを見て、ボコモンとトコモンが何か頷き合っている。そして、トコモンがトコトコと歩く。コータの足元まで行って、その足に「アウツ」と噛み付いた。

「いてえっ」

その痛みに、コータは現実に戻される。

「進化じゃなくて、退化? 退化ができるなんて、聞いたこともないぞ

……!」

驚いたようにコータは言い放った。そんなコータに頷いて、ガブモンは話す。

「ああ。普通、進化したら退化なんてできるはずもない。でも、俺たちにはそれができる。まるで、この状態を基本として調整されているように。だから、進化したまましていると疲れるし、不意に戻ってしまう。あんな風に」

「あんな風……？」

ガブモンが指した方を見れば、そこには「疲れたあつ」と言って倒れ込む小さく黄色い恐竜がいた。ライズグレイモンから退化してしまったのだろう。

「なんだよ、だらしねえな。お前らトウエニストじゃねえんだから、そういうところで気張つてろよ！」

「うう、トウエニストって何なんだよ」

「トウエニストはトウエニストだ！」

いかにも私疲れてます！　と言いたげなアグモンに食つてかかるズバイガーモンを他の面々は見ないふりする。話を続けたいのもあるし。

だから、ボコモンの「まあ、名と力のある者なら退化くらいできる者もそこそこ……全くいないわけではないがの」という呟きも聞いてはいなかった。

「俺たちの前のことはおっぴらには知られてはないけど、まあ、薄々と勘づいている者もいる。でも、俺たちには覚えがないんだ。怪しいのも信じられないのもわかるけど、信用して欲しいし信頼を得たい。覚えのないことで迫害されるのは嫌なんだ」

「……そりゃあ、まあ」

言っていることはわかる。わかるのだが、やはりあの絶望の騎士が変化した存在と考えれば、コータたちとしても少し警戒してしまう部分がある。

「だから、まあ、行動で示すしかないって思って、レジスタンスでこの数日頑張っていたんだ、けど」

「けど？」

「まあ、やつぱりちよつとね。いろいろと他人の目もあるし、そういう目で見られてると……」

そう言ったガブモンの目は不安で揺れていた。

他人に不審がられる余り、自分の過去が不明ということもあって、彼ら自身も自分がわからなくなってしまっているのだろう。

「だから、ウォーグレイモンたちに言つて休暇をもらつて、ここに来た

んだ」

「いや、その思考が訳わからないんだけど」

ドルグレモンが首を傾げて聞いた。まあ、こんな地獄の真つ只中に来る理由がわからない上に、先ほどまでの話とだからで繋がる気がしないのだ。

「ああ、今の状況はここに来て初めて知ったよ。目的は別。噂を聞いたんだ」

「噂？」

「そう。このウルドターミナルに到達者がいるって噂さ。目撃者もいるらしい」

「とっ」

「到達者——!?!」

まさかまさかの存在に、この場にいた全員が絶句する。

到達者という存在は、それこそ伝説の中だけの存在だという噂もあるくらいなのに。かの偉大なる者たちのように存在していたという証拠もない、名前だけ知られるあやふやな存在。

その目撃情報があったというのだから、驚くのも当然だった。

「到達者なら、俺たちのこともわかるかもしれない」

つまり、ガブモンたちは到達者に自分たちの正体を聞きに来たのだ。それだけの力を持つものならば自分たちのこともわかるだろうと、藁にもすがる気持ちで来たのだ。

ガブモンたちの事情はわかった。

なるほど、とコータたちは納得の声を上げる。

「というわけで、到達者のこと知らない？」

「知らないな」

ガブモンの質問に、コータは首を振った。同じようにして、ドルグレモンも首を振る。

彼らだって、何かを知っていたのならガブモンたちに教えてあげたとは思いう。助けられたことであるし。

ただ、こんな状況の世界でまともに情報収集ができるはずもなく、到達者の噂どころか自分たちの目的を探すのにも苦労しているコー

夕たちだ。協力できそうになかった。

「そっか……」

残念そうに、ガブモンは肩を落とす。

見れば、話を聞いていたらしいアグモンも肩を落としていた。そして、突進してきたズバイガーモンに吹き飛ばされていた。

「でも、到達者か」

「気になるのか？」

コータの呟きを、ドルグレモンが拾う。コータは頷いた。

「到達者は凄いなだろ。もしかしたら、メイクーモンのこともどうにかできるかもしれないって思ったんだ」

そうだ。今のコータたちには、メイクーモン^{メイクラックモン_{VM}}の問題を解決するための案はない。

だが、いろいろな意味でも凄いだらう、到達者に話を聞いたのならばあるいは光明が見えるのではないか——と、コータはそう思ったのだ。

「あいつを探すのと同時に、到達者も探してみるか」

コータはそう言った。

そして、次の日。

目的に新しく到達者を探すことを追加したコータたちは、同じ目的を持つアグモンとガブモンと一緒に行動することにして、森を越えた先にある山を登っていた。

「こんなところの先に到達者がいるのか？」ズバイガーモンは言う。

「いないと思うけど」コータは自信なさげに答えた。

まあ、山を登る必要性はない。どちらかといえば、山を登りつつ、迂回して反対側に移動している感じである。ある程度の高さまで山を登れば、遠くまで見通せることであるし。

「しっかし、到達者かあ。トウエニストだと思っか？」

「うーん、わからないのう。たぶん、違うんじゃないか」

「かーっ！ ボコモンは夢がねえなあ！」

ズバイガーモンとその背に乗ったボコモンが先頭を走りつつ、アグ

モンとガブモンが真ん中を歩く。その後ろを、ドルグレモンの背に乗ったコータとトコモンが行く。

それぞれが前、左右、後ろと警戒をしつつの行進だった。

それぞれが話し続けていても、警戒を怠っていないかった。それなのに。

「ほう。不穏な風を感じて来てみれば。最近の我は妙に当たりが良いらしい」

それなのに、その風はいつの間にか彼らの周りを逆巻いていた。

「っ——！」

それは、本能の行動だった。頭で考えるよりもずっと早く、身体が動いていた。ドルグレモンが羽ばたく。その翼が引き起こした突風が、周囲に逆巻く風を吹き飛ば——

「っくー！」

——せなかった。

格下のデジモンならば堪えさせずに吹き飛ばすほどの突風は、しかし、逆巻く風に吞まれて意味を成さない。

そして、逆巻く風が収縮する。コータたちは為す術もなく、風に吞まれて巻き上げられる——！

風にもみくちやに振り回され、体勢を立て直す暇もない。

「ぐへっ」

「ぐはっ」

「ア、ウ〜」

やがて、コータたちは地面に叩きつけられた。目が回って、上手く立ち上がれない。身体が言うことを聞かない。

それでも、コータたちは何とか立ち上がる。やはり目が回っていて、立ち上がった瞬間に身体が揺れて倒れそうになる。

それでも、コータたちは何とか堪える。気持ち悪くて吐きそうになる中、辺りを見れば同じように他の者たちも立ち上がっていた。

そんな彼らの目の前に、いた。

「どこかで見た方もいる。どこかで聞いた者もいる。然し、ふむ」

かの到達者——メディーバルデュークモンが。

有名な聖騎士と同じ名を冠する、風を纏った騎士が。

第二十三話く魔法世界の英雄く

「どこかで見つ方もいる。どこかで聞いた者もいる。然し、ふむ」

メデイーバルデュークモンはその手に持った黄金の槍を、地面に軽く突き刺した。たったそれだけの動作なのに、一挙手一投足から目を離せない。

「コータ、フアイトじゃー！」

「アウー！」

いつの間に合流したのだろうか。

ボコモンとトコモンは、いつの間にか合流して離れたところの岩陰で様子を伺っていた。そして、気楽そうにコータに向けて声援を飛ばすものだから、普段のコータなら腹立たしさの一つも覚えたことだろう。

あくまで普段のコータならば、だが。今のこの状況で、関係のないところまで意識を回せる余裕はコータにはなかった。

「……」

一方、メデイーバルデュークモンは一瞥する。遠くから様子を伺うボコモンたちを、呆れたような目で一瞥する。

「ぬわっ」

「アウツ」

一瞥されて、思わずボコモンは地面にあつた大きな石を持ち上げて顔を隠した。トコモンはそんなボコモンの背に隠れた。

まあ、そんなボコモンたちなど知ったことではないと、すぐにメデイーバルデュークモンは残りの者たち——正確にはアグモンとガブモン、コータとドルグレモンに目を向けたのだが。

「さて」

まるで蛇に睨まれたカエルのように、圧倒的強者の気配にコータたちは凍りついていた。

だが、それでも、相手がわざわざ来てくれたのだ。このチャンスを不意にするわけにはいかない。

「貴方に聞きたいことがある——！」

まるで針で縫い付けられてしまったかのように、固く閉ざされた自分の口。それを、コータは頑張つてこじ開けた。それは逆に言えば、頑張らなければ口さえ開けないということだ。

「メイクラー……メイクラックモンVMのことについて」

「メイクラックモン。あの伝達者のことか」

「あいつは俺たちの仲間なんだ。仲間で、だから——」

「その間に意味はない」

「——だから、え？」

メイディーバルデュークモンはコータの言葉を遮った。

そんな彼の視線は、どこか哀れみのあるもので。彼は一体誰を、あるいは一体何を哀れんでいるのか。コータか、メイクラックモンVMか、それとも別のものか。

「あの伝達者の性質に変化は望めず。故に。あれは世界の敵でしかない」

「っ、そうかもしれない。でも——！」

「主観的事実がどうであれ、客観的事実が変わりはない。あれは其のように作られた者であるが故に」

その言葉を、コータは否定したかった。

メイディーバルデュークモンの言葉はつまり、メイクラーモンVMメイクラックモンVMの問題をどうにもできないということだ。

「行き着く先は決まっている。生まれ変わりでもしない限り何も変わらない。真逆、仲間だからと手を出せずに殺されてやるとでも」

「……そ、れは」

「仲間だと言うのなら、もう少し考えることだ」

冷たく、メイディーバルデュークモンはコータを突き放す。

コータは目を伏せた。

そして、一方でそんなコータを気遣わしげに見ながらも、声を上げる者がいた。アグモンだ。

「今度はボクから質問だ」

「……質問の多いことだ。然し、其れも領けるか。良いだろう。予想はつくが、言ってみるが良い」

「ボクたちは、いや、ボクとガブモンは一体何だ？ わからないんだ。ボクたちは普通じゃない。どうして、ボクたちはこんなことになってるんだ？」

「その答、知りたいか。その為に此処まで来たのか」

メディーバルデュークモンの言葉に、当たり前だとアグモンは力強く彼を見た。ガブモンも、同じように見る。

相手との力の差だとか、自分たちの正体に対する不安だとか、彼らはそういうものすべてを自分たちの心の中に檻を作って閉じ込めた。

当然、檻が蹴破られそうになるほどに、それらは大きくなっている。でも、負けないように彼らは前を向く。

先ほどのコータと同じだ。そんなことのために好機を不意にするわけにはいかないのだ。

彼らはこのために、ここまで来たのだから。

「自らを知るための行程という訳か。然し、其は答を持っているはずなのだが」

「え——」

「成程。未だ答に気づけず、という事か。ふむ」

メディーバルデュークモンは何かを考えるように目を閉じる。そして、次の瞬間、地面に突き刺してあった黄金の槍を引き抜いた。

え、と。その最小の動作に誰もが気付けなかった。いつの間にか手に持たれた槍を見て、そこで初めてその動作があったことに気がついた。

「答を知ることが望む者よ、答を知りたくば自ら行動せよ」メディーバルデュークモンはその槍をアグモンに向けている。

その意味を、この場の全員が理解した。

「我は其の答を知っている。然し、其の問題に対して言葉による教示を是としない。我の持つ答を知りたくば、力を示せ。力で奪い取れ。其れが最も良き過程となる」

「……」

アグモンはガブモンを見る。ガブモンが小さく頷いたのを見て、彼は頷き返した。

答えを知っているのなら、言葉で教えてくれればいい。わざわざ戦う必要はない。そう、思わなくもない。だが、アグモンもガブモンもそう思いながらもメデイーバルデュークモンの言葉に従った。

彼らは何となく思ったのだ。きつとこれは必要なことである、と。言葉で教えられては意味のないことなのだ、と。

「其達は離れている。手出しは許さず」

アグモンたちがやる気になったことを感じて、メデイーバルデュークモンはコータたちに釘を刺す。ギクリと肩を震わせて、コータたちは離れた。

まあ、到達者の戦いともなれば、離れたところで意味はないとこの場の全員がわかっているのだが。

「っふ——！」

「はアーツ！」

気合を入れたような、掛け声。瞬間、アグモンとガブモンは進化する。本来あるべき成熟期を超えて、完全体としての姿に。

これが、今の彼らの全力。どうだとばかりに、彼らは見る。だが、しかし、そんな彼らを見るメデイーバルデュークモンの目は冷めていた。

「真逆、終わりか」

「っ」

「——！」

わかっている。メデイーバルデュークモンの言った、力を示せという言葉の意味がこんなことではないことくらい。

力で示せとは、即ち行動しろということだ。アグモンとガブモン——ライズグレイモンとワーガルルモンにできることは力という部分が大いからこそ、彼はそう言ったのだ。

だから、ライズグレイモンはその左腕の銃口を迷わず構えた。

「トライデントリボルバー」ア——」

三度、銃声が鳴り響く。銃身が耐えられる限界ギリギリの速さで連射された銃弾が、棒立ちのメデイーバルデュークモンに直撃する。

「カィザーネイル」ッ」

すぐさま距離を詰めたワーガルルモン。彼は両腕の鉤爪でメディーバルデュークモンを切りつける。両腕の爪撃と腕の勢いで、僅かにメディーバルデュークモンはよろめいた。

それを、どう認識したのか。

ワーガルルモンが腕を振り終わるよりも早く、その背後から声が飛んできた。

「退けっ！　　ライジンググレストロイヤー！」

ライズグレイモンの翼にある三連ビーム砲、そして彼の胸部発射口から放たれたビーム弾幕が着弾する。土煙が舞い上がった。

ああ、それは危険な攻撃だった。ワーガルルモンが攻撃し終わる前に放たれた攻撃だった。一歩間違えなくとも、フレンドリーファイアになる可能性が高い攻撃だった。

だが、それをわかった上でライズグレイモンは攻撃した。それは、ワーガルルモンへの信頼故か、はたまた——自分ならこれくらい避けられるという認識故か。

それに気づかず、ライズグレイモンは左腕の銃を構えたままで警戒する。

そして、土煙の中から飛び出してきたのは——

「げほげほっ。どうかかな？」

——土煙で汚れ、僅かに傷を被ったワーガルルモンだった。メディーバルデュークモンは攻撃していない。であれば、その傷が誰によるものか、明らかだった。

だが、それを責めずに、ワーガルルモンはライズグレイモンと並び立つ。

「まさか、到達者がこんな程度で終わるはずがない。でも、攻撃して来ない……一体、何を企んでいるんだろう？」

ライズグレイモンは警戒を怠らない。

ワーガルルモンも、警戒を怠らない。

だが、それでも。

「其達の力は、この程度か」

「っ」

土煙から現れたのは、無傷のメディーバルデュークモンだった。その事実には、ライズグレイモンたちは落胆しない。だって、到達者なのだ。伝説なのだ。このさまざまな種族のいる世界において、最強の一角なのだ。

それが、自分たちの攻撃程度でどうにかなると思っではない。

「力を示せ」

メディーバルデュークモンはライズグレイモンたちを睨みつけた。竦み上がりそうになって、ライズグレイモンたちは困ってしまう。力を示せと言っても、先ほどの攻撃が自分たちの手抜きは一切ない全力だったのだから。

「笑止。自らに怯え、自らを恐れ、自らを信じず、それで全力を語るとは笑わせる。未だ其達の全力は程遠く。其れを示せずというのなら、此処までだ」

メディーバルデュークモンが黄金の槍を構える。

風が吹いた。

この場にいる誰もがそれを認識する間もなく、風と共に黄金の槍が振り抜かれる――！

「あ――」

斧のような刃先が、ワーガルルモンに向かう。

それをワーガルルモンは静かに見ている、瞬間――

――『思■出■。■ち■、■なのだ。故■。■々は』

――何かを聞いた。彼は納得する。ああ、確かに自分は全力ではなかった、と。

無意識で感じていた恐怖を、生への生存本能が上回る。いや、あるいはその時に聞こえた声こそが原因なのか。

甲高い金属音が響いた。それは、メディーバルデュークモンの槍が弾かれた音だったのだが、何によって弾かれたのかがわからない。

それを成す者は誰もいない。ワーガルルモンも、ライズグレイモンも、それができる状態にない。

「――グ、アアア……！」

「……ぐ、アアア――！」

その時、彼らは頭が割れるほどの痛みを襲われていたのだ。
もはや、戦闘とかそういう段階ではない。気を抜けば、シヨック死
してしまいそうなほどの痛みだった。

「おい、大丈夫かっー！」
様子を見ていたコータたちが遠くから叫ぶ。だが、それは彼らには
届かない。

心配だ。近寄るべきだろうか、とコータたちが逡巡したその時のこ
とだった。彼らは、信じられないものを目にする。

「――！」
それは、ワーガルルモンに重なるように見えた黄金の装甲を纏う狼
戦士だったのか。

「――！」
それは、ライズグレイモンに重なるように見えた赤き機械の竜戦士
だったのか。

「――！」
いや、違う。それは、この世で最も有名な聖騎士と同じ名を冠する、
あの絶望の聖騎士だった。

「――！」
ああ、今この場で起こっているのは、聖騎士の再誕だ。
ベルサンデーターミナルの絶望の再来、その序章――

「これが、答だ」

――とは、ならなかった。
一筋の黄金の風が世界を断つ。次の瞬間、再誕しかけていた聖騎士
は崩れ落ちる。まるで幻のように、アグモンとガブモンの二匹が地面
に落ちる。

「其達は伝達者や落武者と同じ、遙かな深よりの呼び声に選ばれた者。
然し、彼らとは違う、作られた者ではなく調整された者なれば。その
感覚を大事にすると良い」

苦痛の中、僅かに目を開くアグモンたちにそれだけを告げたメ
ディーバルデュークモンは彼らに背を向ける。
そんな彼にコータたちが声をかけるよりも早く。

「コート、か。此処に来て我はすべき事を見つけたり。故に、こうして
いる場合ではなく」

彼は、さつさと風と共に消えたのだった。

第二十四話くレジスタンスく

D. C. 2018 NEWデジタルワールド——ウルドターミナル——

現在と未来、他の二世界と比べてより過酷だったこの過去世界において、そこに行く着くのはある意味で当然のことではあった。

数日前より起こった地獄。それに、デジモンたちは最悪の形で適応しようとしていたのだ。

元より神Xプログラムによる粛清にさえ適応し生き残ったのだから、この地獄にさえ適応するのも時間の問題だったのだろう。

「この動乱の時代において、今まで通りなど望めない」

誰かが、そう言った。この狂気に満ちた世界で正気を保つことができる、X抗体を持つ誰かが。

「……では、どうする?」

誰かが、そう聞いた。この狂気に満ちた世界で正気を保つことができる、X抗体を持つ誰かが。

「決まっている」

誰かが、そう答えた。この狂気に満ちた世界で正気を保つことができる、X抗体を持つ誰かが。

自信満々に、周囲にいる皆に聞かせるように。

「いつだって俺達は生きてきた。今度もそうするだけだ」

誰もが、それに頷いた。この狂気に満ちた世界で正気を保つことができる、この場に集まった誰もが。

「狩るぞ。我々は生き残るんだ」

現在世界において、絶対的脅威オメガモンA.I.t.e.r.sに対抗するためにX抗体デジモンたちは徒党を組んだ。

今回も、同じ。

この過去世界において、狂気に囚われたデジモンたち自分たちを襲う脅威に対抗するために、X抗体デジモンたちが徒党を組む。自分たちが生きるために。

ああ、奇しくもそれは、X抗体を狩ろうとしていた彼ら通常デジモンたちと同じで。

数日前までは、狩る者と狩られる者は逆だったのに。今この瞬間

に、狩る者と狩られる者が逆転する。

「いくぞ——！」

今ここに、また一つレジスタンスが誕生する。彼らの目的はただ一つ。狂気に囚われた者たち、そして囚われる可能性のある者たち、その殲滅。

元々弱肉強食の世界を生き抜いていた強者の、さらにX抗体持ちが——Xプログラムの時でさえ協力しなかった者たちが、ついに手を取り合って事に臨む。

ああ、通常デジモンたちが耐えられるはずがない。

元よりスペックで劣るのに、理性というそれを覆しうる可能性すらも狂気によって失ってしまったのに、それなのに自分たちよりも力を持つ者が数の暴力を振るっているのだから。

「アアアアア——！」

「やめっ、やめてくれ！　ボクはまだ狂ってないんだ！」

「ウオオオオオ！」

「ダギヤアアア！」

「な、なんでこんなことにいいいい！」

狂っている通常デジモンも、狂っていない通常デジモンも、等しくX抗体デジモンたちに駆逐されていく。

ああ、時にはやり返す者も当然のようにいるし、一矢報いるとばかりにX抗体デジモンを倒す者も当然いた。だが、ダメだ。数の有利が失われるほどではない。

そうしてレジスタンス誕生の二日後には、すでに大陸の通常デジモンの数は地獄の始まる前の二十分の一ほどに減ってしまった。

最も、地獄の開始によって元々からして減っていたのだが、それを抜いても驚異の速度であった。

「やれやれ殺れ、やれ——！」

その掛け声は、果たしてどちらのものか。

「死んでたまるかああああ——！」

そう叫んだ声は、果たしてどちらのものか。

「俺は、生きるんだ……生きたいんだよお」

その眩きは、誰のものか。

生存闘争——それは原初の戦いであり、始まりから今にまで続く、逃れられない決まり。正誤善悪美醜など関係のない次元の、ある意味では低次元な、それでいてある意味では高次元な戦い。

それに則れば、これは聖戦とすら言えるかも知れない。

だが、どうだろうか。

生存闘争ならば、何でも良いのか。

生存闘争ならば、何でも許されるのか。

「誰か……助けて……」

生存闘争ならば、こんな声がどこにも届かないのも当然なのか。

もはや、過去は地獄にとつて変わられた。ああ、そうだ。この開戦をもつてして、地獄は真の地獄になった。生存闘争を強要される、地獄に。

大雑把に見れば、元より在った生存闘争がより過酷になったただけの話ではあるが——規模が違う。

X死の病プログラムには完全に来なかつたことが、狂気理性の病によつて引き起こされた。そう見れば、これはとても皮肉の効いたことだった。

「……」

そして、そんな地獄の始まりにおいて、彼はそこにいた。和風な鎧を身に纏う、落武者がいた。

落胆を隠そうともしない、失望に沈んだ暗い顔をして、鞘に収まつたままの大太刀をその手に持った彼は地獄を見つめる。

「これこそは我が主の望んだこと。我が主の望みは某の望みではある。しかし、これは……——」

私情を振り払うように、武者は首を軽く振る。

そして、冷徹な目で地獄を見つめた。その先にいるのは、狂気デジモンたちを襲うX抗体デジモンたちだ。同種同士で固まって行動しているらしい。深紅グラウモンX抗体の魔竜六体と巨大なる魔竜三メガログラウモンX抗体体を取り囲むようにして狂気デジモンたちを攻撃している。四方からの連携攻撃に、狂気デジモンたちは為すすべもなく倒れていつている。

その光景を、落武者は嘲つて——

「我が使命を果たす時」

——そして、大太刀を振るった。

発生した衝撃波が、大地を割って突き進む。予想外の方向から飛んできた究極体クラスの一撃に、X抗体デジモンたちも狂気デジモンたちも対応できない。

一瞬で、十を超える命が失われた。

生き残ったのは、偶然にも仲間が肉壁となる形となったメガログラウモンX抗体一体だけだ。

「ナ、何?」

唐突な事態にメガログラウモンX抗体は呆然と目を見開いて、目の前を見ている。敵も味方も失われた場所で、何もかもがわからなかった。

ただ一つわかるのは、事を起こした犯人だけ。

その犯人はゆっくりとメガログラウモンX抗体の前に立った。そして、侘びも入れずに言い放つ。

「悪く思うな。これこそが我らの使命故。某は貴様らを殺す」

「何ヲ——!」

実力の差は明白。逃げることなど出来はしない。だが、殺すと言われて、大人しく殺される謂れもない。だから、メガログラウモンX抗体はその腕の刃を振るう。

自らに目掛けて振り切られたそれを、落武者は軽々と掴んだ。そして、哀れみを込めた目で見る。

「ああ、貴様らは神が作り出したモノ——あるいは、我々に取って代わるデジモンの新しい形なのかもしれん」

「フザケルナ。我々ハ生キル意思ニヨツテ進化シタ! 断ジテ神ナドに作ラレテハイナイ——!」

自分たちの意思が、自分たちの苦痛が、まるで神の思惑通りだと言われたようで、メガログラウモンX抗体は腹立たしげに武者を睨む。

そして、その怒りが力を産む。

「馬鹿ニスルナア!」

誰だって、自分が生存すればいいと心の奥底で思っている。それは

本能だ。ある者はこのように定義付けるだろう。感情とは、本能によって生み出される本能の子供なのだ。

ああ、だから、これは。

生存の本能が、自らを殺す者に怒りを向ける。メガログラウモンX抗体の中に眠る因子が、進化を利用して目覚める。

それは、世界を滅ぼしかねない怒りだった。怒りそのものの体現者でもあった。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

メギドラモンX抗体
怒りの化身が降誕する。

だが、それを前にしても武者は冷静だった。目の前の怪物はもはや、歴史に残りかねないほどの災害に化けたというのに。

「……怒りか。某にとっても、我々にとっても、慣れたものだ。だが、意味もない」

「ウアアアアア！」

「かつて存在したメギドラモンは、それは凄まじかったと言う。X抗体に引き出された力もある故、時間さえあれば、あるいはかつてさえ超えて歴代最強にさえなりうるかもしれんが」

冷静に、武者は大太刀を構える。

「だが、貴様はここ^{X抗体デジモン}までだ。貴様らも、ここ^{X抗体デジモン}までだ。我らは貴様らを認めぬ。故に、貴様らはここ^{X抗体デジモン}までなのだ」

そして、武者は大太刀を振るった。

この日を境に、この過去世界に存在するX抗体デジモンは再び狩られ始める。少し前の現在世界と同じように、絶望の存在がX抗体デジモンを狩り始めたのだ。

使命のために、彼は進み続ける。当然、大陸中のX抗体デジモンを狩ろうとしているのだから、その行く先には――。

そして、さらに数日後。

メイクラックモンVMを探して旅を続けるコータたちもまた、この過去世界の変化に巻き込まれていた。

「抗体を持ってない奴がいたぞっ。殺せ――！」

毎日のようにX抗体デジモンたちに襲われるようになったのだ。

主に狙われているのは、X抗体を持っているドルグレモン以外の面々なのだが――

「ちよつと待てよ！ ボコモンたちは大丈夫だってばあ！」とドルグレモンが叫ぶ。

「あいつ、抗体持ちの癖に庇い立てしてやがる！ あいつも殺れ！」しかし、聞く耳は持たれなかった。

「なんでだあー！ いや、見捨てる気はないから否はないけど！ ないんだけど！」ドルグレモンはうがぁーつと頭を振る。

――結局、ドルグレモンも襲われることになるのだ。

まあ、そこはいい。襲われたら迎撃するなんて、いつも通りのことだからだ。問題はただ一つ。

「やー。大変じゃのう」

「アウアウ」

「狙われてるのお前たちなんだけどっ」

問題は、力も弱くて一番危機的状況にいる連中が呑気でムカつくということだけだ。

何はともあれ、ドルグレモンは目の前の敵を見る。青き恐竜に^{アロモン}角竜型の恐竜に、仮面のマンモス――X抗体を持つ者たちが、各三体ずついた。

「どうする、コータ？」とドルグレモンが問えば、

「ま、いつも通りやるぞ」とコータが気楽に返す。

その目の前で、「トウエニストおおおおお！」といつも通りに元氣よく叫んだズバイガーモンが突っ込んでいった。

その背中にボコモンが乗っていたのもいつも通り。珍しくトコモンが乗っていたのはいつも通りではなかったが、まあ、

「……そうだね」

もはや考えるのも馬鹿らしい。

アグモンとガブモンがそれぞれライズグレイモンとワーガルルモンに進化したのと同時に、ドルグレモンも攻撃を開始しようとして――

「なるほど。不快だ。トウエニストとは」

——斬撃が、敵を切り飛ばす。

巻き込まれたらしいズバイガーマンの生死を確認する間さえない。コータたちは目の前の乱入者から目を離せなかった。

「抗体持ちを狩る。なるほど、使命さえなければ意気投合できそうではある。しかし、むう。残念だ」

現れたのは、コータたちも噂として知った落武者。

その刀は、コータたちにも向けられていた。

前の強敵相手から逃げ出し、そこに行くことはできない。

「コータ……」

「今は、目の前の相手に集中するぞ」

「……おう」

コータとドルグレモンは苦々しい想いを振り払って、落武者を睨みつけた。

一方で、そんな二人を見て落武者は笑った。今までの冷徹な顔とは違う表情に、誰もが一瞬だけ眉を顰める。

「では、行こうか」

そして、刀の柄を握る落武者の手に力が込められる。

傍目には気づけないほどの、僅かな動き。だが、その僅かな手の動きを目ざとく見つけた者がいる。

ライズグレイモンとワーガルルモンだ。

「はあっ」

「ふうっ！」

二体は同時に、落武者へと襲いかかった。

それは、力の差を正しく認識しているからこそその行動だ。後手に回れば地力の差によって為すすべもなく負ける、と悟ってしまったからこそその、余裕のない行動だった。

だが、彼らのそんな決死の行動すらも、落武者は対応する。刀が動いた。

一突き、ワーガルルモンの腹に吸い込まれるように。

一閃、ライズグレイモンの身体を切り裂くように。

それだけでライズグレイモンたちは宙を舞った。鞘に収められているために致命傷ではないものの、相当の衝撃だった。弱いデジモンならば、それこそこれだけで死んでしまっただろう衝撃だった。

「っ、ライズ——！」コータが声を上げる。

そんなコータに、よろよろと立ち上がったライズグレイモンが叫んだ。

「ボクたちが引き受ける！」

「はっ！」

「コイツは俺たちが倒す」啞然とするコータたちに、ワーガルモンも頷いた。

置いていけるわけがない。全員でかかっても勝てるかどうかかわからない敵なのに。

だが、それを承知でライズグレイモンは笑った。

「キミたちには助けられた恩があるからね。仲間なんだろう？ だったら、行ってあげないと」

「……すまん、ありがとう！」

「死ぬなよっ！」

瞬間、ドルグレモンがコータを背に乗せたまま飛び上がる。あの叫びの間こえた方へと飛んでいく。

この場に残ったのはライズグレイモンとワーガルモン、そして落武者だ。

「……まさか、すんなり行かせてくれるとは思わなかったよ」

ライズグレイモンの少しの驚きの含まれた言葉。

それに、落武者は肩を竦めた。

「使命を果たすのは某だろうとあの獣天使だろうと関係ないからな。少々残念ではあるが、私情は挟めん」

「……？ 何を言ってる——」

「某はさっさと貴様らを殺し、次へ向かうのみよ」

そうして、落武者は再び刀を持ち上げる。

ライズグレイモンとワーガルモンも、銃と拳——各々の武器を構えた。

「『トライデントリボルバー』！」

ライズグレイモンの銃撃が開戦の合図となる。

飛んできた三連の銃弾を、落武者は素早く切り伏せる。だが、無論、それくらいはやってのけるだろうとライズグレイモンたちもわかっている。

彼らが思い出すのは、つい先日。あの到達者のこと。彼は強かった。あの少しで、文字通り次元の違いを見せつけられた気がした。何をしても対応される、そんな気にさせられた。

これは、あの時と同じだ。

相手は格上、何をしても対応される。であれば、ただただ全力で叩き込む。

「うおおおおおおおおー！」

ワーガルルモンが必死に拳を繰り出した。自分に迫る大太刀を、必死に拳で弾いていく。

鈍い音と共に刀が弾かれる度、銃声が聞こえた。その度に鈍い音がして、また刀が振り回された。そして、やはりワーガルルモンは必死に拳を繰り出して、鈍い音と共に刀を弾くのだ。

戦えていた。バケモノみたいに強い相手に、ライズグレイモンとワーガルルモンは戦えていた。だが、

「フンッ！」

だが、

「ぐっ——！」

だが、戦えているだけだった。

決して手加減されているという訳ではない。ないのだが、それでもやはり落武者は本気ではなくて。

故に、落武者がほんの少し力加減を間違えただけで、容易く戦況が変わる。

「まだまだあつ！」気合と共に、ワーガルルモンは何度目になるかもわからない拳を突き出す。

だけど、繰り出した拳はどこにも届かない。顔面を逸しただけで躲され、代わりに自分の身体に鈍い衝撃が食い込むのを、ワーガルルモンは感じた。

そして、彼は空を舞った。

「ワーガルルモンッ！」

ライズグレイモンの悲鳴を遠くで聞いたワーガルルモンは、地面に叩きつけられる。叩きつけられて、初めて彼は自分の身に起こったことを察した。

「おおおおおおー！ トライデントリボルバー！ アー！」

三度の銃声。

それは、ワーガルルモンには遠くで聞こえた。いや、それだけではない。ありとあらゆる音が、彼には遠く聞こえた。

「少しは期待した某の失策か。貴様らならばあるいは快い戦いになると思っただが、間違いか。我らが主に選ばれた個体の力は、こんなものか」

失望を隠さない、落胆の声が遠く聞こえた。

「ぐあつー」

ライズグレイモンの苦悶の声、そして地面に何かが叩きつけられたような重い音が遠く聞こえた。

ああ、何もかもが遠くに聞こえて。それでも、何かが聞こえた。

——『……来い』

音量としては、わずか。蚊の声のように聞き取り難く小さい。だが、ワーガルルモンには雷鳴にも似た大音量に感じていた。

——『使命を果たせ』

耳を潰したい。聞いていたくない。そう感じて、そして不意に彼は思い出した。いつか似たようなことがあつた気がする、と。

それはつい先日にも到達者と戦った時、ともう一つ。ああ、そうだ。この新世界に来たばかりの頃に。

——『お前は死すべきを是としないはずだ』

だが、それを思い出したところで、関係ない。

——『故に立ち上がれ』

そうだ。この声の言う通りだった。

——『力が足りぬなら、貸してやる。故に、戦え——！』

だから、ここで地に伏せる場合ではない。

「あああああああああああああー」

「むっ」

だから、ワーガルルモンは駆け出した。

勢いのままに、胸の中に熱いものを感じて、堪らず駆け出して落武者へと向かう。

一方、落武者はワーガルルモンのその奇行に何とも思わないようだった。いや、少し呆れているか。反応としてはそれだけで、その手

の刀を振り上げてすぐに振り下ろす。ただただ突っ込んできたワールモンめがけて、振り下ろす。

そして、鈍い音がした。

「何——」

今度こそ、落武者は驚いたような声を上げた。

それは本気で殺す気だった自分の一撃が思いも寄らずに弾かれたからで、同時に、そこにいたのが先ほどまでとは違う、クールレスガルモンだったからだだった。

ああ、そうだ。ワールモンは進化した。黄金の装甲に身を包み、その手に持つは黄獣偃月刀。獣騎士型の究極体デジモン——クールレスガルルモンに。

「カツカツカッ！ そうか、ようやくか！」

落武者が愉快そうに笑った。

「少し足りぬが、是非もない。そこは諦めよう。しかし、これでようやく良き戦いができそうだ。私闘は良くないが、うむ！ これも使命の一貫と考えれば多少は通るだろう！」

先ほどまでとは打って変わって、楽しそうな気配を落武者は纏わせる。

それが、なぜかクールレスガルルモンには酷く気に障った。

「では、やり合おうか。某はタクティモン！ 我が主に形作られし、傀儡の武士である！」

そして、落武者——タクティモンは笑う。

「クールレスガルルモンだ」

その名乗りに、クールレスガルルモンは簡単に返し——そして、その手の黄獣偃月刀を振りかぶった。

そして、刀と刀がぶつかり合う。タクティモンの刀とクールレスガルルモンの黄獣偃月刀がぶつかり合う。偃月刀という長物と身の丈ほどの大物の刀が、普通ならば小物と比べて素早い連撃には向かぬ大きさを誇る武器同士が、常識など知ったことではないとばかりに荒れ狂う。

音が鳴った。大気が震えた。まるであらゆるものを切り裂く竜巻

のように荒れ狂うクーレスガルルモンの斬撃が、まるであらゆるものを呑み込む雪崩のように押し寄せるタクティモンの斬撃が、敵を喰らわんと繰り出される。

「カツカツカツ！ いいなあ！」

「つく……！」

一、十、百——何度もぶつかり合っては、しかし、致命的な傷には繋がらない。

だが、ああ、クーレスガルルモンは感じていた。このまま行けば押し負ける、と。進化した。進化できた。だが、それでも届かない。

今は勢いでギリギリ互角になっているだけで、勢いが衰えれば地力の差で負ける。それが、理解できた。

「残念だったな」

そして、それはタクティモンもわかっていた。

「貴様らの先であれば、某とも互角だったろうに。いや、それでは戦う理由がなくなるのか。むう、上手いかんものだ」

「つく、もう勝った気になっているのか！」

「カツ。それは失敬！」

そして、タクティモンは迫り来る黄獣偃月刀を弾く。

その時、クーレスガルルモンは笑った。

タクティモンは怪訝そうに顔を顰めた。

「何がおかしい？」

「いや。今、自分で言ったばかりだろうに」

「……？ つ——！」

驚いたように、タクティモンは振り返った。だが、遅い。

ああ、そうだ。タクティモンは自分で言った。貴様ら、と。それは、タクティモンの相手はクーレスガルルモンだけではないということだ。

「プlazマステーク！」

「ガアツ、ぐううううううう！」

自分の身体に流し込まれた電流が、己を壊そうとしているのをタクティモンは感じた。まるで自分の中に龍がいて、内側から食い破って

来そうなの、そんな感覚。

苦しみに焼かれながら、見る。雷でもって自分を焼き殺さんとする、敵。赤き機竜戦士——ライズグレイモンが進化した、ブリッツグレイモンを。

「つく、まだだあああああああ！」

タクティモンの初めての苦悶の声。それに手応えを感じ、ブリッツグレイモンは電流を流し込んでいる両腕の「プラズマステーク」をタクティモンの身体から離さない。

だが、当然ながら、タクティモンも黙ってやられているわけがない。ブリッツグレイモンを振り払おうともがき、そして、見た。

「獲った——！」

黄獣偃月刀を振り上げる、クールスガルルモンの姿を。

そして、一瞬だった。

「かはっ」

ついに、タクティモンの身体から力が抜ける。

「やった——っ?」

だが、クールスガルルモンたちが感じたのは勝利の興奮ではなく、敗北の悪寒だった。だから、即座にトドメを刺すべきと再度の攻撃を仕掛ける。

振り上げた黄獣偃月刀が、突き出されたプラズマステークが、タクティモンを殺す——！

「……是非もなし」

そして、その直前、タクティモンの刀から発せられたとんでもない力の衝撃によって、クールスガルルモンたちは吹き飛ばされる。

「今のは、効いた。ああ、うむ。本当に是非もない。後で我が主には許しを請おう。だが、今は」

吹き飛ばされながら、クールスガルルモンたちは見た。タクティモンが、その刀の柄に手をかけ力を込めていたのを。

「今は、この戦いを。封印、解放」

刀を鞘に縛り収めていた鎖が千切れた。

「抜刀——」

そして、刀が引き抜かれる。

鞘に収められたままだった、封印の刀が。

「行くぞ、戦だ。付き合ってもらおうぞ。……蛇鉄封神丸！」

蛇鉄封神丸。それは星さえ砕く、刀——！

そして、時は少しだけ遡る。

——いいですか？ 私の力で、貴方を再起動させます。どうか、どうか、どうか。武装伝説に語られる武器の力を、存分に。

遠く、声が聞こえた。

その声に惹かれるように、ズバイガーマンは目を覚ます。直後、彼は自分の中に流れ込んでくる活力が、自らの段階を押し上げるのを感じた。

第二十六話く友情の行方く

荒野のど真ん中。そこは、何かがあったのだろう場所だった。

元は豊かな草原だったのか、はたまた命茂る森だったのか。

狂気デジモンたちによって蹂躪されたのか、それともただの自然災害でか。

誰がやったにせよ、何の結果にせよ、そこはこの数日で荒野へと変わり果ててしまった場所だった。

そんな場所で、メイクラックモンVMは静かに待っていた。誰を？ 決まっている。

「メイクーモンッ！」

自分にとつていろいろな意味で大きな意味を持つ、コータたちを。ドルグレモンとその背に乗ってやって来たコータの姿に、メイクラックモンVMは安堵する。ボコモンたちの姿がないことに喜ぶ。

正真正銘ここにいるのはメイクラックモンVMと、コータとドルグレモンだけだった。

「さあ、もう逃がさないぞ……！」

コータが決意を込めてそう言う。

「もう止めるんだ。こんなこととして、何になるんだよ。これは生きるための戦いじゃない。戦わなくて済む道だつてきつとある」

ドルグレモンが悲しそうに言う。

ああ、それがメイクラックモンVMには何とも悲しい。

「ココデ終ワリダ」

メイクラックモンVMは声を出した。女性らしさを持ちながら、獣のような低い声だった。その声は、いつぞやの自分とはかけ離れ過ぎている、彼女も笑いそうになる。

「モウ、終ワリダ」

そして、メイクラックモンVMは手を挙げた。

「才前タチノ望ム未来ナド、来ナイ」

その時、コータたちは悪寒を感じた。まるで全身から、それこそ指の先に至るまで、身体中が感じたものが一瞬で身体を駆け巡って頭に

到達したかのような、そんな気がした。

コータたちは悟っていた。目には見えない何かが、世界中からここに集まっている、と。それに気づけたのは、あるいは本能か。

「我方使命、果タス時——！」

ニヤリと、さまざまな想いを込めてマイクラックモンVMは笑った。

その意味が彼らに届いたのか、コータたちは顔を険しくする。

そして、

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

咆哮。

世界中から集まってきたモノが、マイクラックモンVMに収束する。その身体からは、黒い煙のような光が現れた。

まるで卵のようだ。マイクラックモンVMの身体に収束した何かが、別の形となって解き放たれようとしているかのようにだった。

「……」

「わかってる！」

「でも、コータ」

「わかってる！」

「……」

「……わかってるんだ。……ドルグレモン。撃て」

絞り出したような、コータの声にドルグレモンは従った。

ドルグレモンは空高くにまで上昇する。

「『メタルメテオ』！」

鉄球を放つ。鉄の隕石が降った。卵を、潰した。

「……わかってるだろ。ドルグレモン」

「うん」

「こんなことしたって、無駄だつて」

「そうだね。それでも、もしかしたらに賭けたかったんだ」

鉄の隕石は卵を潰した。それは卵の中にいる何かが、卵から孵るのを防ぐ——つまりは、戦わずにして勝つということをしたかったのだ。

ここだけは、戦いたくなかったから。

「ニャー……」

この場にいた全員が、猫のような細かい幻聴を聞いた。それを、全員が気のせいだと切り捨てる。

そして、鉄の隕石が空を舞った。卵を押し潰していたはずの鉄球が、恐ろしいまでの力で吹き飛ばされたのだ。しかも、明らかに指向性を持たされて。

返ってきた鉄球がどこに飛んでいくかなど、決まっている。全速力で返ってきた自らの技を、ドルグレモンは回避した。

「サア、モハヤ狂気ナド必要ナイ。タダ死ネ。敗者トナレ」

そして、見る。

そこにいたのは、獣天使。二対の汚らわしい羽根を持ち、金色の鎧を着込む者。禍々しい紫の結晶爪を武器にする、究極体デジモン——ラグエルモンだ。

「コータ」

「ん？」

「逃げる？」

「……逃げたい。でも、逃げない」

「だよね」

言葉短く、ドルグレモンとコータは会話した。軽い口調ではあったが、その顔は険しい。

実際、やはりラグエルモンの方が格上で、ドルグレモンには勝ち目が少ない。それでも、ここだけは戦わなければいけなかった。例えば、万が一として逃げられるとしても。

こうして直接の機会を得て、コータたちはわかった。

この戦いは、いつも通り生きるためなどという単純な戦いではない。

「ドルグレモン——」

「おう」

この戦いは、自分の中にある望みを現実のものとするための戦いだ。

「——勝つぞ」

「おうっ！」

言うが早いのか、コータたちはラグエルモンに突撃する。

そんな彼らを前にして、ラグエルモンは笑った。

タイミングを合わせて、ラグエルモンは爪を振るう。だが、その爪は空を切った。タイミングを合わせたはずなのに。

見れば、直前でドルグレモンは急上昇していた。そして、ラグエルモンの爪撃直後の技後硬直の瞬間を狙って、技を放つ。

タメのいる大技ではなく、小技。成熟期だった頃の彼の技。

「『パワーメタル』ッ！」

完全体になったことで威力だけは上がっている鉄球が、ラグエルモンに直撃する。

甲高く大きな音が鳴った。見れば、その鎧の腹部分に僅かな傷がついていた。だが、それだけだ。鎧はその本来の在り方を示したとばかりに、ラグエルモン自身はノーダメージだった。

「まだだ！」

「『パワーメタル』ッ！」

もちろん、コータたちもこれくらいで倒せるとは思っていないのだろう。再度の技が放たれる。

だが、技後硬直から解放されたラグエルモンには、その程度の技など敵ではない。軽く腕を振るっただけで、鉄球を細切れにした。

「『パワーメタル』連打ア！」

上空から、馬鹿の一つ覚えみたいに同じ技をドルグレモンは放ち続ける。それしか選択肢がないから。それ以外、例えば接近戦を挑みでもしたら、その瞬間に負けるのがわかるから。

雨あられと降り注ぐ鉄球。喰らっても大したダメージにはならないうしろに、ラグエルモンはわざわざ迎撃を選択する。あるいはそれは、何らかの思惑があつてのことか。

「早く、ハヤク、シロ。『フォルムタラニス』！」

両爪と尻尾の刺が振り回される。十を超えて降り注ぐ鉄球、そのすべてを切り刻んだ。

そして、ラグエルモンはドルグレモンを見つめる。やろうと思えば反撃ができただろうに、しなかった。それはまるでお前の攻撃など通じないぞ、と嘲っているようだった。あるいは、最大火力を撃つてこいと挑発しているのか。

「コータ……行くよ」

「ああ、やれっ！」

「メタル——」

溜めの問題で出来なかっただろう、その一撃を放つ。今までにないほど、文字通り最大の一撃を、渾身で放つ。

「——メテオ——！」

ああ、その鉄の隕石は、ラグエルモンにとっては空を覆うほどの巨大さに見えたことだろう。

それでも、ラグエルモンは冷静だった。冷静なままに、その両腕と腹を向ける。

「『パーホルス』——！」

放たれたのは、レーザー弾。隕石に比べて遥かに小さいそれが、隕石を押し戻す。

技に全力を出していたドルグレモンに、返ってきたそれを躲す術はなかった。己の必殺を返されて、ついにドルグレモンは撃墜される。

「ど、どるぐれもん……」

「大丈夫、つぐう！」

コータたちは地面の上でうめいていた。

彼らにとつて幸いだったのは、当たったのがレーザー弾ではなく押し返された自らの技だったことか。仮にレーザー弾だったら、彼らはもうこの世にはいなかっただろう。

「……終ワリカ」

そして、そんな彼らの下に、ラグエルモンが来る。

彼女はドルグレモンを足蹴にし、動けないようにする。逃げられないようにか、それとも他に理由があるのか。

何にせよ、そこまで近づいてきて、コータたちはその顔をまじまじと見ることになった。複雑な表情だった。だが、どこか、そう、メイ

クーモンの面影がある表情だった。

「……」

「……」

だから、コータたちはつい黙ってしまった。

悲痛な表情で、黙り込む。そして、一瞬後に彼らはどちらともなく力ない様子で笑った。

「あーあ……結局、勝てなかったよな」コータが笑う。

「こんなことなら、出会わなければ良かった？」ドルグレモンも笑った。

「わかんないよ、そんなん」

「だよね」

ラグエルモンが冷徹な目を向ける中で、コータたちはまるで辞世の句を唱えるかのように、それでいて余りにも日常的に会話していた。

それは、何とも違和感のある光景だった。

「……メイクーモン」

コータは、ラグエルモンに話しかけた。

「オレたちはお前を殺すよ。オレたちは生きていんだ。お前に殺されるつもりもお前と一緒に死ぬつもりもない。だから、オレたちはお前を殺すんだ」

そう、コータは宣言した。

それは責任転嫁しないという意味表明で、自分たちの望む未来を諦めるといふ決意だった。

その決意が、もしくは■■が、あるいは別の何かが、この現実に空想を導く。存在し得ない空想が、道理に雁字搦めの現実を打ち壊すために、解き放たれる。

「……」

ラグエルモンはその決意の籠った言葉を聞き届けた瞬間、彼女は凄まじい力で吹き飛ばされた。

「さようならだねえ、メイクーモン。俺たちは生きるよ」

そこにいたのはドルグレモンではなかった。

そこにいたのは、ドラゴンだ。その強大なイメージが具現化したと

ばかりの、威圧的な姿。今までの獸的な姿から、雄々しい剣のような姿となった、破壊の権化。

ドルゴラモンと呼ばれる、究極体デジモン。

「ドルゴラモン……殺せ」

コータが笑ってそう言う。顔を歪めて、笑いながら言う。

「ブレイブ——」

気持ちは同じだとも言うのか、ドルゴラモンは何も言わずにラグエルモンに向かう——！

——なんでオレたちが！

——嫌だ、いやだあ！

——助けて！ 誰かあ！

——聞こえてくる。

——お前さえいなければ！

——俺だけが生き残るんだ！

——苦しい、苦しいよお！

——聞こえてくる。

——なんで僕たちがこんな目に遭うんだ。

——なんであいつらは生き残るんだ。

——なんで俺たちだけが死ぬんだ。

——聞こえてくる。

——なんで。

——なんで。

——なんで。

——なんで！

ああ、それは怨嗟の声だ。理不尽を嘆く、世界中のあらゆる声だ。メイクラックモンV Mが狂気として世界中に撒き散らし、ラグエルモンへと進化するために集めた、理不尽を呪うエネルギーだ。

それが、絶えずラグエルモンの耳を蝕んでいた。

「ブレイブ——」

「……」

彼女が思い起こすのは、少し前。まだ彼女がメイクローモンと呼ばれる成熟期デジモンだった頃、まだ何も知らなかった最も幸せだった頃。

彼女は、理不尽な死を見た。

数と数のぶつかり合いで、何人もが死んだ。たった二体の力のぶつ合いで、何人もが吹き飛んだ。

それを前にして、彼女は衝撃を受けた。

命はそんな簡単に消えていいものではないのに。命はもつと純粹なものなのに。

理不尽な死による大きな衝撃を前にして、彼女は思い出してしまったのだ。自らの使命を。自らのことを。だから、彼女はただただ悲しかった。

理不尽を撒き散らす側として覚醒しなければならなかったことも。友達を導かなければならなかったことも。

彼女はそんな役割になってしまった自分が嫌だった。友達を裏切るのが嫌だった。

「……」

追ってこないでくれ、とも思った。それでも追ってきてくれたことが嬉しくて、彼らの苦難を望んでしまった、そんな自分自身に嫌気が差して彼女はまた自分が嫌いになる。

だから、彼女は思うのだ。

生きていては『役割』によって世界を汚してしまうのだから、どうせ自分は生きてはいけない。何より、こんな嫌いな自分など生きていたくない。だから、死ぬべきだ。……ただ。

「ニヤー」

ただ許されるのならば、自分を殺してくれる相手は友達だった彼らがいい、と。

彼らはそんな彼女の意思を受け取ってくれた。そこには正しく友情があつて、だから、彼らはこの場で進化したのだ。その友情が、友達達の願自死いを叶えようとする想いが、それを叶えられる空想の姿を現実のものとしたのだろう。

自分の主の思惑などではなく、そうであつたらいいと彼女は妄想する。

「——メタル——！」

せめて罪悪感など抱かないようにしたつもりだったが、彼女には演技の才能はなかったらしい。

本当に申し訳ないことをしたと思いつつ、せめてもと彼女の口は軽い弧を描く。

「さよなら、ニヤ」

そうして、彼女は笑って破壊の突撃をその身に受けた。

少年たちが求めたのは、友という未来だった。友が求めたのは、自らのいない未来だった。

少年たちは友の願いを汲んで、自らの願いを諦めた。

悲しいし、辛い。ただ、そう。初めから変わっていなかった友の笑顔だけを、彼らは胸に刻み込んで——そうして、彼らはまだ生きる。

第二十七話く蛇鉄封神丸く

ラグエルモンを倒した——と言っているのかどうかは彼ら自身もわからなかったが、とにかくその後のコータたちはその場に静かに佇んでいた。

目の前にあるのは、ラグエルモンの死体だ。

「……生きるって難しいよなあ」

「そうだね」

ドルゴラモンはコータの独白に静かに相づちを打つ。

「生存闘争はそりゃ確かにキツイ。今のこの時代は過酷だよ。言葉なんてほとんど意味を成さずに、ただ力でのみ解決するんだから。言葉なんか放っていたらその隙に、死んでしまうんだから」

「うん」

「それでも、そこには善悪も正誤もなく単純明快で。辛くて苦しいけど、楽なんだよな。……本当に難しいよ」

「でも、さ。最期の最後、メイクーモンは笑ってたよ。それだけは覚えておかないといけないんじゃないかな」

苦しみの中から捻り出すようにして、ドルゴラモンは言った。

それこそ難しい話だ、とコータは思う。あれこれ理由つけて自分を楽にするのは簡単だ。それでも、楽になる代わりに選択の責任を転嫁していいはずがない。いや、そもそもそれには意味がなく、そんなことができないはずもない。

それを、何となくコータたちはわかっていた。

「生きなきゃなんないんだよな」

「うん」

生きたいから生きるのではなく、生きなければならぬから生きる。今回の「殺し」の結果は、そこにある。

初めての決意を、コータたちは胸に抱いた。

そして、決着から数分経った今になって、彼らはようやく動き出した。

「……墓くらい作ってもいいかな?」

思い立ったように、コータは言った。

「どうだろう？ 死んでるけど、特性が残っているなら埋めたら不味い気がする」

「火葬……できるやつなんかいないか。でも、このまま放置ってわけにも」

ドルゴラモンとコータは腕を組んで考え込む。

だが、結果としてその思考は無駄に終わった。

「っ——！」

瞬間、驚いたようにコータは顔を上げた。すぐさま、ドルゴラモンは行動を開始していた。

彼らを感じたのは、未だかつてないほどの力の波動。あの到達者さえ凌ぐのではないか、と思えるほどの威圧感。

ドルゴラモンは咄嗟にコータを握り締めて空を飛ぶ。

その瞬間のことだった。

大地が、両断された。

「な——！」

「つくー！」

それは、地平線の彼方からやって来た。黒く、黒く、黒い、這い回る蛇のようなナニカ。それが大地を切り裂いたのだ。

「今のは、まさか」

「斬撃、だよな」

コータとドルゴラモンは戦慄と共にその事実を正しく認識していた。

斬撃の爪痕は凄まじい。大地に巨大な断層を刻み込んでいた。

「っ、メイクーモン——！」

思わず、コータは声を上げた。その視線の先で、ラグエルモンの死体は裂け目に吞まれて地下深くへと消えていく。

やるせないことだらけの中で、ひとしおのやるせなさかコータたちを襲ったのだった。

同時刻、クレースガルルモンとブリッツグレイモンは荒い息と共に

タクテイモンを睨んでいた。

先ほどの大斬撃を、何とか辛うじて躲した彼らは極度の緊張と共にあった。タクテイモンの持つ刀から、目が離せなかった。

「そ、その刀は……！」

「ああ、うむ。これか。蛇鉄封神丸と言う。これは我が主が偉大なる破壊神の権能とその武器を模して作り上げたもの。さすがに彼らそのものには一步譲るが、単純な威力だけならばこの刀は彼らにも通じる」

「――！」

偉大なる破壊神と言えば、このイグドラシルの管理する世界とはまた別の世界、東方世界の伝説だ。

曰く、破壊と再生をもたらす者。

曰く、雷を放ちて世界を留め、刃を振りて世界を両断する者。

曰く、既存のシステムを無にし、新たなるシステムを創造する者。

その神威を模した武器。真実かどうかはクーレスガルルモンたちには判断がつかないが、その曰くを嘘だと断じられないだけの力があつた。

「さあ、せっかく抜いたのだ。もう少し愉しもうではないか！」

テンシヨン高く、タクテイモンは蛇鉄封神丸を構え直す。

巨大な蛇のような刀が少し動く。あまりの強大さ故か、普通ならば聞き咎めないその僅かな瞬間の音さえ、クーレスガルルモンたちには聞こえてしまった。そして、だからこそ、悟ってしまう。次にあれが振り下ろされた時、その時こそが自分たちの最期だと。

蛇鉄封神丸――ああ、それは、クーレスガルルモンたちが勝つ上では絶対に抜かせてはいけない武器だった。

「……」

「……」

だが、もう言っても仕方がない。クーレスガルルモンたちは頷き合う。もはや、賭けるしかない。

そして、一瞬後。

「行くぞ――！」

「おお！」

クーレスガルルモンとブリッツグレイモンが、覚悟を決めて駆け出した。

「その心意気やよし！」

タクテイモンが、いい笑顔で刀を振る。

そして、クーレスガルルモンたちの耳に届いた音は――

「とうりやああああああああ！ トウエニストオオオオオオオ！」

――うるさいくらいの、声だった。

死角から放たれた斬撃を、タクテイモンは軽々と回避する。突撃を仕掛けてきていたクーレスガルルモンたちからも軽く距離を取って、斬撃を仕掛けてきた者に目を向けた。

そして、視線を鋭くする。その雰囲気はまた変わった。

「貴様は……！」

一方、タクテイモンに睨まれたデジモンは、不敵に笑った。

「おう、そうだ！ トウエニストだ！」

ああ、そうだ。そこにいるのはズバイガーマン――ではなかった。

両腕を剣に変え、背中に剣を背負った、二足歩行の黄金の武器型デジモン。ズバイガーマンが進化した、完全体のデユラモンだ。

「トウエニストか。その耳障りな単語を某に言い放つとは、よほど斬られたいらしいな」

「どうかな。斬られるのは、お前だぜ！ 今のオレはサイツコーに絶好調だ！」

デユラモンは自信満々に言い放つ。その言葉の節々から活力が感じられて、なるほど彼自身の言うことは間違いではないのだろう。

だが、それが、余計にタクテイモンの気に障った。

「たった斬る」

感情を染み込ませられた、短い言葉。だが、それだけで十分だった。そこに込められた感情が端的に伝えていた。

十分に伝わった。

だから、デユラモンも凶暴に笑う。

「斬る」

そして、デユラモンは駆け出した。

その前に迫る、黒の刃。無数の斬撃。

「『悟の太刀、五稜郭』」

「つくうー！」

デユラモンはその両手代わりの大剣で、必死に斬撃を迎え撃った。

「なめんなよつ。今度はこっちの番だぜ！ グラン——」

彼は太剣と化している両腕を振りかぶる。

だが、その視線の先は。

「遅い」

振り下ろされた、蛇鉄封神丸——！

「つくー！」

正に流星の如き、一閃。

それを、デユラモンは両腕で受け止める。その瞬間、彼は自分の腕に走る痛みを感じた。

「ぐ、ううううううううー！」

力を緩められない。逃げられもしない。耐えることに必死になるしかない。

彼はわかっていて。それ以外をしようとした時にこそ自分は両断されると。

「ひと時でもこの蛇鉄封神丸を防ぐか。だが！」

タクテイモンの腕に力が入る。

僅かに音が聞こえた。

金属が擦れる耳障りな音、とひび割れのような小さな音。その意味するところを、デユラモンは自分の腕に走る痛みと共に感じ取っていた。

「誰が斬られる、かああああああ！ オレはトウエニストだあああああああー！」

それでも、デユラモンは声を上げる。それこそが自分だと。

だから、ここで諦められない、と。

「黙れ。その耳障りな単語を言うな」

しかし、一方でタクティモンはより表情を歪ませる。

「ぬ、おおおおおおお！」

音が大きくなる。痛みが大きくなる。

もはや、どちらも無視できるレベルではない。見て見ぬふりをしていたが、もはや無理だった。デュラモンの腕——大剣に、罅が入っていた。

いや、罅どころではない。蛇鉄封神丸の刃が大剣に食い込んでいた。

このまま行けば、デュラモンは腕^剣を斬られる。斬るための剣^{自分}が、逆に斬られる。ぽつと出の訳がわからないやつに。

「斬られる。死ぬがいい。トウエニストだと？ 戯言を。自力では何もできず、何かがある他力に甘える者が格好つけてよくも言う」

「な、舐めんなつ、誰が他……力本願、野郎だ——！」

「は。他力で進化した貴様に何が言えるものか。自ら道を切り開いたのではなく、他者と力を合わせたのでもなく、他者に用意された貴様に。そうでなくとも貴様は使われる者なのに。武器とは振るい手がいてこそ。振るう者がいないから自分で動くなど、鈍ら以前の話だ」

「……！」

苦しそうにただけで、デュラモンは言い返せなかった。事実だからだ。彼は気づいたら進化していた。何者かに進化させられていた。そして、彼は本当の力を受け入れていない。

ああ、それで何を言い返せよう。今の彼に、言い返すだけのものはない。

だが。

「オ、レは……トウエニストなん、だ」

「まだ言うか」

だが。

「それが、なんだってんだあ！」

だが、誰にどのような思惑があったとしても、それに甘んじるかどうかを決めるのはデュラモンだ。用意されたもので何を為すのかを決めるのはデュラモンだ。

彼は、それを信じている。

「例えどうな思惑があろうと、オレはオレだ。トウエニストの道を貫く！」

運命とは選ぶことのできる、希望に満ちたものであると。

「よく言ったね！」

声が降ってきた。それは、忘れてはならない声で。

タクティモンは舌打ちと共に引き下がった。

今まで自分を押さえつけていた力がなくなり、疲労と共にデュラモンは自由となる。

「ごめん、遅くなった！」

「待たせたなっ！」

デュラモンと共に立ち塞がるのは、タクティモンがデュラモンに夢中なのをいいことに全力で体力回復していたクールレスガルルモンたちだった。

「そうか。貴様らもその味方をするのか」

「当たり前だろう！　ここにおいて敵なのはお前だけだ！」

ブリッツグレイモンの言葉に、タクティモンは「是非もなし」と諦めたように首を振った。彼としては、ブリッツグレイモンたちとは愉しく戦いたかったのだ。

それでも、こうなってしまったのなら仕方ない。そう、タクティモンは気持ちを切り替える。

「ふっ」

そして、横薙ぎの一閃。蛇鉄封神丸が天と地を切り分ける。

その天地開闢の如き斬撃を、デュラモンは飛び上がってギリギリで回避する。

一方、ブリッツグレイモンとクールレスガルルモンは――

「なっ」

――それは、誰の驚きだったか。

見れば、ブリッツグレイモンたち二人は蛇鉄封神丸を二人がかりで掴み取っていた。まるで真剣白羽取りのように。

奇跡のような光景だ。だが、所詮は曲芸。徒労に終わる。受けに全

力なあまり即座に反撃に転じられていない。正気を取り戻したタクティモンの再度の攻撃で沈むだろうし、今度は奇跡は起きないだろう。

そんな無駄な行動を、どうして彼らは取ったのか。

ああ、答えは分かりきっている。

「ブレイブメタル！」

無駄な行動ではないからだ。

直後、破壊の権化が空より来る――！

第二十八話くLegend―Armsく

へいこらへいこら必死に昇った高高度より落下してきたドルゴラモンの拳が、タクテイモンをぶち抜く。

ブリッツグレイモンたちに蛇鉄封神丸を押さえつけられているこの一瞬、タクテイモンには避けられない！

「つぐー！」

大地が割れた。

その凄まじい衝撃のすべてを受けて、タクテイモンは地面に倒れる。

「コーター！ と、誰だ！」

「なんで俺だけそんな感じ!?!」

降り立ったドルゴラモンと、必死にくつついていたのだろう、息絶え絶えになっているコータの姿にデュラモンは驚いたようだった。

だって、彼らが戻って来たということは。

「そっちはもう大丈夫なのか?」

「ああ。……終わった」

「そっか」

何かあったのだろう。それを感じつつも、デュラモンもブリッツグレイモンたちも何も言わなかった。

「それより今は――」

「『式の太刀』!」

「っ!」

聞こえてきた声に、全員が苦々しい顔をした。見れば、タクテイモンは倒れたまま、しかし、何らかの技を使ったのだろうか、辺り一帯の雰囲気に変化が起きていた。

具体的にどうかは言えないが、気温が僅かに下がったような、そんな感じがしていた。

「しかし、好機に攻撃して来ないとは。運が良いと言うべきか、その嗅覚に優れると言うべきかな」

少しフラつきながら、タクテイモンは立ち上がる。全くの無傷では

ないようだったが、それでも戦闘続行が可能なようだった。

「その姿……なるほど。獣天使は使命を半分しか果たせなかったのか」

「使命？ 半分？ どういう意味なんだ……！」

「知る必要はない。もう半分は某がやらねばならぬか。面倒だが、あの意味では楽な仕事でもある」

「……？」

コータたちを見て、タクティモンは蛇鉄封神丸を構える。ドルゴラモンは険しい顔をして拳を構え、一人で戦わせないとばかりにブリッツグレイモンたちもドルゴラモンの横に立った。

「某と戦う余裕が有るのか？」

「何!？」

言われて、気づいた。ブリッツグレイモンとクレーレスガルルモンは攻撃の気配を察知して、躲す。一瞬後、彼らの居た場所を黒い半透明の何か——何か、としか言えないものが通り過ぎた。

「今この世界に満ちる、我が主の欠片を呼び出した。さあ、貴様らは死霊と共に踊っているといい」

黒い半透明の存在——死霊が、ブリッツグレイモンたちに襲いかかる。一体一体には大した強さはない。だが、死霊という名は伊達ではないのだろう、この世界の悲劇の数だけ存在するかの如き数だった。

その数すべてがブリッツグレイモンたちを襲うのだから、彼らはその数を捌くのに必死になるしかなかった。

「……さて、あとは貴様らだ」

場を整えたとばかりに、タクティモンはコータたちに向き合う。

険しい顔で、しかし、諦めないとばかりにコータはドルゴラモンに頷いた。

「良い顔だ。では、行くぞ。『壺の太刀』」

振り下ろされた蛇鉄封神丸、それをドルゴラモンは迎撃しようとして——

「オレを忘れるんじゃねえっ！」

——直後、黄金が黒を弾いた。

甲高い音がなつて、黄金が僅かに世界に散る。

「トウエニストか……!」

「そうだ、トウエニストだ!」

見れば蛇鉄封神丸を弾いたデユラモンの剣は傷だらけの姿を晒していた。後一步動けば、それだけで崩れそうなほどの見た目だった。

「おい、デユラモン!」

「うるせえ、黙つてろっ!」

思わず心配の声を上げそうになったコータを、デユラモンは黙らせた。

「ここだけは負けちゃなんねえ」

「……!」もはや言葉すら発するのも忌々しいとばかりに無言で斬りかかってきたタクテイモン。

「だから、こうをするんだ!」それを、デユラモンは身体を砕けさせながら弾く。

そして、デユラモンの身体が変化する。

背中の大剣を中心に、身体が折^{鍛え上げられる}りたたまる。

一瞬後、そこにあつたのは――

「本当は嫌だっただけだな」

――剣だった。

ああ、これこそがデユラモンの真の力。 天使が持てば世界を救い、悪魔が持てば世界を滅ぼす”と伝えられる、Legend Armsの力。 武具へと姿を変える、デジモン。 彼らは個のデジモンでありながら、武器でもある。 しかしながら、その真の力は武器とならなければ発揮されない。

だから、デユラモンはこれを嫌っていた。 自分は自分であり、武器として他人に使われるなど冗談ではないからだ。

だが、それでも。

「オレはトウエニストとして、アイツを認められない。 アイツを斬らなきゃなんねえ」

彼はタクテイモンに、そして蛇鉄封神丸に負けたくなかったのだ。 剣となったデユラモンはドルゴラモンの前に降り立った。

「でも……」

「だけど……」

コータもドルゴラモンもわかっている。雰囲気だけ凄まじい、見た目ボロボロのこの剣を振るうということは、デュラモンにとつてどういふ結果になるかは。

「笑止。戦場で迷うか！」

そして、その迷いの際にタクティモンはつけ込んでくる。

咄嗟にドルゴラモンは動いて、蛇鉄封神丸を拳で弾く。

ドルゴラモンはそのままタクティモンと戦闘を始めた。剣となったデュラモンを放置したのは、それを使うことに迷っているからだろう。迷ったままで隙を作るくらいなら、すっぱりと放置して戦えばいいとそう考えたのだろう。

コータを巻き込まないように、ドルゴラモンはなるべく遠くに引き離すようにタクティモンと戦う。タクティモンはそんな彼の思惑をわかった上で、見過ごしているようだった。

そして、そんなドルゴラモンの一方で。

「な、なんでそんなことができるんだよ」

コータは死に向かうことを良しとするデュラモンに疑問をぶつけていた。

彼の姿に、コータはいつかのブラックウオーグレイモンを見た気がした。あの時は生きること必死で、あの後もいろいろとあつて、考えられなかった。

だが、よくよく考えれば不可解でしかない。

「これがオレの輝き、オレの命の在り方だからだ」

ああ、それこそはコータたちの知らない命の在り方だった。生きるために生きるのではなく、生かすために死ぬ。誰かの命を守るために、自らの命を投げ出す。

コータたちには理解できない、在り方だった。

「命は、受け継がれるもんだからだ。過去から未来へと受け継がれていくもんだからだ。積み重ねられた過去を愛して積み上がっていく未来を夢見る者——それが、トウエニストだからだ！」

「……！」

コータは、そんなデユラモンの輝きに圧倒されていた。

「だから、アイツだけは許せない。どんな歴史でも愛するのがトウエニスト。なのに、アイツらは今の歴史を否定している。未来を汚そうとしている。みんなが作った歴史を、自分勝手な理由で壊そうとしている！ だから、トウエニストとしてオレは負けられねえんだ！」

「……！」

「だから、遠慮なくオレを使ってくれ。オレを、振るってくれ」

「……ああ、もう！ どの時もこいつもこつちの気も知らないで！」

ドルゴラモンッ！」

ドルゴラモンは飛びずさりながら、頷く。

無言で、彼はデユラモンを両腕でしっかりと握った。そして、タクテイモンへと向ける。

「ふん。恥を知るがいい」

そんなドルゴラモン——の手にある剣を忌々しそうに、タクテイモンは蛇鉄封神丸を構えた。

そして。

「ハアッ！」

「ふうッ！」

一瞬後、ドルゴラモンとタクテイモンが蛇鉄封神丸と剣と化したデユラモンで鏝迫り合う。

単純な鏝迫り合いだ。武器を振るう技は関係ない、より強い力によつてねじ伏せる状況だ。これならば、技量で劣るだろうドルゴラモンにも勝機はある。というか、そこしか勝機がないからドルゴラモンは鏝迫り合いに持っていった。

だが、力は互角。

「……！」

「つぐううううー！」

いや、僅かにドルゴラモンの方が押しているのか。

タクテイモンの方が必死に食らいついている。ああ、だが、

「残念だったな——！」

だが、

「っ」

だが、技量の差の関係ない力勝負に持ち込んでも、それで力で押し
ていても、それでもドルゴラモンには負けているものがある。

そうだ。

「デュラモンが……！」

振るう武器の、差。

蛇鉄封神丸に比べ、デュラモンは今にも碎けそう。このままドル
ゴラモンが押し続けられれば、碎けて折れてしまうだろう。

「ぬあああああああ。真のトウエニストを舐めんなあああああ
！」

それは、断じて認められない。ドルゴラモンも、コータも、デュラ
モンも、全員の想いが一致した。この極限状態での奇妙な一致が、道
を開く。

「ぬ、まさかこの状態で——！」

タクテイモンが驚いた。

「いつけええええええええええ！」

コータが叫んだ。

「行くぞっ！」

「おうさー！」

ドルゴラモンの声に、デュランダモンが意気込んだ。

ああ、それこそは伝説の完成形。先ほどよりも輝かしく、大きい、黄
金を纏う剣。完全を越えた、究極の剣。

剣を持つ両腕の拳を力強く、ドルゴラモンは一步を踏み込んだ。そ
して。

「おらあつ——！」

ゆっくりと、だが、確実に。

ついに黄金が黒に打ち勝つ。

伝説の武器を振るう空想の化身が、武者を斬る。星さえ切り裂く力

を夢想の力が押し切って、剣が刀の上から武者の肩を斬っていく。

「があつ」

そして、ついにドルゴラモンがタクテイモンを切り裂いた。深々とした傷をつけられ、タクテイモンはついに倒れる――

「『無の太刀、六道輪廻』！」

――ああ、だが、それこそは最期の反抗とばかりの一撃だった。

無数に放たれる斬撃が、技後硬直のドルゴラモンを襲う。ドルゴラモンに躲す術はない。

まあ、あくまでドルゴラモンには、だが。

「そつちに夢中で――」

「――死霊たちが消えてったぞー！」

その瞬間にブリッツグレイモンとクレーレスガルルモンが来る。

黄獣偃月刀とプラズマステークが斬撃を砕く。

その一瞬の時間で、再び動き出したドルゴラモンが剣を振りかざす。その光景を、もはや動くだけの力がないタクテイモンは笑って見ている。

「カツ。是非もなし。まつこと、忌々しくも輝かしいトウエニストよ」

そして、黄金の剣がタクテイモンを両断した。真つ二つになったタクテイモンの死体、傍に音を立てて落ちていく蛇鉄封神丸。

それを前にして、ドルゴラモンの腕にあった剣が声を上げた。

「ああ、クソ。勝てなかったぜ……――」

満足そうに、それでいてどこか悔しそうに。

戦いの中で限界が来たのか、それとも無理な進化のツケか、あるいはその両方か。デュランダモンの身体はひび割れと共に朽ちていた。

その意味するところは一つしかない。

「……お前は」

「あーばよっ」

そして、笑いながらデュランダモン^剣は死んでいったのだった。

タクテイモンとの決戦から一日後。ゆっくりと休んだコータたちは、未だ疲れた身体を引きずって話し合っていた。

ちなみに、いつの間にかボコモンとトコモンはいた。まあ、戦いの余波に巻き込まれたらしく、泥だらけだったのだが。

「コータたちはこれからどうするんだ？」

ブリッツグレイモンがそう聞く。

そうだな、とコータは考える。

「ウォーグレイモンたちと合流するのはどうだ？」

意外にも声を上げたのはドルゴラモンだった。

そうだな、とコータは返す。いろいろと気になることもあったし、それならばいろいろと協力できるウォーグレイモンX抗体たちと行動を共にすれば、活動の選択肢の幅も広がるだろう、と考えたのだ。

「とりあえずそうするか」

「じゃあ、まだまだ一緒だな！」

嬉しそうに手を差し出してきたクレスガルルモンの手を、コータは握り返す。ドルゴラモンも同じように握手した。

「そうと決まれば、早速帰るか！ 懐かしいベルサンデー^現ターミナル^世界へ！」

そして、悲惨な状況のウルドターミナルの報告がたら、ウォーグレイモンX抗体たちのいる現在世界へ向かうことで意見が一致した、のだが。

「むう、もっと休んでいたい気もするんじゃないがのう」

「アウアウー」

文句を言う生ものが二匹。

「じゃあここでさよならか。寂しくなるなあ」とコータが笑って言えば、

「うそうそうそじゃーい！」ボコモンは手を激しく振って前言を撤回した。

ボコモンは「お前さん意地悪じゃのう。あれか、好きな子に意地悪したくなるタイプか？」と唇を尖らせた。

「ア？ アウア、アウアウアウー？」

「うるさいわっ。なんで冗談でそこまで言われないといかんのじゃない！ わしは十分乙女じゃろーがい！」

空気が凍った。

その最中、搾り出すように「え？」と言ったのは誰だったのだろうか

か。

「みんなひどいわー！」

そうして、ボコモンの叫びを最後に、コータたちは過去世界を脱出して現在世界へと突き進む。

それは世界と世界をつなぐ時空の通り道でのことだった。

「おやおやあ。これは意外。まさかあのタクティモンを以てしても事態が進まないとは。役立たずですねえ。本来の役割の前の使命すら果たせないなんてねえ」

——聞こえてきたのは、覚えのある声だった。

「私の仕事が増えてしまうんですよねえ……やれやれ。ま、仕方ありませんねえ。いいでしょう！」

そして、気づいた時にはコータたちはどこかへと引き寄せられていて。

D・C・2018 NEWデジタルワールド——スクルドターミナル——

それはあまりに近未来的な場所だった。

ビルとビルが立ち並び、舗装された道路があり、空中投影スクリーンなどの現代の人間世界にも見ないようなものさえある都市だった。そんな場所の片隅で。

「ここは……」

「アウ」

コータとトコモンは目を覚ましたのだった。

る可能性だってあるのだし。

「スクルドターミナル……未来世界とは聞いていたけど、まさかこんなに未来だなんてな」

「アウ」

そう、ここはスクルドターミナル。NEWデジタルワールドの三つの世界のうち、未来を担当する世界だ。しかし、それはそれとして変わり過ぎである。

過去世界と現在世界は住んでいるデジモンの種類くらいしかパツと見の違いはなかった。いや、大気成分とか大陸の形とかデジモンたちの性格の違いとか、そういう環境面等での細かい部分の違いはあったのだろう。

しかし、ここはそんな二つとは全くとして違う。砂漠と海くらい違う。

「発展し過ぎとかさ。なあ、未だここのデジモン見てないけど、ちゃんとデジモンが住んでるよな？」

「アウ？」

「なんかさあ、ここまで違うとエイリアンみたいな未来人が出てきてもおかしくないとか、そんな気しかないとか」

コータが思い出すのは、人間の未来予想図だ。

固いものを食わずに柔らかいものを食べるようになったせいで顎の部分が退化していき、最終的には頭がでかくて顎が小さい、一昔前の宇宙人のような顔に人間はなるというアレである。

この未来世界の発展といい、デジモンもそんなことになっているのではないかとコータは思ったのだ。

「なんか怖いような……見てみたいような……」

「アウ」

微妙な顔で考え込むコータを、トコモンはアホを見る目で見ていたのだった。そんな訳無いだろ、とでも言いたげである。

だが、

「侵入者発見。付着成分ヨリ、ウルドターミナルカラノ侵入者ダト推測サレル」

しかし、

「補足。X抗体持ちデハナイ模様。ヨツテ、排除スル」

不穏な言葉と共にやって来たのは、タコのような脚を持つ、サンダラスをした巨大に発達した頭部を持つデジモンで。

「まさかの進化の果て説!?!」

「アウー! アウア! アウー!」

冗談が本当になってしまった驚愕に止まってしまおうコータを、トコモンが噛み付くことで正気に戻した。

「っ、そうだな。逃げる——!」

「アウー!」

頬に巨大な歯型をつけながらも、コータは駆け出した。

「対象が逃走。追走開始」

「つて、うわっ! なんかに撃ってきたぞ!」

追走開始とか言いながらその手のおもちゃみたいな光線銃をぶっぱなして来たのだから、コータは慌てるしかない。

幸いにして、視力は良い方ではないらしい。放たれた光線はコータの足元にあたって霧散した。まあ、着弾した地面は僅かに融解しているのだが。当たったらどうなるかを如実に示している。

「ダツシユー!」

「アウー!」

「つーか、ドルゴラモンどこ行ったんだよ! アイツならひと捻りだろ!」

「アウ〜?」

トコモンを頭に乗せたまま、というか、トコモンが頭に引付いたまま、コータはひたすら駆け出した。その後ろから光線がビュンビュンと飛んでくるのだから恐ろしい。

時折、頭上を掠めるのだから、生きた気さえしない。

「アウアウツ! アーウー!」

今の言葉はコータにも何となくわかった。多分、掠ったからもっと当たらないように走れ、だ。

「気を遣えるわけないだろ! うわっ! また掠った!」

「アウ！ アー！」

「うおおおおお！」

そんなこんなで、掠ったり掠らなかつたり、喧嘩したり喧嘩しなかつたりしながら、コータたちは路地裏を飛び出して道路を飛び出した。

「おおう」

間近で見る、近未来都市。コータは別段SF好きという訳でもないが、この光景には感動を覚える。

まあ、すぐさま後ろから飛んできた光線によつて現実に戻されるのだが。

「つああ、車とか走ってないのはいいな！ 轢かれる心配がない！」

「アウ？」

幅十数メートルはあろうかという巨大な道路を、光線から逃げ出すようにして縦横無尽にコータは走る。

誰もいないという点、道路が整備されているくせに乗り物の一つも走っていないという点、そこに奇妙な想いを抱かなくもなかつたが、そんな想いは抱いた瞬間に飛んでくる光線によつて打ち消されていた。

「どこまで追ってくるんだよ！」

「アウアウアウ？」

「いい加減しつこい！」

大通りを走るコータは、このままでは埒が明かないと考えて、イチかバチかで路地裏に突入した。

狭い路地裏では逃げ場も少ない、が、視界も狭いため、そこに賭けて撒くことを考えたのだ。

「こういう時にゴミ箱とかあつたらなあ！」

まあ、ゴミ箱があつたからといって、それを使つての足止めが成功するなんていう映画みたいなことにはならないだろうが。

というか、ゴミ箱がないところを見るに、さすがは近未来都市と言ふべきか。ゴミというあまり視界に収めたくないものについて、しっかりと都市のゴミ捨て機能を整備して対応しているらしい。

「つくう、そろそろ足が限界……！」

かれこれ十数分は走り続けているか。全力疾走に近い速度でこれだけ走り続けていれば、さすがのコータも体力の限界が近づいてきていた。

だが、後ろを見れば、しつこいくらいに追いかけてきている。ついでに光線も飛んできている。逃げられる気配は微塵もない。

「アウー！ アウー！」

そんな時、ペシペシと前足を使ってコータの頭を叩くトコモン。

「どうした？」

「アウー！」

トコモンは連続で右前足をコータの頭に叩きつける。右の前足だけを、使って。

その意味するところを、コータは察した。

いつぞやの、現在世界での戦争の時と同じだ。あの時、未だドルガモンだったドルゴラモンとコータは自分の役割を分担することでも乗り切った。

トコモンはそれと同じことをしようと言うのだ。まあ、強いて言えばデジモンと人間の役割が逆転しているのだが。

「よし、行くぞー！」

「アウー！」

最後の力を振り絞って、コータは全力を出す。

「アウー！」

トコモンが左前足をコータの頭に叩きつけた。

それに従って、コータは曲がり角を左に曲がる。

「アウアウー！」

今度はトコモンが右前足をコータの頭に叩きつけた。

それに従って、コータは曲がり角を右に曲がる。路地裏からまた表通りに出た。

「アウー！」

急げ、とばかりにトコモンはコータの頭に左前足を二回叩きつける。

それに従って、コータは左の方向に進んで、さらに左に曲がる——
ビルを一つ通り過ぎたところにあるビルの間の部分へ入り込む。

再び路地裏に入った。

「次はっ？」

「アウー！」

右前足が叩きつけられた。

コータは一番初めにある角を、右に曲がった。

そして——

「ぜえっ、ぜえっ」

「アウツアー！」

「ぜーはー」

——それを繰り返すこと数分。

コータは何とか撒けたのだった。かれこれ二十分近くも逃げ続けていたのだから、コータの足は生まれたての子鹿のよう。

そんな中で、トコモンは元気だった。というか、その得意げな顔を見るに、よくやった、とでも言っているようだ。

……コータはとも腹が立った。まあ、疲れ果てた今の彼にその苛立ちを発散するだけの気力はないのだが。

「アウアウーウ」

コータがそんな感じなのに、トコモンはさらに油を注ぐ。

トコモンの言葉がわからないコータだが、何となく馬鹿にされているというニュアンスだけは伝わってきた。さすがに限界だった。

コータは息を整えながら、トコモンを引っ掴んでわちやくちやと、ぐにぐにと、さながら消しゴムのカスでネリケシを作る小学生のように、弄る。

「アウー！」

「痛い！」

噛み付かれて終わった。

「お前なあ……！」

「アウアウ」

体力はともかくとして、荒れた息はだいぶ元通りになってきたコー

タは、トコモンを睨みつける。一方でトコモンは気にした風もなく、彼を鼻で笑っていた。

「ぐぐぐ！」

見た目に合わない小生意気な様子に、お前そんなやつだったのかよ！ とコータは内心で叫ぶ。が、まあ、思い返すまでもなく、元からこういうやつである。

見た目と性格の良さは同じではないのである。人間と同じだ。見た目が良いやつほどアレなやつも相応に多いのだ。

まあ、トコモンのような幼年期なのというタイプは珍しいと思われるが。

「可愛くねーガキだな」

幼年期といえ、人間でいうと小学校に上がる前の幼子にも等しい。というか、場合によっては赤子レベルの場合もある。

それなのに、そんな時期からこんな性格とは先が思いやられるだろう。大きくなった時に周りが被る迷惑を考えて、コータはげんなりした。

「アウアウ」

そんなコータを知ってか知らずか、まあ、半分くらいは知ってやっているのだろうが、トコモンはテンションの低いコータの頭に飛び乗った。

「アウー！」

そして、出発進行とばかりに声を上げる。

どことなく小馬鹿にされているように感じるのは、コータの考え過ぎか。少しかだけコータは頭が痛くなった。

とはいえ、だ。

「行くか」

「アウアウー！」

いつまでもこうしている訳にもいかないだろう。先ほどのデジモンも近くにいるだろうし、何よりもドルゴラモンたちと合流しなければならぬ。

警戒を保ちつつ、コータたちは未来世界の探索へ歩き出したのだっ

た。

第三十話くアポイントメントく

D・C・2018 NEWデジタルワールド——スクルドターミナル——

そこは巨大な部屋だった。

空中投影スクリーンのパソコンらしき端末がいくつもあり、分割した街の様子をそれぞれ映し出したスクリーンが壁一面にあつて——まさに、街中を監視しているような部屋だった。

そして、その壁のスクリーンの中でも一番巨大なスクリーンに映し出される、影。

「何？ ウルドターミナルからの侵入者だと？」

その影に向かつて報告しているのは、コータたちを追い掛け回したあのデジモンだった。

「ハ、ハイ」

「ふむ。今更か」

「今度こそ排除シマスノデ、監視システムノ使用許可ヲ願イマス」

先ほど撒かれたこともあつて、何か処罰を受けると思っているのか、あのデジモンは少し震えている。

一方、影は少し考え込んだ後、「いい。捨て置け」とそう言った。

「ハッ？ 放置、デスカ？ シカシ……」

「分かっている。だが、これは好機だ。我々が侵入者共に何も出来ない」と民衆に思われぬ程度に、追いかけて回せ。だが、決して捕まえるな。放置しろ」

「……ナ、何故デスカ？」

その瞬間、部屋の中にいた同種のデジモンたちが、焦ったようにそわそわと落ち着かない様子を見せた。

まあ、上官の命令に疑問を問うなど、正気の沙汰ではない。上司如何によつては下手すれば罰則もありうるし、それこそ連帯責任を問われることがあるれば周りごと破滅だ。

それに気づいたのだろう。それをつい口走ってしまった報告中の者は真つ青な顔で、今にもぶつ倒れそうな様子を見せていた。

「聞かなかったことにしてやる」

「……！」

「この理想郷を穢がしかねない異分子。だが、異分子の行く場所など決まっている。くれぐれも目を離すな」

それだけを言うときスクリーンのチャンネルが変わり、そこに映っているものが影から街の光景へと変わる。

「……」

そんな中で、命が抜け出たとばかりに固まっている報告者がいたのだった。

同時刻、コータとトコモンは誰もいない街をひたすら歩いていた。

「どこに行ってもどこまで行っても街、街、街、街！」

「アウ〜」

「しかも誰もいない！ 気が狂いそうになる」

あれからコータたちは街を探索してみたのだが、相変わらず現地住民は誰一人として見当たらなかった。

景色は代わり映えのしないビル郡。確かにこの近未来感はなかなか楽しいが、どこまでも同じ光景が続くといっそ飽きるし気が狂いそうにもなる。

というか、ここまで同じだと何らかの規格で統一されているのだろう。

「自然の一つもないし！」

「アウ」

そう、完全に文明が自然を征服したとばかりに、木の一本どころか雑草の一本すらも見えない。環境問題とか大丈夫なんだろうかと思えるほどだが、近未来ということでは何とかなっているのだろう、おそらく。

「建物の中には入れないし！」

「アウ」

高いところから景色やこの街の全貌を見てみればいいと思ったのだが、それすらも出来なかった。

ビルの入口自体は現代にもある自動ドアだったのだが、何らかの認証システムがあるのか、単に電源が落ちているのか、コータたちを前にしても開く様子はなかった。

「ここ本当に未来世界のスクルドターミナルか？ 間違って別の世界に来ちゃったとかなないかな？」

「アウ〜？」

確かに未来的だが、この何とも言えない感じを前にコータはどこか違和感を覚えていた。しかし、それだけだ。どこに違和感があるのかわからない。

「うーん」

「アウアウ」

そうして、探索開始から数時間が経過した後のことだった。

「えっ」

「アウー？」

突如として街全体に響き渡る、音。機械的なメロディが大音量で鳴り響いたのだ。

「何だと思う？ 敵襲？ 異常事態？ それとも……？」

「アウアウ」

まあ、敵襲だの異常事態だのそういうのを知らせる音にしては多少軽快が過ぎる。では、一体何の音だというのか。

コータはトコモンを抱え、いつでも逃げ出せる準備をしつつ、周りを伺う。

「……」

「アウアウ」

「しっ。静かに！」

「アウー」

そして、音が止んだ。

すると――

「やっと終わったー！」

「いやあ、緊急事態による外出制限なんて久しぶりだねえ」

「ピピ。ナニガアツタンデシヨウカ」

「まあ、こうして外出の許可が出たってことは問題ないってことなんでしょう」

「さー、仕事仕事！」

「取引先に行かなきゃなー。あいつら仕事遅いけど、終わってるかなあ？ 今の時間に終わらせておいてくれるとありがたいけど、無理なんだろうなあ」

——出るわ出るわ、彼方此方のビルの中からデジモンたちが大量に。

一分もすれば、辺りは人間の世界の大都会レベルに人口密度が高くなり、デジモンたちで溢れかえった。しかも忙しいのか、あるいは他者には無関心なのか、彼らは人間であるコータには目もくれずに街を行き交っていた。

機械デジモンもいれば、生物デジモンもいて、大きさも小さきままだ。コータよりも小さなデジモンもいれば、コータの倍以上の大きなデジモンもいる。

特定の種や類似の種がいるということではなく、さまざまな種のデジモンたちがいた。

「アウアウ。アウアウ」

トコモンが吐き捨てるように、呟く。その顔は嫌いな食べ物を見た時のように、僅かな嫌悪感によって彩られていた。

「どうした？」コータがびつくりして聞くが、

「アウアウ」とトコモンは首を振って答えない。

まあ、聞いたところでコータではトコモンの言葉を理解することはできないのだが。

「……うーん、やっぱりなんかおかしいんだよなあ」

「アウ」

違和感がある。

「なあ」

とコータは何の気なしに身近にいた植物のような爬虫類型デジモンに話しかけた。コータも見たことのある、パルモンX抗体だ。

「何でしょうか？」

一方で、話しかけられたパルモンX抗体は、無表情に近い顔で対応してきた。

だが、コータたちはわかってしまった。その無表情は努めてされているだけで、その下には警戒と迷惑の感情があることに。

「あ、いや。ここってスクールドターミナルでいいんだよな？」

「……？ 当然でしょう」

何馬鹿なことを言っているのですか、とでも言いたいような顔だった。

まあ、そんな顔になるのも当然だろう。人間の世界で言えば、東京のど真ん中ここは日本ですか？ と聞くようなものだ。

しかし、まあ、それでもコータにとっては重要な質問だった。この違和感のある世界はやはりスクールドターミナル——未来世界で間違いないらしい。

「もういいですか？」

「あ、ああ、ごめん、ありがとう」

最後に迷惑そうな表情が出てきて、パルモンX抗体は雑踏の中に消えていった。

「アウア？」

トコモンがコータに言う。何となくだが、コータもトコモンの言うことがわかった。すなわち、これからどうするのか、という類の意味だ。

「ドルゴラモンたちを探そう。別れた場所が場所だから、ここにいるかどうかわからないけど」

「アウ」

どうするにせよ、コータとトコモンだけでは人数も力も明らかに足りない。もし荒事になった場合、確実に終わる。

早いうちに合流しておきたかった。

「ドルゴラモンはデカイ方だから、目立つと思うんだけど……」

「アウ〜」

「まあ、探そうか」

とりあえず道のど真ん中にいたからだろうが、邪魔という視線ばかり

り向けられることに辟易としたコータは道の隅へと行く。

「アウ！ アウアウ！」

「ん？」

トコモンが思いついたように声を出した。そして、その小さな前足である方向を指している。

その方向にあるのは――

「ビルか？」

「アウ」

――ビルだ。

そこでトコモンの言わんとしていることはコータにもわかった。先ほどまでは入れなかったが、デジモンたちが出入りできるようになった今ならば入れるのではないか、ということだ。

「じゃあ、言ってみるか」

「アウ」

街にあるビルは高さも外観もすべて同じだ。

だから、適当に目に付いた目の前のビルにコータたちは入った。

「ピピ。侵入者――！」

「……」

「……アウ」

そして、すぐさま中にいたデジモンたちに囲まれることになる。

歯車やドリルが組み合わさったデジモンが大半だが、中には帯電する球体に手足が生えたデジモンもいる。

「ちよつと待ってくれ！ オレたちは別に――」

「黙レ。ドコノ企業ノ手ノ者ダ」

「いや、別に企業とかそんなんじゃないって――」

「戯言ヲ」

「いや、だから――」

どれだけコータが言葉を尽くそうとも、わかってくれない。

というか、聞く耳を持っていないようだった。

「アウウウウウ！」

「お前笑うなよ！」

何がツボにはまったのか、トコモンはコータの腕の中で笑いまくって助けになりそうになかった。

まさに孤軍奮闘状態だ。これはやばいな、とコータは逃走を視野に入れた――

「待テ」

――その瞬間のことだった。

奥からやって来たのは、金属の球体に手足が生えたデジモン。完全体デジモンの、マメモンX抗体だ。

「マメモン社長!」

「ソレハ客人ダ。通セ」

「ピピ。ワカリマシタ」

マメモンX抗体の言葉に従って、ハグルモンX抗体たちやサンダーボールモンX抗体たちが引いていく。

何とか助かったようで、コータはホツとした安堵の息を吐いた。

「失礼シマシタ、過去カラノ旅人ヨ。私ハコノマメモン電磁社ノ代表取締役ヲシテオリマス、マメモンX抗体デス」

「取締役、つてもしかして社長?!」

「……マア、似タヨウナモノデスガ。ヨロシクお願いシマス」

「あつ、ご丁寧にどうも。オレはコータ、で」

「アウ!」

「こっちはトコモンです」

握手、と差し出されたマメモンX抗体の手をコータとトコモンは受け取った。

そして、彼らはそのままマメモンX抗体に「ドウゾ、コチラノ応接間へ」と案内される。

「へえ」

「アウー」

応接間はなかなか豪華だった。座り心地の良いソファーに、何か分からないが高そうな装飾や家具があつて、気合が入って作られた部屋だというのが分かる。

「先ホドハ部下ガ手荒ナコトヲ。誠ニ申シ訳アリマセンデシタ」

「いやっ、頭を下げなくとも——」

「シカシ、貴方方モ悪イノデスヨ。アポイントメントモ無シニ立ち入ルナド、警備隊ニ突キ出サレテモ文句ハ言エマセン」
「うッ」

どうやら、この未来都市は現代人間世界以上にいろいろと厳しいらしい。

その辺まで未来的なのか、とコータは内心で呆れとも感心ともつかない息を漏らした。

「何故、我社ニ？」

「あ、いや、ちよつと高いところから見たいな〜って思いました」

「……」

「ごめんなさい」

どこの何ともわからぬ施設にそんな理由で立ち入るなど、軽率以外の何者でもない。

呆れたような目で見てくる偉い人に、コータは平謝りするしかなかった。まあ、企業を騒がせ仕事を止めさせたのだから、謝るのは当然なのだが。

「マアイイデシヨウ。私ガ何カヲ言ウノハ間違イデスシ」

「う、ありがとうございます」

「イエイエ。礼ヲ言ワレルマデモアリマセン」

とりあえず許してくれたらしい。

怒られたり責任追及されたりすることもなく、厄介事にもならなかったことにコータは安堵の息を漏らした。

「アウ」

ただ、トコモンが小さく呟いて——

「通報ヲ受ケマシタ。捕縛ヲ開始シマス」

「……そういうことかあああああ！」

——その瞬間、昨日の宇宙人っぽいデジモンがこの部屋に踏み込んできたのだった。

第三十一話　都市の在り方

それはまるで、映画のワンシーンのようだった。

放たれた光線を華麗に——あくまでコータの主観だが——躲したコータが、光線によって傷ついた壁をぶち抜き逃走を開始する。

「アウアウ」

「いや、呆れてないでナビゲート頼むわ！」

「アウ？　アーウ」

「だから、早く！」

そんなこんなで、またダツシユ&ダツシユ。

まあ、この会社のデジモンたちが参戦してこないのは幸運だった。この街の警備隊であろう、背後から追いかけてくるあの宇宙人っぽいデジモンに任せようというのだろう。

コータはそのまま駆け抜け、ビルから飛び出した。

「自動ドアがロックされてなくて助かった——！」

「アウアウ」

そうして、十数分後。コータは何とか逃げ切れたのだった。

「くそう、まさか通報されるなんて。これじゃあ下手に大通りを歩けないぞ」

「アウアウ、アウア」

「こいつ捨ててきてー」

仕方ないね、頑張つて。そう言いたいかのようにアウアウと笑っているトコモンの姿に、コータは腹が立つ。

まあ、本当に捨てていける訳もないのだが、戦闘に巻き込まれた今までも何だかんだと無傷で合流している辺り、仮に捨てたところで元気にやってけそうである。

それがコータにとってはおのこと腹が立つのであるが。

「さて、どうするかなあ」

路地裏に蹲り、疲れを癒しながら、コータは考える。

どのみちここでジツとしている訳にもいかないのが辛いところである。結局、動くしかないのだ。

「慎重に行くしかないか。オレも覚えておくけど、トコモンも路地裏の道を覚えておいてくれ」

「ウゝ?」

「いや、頼むから」

「アウ」

まあ、先ほどまでのコータは軽率に過ぎた。彼はそこを反省して、路地裏からこつそりと表通りを観察する計画に切り替える。

とはいえ、路地裏から表通りを見ていけば、目立つほどではないが全く見えないほどでもない。表通りを歩き交うデジモンたちの中には、コータを視界に収めるものもいた。

「……相変わらずデジモンが多いな」

「アウ」

それでも通報しないのは、視界の端に映った誰かしらなどに興味を割くことはないからだろうか。

この調子なら直接会話したり相対したりしなければ意外といけるかもしれない、とコータは脳内にメモする。

まあ、それはそれとして周囲を観察を続ける。

忙しそうに街を歩き交うデジモンたち。

「……?」

だが、やはりどこか違和感がある。

「……」

どこに違和感があるのか、必死に見定めようとする。

「……ダメだ」

まあ、結局、見つけれなかったのだが。

「ア? アウアウ」

「どうかしたのか?」

「アウアウ」

トコモンが何かに気付いた。後ろを見るとばかりに、前足を振る。

言われた通り、コータは後ろを振り向いた。そこには日光が届かないジメジメとした路地裏が相変わらず広がっていて――

「ピツ。コチラZ―102地区、対象発見」

——その物陰から、あの宇宙人っぽいデジモンが現れた。
「つくー！」

すぐさまコータは駆け出した。

路地裏の通りは塞がれているため、表通りとか関係なく駆けていく。地味にデジモンたちの多さが逃走の上で邪魔だった。

「つていうか、もつとちゃんと喋ってくれよ！」

「アウアウ」言ったよ、と言いたいのだろう。どうしてもよさそうにトコモンは言う。

「もつと危機感を抱かせるようなテンションで喋ってくれって言うてるんだ！」

「アウー。アウアウ」

やる気なさそうにアウアウと言うトコモンには、反省の色は見えない。というか、その口は軽く緩んでいて、今のコータが逃げ回っている様子を見て楽しんでるのが分かる。

どう見ても確信犯だった。

「むっ。人混みなら光線は飛んでこない！ しめた！」

「アウアアア」

警備の者が住民に対して攻撃するわけにはいかないのだろう、その致命的な弱点を把握できて、コータは希望の光が見えた。

一方でトコモンはつまらないとばかりに不満を露わにしていたのだが。

「うおおおおおおおー！」

そうして、今回は数分程度で逃げ切ることができたのだった。

そんなこんなで、またも路地裏で息を整えているコータ。

「くそ、しつこい。今日三回目だぞ」

「アウ」

「……まさか、監視カメラとかで監視されてるとかないよな？」

近未来都市だ。それくらい有り得る、とコータは肩を震わせる。辺りを見渡す。だが、監視カメラのようなものは彼には見つけられなかった。

まあ、近未来的な監視カメラがどのような形をしているかわからない以上、見つけられるはずもないのだが。

「でも、監視されてるとなるとお手上げだぞ」

今が逃げられているからといって、いつまでも逃げ切れるとは限らない。

なぜ追われているのか、どうやったら安全を得られるのか。無事に生きるためにも、コータはその辺りを知らなければならなかった。

この謎に満ちた未来世界、その情報の早期獲得の重要性が増したのだ。

「動くに動けない。でも、動かないといけないんだよな」

「アウ〜」

「ドルゴラモンがいなくて良かったのか悪かったのか。アイツ目立つからなあ。でかいし」

「アウー」

トコモンと話していないように話しながら、コータは辺りをもう一度見渡す。

人混みの中にあの宇宙人っぽいデジモンの影はない。

「人混みに紛れて行こう。木を隠すのなら森の中、人を隠すのなら人混みの中だ」

「アウ」

まあ、その論理でいくところにはコータが隠れられる森はどこにもないのだが。

何はともあれ、意を決してコータたちが表通りに出た、その瞬間のことだった。

「これは……——」

「アウ？」

また、街中に音が鳴り響いた。しかも、先ほどの音とはまた違う音だ。

音が違うということは、何らかの意味があるのだろう。どんな意味があるのだろうか。そんなことをコータが考えていると、気づけば街中のデジモンたちが立ち止まっていた。

「どうしたんだ？」

「……アウ」

こっそりと観察すれば、街中のデジモンたちは上を——正確に言えば、空中に投影されているスクリーンを見ている。

さらに、心なしか雰囲気は暗い。緊迫した様子がそこにあった。中には震えている者もいる。

一体何だというのか。コータはトコモンを抱え、いつでも逃げられるように準備をしながら、固唾を吞んで事を見守った。

そして——

——『皆様、今月の情報をお伝えします』

——それは、空中スクリーンから聞こえてきた。

今までは当たり障りのない光景しか移していなかったスクリーンが、突如として何らかの思惑があるだろう、円グラフや折れ線グラフなどのデータ推移がわかる映像が映し出されたのだ。

見れば折れ線グラフは右肩上がりになっていて、円グラフも八割ほどが同一の項目によって埋まっている。

一見すると、何のデータかはわからない。が、その答えはすぐにアウンスされることになる。

——『現在、スクルドターミナルのデジモンのX抗体化は八割達成。同時に従来種のデジモンは全体の二割弱となっております』

「それは——」

それは、驚くべきことだった。

現在の世界でも過去の世界でも、数という面においてX抗体デジモンは従来種に比べると少数だった。もちろん、希少というほどではないが、それでも比較的少なかった。

それはX抗体獲得に必要な、“死に面しても生存を望む強い本能”を發揮できる者が総数に比べて少ないため、生まれるX抗体の数が少ないからだ。

自発的に発現させられないから、他から奪おうとする者が多かった。だから、総数に対するX抗体デジモンの割合は増えなかった。

なのに、その数の差がこの未来世界では逆転しているというのだ。

——『これは、皆様の弛まぬ努力の結果であると、天は述べており……』

そこで、コータはこの世界に来てから自分が覚えていた違和感の正体に気がついた。

いないのだ。通常種のデジモンがどこにも。過去世界にも現在世界にもいた者たちが、どこにもいなかったのだ。

「これは……さすがは、未来っというだけあるっということかな？」
「アウ」

白々しい言葉だと、コータはわかっていた。

X―進化は闘争本能とはまた別の、生存本能の進化だ。それが起こるには、この未来世界は社会的過ぎる。都市がある。企業がある。住民が行き交う。

そんな社会的世界で、誰がどうやったら生きるためのX―進化できるといえるのか。いや、出来るのかもしれないが、それにしても抗体持ちが総数の八割などという結果になりうるのか。

コータにはその辺が理解できなかつた。もしかしたら抗体持ちが増えた結果、戦闘自体がなくなつてこのような社会になつたというのかもしれないが……。

「……いや。増えたんじゃなくて、減つたのか？」

あるいはX抗体を持つものが抗体を持たない者を狩つた結果が、この世界なのか。

情報が少な過ぎる。こういう面での経験の少ないコータがあればこれと推測するには、証拠も情報も足りなかつた。

——『では、次に今回の栄誉賞受賞地区を発表します』

コータが思考を巡らせる一方で、スクリーンでは次の報告へと進んでいった。

「栄誉賞受賞者？」

その名前から察するに、何かしらの行いをした者に賞が与えられるということなのだろうが。

——『ランダム当選の結果、今回の受賞地区はZ―100地区に決まりました！』

その瞬間、

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおー！」

歓声。

どうやら、コータたちのいるこの場所がZ-100地区らしく、コータたちの周囲にいたデジモンたちはこぞって声を上げた。

いや、違う。

「トコモン」

「アウ？」

「逃げるぞ——！」

これは、悲鳴だ。

何かマズイことが起こる。本能的にそれを理解したコータは、悲しみに暮れるデジモンたちを押し退けて逃走を開始する。

その瞬間のことだった。

空から降ってくる。破壊のために作り出された、破壊のための無慈悲な機械が——ミサイルが、降り注ぐ。

「っ——！」

「アウ！」

咄嗟に、コータは建物を盾にする。

幸いにして、このミサイル爆撃は特定の誰かを対象としたものではなかったらしい。数秒もすれば、収まった。コータたちは、何とか助かった。

辺りを見渡せば、ミサイルを受けて大半は死んでいたが、それでも生きている者はいた。

「ううううううう——」

「いてえ、いてえよっ」

「なんだって、ちくしよう」

「どうして俺たちなんだよお」

啜り泣くような、理不尽を呪う声が聞こえる。だが、そこは諦めの色しかなかった。

X抗体デジモンが、生存をこうも簡単に諦めるなんて。それが、コータには信じられなかった。

「アウー！」

トコモモンがコータに聞こえるように言った。

コータが言われて、上を見る。

そこには、いた。

「まだ生き残っている者がいますね。では、死んでください！」

そこにいたのは、天からの使いだった。

蜂のような、デジモンたち。百ではきかない、空を埋め尽くすほどのおびただしい数だった。

生物的な蜂デジモンが大半で、四分の一くらいがその尾にレーザー砲を持つ機械蜂デジモンだった。そしてリーダーなのだろう、重兵装を装備した機械蜂デジモンが一匹だけいた。

「これは荣誉なこと。貴方たちの犠牲がこの世界を盤石なものとするのです。ウルドにもベルサンデイにもない発展と栄光をこのスクルドターミナルに与えるのです」

機械蜂デジモンたちが、その尾から放つ死のレーザーによって生き残ったデジモンたちを殺していく。生き残ったデジモンたちは、やはり諦めているのだろう、抵抗もなく死んでいく。

そして、その死骸から必要なものを剥ぎ取っているのか、機械蜂よりも小さく生物的な蜂デジモンたちがせつせと何かを運んで空の向こうへと消えていく。

「こちらにも生存者が！ 別働隊から報告のあった、ウルドからの侵入者です！」

どこからか声が上がった。

見れば、運搬作業をする蜂デジモンの一匹がコータを見つめている。

「やべっ」

「アウー」

下手に動けば見つかるから動けなかったのだが、下手に動かなくても見つかってしまったコータたちは、もうどうすることもできない。

「よくやった、ファンビーモン。運搬に戻れ。あとは実働隊のワस्पモン部隊に任せておけ」

リーダーなのだろう、重装備の機械デジモンが運搬役のデジモンに言う。

すると、ファンビーモンは頷いて去っていき、代わりに生存者を殺して回っている、ワस्पモンと呼ばれた機械蜂たちがやって来る。

「トコモン、戦えるか?」

「アウ、アウツアア〜」

何と言ったのかはわからないが、それは無理だと言ったのだろう。

まあ、コータとしても期待していない。

絶体絶命のこの状況下で、コータは逃走ルートを探す――

「こつちだよ!」

――聞こえてきたのはこの場にいる誰でもない声で。

瞬間、辺が煙に包まれる。濃い煙だ。すぐ目の前も見えない。

「む。我々の探知能力さえも無力化する煙幕だと――」

あのリーダーデジモンが、納得したように呟いて。

その時、コータは自分の手に糸が絡みついたのを感じた。そして、その糸が引っ張られる。どうやら、その方向に来いということらしい。

「……!」

誰だか知らないがこの状況から脱せられるのなら、とコータはその提案に乗る。

そうして、この場から逃げることに数分。煙の晴れた場所に来て、コータとトコモンは自分たちを助けてくれたデジモンと向かい合っていた。

「やあ、危なかったね」

そのデジモンは成長期なのだろう、緑色のイモムシのようなデジモンで――

「僕はワームモン。レジスタンスのメンバーだ」

――この未来世界においての、レジスタンスだった。

第三十二話くレジスタンスく

何とか危機を脱せられたコータたち。

彼らは今、情報収集のためにもワームモンに連れられてレジスタンスのアジトに向かっていた、のだが。

「臭い」

「アウ」

とても、臭い。

レジスタンスのアジトというだけあって、隠されているらしい。それはまあいい。隠されている場所に行くにあたって、普通は通らない場所を通っている。それもまあいい。

だが、それが地下排水路で、あらゆる生活排水の詰め合わせみたいなものが流れている側を通るなんて、それはさすがに良くはない。

コータとトコモンは今にも鼻が曲がりそうだった。

「僕は慣れてるけど、確かに酷い臭いだよね」とワームモンが笑いながら言う。

「慣れるんだこれ……」

慣れたくはない。コータとトコモンは同じように思った。

「しっかし、すごいよな」嫌なものを見る目で、時折汚物さえ流れることさえある排水路を眺めたコータは、感心した風に言う。

「……？ 何が？」

「だって、大して地下を流れているわけでもないだろう？」

コータたちはマンホールからここに降りてきた。だが、その距離は二十数メートルあるかないかというくらいで、つまりここは地下二十数メートルの場所である。

地上から遠いというほどでもないのに、これほどの異臭が地上まで届いていないのだ。

「普通、こんだけ臭ければ地上まで臭いが届きそうなものだけだな」

「ああ、それ。地上までの地面には臭いが吸収されるプログラムがセットされてるからね。届くはずもないよ」

「へー」

「ま、これくらいは出来なきや未来を司る世界とは言えないってことだろうね。反吐が出るけど」

何を思ったのか、そう言ったワームモンの顔はどこか厳しいものだった。

そうして、地下排水路に行くこと数時間。

地下の代わり映えしない、まあ、この世界では地上でも代わり映えはしないだろうが、とにかく閉鎖空間の中を歩き続けてしばらく経った頃。

時間間隔が薄くなったためにどれだけ歩いたかはわからないが、コータたちは目的地に到着した。

地下排水が流れ込む、滝のようになっていている場所があつて、その隅に扉があつたのだ。

「汚い滝だな」

「アウ〜」

「あ、あんまり近づかない方がいいよ。飛沫とか、たまにいろいろと飛んでくるから」

ワームモンの注意が聞こえた瞬間に、コータとトコモンは素早い動きで排水滝から距離をとった。まあ、汚い飛沫はもうかかってしまったのだろうか。

何はともあれ、ワームモンが開けた扉に入る。

「……またかよー！」

「アウアウ」

その先にあつたのは、扉だった。

「ああ、これ含めてあと四つあるよ」

「なんでっ!?!」

釈然としないものを感じながらも、コータたちは次から次へと扉を潜っていく。

そして、最後の扉の前、そこには――

「はっ！ お疲れ様です！」

「お疲れ様です！」

——そこには、門番なのだろう二匹の黄色い汚物。
スカモンと呼ばれる、ウンコに手足が生えた成熟期デジモンであ
る。

「……」

「……」

コータとトコモンは顔を見合わせて溜息を吐きたくなった。吐か
なかったが。

「む、そちらの方は——」

「あ、仲間候補だよ」

「なるほど！ よろしくお願いしますー！」

スカモンたちに手を差し出されて、コータたちは握手をした。

その際、咄嗟に頬を引き皺らせないように努力をしたのはコータ
だった。

まあ、多少は顔に出ていたのだが、もう一方のトコモンが思いつき
り嫌を顔に出していたことに比べれば、些細なことだろう。

「ふむふむ、良い匂いを漂わせている方たちですな。是非仲良くした
いですー！」

「……え」

「……アウ？」

何を言われているのかわからなくて、コータとトコモンは呆然とし
た。

「この熟成した糞尿の香り……なかなかのオブチストですね！」

「オブチスト？」

「またまたあ、隠さなくてもわかっておりますよ。汚物や排水の匂い
をこよなく愛する者たち！ 仲間が出来て嬉しいですよ！」

もしか、レジスタンスとはそのオブチストとやらの集まりなのだろ
うか。もしか、清潔さに対するレジスタンスなのだろうか。

コータとトコモンは早くもワームモンについて来たことを後悔し
始めている。

「っていうか、もしかしてオレ臭い？」

「アウ——」

散々と排水路を臭い臭いと言っていたが、まさか自分たちも訳のわからん汚物に好かれる臭いを放っていたとは。

コータとトコモンは愕然とするしかなかった。

場所が場所であれば、そのまま崩れ落ちそうだった。

「いや、排水路の臭いが移っただけだから。あと、レジスタンスはそんな臭いフェチ集団の集まりじゃないからね！」

そんなコータたちに、ワームモンが焦ったように弁解した。

まあ、レジスタンスの尊厳のために、そして自分が汚物好きの一員と思われなかったためにも、必死だったのだろう。

「えー?」

「アウー?」

何はともあれ、誤解も一応は解けて、コータたちはようやくアジトの中に入る。

アジトはそこそこ小さかった。

「アウーアウアウ」

こんなのがアジトかよと言いたげなトコモンが嘲笑を浮かべるくらいには、狭かった。

「ごめんね、狭くて。元々は排水路のシステム管理室でね。オートメーション化されてもう使われなくなってたから、レジスタンスが再利用させてもらってるんだ」

「へえー」

「機械は弄らないでね。未だ生きている部分あるから。それ以外ならどこでもいいから、座ってゆっくりしてよ」

辺りを見渡せば、確かにスクリーンや操作パネルなどのさまざまな機械が置いてあった。

しかし、そのどれもがそこそこ大きい。空中投影スクリーンなんてものがあつた地上と比べて、一昔前感を抱かされる。

「それで、レジスタンスって言ってたけど?」

「ああ、うん。そうだよ。今はみんな出払ってるけどね」

「何のレジスタンスなんだ? まさか本当に清潔な世界に対するレジスタンスとは、言わないよな?」

先ほどのウンコ共スカモンたちのこともあって、冗談混じりにコータは聞いた。すると、ワームモンも笑いながら、冗談混じりに「まあ、それでも間違っではないかな」と言う。

「今のオレたちはこの未来世界がわからないんだ。教えて欲しい。デジモンの世界は生存闘争の世界だと思ってた。でも、ここは——」
「そうだね。順を追って話そうか。XプログラムやX抗体のことは知ってるよね？」

「もちろん」

何を当たり前のことを、とコータが領けば、ワームモンは「それはよかった。そこを知らないなんて言われると面倒だからね」と笑う。どうやら、前提条件を確認しておきたかっただけらしい。

「ベルサンデイやウルドではXプログラムの蔓延とX抗体の獲得について、同じ回答を出した。すなわち奪い合い、過酷なまでの生存闘争だ」

X抗体を得なければ生きられない。それを得るために得た者から奪う。それを奪われそうになるから、奪おうとしたものを倒す。

そんなことの繰り返しだが、過酷な弱肉強食の世界を作り出した。

その流れを良しとしたのは、仕方ないとはいえ生きる為に必死だったデジモンたちだ。

その弱肉強食の世界をこのXの事態の回答としたのは、現在や過去の世界に生きるデジモンたちだ。

自分が生きるのに必死だった彼らでは、それ以外の答えを見つけられなかったのだ。

だが、しかし。

「だけどね、このスクールでは別の回答を出した」

この未来の世界では、Xの事態に対して過去や現在とは別の答えを見つけ出した。

それはある意味ではとても利口な、別の意味ではとても愚かな答えであるにも関わらず、この世界に生きる者たちはそれを良しとした。

「この住人はね、捨てたんだよ。デジモンとしての在り方——生命の誇りを」

デジモンは、種によって向き不向きはあるとはいえ、戦う生命体だ。世界がこうなる前、Xプログラムが蔓延する前からさえ、少なからず生存闘争の風潮はあった。

デジモンの生には、少なからず戦いというものが組み込まれているのだ。戦い、というものはデジモンにとって重要なものであったのだ。

だが、ここに生きる彼らは生き延びるために、それを放棄した。デジモンは戦う生命体であると定義づけるのならば、彼らはデジモンであることを捨てたとさえ言えるかもしれない。

「Xプログラムの蔓延に対して、徹底的な管理社会を築いた。X抗体を獲得した者たちの中で反社会的な考えのデジモンを存在を社会ぐるみで討伐し、そのX抗体を捕獲、培養し、社会全体に配布する」

「培養？ 配布？ ……X抗体を？」
「そう。本物には及ばなくとも、少なくとも当面の命の危機は避けられる」

未来の住人たちは戦うことを、抗うことを止めた。管理システムの下、公正と公平を求めたのだ。

その結果が、先ほどの放送である。ランダムで選ばれた住人を削除し、その個体が持っていた培養X抗体や素材^{データ}を再び社会に還元する。そうすることで、社会全体の秩序と安寧を維持するのだ。

誰もが与えられた役割を全うし、社会の歯車となる、ここはそれだけの世界。

自由はないが、平等はある、世界。

「職業から日々の食事、友人や仲間まで全部決められる」

「それで生きているって言えるのか？」

「言えないよ。この未来世界は死に直面した時、死にたくないと思う余りに生きることが止めたんだ。生きられないが、死なない。そんな世界を作ったんだ」

この未来世界にもX抗体を自然に獲得できるような、いわゆる私の強いデジモンもいたのだろう。だが、そんなデジモンはこの社会が作られた時点で、この社会には必要ないと淘汰されている。

だから、今の未来世界はこの社会構造を何とも思わないデジモンで溢れている。

「皮肉な話だよ。過酷な世界に適應するために生まれた強い者は、その世界に適應した社会では生き残れない。生きようと望む強い者が生きられない、弱い者がみんな生きられる社会になったんだ」

「だから、ここでもレジスタンスが出来たんだな」

「そうだよ。僕たちレジスタンスは、そんな社会に反旗を翻したデジモンたちの集まりさ」

そう言ったワームモンは、しかし、どこか力なく笑う。

アジトと呼ばれるこの場所の広さを見れば、何となくだがその理由はコータにもわかった。

「僕たちはこの社会を壊す。ウルドやベルサンデイのようにデジモンが生きる世界を、作り出す。だからこそ、君たちにはレジスタンスに入って欲しい。君たちみたいな者はもうこの世界にはいないから。君たちみたいな者にこそ、力を貸して欲しいんだ！」

ワームモンは懇願する。

一方で、コータは迷った。トコモンはどうでも良さげに欠伸をしているが。

確かに、この社会はコータとしてはごめんこうむる社会だ。だが、しかし、それを壊したいと肩入れするほどにこの社会には思い入れがないわけで。

だからこそ、数瞬迷ったコータが再び口を開いて――

「た、大変です！」

――その瞬間のことだった。

扉を蹴破るようにやって来たのは、緑色のナメクジのようなデジモンだ。また汚物系である。

一体、レジスタンスの人員はどうなっているのか。少ししか話を聞いていないコータたちには未だ理解しきれない真面目な思想や理想があるのだろうか、本人たちは真面目であってもビジュアルが全力でふざけている。

コータは微妙な気分になった。

しかし、

「現在、Z―地区で戦闘発生！ 未確認の獣竜型X抗体デジモンが奴らと戦ってる模様！」

ヌメモンの報告は、彼のそんな気分を跡形もなく吹き飛ばしたのだった。

第三十三話く個か全かく

数時間前まで遡る。コータたちが不法侵入で通報されていた頃のことだ。

その時、街を歩くのは一匹の犬。地獄の猛犬のような姿のそのデジモンは、ケルベロモンX抗体だ。デジモンたちが行き交う中、彼が目指すのは自分の住処。

企業ビルとは別の、居住ビルの一階の部分だ。まあ、企業のあるビルも居住用のビルも外観自体は変わらないのだが、住んでいる者たちにとっては見分けがついているらしい。彼は迷うことなく自分の部屋があるビルに入ってしまった。

「噂になってたぜ」

部屋に入るや否や、彼は独り言のように呟く。

この部屋は一人用の部屋であるため、普段のこの時間帯では家主の彼以外がいるはずがない――

「なるほどのう。やっぱりあやつらもここにおったか」

――はずなのだが。

ケルベロモンX抗体の声に応じる声があった。

「無事だといいいけど……」

「無事じゃろ。そう簡単にくたばるものか。それにいざという時には……まあ、アテにはならんがトコモンもおるからの」

しかも、二つも。

「ずいぶんと信頼してんだな」ケルベロモンX抗体がそう聞くと、「当然だ！」と自信満々な声が飛んできた。

だからだろう。声の主を羨ましそうに見ながらも、ケルベロモンX抗体はそんな内心を認めるのが癪で、ジト目で言うのだ。

「ところで、デカブツもつと気を遣え。狭いんだよ。部屋壊すな。縮め」

そう言った彼の視線の先には、部屋の隅に押しやられているドルゴラモンの姿があった。

というか、巨体のドルゴラモンが、ケルベロモンX抗体用の部屋に

無理矢理に入っているため、部屋の密度が凄いことになっている。

ドルゴラモンは体育座りだった。その状態で丸まって、それでようやく天井に翼がぶち当たる程度の広さしかないのが、この部屋だ。一体どうやって部屋に入ったというのか。

「無茶言うな！ 俺だって好きで窮屈な思いをしてない！」

「テメエの身体、ただでさえ剣みてえに尖ってる部分が多いんだから細心の注意を払え。賃貸なんだぞここ」

「ちようど見えなくなつとるが、あやつの翼で天井に傷が入つとるのは言わない方がいいかのう……？」

ポツリと呟いたのは、ボコモンだ。

このケルベロモンX抗体の部屋に、ドルゴラモンたち二人は招かれていた。いや、招かれていたというよりは、匿われていたと言うべきか。

数時間前、この未来世界で目が覚めた彼らは近くにコータたちがいないことに気づいた。気づいて、探すためにも行動し始めたところで、彼らもまたあの宇宙人っぽいデジモンに追われたのである。まあ、振り返りにしたのだが。

その際、彼ら——というかドルゴラモン——が壊した建物の中にいたのが、ケルベロモンX抗体だ。どうやら食事中だったらしい彼は、天地がひっくり返ったかのように驚いていた。

で、外出禁止令を破った扱いにされてしまった彼を巻き込む感じで逃走を始めたドルゴラモンたちは、彼の部屋にお邪魔したのである。

「今更だけど、大丈夫か？」

「大丈夫じゃねえよ！ テメエらささいなきやあよお。はあ」

ケルベロモンX抗体はさめぎめと泣いていた。

まあ、それも仕方のない話だろう。彼としては、外出できないからとレストランで優雅に食事をしていたらテロリストが入ってきた上、その仲間と間違われて一緒に指名手配されたようなものだ。

誰だってそんな事態になったのなら、どうしてこうなつたと頭を抱えたくなるだろう。

「というかお前さん、自分の部屋に戻って来て大丈夫じゃったんか？」

「大丈夫じゃねえな。テメエらが追っ手を全員のしちまったとはいえ、バッチリ監視カメラに見られてるだろうしな」

「え。監視?! じゃあ、こんな部屋で隠れている暇はないじゃ——!」
ドルゴラモンが慌てたように動く。メキメキと音が鳴って、天井と床が僅かに破れた。

ケルベロモンX抗体は悟った顔で泣いた。

「隠れたいって言ってテメエらが勝手に来たんだろうが!」

ケルベロモンX抗体はヤケクソ気味に叫ぶ。

ちなみに言うと、「とりあえず隠れて情報収集した方がいいのう。ドルゴラモンは身体が多いから目立つし」と言ったボコモンが諸悪の根源である。

「ま、しばらくは来ねえだろうよ」

「なんで?」

「今月の時間だ」

「……?」

何を言っているのかわからない、とばかりにドルゴラモンが首を傾げる。ミシミシと部屋の壁から変な音がした。

ケルベロモンX抗体がドルゴラモンを睨む。ドルゴラモンは縮こまった。あまり意味はないが。

「毎月あるんだよ。榮譽受賞地区つてのがね」

「へー。榮譽受賞者かあ。なんか良いもんもらえんの? そういうのがあるのはさすがスクールドターミナルって感じなんだなあ」

「へえ、ウルドやベルサンデイにはないのか。変わってんなあ」

ドルゴラモンの反応に対して心底不思議そうにしながら、ケルベロモンX抗体は空中投影スクリーンを展開する。

「いやいやこつちが変わってるんだって!」

一方で、その発言が信じられないドルゴラモンは感情の勢いのままに腕を動かした。大きな音が出て、砂埃が天井からバラバラと落ちてくる。

もはや何も気にしないとばかりに、ケルベロモンX抗体はスクリーンを見つめた。

——『では、次に今回の栄誉賞受賞地区を発表します』
そして、スクリーンから聞こえてくる音声。

——『ランダム当選の結果、今回の受賞地区はZ—100地区に決まりました！』

それが聞こえてきた瞬間、ケルベロモンX抗体の表情が消えた。信じられないものを見たような、無表情。やがてその無にとつて変わって、諦めの表情が彼の顔を満たしていった。

「そっか。いよいよ俺達の番ってことか」静かに目を閉じて、言った。
受賞地区とは一体何なのか、未だそれを知らないドルゴラモンとボコモンは首を傾げる。だが、すぐにそんなことはどうでもよくなった。

一番初めにそれに気づいたのは、ドルゴラモンだった。さすがの経験というべきか、相変わらずの本能というべきか。

「っ、ボコモン！ ケルベロモン！」
ともかく、それに気づいたドルゴラモンはすぐに行動を開始したのだ。

部屋が壊れることにも気にせず、ボコモンとケルベロモンを掴んで自分の腹下に投げ入れる。すぐさま腕を振り回す。年月を重ねた大樹のような太い腕が勢いよく振り回され、外へと繋がる大穴が部屋に開けられる。

だが、遅かった。

出口はあっても、自分だけならともかくとして、部屋の全員がその一瞬で脱出することは不可能だ。それに気づいたドルゴラモンは蹲るようにしてボコモンたちを庇う。

「静かに！」

そしてその瞬間、世界が揺れた。

雷が落ちたと錯覚するかのような、大音量。地震が起きたとばかりの、衝撃。

建物がそれに耐えられなかったのか、崩壊する。狭い部屋の中にいたドルゴラモンたちは、その崩落に巻き込まれた。

だが、ドルゴラモンはこの程度で死ぬほど柔くはない。

「おらあつー！」

気合と共に、ドルゴラモンは瓦礫を吹き飛ばす。幸いにして、雑な庇われ方だったボコモンたちも無事だった。

そして、彼らはそれを見る。

「――！」

「これは……」

ワスプモンたちがデジモンたちを殺して回っている。

ファンビーモンたちが殺されたデジモンたちを上手いこと解体して、^{データ}素材をどこかに運んでいる。

そんな光景を、彼らは見た。

「なんで……！」

だからこそ、ドルゴラモンは信じられない。

無抵抗で殺されているデジモンたちが。

「別におかしなことじゃねえだろ」

そんなドルゴラモンに言うのは、ケルベロモンX抗体だ。

「これがスクールドターミナルの社会だ。これが、俺達だ。何もおかしいことはねえ。誰かの荣誉ある献身のおかげで俺達は生きている。今度は俺達の番になった。それだけの話だろ」

「っ、お前たちはそれでいいのか！」

「良くはねえ。けど、仕方ねえ。今更俺達だけ嫌だと言えねえよ。皆そう思ってるんだ」

ケルベロモンX抗体は笑って、ドルゴラモンの腹下から這い出た。

そして、歩いていく。今日の前にある世界を刻み込むように、目をしっかりと開いて歩いていく。最後に、ドルゴラモンとボコモンに振り返った。

「そっちは俺達をわかってるみたいじゃねえか」

「……」

言われて、ドルゴラモンがボコモンを見れば、苦悶の表情ながらも何も言わないボコモンがいた。ああ、ボコモンはわかっているのだ。

誰かが生きるために誰かが犠牲になる――そんな世界の道理を公平かつ公正に敷いたこの社会の在り方は、限りなく正解の一つに近い

ものであることに。

だから、ボコモンは何も言えない。感情はともかく、理性ではこの在り方を認めているから。

「だから、俺達はここまでだ。だから、俺もここまでだ」

その時、そう言ったケルベロモンX抗体を光が貫いた。

太いレーザー光線。それは「ベアバスター」と呼ばれる、ワस्पモンの技だ。

「っ！」

ドルゴラモンが見れば、そこには一匹のワस्पモンがいた。おそらく、格上^{完全体}のケルベロモンX抗体を殺すために、エネルギーを極限まで貯めていたのだろう。極限まで貯めたエネルギーを一気に放出したせい、少し蛇行飛行していた。

即座に、ドルゴラモンはその一匹を叩き潰す。だが、そのせいで他にも気づかれた。

「つく、一気に来るぞいー！」

ボコモンの焦った声。

咄嗟にドルゴラモンはケルベロモンX抗体を引つ掴んで、ボコモンを肩に乗せ、逃走を開始する。

ケルベロモンX抗体はぐったりとしていた。今にも死にそうだが、傷の深さも大概だが、

「ほら、さっさと捨てろよ。下ろせよ。ファンビーモン部隊に解体されなくなっちまうだろ。何のために死ぬと思ってるんだ」

しかし、彼に生きる意志がないことが問題だった。

生きる意志のない者は弱っていく。それは当然のことだ。現に、ケルベロモンX抗体はどんどん弱っていつていた。ドルゴラモンが同じくらいの傷を受けても、ここまで弱らないだろうに。

「お前はこんなところで死んでいいのか！ 生きていだよ。生きていたいだよ。生きていって言え！」

言うなれば、価値観が違うのだ。

だが、ドルゴラモンは、自分の生の価値観を信じている。だからこそ、ケルベロモンX抗体のそれを否定したくて、必死になって彼を助

けようとしていた。

だが、無駄だ。価値観はそう簡単には変わらない。

「言わねえ。死んでいいに決まってる。死が社会を生かす。個を捨て全に殉じる。それを良しとする。それが俺達だ」

だからこそ、そんなドルゴラモンを嘲笑うように、ケルベロモンX抗体はニヤリと笑う。

「でも、テメエらは違うんだろ？ そっちは俺達とは違って……あれ、何て言うのかなあ……いや、ま、どうでもいいか」

そうして、ケルベロモンX抗体は死んでいく。

結局、彼はドルゴラモンたちと出会ってから、ずっとその表情のどこかに羨ましさを含めていたことに、最後まで気付かなかった。

「……」

完全に死んだケルベロモンX抗体の死体を、ドルゴラモンはゆっくりと下ろす。

彼のその姿に、その言葉に、ドルゴラモンはあのトウエニストの姿を見た気がした。が、すぐに振り払う。例え同じでも、これとあれは違う。

自分にやられに向かってくる者たちを目にしながら、何となくドルゴラモンはそう思った。

「生きてるに決まってるだろ」

コータはわかつてる。理屈も何もなく、ただ信じられることが。「生かすに決まってるだろ」

だから、行くのだ。

一方で、ワームモンは物も言えなかった。その隙に、足に絡みついた糸を引きちぎって、コータはまた走り出す。

「あ、ちよつと待って——！」

なおも追い縋ろうとするワームモン。

そんな彼に、コータは足を止めずに声を投げた。もう、彼が自分たちを気にして追って来なくていいように。

「さっきの返事だけど断るわ！」

「えっ」

「パツと考えたけど、この社会をどうこうするだけの理由^熱はオレにはない！ オレはオレのことだけで精一杯だ！ 悪いなっ」

自分が良ければいい。自分さえよければ良い。

それは、ある意味で生物の真理だ。しかし、理性と知性を持つ人間として公言するのはどうかと思われる理屈ではあるが。

「っ。そうだね。君はここの人たちとは違うんだよね」

そう、理性と知性に溢れる生物はその真理を徹底することはない。そこに他者を加える。他人を慮り、集団を組み上げる。

……この未来世界は、それが行き着くところまで行き着いた先だ。集団を重要視する余り、個人を見なくなった場所がここだ。

公正と平等の世界。一部の強者しか生きられないのではなく、誰もが平等に未来を持てる世界。ああ、きつと良いことなのだろう。素晴らしいことなのだろう。集団として種族として見るならば、ここはまさに理想郷だ。毒とさえ気づけぬ、甘い菓子のような場所だ。

無論、個人を見た場合、ここは全く別の世界となる。誰も個を見ることも見られることもなく、歯車としてしか存在できない地獄。

誰もが歯車としてしか存在できない中、しかし、外から来たコータたちだけが違う。

「でも、君は君の相棒を信……ちゃんと他人を見てる。きつと君くら

いの塩梅がちようどいいんだろう。だから、そんな君にはレジスタンスに入って欲しかったな」

遠くに離れていくコータを見つめながら、ワームモンは静かに独白する。

「信頼かあ。僕にもこの世界にも縁がなかった概念だけど。でも、やっぱりその概念が実際に現れた今こそがタイミングかな。本当はもっと準備が整ってからが良かったけど。ま、準備万端で事が進むなんてありえないしね」

ワームモンは目を閉じて、数瞬の後にまた開く。

次に開かれたその目には、覚悟の炎が灯っていて。

「仕方ない。革命の時だ」

そして、レジスタンスが動き出す。

ワームモンを振り払って走っていたコータ。

「迷った」

彼は今、迷っていた。

まあ、当然である。この地下排水路は、街中から排水を集めるように構成されている。つまり、街中の地下を走る水路に合わせるように、若干の迷路となっているのだ。

来た時はワームモンに案内されたために無事だったのだが、ワームモンを振り払ったばかりにこれである。

「アウアウー」

呆れたような、馬鹿にしたようなトコモンの言葉がコータの耳に届く。

とても腹立たしい。

「道分かるか？」

「アウアウ、アアア」

わかるわけねーだらばーか、とでも言いたいかのようにトコモンは啜う。もちろん、コータの偏見が入っているが。

しかし、八方塞がりだ。

このままではドルゴラモンのところに行く前に、野垂れ死にしてし

まいそうである。

「つく、何かないか。目印とか、音とか——！」

そこで、はたとコータは思い至った。パワーバカなドルゴラモンが暴れているのなら、その音は地下まで響いてきているのではないかと。

トコモンが思わず無言になるほどの阿呆な考えだったが、今のコータには何ものにも代え難い名案のように思えて、彼は耳を澄ませる。

「アウアウ」呆れた様子のトコモン。

「ちよつと静かにしてろ」コータはそんな彼を黙らせた。

そして、改めてコータは耳を澄ませて——

「むっ」

——聞こえてきた音に目を見開いた。

聞こえてきた音はこの地下を震わせるような凄まじい音、ではもちろんない。

「何か嫌な予感が」

「アウ」

つい最近、聞いた音だった。それが目的があるように近づいてきていて、しかも、一つではない。

先の展開が読めて、コータは天を見上げた。もちろん、見上げた先には汚れた天井しか見えないのだが。

まあ、だからといってこのままブーツと突っ立っているなんて愚行は犯さない。

「逃げるぞ」

「アウ」

咄嗟に振り返り、コータは駆け出す。

すると、彼の頭のすぐそばをどこかで見たような閃光が通り過ぎた。

「……」

「……」

一瞬止まってしまったものの、再び駆け出す。

またコータの頭のすぐ側を閃光が通り過ぎた。

「逃走ハ、オススメシマセンヨ」

背後から投げかけられた声。

コータたちは恐る恐る振り返れば、姿が見えない。否、通路の奥の暗闇にいるのだろう。

ゆつくりと暗闇の中から生まれ出てくる。

「イーバモン率イル、ベータモン部隊ヲ前ニ逃ゲラレルトハ思ワナイコトデス」

現れたのは、宇宙人^{ベータ}っぽい^{モン}デジモン^X抗体^体たち。そして、そんな彼らのリーダーであり、進化体なのだろう、機械化されている宇宙人^{イーバモンX}っぽい^{デジモン}。

「報告通り、発見。シカシ、レジスタンスノ存在ヲ確認デキマセン。ドウシマスカ?」

「奴ラノ隠レ家ガ此処ニアルノハ突キ止メタ。コイツラハ用済ミ。始末シロ」

「ラジャ」

彼らは等しく、その手の玩具みたいな光線銃をコータたちに向けていた。

「最悪だ」

見る限り、手下が五体とリーダーが一体。しかも、全員が遠距離攻撃持ち。

ついでに言えば、コータは知らないがベータモンX抗体は完全体であり、イーバモンX抗体に至っては究極体である。

数でも負けて、質でも負けて、リーチでも負けている。トドメとばかりに、場所が入り組んだ迷路とはいえ狭い。一斉掃射されたのならば、即座に蜂の巣だ。

「……っ」

「アウウ」

まさに、絶体絶命な状況だ。

「サテ。レジスタンスノ下マデ案内シテ貰イマシヨウカ」

「うーん……」

コータが悩むふりをすれば、即座に足元に光線が飛んでくる。

どうやら、あまり気の長いタイプではないらしい。コータは冷や汗を流し、トコモンを見る。トコモンが頷いた。

だから、コータは覚悟を決める。これほど意思疎通が出来ないアイコンタクトは他にないだろう。

「こつちだ……よっ！」

コータは投擲。投げたのはもちろん、トコモンだ。

「アウウウウウウー」投げられた彼は、必死に空中で飛んでくる光線を避けていた。むしろ、どうやっているんだという話である。

何はともあれ、憎しみと恨みの声が飛んでくる中、コータは構わずに駆け出す。

「トコモン、かみつけ！」

「アウー！」

こうりやヤケだ！ そう言いたいかのように、トコモンは着弾したベーダモンX抗体の脳みそに噛み付いた。何とも言えない、柔らかくて固い、微妙に歯応えのいい食感にトコモンは泣いた。

「ウガッアアアア！」

一方で、脳みそを噛まれたベーダモンX抗体は堪ったものではない。

いくら、デジモンにとっての外見は人間と全く同じ意味と機能を持つことはないとはいえ、それを差し置いても泣き所だったのだろう。

痛みに暴れ回り、光線を乱射する。イーバモンX抗体は堪えていないが、その他のベーダモンX抗体は慌てている。

「設立タズデスネ」

そんな中で、イーバモンX抗体はその手の光線銃を構え――

「まさかこれほど幼き者でさえ、これほど勇ましいとは。未来が過去に負けるとは、情けない。我々は進歩と引換えに墮落と怠惰を抱いてしまったのかもしれないな」

――瞬間、声がした。

汚水が溢れ出し、まるで通路を襲う。

「何――!？」

イーバモンX抗体の焦ったような声がした。

一方で、状況がよくわからないものの、コータにとっては好機だ。

「ぶはっ。トコモン！」

「アウー！」

汚水に流されながらも、彼は何とかトコモンを回収する。

そして、口直しとばかりに噛み付かれながらのコータが向かう先は、この場で唯一の逃げ道。すなわち、吐き気がするほどの臭いを放つ排水路の中——！

「潔い！」

そして、またあの声がした。

瞬間、地下が震える。

かつて人間の世界のとある国では、地震とは地下に住む大鯰が暴れることで起きたという。もちろん、人間の世界では御伽噺だ。

だが、ここにおいては。

「吾輩はレジスタンスのギガシードラモン！」

大地を震わせて現れたのは、コータが今まで見た中では最大級のデジモンだった。

まるで洞窟がそのままデジモンになったかのような巨大さを誇る、機械水龍。彼こそ、ギガシードラモンと呼ばれる究極体デジモンだった。

「さあー！」

さあー！ とギガシードラモンが大口を開ける。

一方で、コータたちは「さあー！」と言われても、と固まってしまっ

「急いで！」

だが、そんな彼らの前に現れたのは、ギガシードラモンの喉の方から走ってきたワームモンだ。

「早くー！」

届かない小さな前足を伸ばして、ワームモンが叫ぶ。

その顔は、泣きそうなくらい必死だった。

「っー！」

だから、コータはギガシードラモンの口の中に飛び込む。

「撃てー！」

汚水から立ち直ったのだろう、イーバモンX抗体の声。飛んでくる光線。それを背に、コータはギガシードラモンの体内に行き――

「はははー！」

――再び地下を震わせながら、ギガシードラモンは排水路の奥深くに消えたのだった。

第三十五話く理想にこそ強きは宿るく

怪獣映画のワンシーンのような光景が広がっていた。

もはやそこは戦場だった。

街の守護者たちが数々の兵器を持ち出し、知恵と勇気で怪獣ドルゴラモンに立ち向かう。怪獣は街を破壊しながらも、自分に襲いかかってくる愚か者を迎撃する。その中で、隠れる場所のなくなった弱い人々が逃げ惑う。

ドルゴラモンというデジモンは破壊の権化やら究極の敵やらという物騒な異名を持つが、あながち間違いでもないだろう。

少なくともこの街の誰もが、総出で街を守ろうとする軍を蹴散らすドルゴラモンを見て、そう思っていた。

「おらあつ、まだまだあつー！」

ドルゴラモンが拳を振るえば、発生した風圧と共にファンビーマンやワस्पモンで混成された軍団が吹き飛ぶ。街は壊れる。

ドルゴラモンが足で踏みつけければ、発生した地震が大地を砕いて軍団に襲いかかる。当然、街は壊れる。

「つく、撃てー！ 撃てえー！」

焦ったように声を上げるのは、完全体デジモンのキャノンビーマンだ。蜂の巣のような巨大武器コンテナを背負い、大口径のレーザー砲をその尾に持つ、機械蜂デジモンである。

彼は同じキャノンビーマンたちと共にこの混成軍団の指揮を務めていた。

「いいから、撃てー！ 何としても足止めしろ！ もう少しだ——！」
彼らは具体的な解決案もなく、兵を消耗する総攻撃を何度も命じている。

リーダーとしてあるまじきことだ。だが、彼らも想定を遥かに超えているバケモノドルゴラモンを相手にして怖れと焦りを感じていたのである。

まあ、自分たちの武装の一切が通じないのだから、そうなってしまうのも頷ける話である。

「活路を拓く、スカイロケット∞ッ！」

キャノンビームモンたち全員のコンテナから放たれたのは、まさに弾幕だ。

弾丸が、砲弾が、ミサイルが、雨のように降り注ぐ。いや、雨という言葉すら生ぬるい。まるで滝のように、怒涛の如く落ちてくる。

たった一人のドルゴラモンを殺すためだけに、本来ならば軍に向けられるような攻撃が放たれていた。

だが。

「無駄だあつ」

だが、無意味だ。

ドルゴラモンが翼を飛ばたかせる。突風が発生して、風が弾幕をなぎ払った。それだけでは飽き足らず、風は遙か上空に待機するキャノンビームモンたちさえも吹き飛ばす。

警戒が解けるまで無限に続くはずの攻撃は、ただの飛ばたきで蹴散らされた。

「……そ、んな」

軍勢の中の誰かが、そう言った。いや、誰もがそう思っていた。

唾然とするしかなかったのだ。自分たちの上司たちの攻撃が、自分たちを遥かに超えた実力を持つ上司たちが、為すすべもなく破られるなど。

もはや敵う術はなし。ファンビームモンもワस्पモンも、絶望のうちに負けを認めようとしていた。

「やっと参ったかー」

そんな彼らに自身の威光を見せつけるように、ドルゴラモンが勝ち誇る。

意外と危なかった！ と内心では心臓をうるさいくらいに鳴らしていたのだが。

しかし、こうすれば相手の心を折ることができる。すべては肩に必死でへばりついているボコモンの入れ知恵である。

ともあれ、これで戦闘は終了だ。

ドルゴラモンとしても街を壊してしまったことに申し訳ないことを思わないでもないが、人死は出していないのだし、攻撃して来たの

は相手からだし、見逃してもらおうと考えていた。

まあ、

「まさか、過去からの侵入者にこれほどの実力者がいたとは。誤算だった。単純だけな力ならば、伝説に聞くロイヤルナイツにも比肩……いや、凌駕しているやも知れん」

戦闘は終わっていないのだが。

ドルゴラモンが声の方向を向く。瞬間、閃光。いや、閃光と見間違えうほどの刺突。

「っ！」

ドルゴラモンは咄嗟に腕を胸の前に出し、防いだ。

腕に鋭い痛みが走る。見れば、蜂の針のような剣が僅かに突き刺さっていた。

「硬いな。しかし、鈍重な相手を解体することなど、造作もない」

その剣を握っていたのは、細く鋭い全体像が特徴の蜂のような人型デジモン――

「総指揮、タイガーヴェスパモン。早速だが、この街に無用な混乱をもたらした責任、とつてもらうぞ」

――タイガーヴェスパモンという、究極体デジモンだった。

瞬間、タイガーヴェスパモンがドルゴラモンの腕に突き刺さった剣を引き抜く。

「っ！」

即座、その剣が突き出された。

咄嗟に、ドルゴラモンが躲す。しかし、遅い。彼の腕に浅いかすり傷がついた。

「つく、疾い――！」

「遅い」

いつの間にか、タイガーヴェスパモンは二刀流となっていた。その両腕から繰り出されるのは、苛烈なまでの突きだった。

しかも、刺突の速さもさることながら、タイガーヴェスパモン当人もかなり速い。

「っ、後ろだ！」

後ろに回りこまれて、ドルゴラモンはすぐに振り向く。

「正解だが、欠伸が出る遅さだ」

「つく」

だが、次の瞬間にはタイガーヴェスパモンは移動を開始していた。ドルゴラモンは何とか対応しようと動くのだが、タイガーヴェスパモンが速過ぎるのだ。目で追うことはできても、ドルゴラモン自身の速度が追いつかず、結果としてタイガーヴェスパモンを追い切れない。

しかも、タイガーヴェスパモンはドルゴラモンよりもずっと小さい。その小ささがスピードと相まって、ドルゴラモンにとっては見失いやすかった。

反対に、タイガーヴェスパモンにとっては自分と比較して鈍重で巨大なドルゴラモンなど大きな的である。厄介なパワーは捉えられなければ問題なく、硬さは地道にやって行けばこれも問題ない。

「コータがいれば……！」

役割分担でも、作戦でも、何か思いついてくれるのに！ ドルゴラモンはそう思ったが、現実がすべてだ。もしを想像したところで意味はない。

「遅い！ 遅過ぎる！」

縦横無尽にドルゴラモンの周りを飛ぶタイガーヴェスパモンが加速する。

移動の刹那に攻撃することで、彼は順調にドルゴラモンに傷を増やしていった。

「マッハステインガーV！」

連撃が、さらに苛烈になる。

比例して、ドルゴラモンの傷も増える。

「つく、あんまりやりたくなかったけどつ。仕方ない！ ッドル
デーン！」

破壊の衝撃波が、世界を壊しながら突き進む。さすがにこれを放たれても攻撃を続けることは何者にもできない。

衝撃波は戦闘区域を超えて、街を残骸へと変えていく。

「なりふり構わず、か……！」

タイガーヴェスパモンは素早く退避に切り替える。

衝撃波に追いつかれないように、突き進む。

そして、見渡す限りが街の墓場となった頃、ようやく衝撃波は収まった。

「街をこれだけ壊してくれたか。面倒なことをしてくれる」

吐き捨てるように、ドルゴラモンに向けてタイガーヴェスパモンは言う。

彼は苛立っているようだった。

「人的被害はないからいいものの、これだけの物損……——今月の回収はしてしまったというのに！」

「っ、回収だつて？ お前、命を何だと思っているんだ！」

堪らず、ドルゴラモンが叫んだ。

彼にとって命は、生きるためのものだ。生きたいと叫び、生きようと行動する、個だ。そう、ドルゴラモンは思っていて、考えている。

だから、そんなドルゴラモンにとっては目の前のタイガーヴェスパモンは、この社会の仕組みは、あのメイクーモンの特性にも引けを取らない悪として映る。

だが、しかし、悲しいかな。ドルゴラモンは知らない。強者が故に、生きたいと考えれば生きられる——生存闘争に参加できるほどの強さを持つが故に、彼は知らない。

「弱者を切り捨てる、前時代の叫びだな。世の中、生きたいと願って生きられる者ばかりではないというのに」

世の中には生きたくとも生きられない——生存闘争に参加したところで負けが決まっているような、生まれつきの弱者がいることを。

世界はそんな弱者には甘くはないことを。

そして、そんな弱者は得てして自分の弱さを良しとできるほど、強くない。

「我々のこの世界——このスクールドターミナルこそが理想郷だ。誰もが平等、誰もが公平。生死に強さなんてものは関わらず、弱者だって生きられる」

間違っている。そう思っているのに、ドルゴラモンは何も言えなかった。

「世界をこうするまで、この理想が叶えられるまで、どれだけの時間がかかったか！ 旧世界時代から続くこの理想が、Xの一件を超えて、世界のリスタートによつてようやく叶ったのだ！」

タイガーヴェスパモンは、ドルゴラモンに剣を向ける。その顔には、揺るぎない意志が込められていた。

ただ生き抜くための覚悟とは違う、理想に生きる者の覚悟がそこにはあった。それはあのトウエニストと似て、しかし、少し違う。

……また、ドルゴラモンの知らない顔だった。だからこそ、ドルゴラモンは压せられる。もちろん、ドルゴラモンのそれとタイガーヴェスパモンのそれは別の次元のもので、どちらが優れている劣っているということはない。ないが、持っていない上に知らないからこそ、そこにある異様な压を感じ取ってしまうのだ。

「ここが我らの理想の終着点。この理想は永遠でなければならぬ！ この理想郷を汚す者は誰であろうと許しはしないっ！」

改めて更地となった街を見渡し、さらに感情を滾らせて、タイガーヴェスパモンは空を駆ける。

「っ——！」

一方で、ドルゴラモンも拳を構えた。どんな理想が壁になって目の前に立ち塞がろうと、どんな素晴らしい世界が現れようと、彼だってそんなもので死にたくはない。

「おらあつー！」

ドルゴラモンの拳を、タイガーヴェスパモンは華麗に避ける。

そして、その先にあるのは拳が振り抜かれたことで無防備となった胴体——！

「マツハステインガーVッ！」

刺突の連撃が、ドルゴラモンを襲った。感情が乗せられて力を増した剣が、鋭く深く突き刺さる。

「——バカナ」

そして、タイガーヴェスパモンが唾然として呟いた。

その視線の先にあるのは、ドルゴラモンの腕。振り抜いたのとは違うドルゴラモンの拳が、タイガーヴェスパモンの腕を捉えている。

すべてはタイガーヴェスパモンの失策だった。

仕方のないことだが、自分の理想郷が廃墟となってしまったことに感情を荒ぶらせてしまったが故の、失敗だった。彼はもつと時間をかけてじっくりとダメージを与えていくべきだった。

深く切り込んだことで、ほんの僅かに剣を抜くのが遅くなったのだ。だから、その僅かな隙を捉えられてしまったのである。

「捕まえたぞっ！」

まさに、肉を切らせて骨を断つ。

ドルゴラモンはタイガーヴェスパモンを掴んだまま、駆け出した。

「つく、この——！」

「遅い！ 今度はこっちの番だ！ ブレイブメタル！」

全身全霊を込めた凄まじい突撃で勢いづいたドルゴラモンは、その手のタイガーヴェスパモンを地面に叩きつける。

大地が割れて、タイガーヴェスパモンが力なく宙を舞った。

「ぐはっ」

そして、タイガーヴェスパモンは地に落ちた。

もはや彼の身体はボロボロであり、身体の至る所が今にも千切てしまいそうだった。

だが、それでも——

「ま、まだだ……！」

「そ、そんな。あれを食らってまだ立てるのか!？」

——それでも、タイガーヴェスパモンは立ち上がる。

「言った、はずだ。この理想郷を汚す者、は誰であろうと許しはしない……い、と……！」

それは、凄まじい気迫だった。相手は死にかけているというのに、勝ったはずのドルゴラモンが思わず後ずさってしまうほどの圧力がそこにはあった。

「この理想郷は——」

ゆつくりと、タイガーヴェスパモンは一步を歩く。

自分が震えているのか、世界が震えているのか、彼はもうわからなかったが。

「――永遠なのだ！」

それでも、ゆっくりとまた一步を歩く。

揺れる視界と身体を必死に堪えて、彼はドルゴラモンの前で弱々しく剣を振り上げて――

「ま、っはすて、いんがー……びく、と、りー」

――放たれた刺突は、ドルゴラモンに傷一つ付けなかった。

そして、タイガーヴェスパモンは倒れ込む。

「……」

大地が僅かに揺れる中、ドルゴラモンは何とも言えずにその場に立ち尽くしたのだった。

第三十六話く合流く

タイガーヴェスパモンを倒した。

しかし、倒した当人であるドルゴラモンは疲労があり思うところがあつて、その場に立ち尽くしていた。

「で、移動した方が良いと思うのじゃが」

そんなドルゴラモンに話しかけるのは、戦闘中ずっとドルゴラモンに必死でへばりついていたボコモンだ。

「どうか、あのタイガーヴェスパモンの猛攻の中でよくもまあ無傷でいられたものである。」

「うん、移動しようか。つていうか、それはいいんだけど——」

「なんじゃい？ 何か気になることでもあるんか？」

「いや。なんかさ、揺れてない？」

ドルゴラモンは、この地面の微小な揺れを感じとっていた。

戦闘中は感じられていなかったし、戦闘後すぐは疲労による気のせいでと断じていたのだが、戦闘後しばらくした今もなお続いているとあれば、勘違いでは済まない。

有り体に言えば、何かが来ると彼は予感していたのだ。予感していたからこそ、下手に動けない。

「いや、わかつとるなら早く逃げた方が良いと思うがのう」

「でも……っ」

揺れが酷くなった。

いや、まるで揺れそのものがドルゴラモンたちをロックオンしたかのように、彼らの周囲を震源としてどんどん酷くなっていた。

「ここまで来れば、確定だ。何かが来る。」

「飛ぶよっ」

「え、は、ちよつと待つてくれえええ！」

攻撃だつたら堪らない。そう考えたドルゴラモンが飛翔する。

そして、滞空するドルゴラモンが見守る中、すぐにその時は来た。地面を突き破つて、異臭と汚水が街に放たれる。異臭と汚水に乗つて、彼が来る。

「はっはっは！ 外だ！」

いろいろと汚いものの流れに乗って現れたのは、ドルゴラモン以上に巨大なデジモン——ギガシードラモンだ。

「っ、このデジモンは——！」

「やはり水中の方がずっと良いが、あの汚水の中と比べるならば、多少息苦しくとも外の方が良いな。ああ、大海を泳ぎたいものだ」

何やら感慨に耽っているギガシードラモンを前に、ドルゴラモンはどうしたものかと考える。

いきなり襲いかかって来ない辺り、タイガーヴェスパモンたちのような敵ではないのだろう。しかし、何となくそう予測が付くだけだ。

それ以外がさっぱりで、だからこそ、行動に悩む。

「触らぬ神に祟りなしと言うがのう」

「でも……」

「お前さん、あの異臭塗れのやつと知り合いになりたいんか？」

「……」

ボコモンの一言がすべてを決した。ドルゴラモンはそーつと逃げることを選択する。

まあ、

「ああ、貴様がドルゴラモンか」

もう遅いのだが。

「そうだよ。俺がドルゴラモンだ」

「なるほどやはりそうか。吾輩はレジスタンスのギガシードラモンだ」

「レジスタンス!?!」

「うむ。貴様の相棒を連れて来てやったぞ」

「えっ、コータを！」

驚くドルゴラモンを前にして、ギガシードラモンは「うむ、ほれ」と大口を開ける。

「ドルゴラモン！」

「アウ！」

その中には、未だ身体も乾いていない濡れたままのコータとトコモ

が街の変わり果てた姿だと気づいたので。

「え？ Z地区ってオレとワームモンが出会ったところだよな？」

「……まさか」

「いやいや！ 座標的にはZ地区だよ！ ねえ！」ワームモンがギガシードラモンに聞けば、

「そうだな。Z地区だ。一体何があったのやら」とギガシードラモンが返す。

そんな彼らが次に視線を向けるのは、ここで戦っていたというドルゴラモンだ。

「必死だったんだよお！」

情けなく、ドルゴラモンは白状した。

「ドツ、ルゴラモン、お前悪い奴だな！ いくらなんでも街を壊すか！

いや、壊すってレベルじゃねえけど！」

「だから、必死だったんだよ！ 強かったんだってば！ コータだってわかるだろ？ なりふり構ってられない気持ちは！」

「……まあ、わかる。もちろん、わかる。わかるけど、それでもこれは……——」

まあ、すべては終わったことだからこそ言えることであるのだが。そうして、一通りコータにからかわれることになるドルゴラモンだった。

「まあ、吾輩も似たようなことはできるが」

「究極体って怖い——！」

一方で、ワームモンはドルゴラモンの想像以上の実力にどん引きしていたのだが。

「でも、そうだね。まさかタイガーヴェスパモンを倒していたとは思わなかった。これはいいよチャンスだ」

立ち直ったワームモンはタイガーヴェスパモンの死骸を見つつ、ギガシードラモンに視線を向ける。

ギガシードラモンは頷いた。

「そうだな。ベータモン部隊は地下に閉じ込めていて、しばらくは地上に来られまい。であれば、確かに今こそが好機」

「攻める？ その気で来たわけだけでも」

「彼らの協力は得られないのだろうか？ こちらの人員はまともなのがないぞ」

ギガシードラモンはそう言って、厳しい顔をした。未だギガシードラモンの体内に格納されているレジスタンスメンバーはいる。いるのだが、あまり力のあるデジモンはいない。

最も力のあるデジモンはギガシードラモンで、それ以下しかないのだ。しかも、排水路システムに思うところがあつたのか、割と力の弱い汚物系が多い。

とはいえ、チャンスを逃すのはもったいなく、またそのために来たというのも事実である。

「どの道退路は断たれている、か。よし」と、覚悟を決めたようにギガシードラモンの表情が変わる。

そんな彼に領いて、ワームモンはコータたちを見た。

「コータ、ここの住人なんかおかしいよ。あのトウエニストみたいな？」

「うーん、でも、あいつとは何か違う気がするんだよな。同じ行動をとっているとしても、その理由が違うっていうかさ。なあ、もしここにあいつがいたとして、こいつらはトウエニストだって言うか？」

「……言わないね！」

コータたちは何かよくわからない会話をしていた。

トウエニストとかいう意味不明単語に興味は惹かれたものの、ワームモンはコータたちの前に行つて用件を話す。

「僕はこれから、天を落とす」

「天？」

「天っていうのは、この未来世界の管理者のことだよ」

天の面々がこの未来世界に秩序を制定し、秩序を守っている。実質的なこの世界の支配者なのである。

ちなみに、管理者とは言うが、NEWデジタルワールドの神イグドラシルがそこにいるということではなく、この未来世界部分の代表——要するに、便宜上の名として管理者がいるというだけの話である。

「空中秘密基地」ローヤルベース”。そこにすべてがある。だから、僕らはそこに乗り込んで、落とす。そうすればこの街を変えられる」
「なるほど。で？」コータが半目で聞いた。

「うっ。だから、助けて欲しい。手伝って欲しい」

コータはドルゴラモンたちを見る。

ドルゴラモンは困ったように笑っていた。助けを請うてきたのだから助けてあげたい気もするけれど攻め入るとするのは……—という感じだろう。

ボコモンはふんすと鼻息荒くしていた。天や管理者なんて名乗る傲慢な奴らを倒しに行くのだ……———と言いたげだった。

トコモンはどうでもいいといった様子だった。逆にボコモンを見てメシウマとばかりに嗤っていた。

「……うん、それでもごめん、断るよ」

もちろん、悩ましい部分はある。

命は生きるためにある——そんなコータたちの考えに、言うなれば信念と反対なのがこの街だからだ。

だから、悩ましい。だが、それでもコータには何が何でもこの社会を良くしたいとまでは思えなかった。だから、自分の中にモヤモヤとした嫌な気分は残るものの、この街の在り方を見逃すのだ。

「うー。残念」

本気で残念そうにワームモンは言う。

「うむ。それでいい」

一方で、ギガシードラモンはそんなコータの選択を良しとしていた。

「外の者が中のことに本気になれないのは当然のことだ。自分たちとは関係のないことなのだから。それなのに些細な動機で無理矢理に踏み込めば、無駄に命を散らすことになる。後悔しか残らん」

「……ギガシードラモン」

「だから、良い。これは吾輩たちの問題だ。吾輩たちが解決する。だから、貴様らは関わらなくても良いし、関わらないことに何かを想う必要はない」

そう言つて、ギガシードラモンは気にするなと言う。

コータもドルゴラモンも、そんなギガシードラモンの様子に救われたような顔をした。彼らは問題を知りながらもその問題を見過ぐす、そのことに罪悪感にも似た感情を抱いていたのである。

「それじゃあ、ワームモンたちが上手くいくことを祈ってるよ」

「ああ、今までありがとうな」

結局、コータたちはそこで別れることになった。

「なんでじゃーい！」

「アウアウ」

グダグダ言っているのはボコモンだけである。

「うむ、貴様らも達者でな」

ワームモンを体内に格納したギガシードラモンが、コータに別れを告げて――

「え？」

「なっ」

――その瞬間のことだった。

それに気づいたのは、ドルゴラモンとギガシードラモンだ。彼らは揃って上を見た。

「そう来たか……！ 吾輩としたことが、無駄な時間を過ごしすぎたか」

そう言つたギガシードラモンは、険しい顔をしていた。

その視線の先にあるのは、空だ。だが、どこか違和感がある。まるで、そこに見えない何かがあるような。

「申し訳ないが、貴様も否応なしに巻き込まれることになるらしい」
ギガシードラモンがそう言う。

その言葉の意味を、コータたちは過不足なく察した。

「あれだ。あれが、天だ」

視線の先、模倣の空の壁をまとつた見えぬ基地。

それこそが、この世界の天。^{管理者} 空中秘密基地 “ローヤルベース”――

！

第三十七話く空中秘密基地く

空が揺らめいた。

「むっ」

即座にギガシードラモンは行動を開始する。咄嗟にコータたちを飲み込み、先ほど突き破ってきた地中へと退避した。

「俺は!?!」

「貴様ならどうとでもできるだろう!」

まあ、大きさの関係で飲み込めなかったドルゴラモンは置き去りなのだが。

そして、その一瞬後のことだ。空から爆弾とミサイルが雨霰と降り注ぐ。

「う、うえええっ!」 “ドルディーン!”

いきなりの攻撃に、ドルゴラモンはそれはもう必死だった。破壊の衝撃波を放ち、もろとも破壊する。が、数が多い。質で劣っていても関係なく、数で衝撃波を押し切るとばかり。

その数、方は超えていただろう。

「ぜえっ、ぜえっ」

爆撃は数分もの間、続いた。その間、ドルゴラモンはずっと必殺技である“ドルディーン”を打ちつぱなしである。

疲れるというレベルの話ではない。

「まさか全部迎撃するとは。いや、いいから降りて来い!」

地下へと続く穴の中から、ギガシードラモンの声が飛んできると、ドルゴラモンは自分の後を追ってくるものだと、彼は思っていたらしい。

じゃあここまで疲れる必要はなかったんじゃない! とドルゴラモンは自分の下手な行動にツツコミを入れつつ、穴に飛び込む。

数十メートル下った場所にギガシードラモンはいた。ドルゴラモンは滞空しつつ、彼と向き合う。

「臭い」

「我慢しろ」

まあ、ギガシードラモンの行進のせいでシステムが逝かれたらしく、排水路の異臭がずいぶんと漂っていたのだが。

「ともあれ、見たな？」

ギガシードラモンが確認する。

ドルゴラモンは頷いた。

そうだ、彼らは見たのだ。あの攻撃が始まる一瞬前に空が揺らめいた時、そこに巨大な島のような何かが浮かんでいたのを。

あれが、ローヤルベースなのだろう。ステルスか、それに類似する機能で隠れていたのだ。

「もはや、貴様らは吾輩たちと同じく奴らにロックオンされている」

「……結局そうなるのかあ」

ドルゴラモンはがっくりと肩を落とした。コータもドルゴラモンもいろいろと考えて関わらないことを選んだのに、結局その選択は無駄となったのだ。

「無駄ではないぞ」

「無駄ではないって、無駄にしか思えないんだけど」

「いや。選んだその事実だけは忘れてはならない。例えば、世界や社会によってその選択がなかったことにされても、選んでないのと選んだのでは大きく違う」

そんなドルゴラモンに対して、そして自分の中にいるコータに対して、ギガシードラモンはそう言う。

事態に流される結果となっても、信念による選択があったことは本人たちの中にあるのだから。

「その違いが、いざという時に生きることもある。どうして自分たちがそれを選んだのか、その理由こそが自分のアイデンティティなのだから」

そう言つて、ギガシードラモンは口を開ける。

そこには、コータとボコモンたちがいた。彼らはそのまま、ドルゴラモンに飛び移る。

「ま、こうなったからには仕方ない。降りかかる火の粉は全部払うつもりで行く」コータがそう言えば、

「それだけでもありがたい」とギガシードラモンは頷いた。

そして、ギガシードラモンは再び外に出ていく。

それを見届けて、ドルゴラモンは気合を入れるように短く息を吐き出した。

「俺たちも行こう」

「いや、ちよつと待ってくれ」

「……どうかした？」

「ワームモンに話を聞いたけど、この攻撃は患部切除のようなものらしい」

つまり、街の運営上で邪魔になった場所や者を諸共消し飛ばすことではなかったことにするつもりなのだ。

「総力戦だったてさ」

「うげ」嫌そうに、ドルゴラモンはうめいた。

一方で、コータもその気持ちはわかるとばかりに頷いた。

彼はレジスタンスのメンバーを知っている。先ほど、ギガシードラモンの体内にいた時に見た。まあ、この社会の少数派が集まっているだけあって、質としても数としてもないに等しい戦力だ。

というか、ほぼほぼギガシードラモン頼みの部分さえ見えた。いや、当人たちは十分やる気なのだろうが。

「総力戦ってことはつまり、この街の警備隊も参加してくる」

「警備部隊？」

「あれ？ 出会ってないか？ ベーダモンとかいうデジモンなんだけど」

「ああ、あの……」

ケルベロモンX抗体と出会った時のことを思い出して、ドルゴラモンは頷いた。

「あいつら、この地下にいるんだよな」

「え？」

「で、多分、オレたち——というか、ギガシードラモンを追ってきてるんだよな」

そこで、何となくドルゴラモンはコータの言わんとしていることが

わかった。

「この穴塞いじまえ」

そう言つて、コータは笑う。

ドルゴラモンは頬を引き攣らせた。

「過激じゃのう。ま、理には適つておるが」

「アウアウ」

呆れたように言つた彼らは、コータに引付く。こうすれば最悪、振り落とされることはないと考えたからだろう。

「わかつたよ」

何はともあれ、ドルゴラモンは飛ぶ。穴の出口まで飛翔する。

そして、

「ッドルデインッ！ッ！」

破壊の衝撃波を放つ。

放たれた衝撃波が地面をぶち抜き、ギガシードラモンが通る上で作り出した穴を、そして地下排水路を、まるごと崩落させる。

轟音が鳴り響き、土煙が舞い踊る。

「これでよし。次は……っ！」コータが何かに気づいて、

「危ない！」そのコータの気づきに気づいたドルゴラモンが、回避行動を取る。

レーザー光線がドルゴラモンのすぐ側を通り過ぎた。

それは、空高くのあの基地から放たれたもので。

「ばっちりロックオンされてるな」

「逃げられないね」

否応なしに巻き込まれていることを、実感する。

見れば、ギガシードラモンが海を泳ぐように空を飛び、何とかステルス状態のロイヤルベースに突入しようとしていた。

ミサイルやらレーザーやらの攻撃によって、突入に苦戦しているようだった。

「……ドルゴラモン、落とせるか？」

コータがそう聞いた。

その意味を、ドルゴラモンは察する。

「やってみる」

敵の本拠地が空の上にある以上、不利だ。

あのギガシードラモンは飛べるが、見た目通り本分ではないのだろう。少し苦戦している様子が見える。

ドルゴラモンも飛べるが、コータたちがいる以上は無茶な動きがでない。

そんな彼らが状況を打破するには、敵の本拠地の能力を奪うか、それか隙を作るくらいに敵を混乱させる必要がある。

そして、ドルゴラモンに出来ることなど一つしかない。

「『ドルディーン』ッ！」

放たれた衝撃波が突き進む。空に座す空中基地を落とさんと突き進む。

だが、しかし。

「あれは」

ステルスから飛び出してきたのは、大量の蜂デジモンたちだ。ファインビーム、ワスプモン、キャノンビーム——……成長期から完全体までの数々のデジモンたちが、盾となって破壊の衝撃波を防ぐ。

彼らによって威力を減衰させられた衝撃波は、届くことなく消えた。

「……！」

「……」

コータもドルゴラモンも、その光景に何も言えなかった。

彼らは基地のために死んだのだ。自分の命よりも、自分“たち”の目的のために死んでいったのだ。彼らもまたこの社会の者たちだった。

「……」

ボコモンは何も言わなかった。

「アウアウ」

ただ、トコモンだけが馬鹿らしいと嗤っていた。

「コータ……」

「ああ、行こう」

生存闘争ではない、ただの弱い者いじめをしているような気分にな

りながらも、コータたちは止まれなかった。だって、ここで逃げ出せば背中を撃たれる。

だけど、戦えば集団でしか生きられない弱者を、それこそアリの巣穴に殺虫剤を巻くように、簡単に殺していくことになる。

「……戦わないでくれ、って言って止まってくれば楽なんだけどな」とコータは言う。

「それは難しいよ。あいつらにだって、戦う理由があるんだから」とドルゴラモンは返した。

もちろん、ドルゴラモンの言うことはコータもわかっている。

今のコータの言葉や願いは、ある意味で傲慢そのものだ。彼ら弱き者は強き者に従えと、強き者の道理や感情を優先して弱き者は何もするなど、そう言っているようなものだからだ。

「気分悪いな」

「そうだね」

だけど、弱者に譲れない想いがあっても、それは強者も同じ訳で。

だからこそ、強者による弱者の蹂躪が起こる。

実に理不尽だ。理不尽で、胸糞悪い。

「……行こうか」

「うん」

身体にまとりつく嫌な気分を振り払うように、ドルゴラモンは進み出した。

「『ドルディーン』！」

再度放たれる、破壊の衝撃波。先ほどと同じように、多くの蜂デジモンたちがその身を犠牲に防ぐ。

ああ、だが、その瞬間こそが隙だ。蜂デジモンが盾になっていて、それが終わる瞬間だけはそこに隙間ができる。

そこを、超える。

衝撃波の後ろを飛ぶドルゴラモンは、そうして、蜂デジモンたちの亡骸を抜ける。

ステルスの壁を越えて、基地の中に突入する。

「突入した——！」

入って初めて、コータたちはローヤルベースの姿を視認する。

そこは、機械で出来た場所だった。だが、見た目としては取り分けて変わった部分はない。強いて言えば、とても広いということだろうか。

空に浮かんでいるという一点を除けば、人間の世界にもありそうな光景ではある。いや、まあ、攻撃状態にある兵器が多いという部分はあるが。

「入ってきたか」

そして、突入したコータたちを迎え撃つのは、ドルゴラモンが見覚えのあるデジモン——タイガーヴェスパモンだ。

「なっ、アイツってドルゴラモンが倒したんじゃないのかっ!？」

「倒したよっ!」

まさか、同一種がいるとは思わなくて、コータたちは混乱する。

なにせ、究極体の同一種である。成長期や成熟期の同一種がいるのとは訳が違う。

究極体に辿り着ける個体は、全体の一パーセントにも満たないレベルである。それなのにその一パーセントが同一種に辿り着く確率など、どれだけ低いことか。

「我らの理想、技術を舐めてもらっては困る。これはシステムだ」

誇らしげに、タイガーヴェスパモンは語る。

「本来出てはならない総指揮の立場の者が出撃し、そして敗北した時点で、その穴を埋めるべく別のものが総指揮の立場に新たに進化する」

「……!」

それは、常に究極体デジモンのリーダーが途切れぬようなシステムが組み立てられているということである。

究極体という希少種を絶えず生み出す——そんなところにさえ、個人主義にならないようなシステムが組み上げられているというその事実にも、もはやコータたちは逆に感嘆するばかりだった。

「以前の戦いのデータは揃っている。もはや貴様に勝ちはない!」

タイガーヴェスパモンがドルゴラモンに急接近する。

なるほど、確かに強敵だ。システムによって、死んだ者が復活したようなものだ。そこに解析された以前の戦闘データを加えれば、弱点を見抜かれたのも同然。

「マツハステインガーV!!」

タイガーヴェスパモンは剣で刺突する。

ああ、だが、彼はわからない。自分たちの技術の凄まじさを正しく認識し、だからこそ、見下している彼にはわかるはずもない。

確かに、解析という手段はない。

確かに、タイガーヴェスパモンたちの技術ほどの精巧さはない。

それでも、精度は低くとも、拙くとも、ドルゴラモンたちだって同じことはできるのだ。

「わかつてるよ」

そうだ。ドルゴラモンはわかっていた。何となくだが、わかっていた。

「きつとお前は、最短があるのなら必ずそこを突く。一番弱いところを突くと——!」

そう、タイガーヴェスパモンは合理に突き抜けている。どうあつても、最短の道や確実な道に行く。

つまり、弱点を突いてくるのだ。

だからこそ、ドルゴラモンはそれに合わせる。合わせられる。

「おらあつー!」

そして、コータを狙ったタイガーヴェスパモンに見事なカウンターが決まった。

第三十八話く何事にも終わりはあるく

「かはっ」

ドルゴラモンの見事なカウンターによって殴り飛ばしたタイガーヴェスパモンは立ち上がったもののダメージで動きが鈍い。

チャンスだ。

「今だー!」

コータの声すら置き去りに、ドルゴラモンは駆ける。

そして、ダメージによって自らの長所を失ったタイガーヴェスパモンに、思いつきり拳を叩き込んだ。

「つぐー!」

「まだまだ、もう一発!」

「がア!」

「もう一発!」

「……!」

「トドメにもう一発だあ!」

ドルゴラモンの拳が、何度もタイガーヴェスパモンの腹に吸い込まれていた。

パワーバカのドルゴラモンの拳を、何発もまともに喰らったのだ。耐え切れない、とばかりにタイガーヴェスパモンは地に沈んで動かなくなる。

「つしやあ! 完勝!」

ドルゴラモンが勝利の雄叫びを上げた。

「……早く移動した方がいいな」

「アウ」

「じゃのう」

一方で、コータたちは冷めていたのだが。

「勝ったのにひどい!」

「いや、だって、どうせまた出てくるし」

そうだ。このローヤルベースのシステム的に、また誰かがタイガーヴェスパモンに進化する。そして、また襲われる。

そうなればジリ貧である。こちらは次はないが、彼らには次があるということなのだから。

しかも、進化する度に彼らは戦闘データを解析・蓄積しているようだから、もしかた戦うことになれば先ほど以上の苦戦は必至。少なくとも、先ほどのような単純なカウンターは通じなくなると考えていいだろう。

「とりあえず、移動しよう」

戦闘の音を聞きつけた誰かしらがここに駆けつけるだろう。その時、コータたちがこの場にいればまた戦闘することになってしまう。

だからこそ、移動しなければならぬ。

「まあ、監視カメラの一つや二つはあるじやろうし、逃げたところで居場所はバレバレな気もするがのう」

「……怖いこと言うなよー」

ボコモンの言葉に、ドルゴラモンが身体を震わせる。いくら彼でも、タイガーヴェスパモンクラスのデジモンとの連戦は堪えるのだ。

「まあ、その辺りは考えずに行こう。それで——」と、コータが何かを言おうとしたその瞬間のことだった。

辺りに爆音が響き渡った。まるで至近距離で雷が落ちたかのような轟音だ。

「っ、なんだ!？」

見れば、青白い光線が基地に突き刺さっている。やがて薄れて消えたものの、一瞥しただけでかなりの威力を持つことは明白な攻撃だった。

そんな攻撃ができるものなど、この未来世界に来てからコータたちは一体しか出会っていない。

「レジスタンスか!」

その時、コータたちに遅れたギガシードラモンがこのローヤルベースに突入してきた光景が見えた。

というか、ものすごい強引に突破してきたらしい。その周囲に攻撃状態のファンビーモンとワस्पモンを引き連れている。

「革命の時だ!」

ギガシードラモンが大口を開ける。すると、中から現れたのはレジスタンスのデジモンたちだ。

「総員、中枢システムの管理室まで前進だあ！」

やたらと勇ましい表情で指示を出したのは、ワームモンだ。

そして、それに従うのは数々の汚物系デジモン——……。

「本当に人手不足なんだな」

「そうだね」

「アウ」

「何というか、いや、あやつらが悪いというわけじゃないのじやが、あんなやつらに社会が変えられると思うと……のう」

それを見たコータたちは何とも言えない気持ちになったのだった。

ちなみに言うと、汚物系デジモンが大半を占めているだけで、赤い背びれが特徴の爬虫類^{爬虫類}や二足歩行のカエル^{カエル}や^オ王冠をかぶった太ったオタマジャクシ^{オタマジャクシ}やら——多少は汚物系以外のデジモンも混ざってはいる。

しかし、今度は微妙に水棲系が多い。まあ、レジスタンスの行動範囲的に地下排水路の周辺にいた者たちなのだろう、きっと。

水辺が地下排水路しかなくて、そこに恨みを感じたとかそんなことではないはずである、きっと。

「……まあ、戦う理由は人それぞれでいいと思うけど……けど……！」

ファンビーモンやワस्पモンを相手に戦うレジスタンスたち。

方や水や雷が、方やミサイルやレーザーが、ひっきりなしに飛び交っている戦場。その中で一際戦果を挙げているのは、汚物系の技である——ウンコだ。機械の大敵ということで特攻が入っているのか、妙に敵を倒している。

水が舞い、雷が行き、ミサイルが飛び、レーザーが進み、そして大量のウンコが散らばる。

何というか、酷い。絵面が酷い。水と雷のせいでウンコが微妙に柔らかくなることもあるのが、もっと酷い。

「……何だろうね」

「……うん」

「……じやのう」

「アウ」

彼らを見ていると、巻き込まれている自分たちに釈然としないものを感じるコータたちであった。

何はともあれ、気を取り直したコータたち。

「ここからオレたちはどうするべきかな？」コータはこういう時に強そうなボコモンにアドバイスを求めた。彼にはこの基地を壊し尽すとか、そういう心情的にも効率的にもよろしくない案しか思い浮かばなかったからだ。

ちなみに、当然だが、そんなコータたちにも基地を守護する者たちは迫る。が、大半がファンビーモンやワस्पモンといった成長期成熟期の面々なので、ドルゴラモンが片手間に倒していた。

「とりあえず殲滅とかを考えないのなら、システム面を落とせばいいんじゃないかの？ そうすれば追跡用のデータもなくなるじやろうし。システム復旧までの間に逃げ切れればよからうて」

「なるほど」

とすれば、図らずも目的地はレジスタンスと同じということになる。先ほどワームモンが言っていた、中枢システムの管理室とやらだ。

「ドルゴラモン！」

「うん！」

ドルゴラモンが尾を横薙ぎに振るう。

迫っていたワस्पモン数匹を諸共に吹き飛ばしたドルゴラモンはコータたちが自分にしっかりと掴まったことを確認すると駆け出した。

「で、それがどこにあるかわかるか!？」

「さすがに知るわけないじやろ」コータの問いに呆れたようにボコモンは返した、のだが、

「ものしりブックは！」とすぐさまドルゴラモンに怒鳴られる。

「おお！ 忘れておったよ。こりやうっかりうっかり」

どうやら本気で忘れていたらしい。ボコモンはものしりブックを取り出して、ページをめくり始めた。

まあ、トコモンは「アウア、アアウ」とそんなボコモンを阿呆を見る目で見ていたりするのだが。

「うむ、わかったぞ！ このローヤルベースはおおよそ円形で、その中心部にあるぞ！」

「言って難だけど、それ本当に凄くないか？」

「当然じゃ。だって、これは——と、ごほんっ。何でもないぞ！ いいからさっさと行け。それからトコモン、誰がババアじゃい！」

何はともあれ、目的地がわかり、その場所もわかった。

ドルゴラモンは壁をぶち抜きながら、目的地へと駆ける。

「ちよ、待って待てえっ！」

飛んでくる壁の破片を前にして、コータは悲鳴を上げた。

一方で、ドルゴラモン下手人は「だって、こっちの方が早いから」と何食わぬ顔。

まあ、ドルゴラモンの言うことにも一理あるというか、壁が飛んでこなければ諸手を挙げて賛成できるので。

「もう少しオレに気を遣って壊せよ！」

コータはそう言うことしかできないのだ。

「今更じゃが、もう基地そのものを壊した方が良い気がしてきたのう。儂らにとつても、相手にとつても」

「アウ？ アウアウ」

そうして、壁を何十枚とぶち抜きまくったドルゴラモンたちは、目的の地へと到達する。

そこは、中央に一本の柱のような何かの機械が置かれている部屋で——
「ずいぶんと大事にしてくれたものだ。この社会を、基地を、作るのにどれだけの時間と労力をかけたと思っっている……！」

——そこにはやはり、タイガーヴェスパモンがいた。

「コータ、コータ！」

こっそりとボコモンが指を指し示すその先には、パネルがあった。

あれが操作パネルなのだろう。

「オレがあれを弄りに行く。その間、タイガーヴェスパモンを任せられるか？」

「もちろん！ コータこそ気をつけてよ！」

「よしっ」

方針は決まった。すぐさま、ドルゴラモンはタイガーヴェスパモンめがけて駆け出す。

コータもまた、そんなドルゴラモンを見送って操作パネルに向けて走り出した。

「させん！」

だが、そんなことはタイガーヴェスパモンにもわかっているのだろう。彼はドルゴラモンを放っておいて、コータを優先して攻撃を仕掛ける。

その瞬間、コータの頭の真上をドルゴラモンの拳が通過した。

「させんのをさせないよっ！」

ドルゴラモンが攻撃しながら庇つたのだ。

ちなみに、彼がもう少し下を攻撃してたら、コータの頭が吹っ飛んでいたりする。

そんなことが数回、地味に味方からによる自らの命の危機に晒されながらも、コータは操作パネルにたどり着いた。

「着いた……！ よし、早速……！……！……！……！」

コータは動けなかった。というか、操作パネルの操作の仕方がわからなかった。

こんな時は、困った時のものしりブックである。

「えっと、操作パネルの操作方法は簡単じゃな。自動翻訳されてくるらしいから、それに従ってパネルを入力していけば良いのじゃ」

「だけど、反応がないんだけどー！」

コータが何度も触っても、叩いても、操作パネルは反応しない。

操作以前に、電源自体が入っていないようだった。

「起動方法じゃな。まずパスワードを入力するんじや」

「パスワードは！ それにどうやって入力するんだ！」

「……えーつと……あ」

「あ？ あ、って言った？ あ、って何だよ！」

嫌な予感が抑えられなかったが、コータは聞いた。
すると、ボコモンは笑って言う。

「予め登録されたデジモンがここに立たなければ、そもそもパスワード入力状態にすらならないらしいぞい？」

「……詰んでるじゃないか！」

もはや、最も温和な解決は望めなくなったということである。

こうなれば、この基地を破壊し尽くすくらいしか案がない。ハツキングやクラッキングができる能力など、コータにはないのだから。

そうして、そんなコータたちの背後で――

「つぐ」

「獲った――！」

――少し手こずったとばかりに目立つ傷を負ったドルゴラモンが、それでもしつかりとタイガーヴェスパモンを殴り飛ばしていた。

それが三度目の決着となった。

「つぐう、があつ」

苦しそうに、タイガーヴェスパモンは這い回る。

その時が近いのは、誰が見ても明らかだった。

「総指揮たる我が……――三度も――だが、これで終わらん。この社会を混乱させる貴様らだけは絶対に――！」

だからだろう。苦し紛れの言葉を、彼は言う。

そう、この基地のシステムがある以上、タイガーヴェスパモンは何度も復活する。何度もリトライできる。だから、彼はこの敗北を最後の敗北にすべく、死――！

「な、システムが壊れているだど？」

だが、次に彼が呟いたのは、混乱の言葉だった。

「次の個体が見つからない？ 進化できない、我が死ぬ？」

そして、その混乱の言葉の中に恐れが交じる。

彼はその混乱の中に見つけた結論を、恐れていた。タイガーヴェスパモンは死んだところで別個体が同じ役割として進化する。幾度も

幾度も。

それは集団の中の一として残り続けるという、個の超越であり死の超越だ。ある意味では、個人ではたどり着けない、命の極致だ。

だが、それが壊れてなくなってしまうた。自分たちの極みが失われた。それにより、集団の中の一どころか、個としても消えてなくなってしまう——気にしなくて良かった死に直面して、彼の中に恐怖が生まれたのだ。

「……！ 我は——、まだ……！」

彼は死んだ。最期の最後まで、生まれて初めての恐怖を味わったまま。

「つくつくつく。無様ですねぇ」

そして、そんな彼に変わって聞こえてきた声は、コータたちがどこかで聞き覚えのある声だった。

「ああ、個としてしか生きられない生命が他者を思いやる余り、種族全体の自己崩壊の道へと進んでく様、実に面白かったですよ？」

そうだ。その声の主こそ、

「やあやあ。直接会うのは久しぶりですかねえ。皆さん、私の思い通りに動いてくださってありがとうございますよ」

あの悪魔——！

第三十九話く悪魔の叫びく

目の前に現れた悪魔の前に、コータたちは警戒で動けなくなっていた。

「いやあ、本当にありがとうございます。私の仕事を手伝ってください！」

「手伝った覚えなんか、ないんだけどな」

「いえいえご謙遜を！ あなた方がいなければ、こんなに早くこの社会を崩すことはできなかったでしょう！」

仕事とやらが終わったことで、よほど気分が良いらしい。悪魔は混乱するコータたちにを前にペラペラと話す。

「この社会、実に鬱陶しかつたんですよ？ 我が主としましてもね。いかにオリジナルより劣化しているとはいええ、X抗体をばらまくなど！」

「我が主……？」

「そこについてはおいおい！」

まあ、何もわかっていない者に我が物顔で種明かしをするのが面白いという心境もあるのかもしれないが、それにしてもテンションが高い。鬱陶しいくらいに高い。

「で、まあ、本当に愉快なんですよねえ。個としてしか生きられない生命が答えを間違え、結果として種族全体が自己崩壊の道へと進んでく様は！ ですが……」

悪魔はタイガーヴェスパモンを見た。コータと悪魔の間にある、タイガーヴェスパモンの死骸を見た。

「この管理者を気取る連中が素晴らしいこと素晴らしいこと！ 彼らは次善の策でもって社会を作り、世界を存続させ、守っていた。我が主のことなど知らないのに、イグドラシルの真意も知らないのに、そこにたどり着いていた。本当に無能な有能さですよ」

忌々しそうにそう吐き捨てた。悪魔の言葉の節々からは突き刺すトゲのようなものを感じられて、彼はタイガーヴェスパモンたち管理者を本心ではどう思っていたのかがわかる。

「ま、我が主のためにも邪魔な彼らを消したかったのですが、だからといって、私一人では骨も折れそうですしね」

しかし、もう終わったことだ。そう言いたいかのように、再び声のトーンが上がる。

「……まさか」

「そうですよ！ 都合よく、社会に不満がある連中がいたのでねえ。利用させていただきましたー！」

実に嬉しそうで楽しそうだ。もし顔が見えるのなら、確実に笑っている姿が見えるだろう。それほどテンションの高さだった。

「あなた方もそこに加わって、実にありがたい！ おかげでこうして侵入して、システムを破壊できたのですし。本当に何度礼を言っても物足りませんよ。ありがとうございます」

礼を言われている気がしない。コータたちは厳しい目で悪魔を見ていた。

彼らは自分たちが利用され、思惑通りに動かされていたという点に気が食わなかった。

「あはは。何をおっしゃいますかひつじさん！ 毎度毎度巻き込まれで動いているのがあなた方。生きられれば良いなんていうただの本能で、信念も理想もなくその日暮らしをしていたのがあなた方。流れで、受身で、バカみたいに生きている時点で、そうなるのは必然でしょう？」

「……！」

コータたちは何も言えなかった。

生存闘争を戦っていたのが、コータたちだ。言うなれば、生存闘争という生き残りを賭けたゲームの参加者がコータたちだ。

プレーヤーが与えられた危機的状況から脱しようとゲームに夢中になっているだけでは、ゲームマスターに好き勝手動かされるのも当然である。

「くくく。さあ、あなた方のおかげで私も本来の使命を果たせるというものです」

自分たちの短慮と悪魔を呪うコータたちを前に、軽い口調で悪魔は

そう言う。

使命——それに、コータたちは聞き覚えがあつた。あのオメガモン
Alter-Sが、ラグエルモンが、タクティモンが、口にしていた
言葉だ。

我が主、使命。この悪魔も、やはり一連の彼らの仲間なのだろう。
「それでは、これで終わりです」

勢いよく、悪魔はその魔法使いのようなローブを脱ぎ去つた。

その下から現れた姿は、まさに羊のような頭を持つ悪魔だった。

「っ、デーモンじゃない？」

「私は悪魔だと言っただけで、かの七大魔王と名乗つた記憶はないの
ですがねえ。さてさて！ これこそが私ですよ！ 私、メフィスモ
ンと申します。以後、はないかもしれませんがお見知りおきを」

メフィスモン——完全体のデジモンだ。

それ自体は知らないものの、コータたちは直感として察していた。
すなわち、自分たちよりも格下であると。油断なく戦えば、以前まで
の強敵ほどの絶望はないと。

だが、まあ、それはコータたちの勘違いだったのだが。

「手に取るようにわかりますよお。あなた方の考えが。いいです
ねえ。傲慢ですねえ。あなた方、私など相手ではないと思つたでしよ
う？」

「……。事実だろ」

「ええ、ええー！ 事実ですともー！」

本当に楽しそうに、面白そうに、メフィスモンは言う。その様子を
前に、コータたちは強く警戒した。だつて、そうだろう。この様子で
は何かがあると言っているようなものだ。

警戒する。だが、その警戒を嘲笑うように、メフィスモンは——
「それでは、私も真の姿を見せましようかねえ」

——進化する。

「っ、ドルゴラモンー！」

「おうー！」

てつきり脳筋に対する何かしらの技があると思つていたコータた

ちは、そのラグエルモンの時のような前フリさええない予想外の進化に焦る。

焦ったコータの言葉に反応したドルゴラモンが駆ける。が、遅い。「ツクツクイーッヒッヒー」

腹立たしい笑い声と共に、それは姿を現した。ドルゴラモンを遥かに超える巨体。まさに山だ。

全長的な意味ではギガシードラモンと同じくらいだろうが、あちらは東洋龍のように細長いシルエットだったのに比べ、こちらはケンタウロスのようなシルエットで全体的にとっしりとしている。そのせいで、体積的にこちらの方が大きく見える。

ドルゴラモンが破壊の竜ならば、このデジモンは悪魔の獣、まさに魔獣だ。

「メフェイスモン改め、ガルフモンでございます」
言うや否や、その巨体の腕が振り下ろされる。

基地を破壊し、凄まじい余波を撒き散らしながら、迫り来る腕。その腕を、ドルゴラモンは殴り飛ばした。殴り飛ばせた。

「あ、いたっ」
「そんだけデカくても、パワーはこっちが上みたいだね！」

まあ、パワーが上回っているとはいえ、巨体故かそこまでダメージを負っている気配は見えない。

全力か、あるいはそれに近い一撃を喰らわせるくらいしなければ倒せないだろう。

「痛いですねえ。痛い痛い」
というか、ガルフモンは痛いとか言っているが、どこか白々しい。それが、不気味だった。まるで道化師がわざとふざけているような、そんな感覚さえしたのだ。

だから、
「ドルゴラモン！ オレたちのことを気にするな！ やれえっ！」

コータはそう言い放った。このままではまずい、そう本能が危険を叫んでいたのだ。

「ッドル——」

「おやおや。まさになりふり構わずといった感じですねえ。ひっひっひ。いいですよお」

「——ディーンッ ツー！」

破壊の衝撃波が放たれる。部屋の中央にある柱や基地の壁も構わず破壊し突き進むそれは、ガルフモンを飲み込む。

「ぐ、これは……！」ガルフモンが厳しい声を出した、その瞬間のことだ。彼は見た。自らの頭上に、ドルゴラモンが飛んでいたことを。

「ッドルディーンッ ツー！」

再度、放たれた破壊の衝撃波がガルフモンを押し潰す。ガルフモンはともかくとして、基地の床はそれに耐えられなかった。

「なあっ！」

ガルフモンは自分の自重によって落ちていく。

同時に、このローヤルベースそのものが崩壊を始めた。多くの壁や柱が壊された上に、床まで壊されたのだ。当然の帰結である。

基地全体が揺れ始め、天井も崩れ出した。

そんな中、

「おおおおおおおおお！」

天井から落下してくる瓦礫を必死に躲しながら、コータは走る。

「もつと早く走らんか！ 生き埋めだけは勘弁じゃぞ！」

「アウアウー！」

「うるさい、置いてくぞっ」

その両脇にボコモンとトコモンを抱えて、必死に走る。

「コータ——！」

ドルゴラモンがコータたちを抱え、背中で庇いながら飛翔する。

上から来る瓦礫を羽ばたきで吹き飛ばし、行く。あと少し。

「出るぞっ」

もう少し。

「出た！」

そして、出た彼らが見たのは、空中秘密基地の最期。地上に落下していくローヤルベースの姿だった。

轟音を轟かせ、土煙を舞い上がらせ、衝撃を撒き散らしながら落下

し、瓦礫の山となったローヤルベース。

何とかギリギリで脱出したのだろう、ギガシードラモンがコータたちの下へとやって来た。

「一体何があったんだ!」

「……レジスタンスは?」

「無事な者と負傷者は全員格納した」

犠牲者は? とはさすがに聞かなかった。

ただ短く「そうか」と言つて、コータは切り替える。短く簡単に自分たちの状況を言い、ガルフモンのことを言う。

「……! 吾輩たちの命を、感情を、思想を! 利用したのかツ!」

ギガシードラモンの目は怒りに震えていた。

利害の一致による協力関係はわかる。しかし、わかるだけし、そもそも協力関係どころの話ではない。何も知らず、知らされず、手のひらの上で動かされていた。命を弄ばれていた。

それが、ギガシードラモンは許せない。

「いやあ、やはり痛いですねえ」

「『ギガシードレストロイヤー』ア!」

「なんとおっ!」

だから、瓦礫から這い出たガルフモンめがけて、ギガシードラモンは全力で必殺技をぶち当てる。撃ち出された閃光がガルフモンに突き刺さった。

だが、

「痛い痛い。こんな社会にこれほどの実力者が生まれたのがびっくりですよ」

だが、

「貴方たちの役目はもう終わったんですよ。私も忙しいんですから、さっさと退場してくれませんかねえ?」

だが、ガルフモンは無事だった。

ドルゴラモンの二度の攻撃、ギガシードラモンの全力攻撃、それを受けてなお無事だった。さすがに無傷ではないようだが、その程度だ。

「っ。貴様、許さん！　『ギガシーデストロイヤー』ア！」

再度、ギガシードラモンの口から閃光が放たれる。

それを前にして、ガルフモンは――

「全く……」

――口を開けた。より正確に言えば、その下半身にある巨大な口を開けた。いや、それを口と言っていていいものか。口と形容できるその中は、穴だった。暗い闇だった。

その穴の中に、『ギガシーデストロイヤー』は飲み込まれて消える。その余波がガルフモンを僅かに傷つけただけに終わった。

「今のは、そうか、今ので……！」

コータは、いや、この場の誰もが、ガルフモンの無事な理由を察した。

となれば、あの大口を避けて攻撃を当てなければならぬ。あの巨体だ。的はデカイが、その分、避けなければならない部分もデカイ。

「はあ。忙しいと言ってるんですがねえ。仕方ありません」

そして、ついにガルフモンが動く。

何かまずいことが起こる。この場の誰もがそれを察知した。

何が起こるか、正確に理解していたのはこの中でただ二人――ボコモンとトコモンだけだ。

「っ、いかん！　耳を塞げ――！」

だからこそ、ボコモンは即座に対応する。その叫びに、コータたちは耳を塞ぐ。だが、腕がないギガシードラモンは耳を塞ぐことは叶わない。

「『デッドスクリーム』」

そして、放たれたのは声だった。下の穴から叫現ばれる、声。衝撃波が発生するほど音量は大きくはない。むしろ小さいほどだ。だが、例え小さくても、それは聞く者全員に胸を突き刺すような痛みを与える、怨嗟と悲哀の声だった。

「……いっ、っく、う？」

それを聞いた瞬間、ギガシードラモンは自らが死んでいくのを感じた。凍えるように身体が動かなくなつて、抗えない睡魔に襲われたよ

うに目が閉じて、何も考えられなくなっていつていく様を実感できた。

もはや自分の運命は決まったものだと、彼はわかってしまった。だから、

「お、のれ……！」

最期の力を振り絞って、体内に格納していたデジモンたちを口から放つ。音が聞こえないほど遠くに吹き飛ばす。

その行動を最後に、彼は死んだ。

「な——！」

「ギガシードラモンが——！」

耳を塞いでいるコータたちは、何が聞こえているかわからない。だが、ギガシードラモンの様子から、それを聞くことが死を意味するという、どうしようもない技の効果を正確に理解した。

聞くことをトリガーに発動する即死技など、厄介などというものではない。それこそ音よりも速く動ける者が、音の伝達波を正確に理解した上で行動すればようやくどこにかできるかというレベルだ。

どのみち、パワー全振りのドルゴラモンにはどうしようもない。

だから、この声が収まるまで耳を塞いで耐えるしかない、のだが。「いけませんねえ。ちゃんと聞いてもらわないと。……力尽くは好きじゃないんですがねえ」

自由な上半身を動かしたガルフモンは嗤って、瓦礫を投擲する。ドルゴラモンほどではなくとも、凄まじい威力で投げられたそれは、ドルゴラモンの頭を正確に捉えていた。

もちろん、普段のドルゴラモンはその程度、どうとでもできる。

「があっ！」

だから、普段通りに対応。

投げられた瓦礫を、一番の武器である拳で迎撃する。してしまう。それはつまり、耳から手を離してしまうということだ。

尾や翼を使って迎撃したのならば、また別だったろうに。

威力も何もない音を聞かせる、という中々想像しづらい攻撃だった。が故に、咄嗟の時の彼の頭から抜け落ちてしまったのだろう。

「……！」

瞬間、ドルゴラモンは呼び声を聞いてしまう。

「どっ、ドルゴラモン——！」

そして、ドルゴラモンは死んだ。

第四十話く意味なき進化く

死に突き進む中の僅かな時、言葉も出せぬ閃光の如き一瞬。
——死にたくない。

その悲痛な刹那の瞬間、ドルゴラモンに許されたことは僅かに思考
することだけだった。

——生きていたい。

——死にたくない。

——生きていたい。

——死にたくない。

——生きていたい。

——『死にたくない』

——生きていたい。

——死にたくない。

数々の思いが、繰り返し湧き上がっては消えていく。

しかし、そのどれもが同じだ。生物の本能に基づいた、生存本能の
声だ。

——生きていたい。

——『死にたくない』

——『生きていたい』

——死にたくない。

彼の内より湧き上がるその声は、自分のものか、それと別のものか。

——死ぬ。

——否。

——「俺^{我々}は生きる。他の何を喰らっても——！」

ドルゴラモンの前に、暗闇が訪れる。

死というものが闇に向かうことならば、これも死であるのだろう。
この時を以て、ドルゴラモンは死んだ。

だが、しかし、

「——！」

心が死に、

「↓」
身体が死んでも、

「↓」
生命はそれを認めない。^死

生命にとって重要な身体はとつくに死んでいる。

生命にとって重要な心もとつくに死んでいる。

だが、事故で身体を失っても生きようともがくのが生命で、絶望に沈み心をなくそうとも生きようと叫ぶのが生命で——個にとって大事なものが失われても、生きることが強要するのが生命だ。

「↓」
だから、これは有り得うること。しかしながら、有り得ないもの。いや、決して有り得てはいけないもの。

生存を望む生命が、生きていないのにこの世に戻る。

生存を望むあまり、死してなお生きるために現れる。

それは、身体も心も生きている事実さえ無くした者が辿り着く果て。

未来を失くした者が、その形だけ今に残す、当人にとつても世界にとつても大いなる愚行。

「……なんだ、あれ」 呆然と、コータが呟いた。

そこにいたのは、ドルゴラモンだった。ドルゴラモンの形をした、何かだった。

身体は腐り果てて失われ、それでも拘束具によってかろうじて元の形だけが残っているだけの、アンデッド。心は死に絶えて失われ、それでも形だけが生命の本能のままに動き回る、バケモノ。

生命が生存のために命を喰らうことはあるだろう。だが、しかし、
“これ”は違う。

“他者の命を喰らって自己を生かす”という生命の本質を忠実に再現するだけの、モノ。

生きていないのに、生きるために、この世に存在するためだけに、他の命を喰らい続けるモノ。

無意味な活動を続ける、災厄。

「くくく、はははは！ 無様ですねぇ。愚かですねぇ。生命でなくなつたのに生命を模倣してる、形だけ取り繕われた嵐！ ほんつとうに、忌々しい。使命でなければ見たくもないのですがねぇ」

そう言ったガルフモンは、目の前のバケモノを見る。忌々しそうに見る。

そのドルゴラモンの動く死体を、汚物を見るような目で見る。

その気持ちは、この場の全員がわかった。死体が無惨に動き回る、それは否応なしに見たくもない死を見せつけてくるものだからだ。

「——！」

そして、ついにバケモノが動き出す。目の前にいる特大の命に向けて、その命を貰い受けんと突き進む。他者の命を貰い受ける権利など、死した者にはとうに失われているのに。

「あれは何だ？」

呆然とした様子のコータ、その再度の眩き。

それに返答したのは、ボコモンだった。

「かつて偉大なる千年魔獣は死した後、終末の千年魔獣として蘇つたという。これはその劣化版とでも言えるが、それだけに質の悪い現象——」

暗黒進化、というものがある。

もちろん進化という概念に良いも悪いもないのだが、目指す目的にそぐわない進化をしてしまった時、一般に皮肉と失望を込めてそう呼ばれることがある。

“これ”は、それに近い。死の淵にあつて生きていたいから進化したのに死を覆すことはできず、死んだまま存在するだけになる進化。無意味な、進化。

「デクスリユーシヨン——死の進化。死んだはずの者が動き出す異様な進化じゃ。言うなれば“あれ”は、デクスドルゴラモンとでも言うべきかな」

あくまでも、動き出すだけ。生き返るわけではない。

その意味を、コータは正確に理解した。

「ドル、ゴラモン……！」

コータの声も、もはや届かない。

デクスドルゴラモンはコータなど知らない、目の前の命だけに向かっていた。

「くくく。さてさて、無事になっていただいたことですし、あとはもうひと手間——」

怪しげに笑ったガルフモンは腕を振り上げる。

だが、

「——！」

それよりもデクスドルゴラモンが殴りかかる方がずっと早い。

「ぐはっ」

ガルフモンの巨体を、デクスドルゴラモンが殴り飛ばす。

自分の数倍はあろうかという巨体を腕力だけで吹き飛ばすその様は圧巻だった。

「いやいや、もうひと手間——」ガルフモンがまた腕を上げる。

「——！」構わず、デクスドルゴラモンは殴りかかった。

「——ぐはっ、いや、ちよっ」

「——！」また、デクスドルゴラモンは殴る。

「ぐはあっ。これ、思ったよりもまずっ」

「——！」

殴って、殴って、殴って、殴り続ける。それしかできないとばかりに、デクスドルゴラモンはガルフモンをボコボコに殴る。嵌っているのだ。

ガルフモンは絶対に何かをしたいようではあるが、意思も何もなく殴りかかってくるデクスドルゴラモンを前にしてその何かをする余裕がない。

結果として、為すがままに殴られているのだ。

「——！」

デクスドルゴラモンの鉄球の如き尾が振り回された。

振り回されたことで加速したそれは、圧倒的なまでの威力となる。生まれた遠心力を利用するようにして、回転しながら跳ぶ。

「あ」

間拔けなガルフモンの顔に、回転により威力の増したデクスドルゴラモンの尾先が直撃した。

「ぬうううううー！腕で顔を抑えながら、ガルフモンは苦悶の声を上げる。それは、聞いている方が苦しんでしまうような、亡者の叫びの如き声だった。

事実、コータたちはその声に耳を押しさえている。

だが、そんなものはデクスドルゴラモンには関係ない。その隙に放つは、最大火力。

「メタル——」

「あ、やば」それに気づいたガルフモンが声を上げるが、遅い。

「——インパルス——！」

放たれたそれは、鉄球だった。正確に言えば、その見た目は鉄球だった。

ドルグレモンの“メタルメテオ”と同等以上の大きさを持つそれは、しかし、“メタルメテオ”のようなただ大きいだけの鉄球というわけではない。

ただの鉄球であれば、どれだけ良かったことか。

それは死の塊だった。デジコアと呼ばれるデジモンの核のみを残して、それ以外のすべてを消し飛ばす、特大の捕食という名の暴力の化身だ。

命を喰らうものとして、これ以上ないほどに効率的に捕食部位を確保する攻撃。

だが、しかし、それを向けられる方は堪ったものではない。触れたら心臓部分デジコア以外のすべてが消滅するという物体が超速で飛んでくるのだから。

「おおおおおおおおー！」

ガルフモンは必死に躲そうとする。

しかし、無理だ。“メタルインパルス”は巨大であるが故に避け難く、ガルフモンはそれほどスピード自慢なタイプではない。

さらにダメ押しを言えば、“メタルインパルス”はメタルの名通り相応の重量もある。つまり、それを何とか回避したり、心臓部以外消

滅という効果が無効化したりしたところで、重量による余波は当然ある。

「はあ。だから、この役目は嫌だったんですよねえ。タクティモンやラグエルモンが失敗さえしなければ……いや、そもそもかつてになぞらえてオメガモンAlter-Sがやってくれば……！」

結局、無理を悟ってガルフモンは諦めた。

だって、そうだろう。例え目の前にある攻撃がなくとも、パワーで負けている。総合スペックならわからないが、脳筋ゴリ押し状態のデクスドルゴラモンが相手では同等で片付けられる総合スペックなどもはや意味はない。

ついでに言えば、必殺技である即死技も相手が既に死んでいるデクスドルゴラモンでは効果を発揮しない。

相性が悪いのだ。

無理ゲーとまではいかないが、諦めずに最後までなどという熱血を好まないガルフモンとしてはさっさと諦めるのが吉だった。

「やれやれ」

だから、諦める。

ガルフモンは「メタルインパルス」の攻撃を前に消えた。

「……勝った、のか？」

その光景を前にして、呆然とした様子でコータが呟く。

いや、勝ち負けなど意味があるのだろうか。コータは内心で自嘲した。自分の半身とさえ言えるような相棒が、もう死んだのだから。

そして、その相棒が――

「――」

――今や、生きてるものすべてを喰らうとばかりに、その視線を自分たちに向けているのだから。

コータは自嘲する。こんな時でさえ、生き残る方法を模索している自分を嗤う。

「潔いやつなら、ここであいつの手にかかって死ぬのかな？」

「おい、コータッ！」

「アウ」

「わかつてるよ！」

コータはボコモンとトコモンを抱えた。

ドルゴラモンを死なせてしまったこと、相棒が死んでも自分だけは生きようとする——自己嫌悪が止まらない中、それでも生きることとを強制してくる本能に従って彼は動く。

「——！」

そんな生きている彼らを見て、デクスドルゴラモンも動き出した。凄まじい速さで踏み込み、その距離を一足で駆け抜け、コータたちめがけて腕を振り上げる。

「っ！」

そして、

「やつと隙を見せましたねえ」

声が聞こえた。デクスドルゴラモンの背中から。

「メフィスモン——！」

そこにいたのは、メフィスモンだった。

咄嗟にガルフモンから退化したことで小型化し難を逃れたのだろう。余波によつて身体のところどころが傷だらけではあったが、それでも健在の様子。メフィスモンがいた。

「やれやれ。なかつたことになったいくつかのようにイグドラシルがやってくれば、私がやる必要もなかつたんですがねえ」

魔法陣が展開される。

それが、デクスドルゴラモンを包み込んで光る。

一瞬の後、デクスドルゴラモンの身体から吐き出されるようにして、そこからドルモンが現れる。

それはデクスドルゴラモンの中に唯一残っていた生命の欠片だったのだろう。

「ドルゴラっ、ドルモン！」

それを、コータはキャッチする。

見れば、気絶しているだけのようで、コータは安堵の息を吐き出した。

「ゴッ、コータ！ 逃げい！」

焦ったような、ボコモンの声が聞こえた。

「……デクスドルゴラモンに残っていた生命の欠片、それがドルモンだと言えるのならば——それを持つていることで、デクスドルゴラモンはかろうじて形として存在していたのならば。」

その唯一のドルモンが吐き出された後の、デクスドルゴラモンはどうなるか。

普通ならば、消滅するだろう。

だが、しかし、ここに例外ドルモンの特性が存在する。それを以て、これが生まれる。

「元々、ドルモンにはとある特性があった。それが生命の本質と相まって、死んでも生き続けるために他者を喰らうという、デクスリユーション無意味な進化が発現した。」

そうして誕生したデクスドルゴラモンは、生命として残すものは何もなかった。生命として自己を生かすことなど出来なかった。生きていないのだから当然だ。しかし、デクスドルゴラモンはそれでも活動生きし続けようとして、死んでいるのに活動を続けるといふ矛盾を解消するための莫大なエネルギーを得るだけの、他者の命を喰らい続けるバケモノとなった。

だが、これはそれとも違う。いや、これはデクスドルゴラモンの特性を受け継いで、しかし、ドルモン生命データが失われたことでそれさえ超越してしまっただけだ。

「生命デジモンではなく、生命動くの名残死体ですらない、死プをもたらずラだけの法則ム。」

他人に死を与えるだけの存在となった、ある意味で、死そのものと言ええる大災害。

故に個として生命としての名など意味はない。

現象であり、災害であり、概念であり、世界の理だからだ。だが、敢えて名をつけるのならば、こう言えるだろう。

死の化身——デクスモンと。

第四十一話く希望の光く

D. C. 2018 NEWデジタルワールド——スクールターミナル——

事情を知らない者たちは、それこそ悪夢としか言えなかった。突如として現れた謎の存在が、デジモンを狩り始めたのだ。その一瞬で、この未来世界は阿鼻叫喚の騒ぎとなった。

「た、助け——！」

「逃げろっ、遠くに逃げろ！」

「何なんだよお！」

「退けっ、さっさと前に進めよ！」

悲痛で、醜悪な、声が響き渡る。

いかに集団を良しとする社会を営んでいた者たちとはいえ、社会そのものが存亡の危機に陥ったせいだろう。集団の在り方を良しとして生死まで集団に任せられた者たちが、この極限状態に及んでその自らの選択を見失った——。

結果、個人にも集団にも依らない、どっちつかずの者たちの集まりとなっている。

烏合の衆と同じだ。

さらに、平和な世界で公平かつ公平な安寧を享受していた弊害だろう。

誰もが、戦おうとしない。

誰もが、抗おうとしない。

この社会の誰もがこの理不尽を認めずに、ただただ嘆いているだけだった。

「——！」

そんなだから、このバケモノデクスモンが好き勝手するのだ。

僅かにデクスドルゴラモンを思わせる頭部、爪や肩などが宙に浮くのみそのバケモノは命を喰らっていく。その命を刈り取る爪に傷をつけられた者はデジコアを残して消滅し、デジコアは引力に引かれるようにしてデクスモンに吸い込まれていく。

その度、その姿は徐々に大きくなっていき、一度に刈り取る命はさらに増える。

「――！」
この未来世界にいたデジモンたちが逃げ場を求めて逃げ惑う。だが、必死に逃げ惑う彼らは嘲笑われるかのように、死に追いつかれた者からその命を刈り取られるのだ。

「――！」
デジモンたちが消え、建物は崩れ、後には際限なく肥大していくデクスモンしか残らない。

時間が経てば経つほど、その腕が届く範囲が増える。破滅の手が届く範囲が増えていく。それが救いの手だったのならば、どれだけ良かったことか。

命が失われて、築き上げられた街が失われて、そしてそれに終わりは見えない。まさに絶望するに相応しい、世界の終わりのような光景だった。

そんな命が消え、ビルが消え、街が崩壊していく光景の中で、

「コータ！ 早くするのじゃ！」

「わかってるよ！」

コータとボコモンたちは死に追いつかれないように必死に逃げていた。

未だドルゴラモンが健在だったのならば、あるいはどうにか出来たのかもしれない。だが、現実にはドルゴラモンは敗北し、紆余曲折の奇跡の末にドルモンにまで退化してしまっている。

いや、生きているだけで良いと喜ぶべきなのだろうが、この状況だとそれも素直に喜べない。必死が喜びを打ち消してしまう。

「ぬぐぐ……！」

「コータツ、どうしたのじゃ！ さつきよりも遅くなつとるぞ！」

「ぐがあああああ！」

というか、今のドルモンは生きていられるだけで絶賛気絶中なので、コータが背負っている。何というか、重い。走り難い。

だから、この状況にあつて物凄い足でまといというか、邪魔な荷物

であった。

もちろん、コータにはドルモンを置いていくつもりは全くないのだが。しかし、重いものは重いし、逃げにくいことは逃げにくいのだ。

「うっ、腕が来とるぞー！ 走れえー！」

「お前はいいよなあー！」 つい、コータは言ってしまった。

まあ、コータがそう言うのも無理はない。

なにせ、今のボコモンは彼らの中で一番楽をしているのだから。

「わしだって十分キツいんじゃないぞー」

「どこがつー」思わず、コータはツツコミを入れた。何度目かの危機ということもあつてか、彼もだいぶ余裕がある。いや、状況的な余裕は全くないのだが。

「どこがつて、……こやつ慣れてないからか、全然走れんのじゃい。せつかくわしが手綱を握つとるのに！」

「……」

コータは哀れみを込めて、ボコモンの下を見た。

ボコモンの下にいるのは、そう——トコモンである。

トコモンのその触覚を手綱のように握り締めたボコモンは、まるで馬にでも乗るように小さな背中に跨っている。

見た目には、それこそ小さな子を虐めているようにしか見えない。だが、この極限状況で逃げるといふ選択肢しかない小さな子トコモンは必死に足を動かすしかないのだ。

「ハイヤーっ、ハイヤーっじゃー！」

「アウア、アウアアウ！」

そのうろ覚えの掛け声か、あるいは馬扱いされていることか、トコモンの機嫌は下降の一途を辿っていた。というか、後でボコモンを殺しそうな雰囲気さえある。

だがしかし、生死がかかっているため、文句しか言えない。振り落とそうにも、頭の触覚が手綱のようになりと握られているため、振り落とせない。

だからこそ、仕方なくトコモンは頑張つて走る。彼のことを知る者たちが今の彼を見れば、二度見をした後に自分の頭の異常を疑い、最

後に大爆笑しながら馬鹿にすることになるだろう。

これは、それほどの光景だった。

「つく、割とキツ……」

そうやってコータは余所に気を回して少しは気を紛らわせられたが、それでも身体から聴こえてくる体力の悲鳴はうるさく耳に届いていた。

普段の彼ならばもう少し速い速度で走っても、もうちょっとは保つだろう。だが、ドルモンという荷物を背負いながらでは、体力の減りも早い。

「コータあ！ しつかりせんか！ お前さんが死んだら背負ってるやつも一緒に死ぬぞ！ お前さんの生きる意志はその程度のものなんかあー！」

「ぐぐ、わかってるよー！」

ボコモンの叱責も飛ぶ中、必死にコータは脚を動かす。ゆっくりとだが、しかし、確かに景色が流れていく。

一瞬だけ、コータは周囲の景色が歪んで見えた。いや、景色が揺れた。

違う。ついに、

「のわっ」

限界が来たのだ。

足を縫れさせてしまい、コータは盛大に転ける。ほんの少しの衝撃が彼を襲う。普段ならば即座に立ち上がれるほどのこの状況でも、今の彼では難しい。何とか即座に立ち上がったって、一度止まってしまった身体は上手く動かなかった。

ドルモンを何とか背負い直し、再び足を動かす。

だが、

「……つくー！」

周囲の景色は、まるで動かない。亀の歩みのようにしか、動いていない。

「コーター！」

今までにないほど焦った、ボコモンの声がコータの耳に届いた。

それと同時に、彼は悪寒を感じる。
後ろを振り向くまでもない。そこに、ある。あの死をもたらす爪が。

「っ！」

だけど、コータは足を動かす。

その相棒を背負う手を離さず、無駄な足掻きをする。その手を離せば、あるいは別の結果があるかもしれないのに。

「まだ……」

コータは足を動かす。

もはや体力も底をつき、火事場の馬鹿力などの介入する余地もなく、その行為は無意味であることは明白なのに。

「まだ——！」

コータは足を動かし続ける。

希望は儂い。諦めなければ奇跡が起こると、そんなはずはない。世界は、現実には、そんな甘いものではない。それを知っているはずなのに、彼は諦めない。

「……」

生きていたいから諦めない？ 実に愚かしいことだ。目の前に死があつて、事を諦めなければならぬ段階にあつて、諦めなければどうなるというのか。死ぬだけだ。

奇跡は起きないし、

「……」

死は訪れる。

「……」

何もかもが無意味であるし、

「……」

無駄に終わる。

「アウ」

それでもいつだって、その光が当たり前の^{希望}のようにそんな道理を覆していくのだ。

その時、コータは光を見た。

「グランドクロス！」

十個の超高熱球が十字を作り、自分の背後へと高速で飛来したのだ。

爆風と光が世界に走り、コータは吹き飛ばされる。何が起こっているのか理解することもできず、彼は地面に叩きつけられた。

「ぐへっ」

それでも、痛み、疲れた身体を押しして周りを観察すれば――

「さて」

――そこには、光が降臨していた。

そこにいたのは光、否、天使だった。十二枚の羽根を持つ、金髪の少年だ。

「君は――」

唐突な登場に唾然とするしかないコータの前で、その天使は名乗る。

「……僕はルーチェモン。ま、君たちには楽しませてもらった借りもあるし、特別に助けてあげるよ。ルーチェモン様と呼んでくれて構わないよ」

「ルーチェ、モン？」

「それとも何かかな？　アウアウ言わなきゃいけないかい？　君たちは阿呆だけど、そんな虫ケラみたいな脳みそしか持ってないのかな？」
そう言ったルーチェモンはどこかで見たような、その容姿に似合わない嘲笑を浮かべた。

その意味を、コータは余さず理解する。

「お――」　コータが口を開いた、その瞬間のことだった。

「さすがにこれくらいじゃどうにもならないか」

ルーチェモンの表情が苦渋に満ちたものになる。彼は遠くより迫り来るあの爪を見た。

「忌々しい。世界を滅ぼす？　それは僕の役目なのに」

再度、ルーチェモンは超高熱球を作り出し、放つ。

「グランドクロス！」

並みの究極体の必殺技を軽く凌ぐ威力のそれも、しかし、デクスモンには通じない。今度は先ほどのようにはいかないとばかりに、爪が十個の超高熱球をまとめて切り裂いた。

「ほんつとうに忌々しいな……！」

軽く苛立った様子で、ルーチェモンは霧散していく自分の技を見る。

だが、彼はやるべきことを思い出したのだろう。すぐさまコータたちを抱き抱えると、飛んだ。

「……ま、あの女の思い通りになるのは癪だけど」

「おい、トコモン!」

「ルーチェモン様と呼べ」

言いながら、ルーチェモンは空間に穴を開ける。

そして、何処か遠くに繋がっているのだろうそこに、彼はコータたちを投げ入れた。

「この先にすべてを知る者がいる。ま、彼に殺されなければだけど……君たちは知るべきだ。あらゆる何故の原因を。そして、君自身の存在を。そうしなければ、答えには辿り着けない」

「トツ——」

「時間稼ぎはしてやる。この僕に時間稼ぎをさせるなんて、全部済んだら殺してやるからな」

穴が閉じていく。コータの視界からルーチェモンの姿が消えていく。

最後に彼が聞いた声は、

「ああ、あの女には気をつけるんだね。あのババアは手足をもがれたくせに頭だけ使って状況を整える性悪女だからね」

軽蔑の感情を隠そうともしない、心のこもった声だった。

D・C・2018 地球——日本・東京——

世界でも有数の大都会、人々が忙しなく行き交うその都市の片隅、
「つく、会議まで時間が……！」

カフェの席を陣取って仕事をする茶髪の青年がいた。

パソコンを使って必死に資料作成している彼は、それはもう忙しうだった。

「こういう時アイツが羨ましいなあ！」

何度目になるかもわからないブラックコーヒーを胃に流し込んだ彼は、脳裏に外国に居る銀髪の友人を思い浮かべる。

起業して大成功した「らしい」友人は一流企業の社長となっている「らしく」、自分のように下っ端業務などしてないのだろう、と彼は内心で涙を流す。

ちなみに、曖昧な表現なのは彼自身よく知らないためだ。まあ、それでも嘘をつくような友人ではないので、ほとんど真実なのだろうと彼は確信していた。

「って、そんなこと考えてる場合じゃない！ あと一時間で資料を……メール……？」

そんな彼の下に、一通のメールが来る。

「まつ、まさか会議の時間が早まったとかっ？」

まあ、差出人不明という時点でそんな訳はないのだが。

怪しいメールではあるが、ウイルスなどはないようで、青年は恐るメールを開く。

「っ」

瞬間、彼が絶えず持ち歩いている「手のひらサイズのカードのような小型機械」が熱を持った。

その意味を、彼はすぐさま理解した。

「っ、ああもう！ クビにならないといいなあ！」

メールを見る。文字化けしていて読めたものではないが、何故か彼はそれが読めた。

——黒の到達者のパートナーよ。今再び、助力を願いたい。この世界の為に、未来の為に、命の為に。

「呼ばれてる、んだよな。アイツは……無理かな？」

このことを唯一話せるあの銀髪の友人に、行方不明になるが心配しないでくれという旨のメールを送った。

そして、彼は確かめるようにその小型機械をギュツと握り締めた。

壊れるくらい、ギョツと。

——「感謝する。人間の子よ」

パソコンの画面から風が吹いた。

風と共に声が聞こえた。

聞き覚えのない声だ。それでも、青年はその声に返す。

「もう子供って歳じゃないよ。でも」

あの時から十五年は経っている。いろいろあった。あの頃の自分と今の自分は違う。しかし、それでも呼ばれたというその意味を彼はわかつている。

「子供だろうと大人だろうとオレはオレ。もう一度、アイツと共に生きられるのなら——！」

彼は笑う。

不安はある。だが、それ以上に友達に会えることが楽しみだから。

「行こう！」

だから、彼は笑って向かうのだ。

自分の世界とは全く違う、命の危険さえある世界へ。

そうして、風に連れられて一人の青年がこの地球上から消えた。

第四章：NEWデジタルワールドの死 第四十二話〈終末の時〉

D・C・2018 NEWデジタルワールド？

不意に、コータは気づいた。

「……………」

自分が何者かに声をかけられていることに。

そこで初めて、彼は自分が目を閉じていることに気がついた。気絶していたのか、はたまた眠っていたのか、それくらいしか起き上がりのぼんやりとした頭では思いつかない。

とりあえず危機的状況ではないらしい、とそこで彼はゆったりと目を覚まそうとした。

目を覚まそうとして、

「……………」

彼は感じた。

自分は誰かに揺すられている、と。

よほど自分を起こそうとしているらしい、とコータは目を開く。

開こうとして、

「……………」

彼は腹部に鈍い衝撃を感じた。

誰かに腹を殴られている。いつだったかこんなことがあったな、と腹立たしさを覚えながら、彼は意識を覚醒させた。

腹に感じる痛みを無視して、目を開ける。

「またか」

彼の目の前は、目を開けたというのに真っ暗だった。

頭が万力で締められたかのようにギリギリと痛い。身体が金縛りにあつたかのように重い。

そこまで認識して、彼はやっと気づいた。

「ふっ」

笑いが堪えられない。

いつかと同じようなこの状況に笑えてしまったのだ。

だから、いつかと同じように彼は全身全霊で――。

「おらあつ」

――目の前をぶん殴った。

「ぐへらっ」

鈍い声が彼の耳に届く。

彼の視界が開ける。頭にあつた痛みが引く。身体に乗っていた重さがなくなる。

自由になつた身体を彼は享受した。まあ、見える光景は夜と見間違うほどに暗いのだが。

「おはよう」コータは目の前の馬鹿ドルモンに言う。

「……痛い」

ドルモンは相変わらず痛みを堪えるように蹲っていた。

「お前、起き抜けに何してんだよ」

「うるせー、だって起きなかつたんだから仕方ないだろー」

そう言つて軽く牙を剥くドルモンの姿に、コータは笑いを隠せなかつた。

もちろん、可笑しいから笑えるのではない。悲しいから笑えるのではない。

彼は嬉しいから笑えたのだ。もう二度と会えることもないはずだったのにまた会えたことが、目の前にドルモンが生きていると実感できることが、嬉しくて仕方なかつたのだ。

「無駄に怖がらせやがつて！」笑い過ぎて涙さえ出てきた。コータはぐしゃぐしゃにドルモンを撫で回す。いっそ痛いくらいに、その身体を触りまくる。

「ぬわあつ、痛い痛い！」

「うるせえつ、オレの方が痛いわ！」

そう言つて笑うコータが落ち着いたのは、この数分後のことだつた。

コータが落ち着き、改めて状況を確認することになる。

「お前、どのくらい覚えてるんだ？」

コータのその間に、ドルモンは首を傾げて腕を組んだ。そして、探るようにゆっくりと口を開く。

「えっと、……それが……うーん……確か……」

だが、記憶が混乱しているのか、それとも忘れてしまっているのか、口からは具体的な言葉は出てこない。

そんな頭の中を必死に掘り進んでいるようなドルモンを前に焦れつつも思ったのか、コータも手伝う。

「あの偉大なる皇帝と戦ったことは？」

「覚えてる」

「じゃあ、その時、お前は？」

「ドルガモンになった」

旧世界で、あの偉大なる皇帝インベリアルドラモンPMと戦ったことは覚えているらしい。確信を持ってドルモンは頷いた。

「オメガモンAlter-Sを倒したことは？」

「覚えてる。その時にドルグレモンになったよね。瞬殺されたけど」

現在世界で、ウオーグレイモンたちと共闘してオメガモンAlter-Sを倒したことも覚えているらしい。同じく確信を持ってドルモンは頷いた。

「赤の到達者と戦ったことは？」

「覚えてる」

「……メイカーモンのことは？」

「それも、覚えてる。究極体に進化できたけど、その後はずっと後味が悪かったよね」

過去世界での出来事、到達者やメイカーモン、タクティモンにあのトウエニストとのことも覚えているらしい。思い出して顔を歪めているドルモンの姿からも、それは伺えた。

「じゃあ、スクルドターミナルでのことは？」

「いよいよ本題だ。」

「スクルドターミナルにいたことは覚えてる。でも——」

そこまでしか覚えていない、と。

深く聞けば、ドルモンはローヤルベースに突入した辺りまでしか覚えておらず、そこから先は臆げながらにしか事態を覚えていないらしい。

何かと戦った、くらいしか言葉が出てこないようだった。

「どうなったんだ？」

ドルモンは何があったか、聞いた。

アグモンたちという例外はあるけれど、基本的にデジモンは退化することはない。なのに、ドルモンはドルゴラモンから退化している。

それだけでも何かあったことだけは明白。

ドルモンはその何かは決して良いことではなかったと理解していたが、聞かずにはいられなかった。

「そうだな。えっと——」

そして、コータは話し出す。

ローヤルベースでタイガーヴェスパモンを倒したことで、あの悪魔が現れたこと、悪魔との戦闘でドルモンが死んだこと、死のバケモノが生まれてしまったこと、そしてトコモンルーチェモンが逃がしてくれたこと。

その一切を話した。

「俺が死んだ……」

その中でも、やはりドルモンは自分が負けた——自分が死んだということにショックを受けたらしい。その恐怖を想像しているのか、彼は身体を震わせた。

「あの悪魔が企んでいたことがなかったら、俺はそのまま……つてことだよな」

「ドルモン——」

「複雑だなあ」

生き返ることができて、死んだままでなくて良かったという気持ちもある。

負けたことや相手の思うツボになってしまったことが悔しいという気持ちもある。

それらが複雑に湧き上がっては、ドルモンを震わせるのだ。

「コータ」

「ん？」

「もう二度と負けないよ」死な

「当たり前だろ」

何もできなかったコータも、為すすべなかつたドルモンも、心の中は同じだった。

D・C・2018 NEWデジタルワールド——スクルドターミナル——

コータたちが目を覚ました頃のことだ。

彼らがいなくなった後も、未来世界では未だ何も解決してはいなかった。

「——！」

デクスモンが爪を振るう。爪が振るわれる度に、多くの命が失われる。世界が崩れていく。

そんな中で、閃光が走った。ルーチェモンの攻撃だ。

「——！」

一瞬。

攻撃に反応したデクスモンの爪を躲すようにして、その閃光はデクスモンに突き刺さった。だが、効いていない。

「これもダメ、と。小手先の技じゃ通じない。かと言って大技は打ち消される。面倒だね」

既にルーチェモンは何度も攻撃をしていた。だが、未だ有効打を与えられてはいない。

無論、デクスモンもそれは同じ。だが、デクスモンの攻撃は即死も同然の能力を備えている。

相手の攻撃に当たってはいけないルーチェモンと、相手の攻撃が当たっても倒れないデクスモン。その両者の違いはかなり大きい。

「あれは僕のアレと同じ、いわゆる影法師——というわけでもないだろうけれど、それに類している。闇雲に攻撃したところで通じないか。僕を見下すほどのその図体、能力。気分が悪くなるな」

もはや見上げるほどの大きさまで巨大化したデクスモンを、ルー

チエモンは睨みつける。

「……力がいるね。理を壊すほどの力が」

例えば、到達者。

例えば、偉大なる者。

そういった普通のデジモンとは一線を画する者たちならば、あるいはこのデクスモンを真正面から打倒できるかもしれない。

だが、無いものねだりだ。

ルーチエモンは普通のデジモンよりも強いが、そういった位にいる訳ではない。

「本当、僕を下す能力を持つ者がいるってだけで苛立つのに」

「……」

「おつと危ない」

振るわれた爪を、ルーチエモンは躲す。

躲された爪はその先で何体か逃げ惑っていたデジモンたちを殺したようだったが、ルーチエモンは気にせずデクスモンを伺っていた。

「幸い、あれは到達者でも偉大なる者でもない、プログラム法則の類。であれば、攻略法はある。見つける必要があるな。全くこの僕がそんな狡いことをしなければならぬなんて。そういうのは三下の役目だろうに」
ルーチエモンは頭上から迫る爪を飛んで躲した。そのまま飛行して、回避に専念し出した。

一方で攻撃されなくなったことで攻撃しやすくなったのだろう。デクスモンの爪撃が激しさを増す。

激しくなる中、それをものともせずルーチエモンは素早く回避していく。上下左右縦横無尽に飛び回り、華麗に躲す。

だが、

「あつ、僕の羽が……」

荒い回避を続けているからだろうか。何度となく羽が舞い散った。その度にルーチエモンは顔を歪ませる。

「……」

しかし、相手の力がわかっているからこそ、ルーチエモンは怒り

狂って攻撃することはない。これがどこぞの有象無象であったのなら、彼は一秒と立たずにその相手を塵に変えてしまおうのだが。

だが、やはり怒りによって行動が単純となってしまうのだろうか。右から来た爪を避けるべく急降下したルーチェモンのその先に――

「――！」

――もう片方の爪が迫る。

躲すには、遅過ぎる。

「つくうー！」

こんなところでこんなやつにやられることを、ルーチェモンは自分のプライドが許さなかった。

だから、彼は無理矢理に動く。彼はそのまま地面に激突することで、爪を躲した。

「っ。こういうのは僕のキャラじゃないんだけどな。あいつらの醜さが伝染ったか……！」

怒りを滲ませながら、息絶え絶えに立ち上がる。

今の回避は、どんな形であれ助かれば良いという優雅さの欠片もないものだった。言うなれば、彼が嫌うみっともない躲し方だ。ストレスが限界に近づいていた。

「我慢も限界だね」

というか、限界だった。

正直なところ、ルーチェモンは気がついていた。デクスモンの攻略法――デクスモンの在り方、あるいはその法則とでも言うべきものに。

ただ、それがあんまりにもあんまりなものだったから、いずれのことも考えて別の方法を探していたのだ。それをやれば、下手をすれば自分がデクスモンの立場にすげ替えてしまうが故に。

「この僕がここまで我慢してやったんだ。あいつら後で絶対に殺してやる――！」

デクスモンの攻略法は実に単純なものだ。

生物の存在生きるするために他者を犠牲犠牲にする在り方の具現、それがデクスモンだ。だからこそ、デクスモンは存在する限りデジモン命を喰らい続ける。他の命がある限り、デクスモンは存在し活動を続ける。

だが、しかし、それは逆に言えば。

「まだしぶとく生き残ってる連中もあれを倒すための贄となれるんだ。他の世界の平和の礎となれるんだから光栄だろう？」

他者がいなければ生命は生きられないという生命の当たり前を、デクスモンもそのまま受け継いでいることになる。

つまり、喰らうべき命がなければデクスモンは存在できない。

そこから導き出されるデクスモンの攻略法、それは――

「さあ、覚悟してもらおうよ」

――その世界に生きるすべての命を滅ぼすことだ。

だからこそ、世界に終末が訪れる。

黙示の竜が顕現する。

第四十三話く黙示録の竜く

D・C・2018 NEWデジタルワールド？

コータたちは会話を続ける。

まあ、一方的にコータがドルモンに説明していくだけで、時折ドルモンが質問するという感じをとっていたのだが——何はともあれ、その甲斐もあってほしい。此処に至るまでの経緯は話せた。

経緯はわかった。であれば、次に気になるのは、

「で、ここどこ？」とドルモンは座ったままで辺りを見回しながら聞いた。

場所についてである。

見回せば辺りは真っ暗だ。かろうじて少し先くらいまでは見えるが、その先は見通せない。

天には輝ける星は一つとしてなく、地面は不毛の大地とばかりの荒野が続いている。そして、その唯一視認できる大地すらも、しばらく進んだ先で暗闇に吞まれて消えている。

真っ暗だからといって、ここは洞窟の中とかそういうことでもなさそう——まさにここは闇の世界というに相応しい世界だった。

「ここは……」

「ここは？」

「オレにもわからん」

コータの言葉に、ガクツとドルモンは肩を落とした。

「なんでわからないんだよお！」

「いや、オレだって穴に投げ込まれてから気絶してたんだぞ！」

「穴ー？」

「それからお前に叩き起されたんだ。ここがどこかなんて知ってるはずないだろ」

旧世界とも、過去世界とも、現在世界とも、未来世界とも違う、どこか。

推測するにしても情報が少な過ぎる。というか、新旧両世界以外の世界——それこそ御伽噺に聞く異世界とかに飛ばされていたとした

ら、コータたちに自力で判別する術はない。

結局、わからないのだ。

「あーあ、せっかく究極体にまで進化したのになあ」

一通りの情報共有が終わって、現状を何とか認識したドルモンはスコ座りしながら嘆いた。

実にリラックスしている様子でいるのは良いのだが、骨格的にどうやって座っているのか。

まあ、気にしないことにして、

「……メイクーモンにも申し訳ないしな」

コータはそう返答した。

「だよねえ。はあ」

ドルモンは溜息を吐く。

せっかくある程度の実力が付いて戦闘面での不安はなくなったのに、ここに来て初期化である。しかも、生死のかかる戦闘の多いこの時世で。

ドルモンではなくとも誰だって嘆くし、いくら嘆いても嘆き足りないことだろう。

「ま、嘆いたって仕方がないんだけどな。生きているだけで儲け物だろ」とコータが気休めにもならないことを言う。

「それはそうだけど。失ったものの大きさを考えれば、ねえ？」

「はは、贅沢になったよなあ」

生きている事実だけに満足せず、それ以外を求める。それは贅沢なことだ。特に、この極限状態に陥ることが多い今の世界ならば尚更。それでも、まあ、悪い気はしなくてコータは笑う。

「それじゃあ、いつまでもこうしているわけにもいかないし、行くか」「そうだね。これからどうするの？」

「そうだな。トコモンの話だと、オレたちはいろいろと知らなければいけないみたいだ。そして、その諸々を知ってるやつがここにいるらしい」

「ここ、にねえ」

ドルモンは辺りを見渡した。

相変わらず暗い。彼らが目を覚ましてからしばらく時間が経ったはずだが、それでも辺りに変化はない。明るくなることもなければ、逆に暗くなることもない。どうやら、この世界はこの暗さで固定されているようだった。

「なんか気が滅入るといふか、あんまり居たくない場所だね」

ドルモンがそう言うと、コータも「そうだな」と頷く。

「ねえ、コータは知りたい？ そのいろいろを」

そんな周りに振り回されるのなんて気分良くないし、というか、ここにはいたくないし、きつさとこんなところ出てこうぜ！ とドルモンのそんな心の声が聞こえた気がした。

「……そうだな」

コータは考え込むように腕を組む。確かにドルモンの考えているだろうことも一理ある。

だが、しかし、彼は思うのだ。

「多分、知りたい。いや、知らなきゃならない。無知は罪だつて言うけどさ、問題が目の前にあるのに考えないのも、答えがあるのに知ろうとしないのも、きつとダメなことだ」

永遠に今という時間に留まるのなら、今のままでいいだろう。だけど、生き物に永遠など有り得ない。どんな生物にも、未来は来る。

未来に進むためには、今のままではいられない。例え今のままがよくても、未来は来る。今のままでいようとしたら、やがて来た未来に押し潰される。

未来に進むためには、常に自分をアップデートしていかなければならない。適応させていかなければならない。

面倒だからと、嫌だからと、そんな自分の都合が通じるはずもない。「きつと知らなきゃ前に進めない。未来にはいけない。……オレは生きたいんだ。目を閉じて耳を塞いで、そんな死んだも同然で在りたくない」

「……だから、行くんだ？」

「ああ。そりゃ、周囲に振り回されてるのなんて薄気味悪いけどさ。

今度はこっちが振り回せるくらい、何もかも知ってやろう！」
そう言つてコータは笑う。

ドルモンも「おう！」と力強く返した。

「ま、コータにそれだけの頭はないけどね」

「それはお前も同じだろーが！」

そう言つて笑い合いながら、コータとドルモンは立ち上がつて歩き出した。

「ところで、どこにどうやっていけばいいの？」

先行きは不安しかなかったが。

D・C・2018 NEWデジタルワールド——スクルドターミ

ナル——

一方その頃。

それは今は無き旧世界、デジタルワールドに語り継がれていたモノ。
ありとあらゆる世界の“終わり”について書かれた書物——黙示

録。

元々、力ある者が多いデジタルワールドだ。黙示録に書かれている世界を滅ぼす要因となるのも環境や自然的なものではなく、その多くが邪悪なる者だった。

もちろん、黙示録の中には偉大なる者や到達者も書かれている。善なる者だけが、偉大なる者や到達者とは限らないが故に。

だが、しかし、黙示録の最後にはこう書かれている。

——全てが無に帰す終わりの時代、あらゆる偉大なる者が、あらゆる到達者が、あらゆる歴史が消え去った後に残る最後の時代。

——過去への情景を以て、子等は希望を燃やして再びの栄光のために未来を目指す。

——その時こそ、七つの罪源を奪った傲慢なる竜は現れる。

——最後の到達者、最後の偉大なる者、古き時代の楔としてこの世に顕現する。

——魔王の名を継ぐ光、それこそがこの魔神である。

偉大なる者も到達者も、その位が意味を失った遙かな未来の時代、そこに現れる最後の破滅の因子。

さて、世界の終わりの要因だけが書かれている黙示録だが、本来は世界守護の予言や預言の書物も別にあり、黙示録はそれらとセットだったというのが旧世界に住んでいた賢人たちの定説だった。

理想の名を冠する到達者に対応した、青の到達者がいたように。故に、最後の竜と対応する者もいるのだろう、と賢人たちは考えていた。

同様に光を名を持つ天使を倒した最初の十か、あるいは同じく光の名を持つ墮天使を殺した偉大なる破壊神か。

そういった者がいなくなつた時代に現れるのだろうか、だから対応する者もない、真正正銘の世界の最後なのではないか——そんな反論によつて議論は盛んになるのだが、それはほんの余談。

何はともあれ、今において重要なのは、

「さあ、世界を滅ぼそうか」

時代を数万年ほど先取りして現れただろうその最後の竜——頭上に七つの大罪の冠を抱き、地獄の具現である暗黒の球体を抱える、竜——ルーチェモン：サタンモードが命を守るために世界を滅ぼすということである。

「こりゃあー！ 何をしとるんじやいー！」

何気に生き残っていたらしいボコモンの叫びも、ルーチェモン：サタンモードは聞き入れない。

というか、命を滅ぼす者と世界を滅ぼす者が争つたところで、どちらが残つても世界を滅亡させる者が残るだけだ。無意味というか、目的を失っているというか。

「お前さん、そこまでせんでもいいじやろーが！」

地団駄を踏みながらのボコモンの言葉に、ようやくルーチェモン：サタンモードは答える。

「指図される謂れはないなあ。僕がいつその気になるかなんて、僕が決めることさ」

もちろん、この時代ではルーチェモン：サタンモードに比肩する実

力者は未だ絶滅していない。

だから、彼としても無駄な労力を使う気にもなれず、その時ではないとずっと先送りにしていた。

それでも、今こうして顕現したのは――

「ま、アレにいずれ僕のものになる世界を滅茶苦茶に作り替えられるも鬱陶しいし」

――彼にとつても、この旅に思うところがあつたからなのだろう。

「アウアウ！ ……なんてね。パーガトリアルフレイム！」

まさにドラゴンブレス。竜というもののイメージ通り、その口から吐き出された業炎が世界を焼き払いながら突き進む。

射線上にある何もかもを破壊し、焼き尽くし、浄化して突き進んでいく炎がデクスモンを襲う。

「――！」

さすがのデクスモンも、自分と同レベルの世界を滅ぼす者の一撃は効くらしい。

両腕の爪が炎を切り裂き、霧散させ、防ぐ。だが、それだけだ。その爪は炎を超えてルーチェモン：サタンモードまで届くことはない。

「ははは！ ……気分がいいなあ！ 動けないだろう？ 自分が活動停止するその瞬間を、見ていることしかできないだろう？ ああ、君が生

物じゃないのが残念だよ」

生物であつたのなら良い顔をしてくれただろうに、とルーチェモン：サタンモードは残念がりながら次の行動へと移行する。

口からの攻撃でデクスモンは動けない。つまり、邪魔はされない。で、あるならば、

「同時発動とか。ずいぶんと気に食わないが……ま、あれを^死圧倒できると思えば少しはマシか」

今こそがその時だ。

「『ダイバインアトーンメント』！」

頭上の七つの冠から光が放たれる。ルーチェモン：サタンモードを中心として放たれた光は放射状に突き進み、存在するあらゆるものを消滅させていく。

第四十四話く現在位置く

D. C. 2018 NEWデジタルワールド?

さて、とりあえず進むことにしたコータたちだが――

「どうすりゃいいんだよ」

「どうすればいいんだろうねえ」

――早くも詰まっていた。

まあ、自分の周囲しか見渡せないような暗闇の世界の中にいるのだから、当然である。方向を示すものは何もなく、目立つ目印もない。目印も何もない場所では、真っ直ぐに進んでいくことさえ至難の業だ。

だから、人間の世界では毎年のように山で遭難者が出るのである。まあ、山の場合はまだいい。星の動きや太陽の動きでまだ方向だけは分かるのだから。

だが、この暗闇の世界ではそれもない。

どうやって進めば進んでいけるのかさえもわからない場所な上、そもそも目的地すらはつきりとしていない。まさに八方塞がりである。というか、このままではこの場所を攻略することができなくて人生に詰みそうなほどだ。

「とりあえず進んでみる?」

「そうだな」

ドルモンの提案に頷き、コータは歩き出す。

だが、

「なあ」

だが、

「うん」

だが、

「進めてるか?」

「わかんない」

だが、どれだけ歩いてても景色が変わらないから、進めているという感覚が無い。

そうして、

「どうすりゃいいんだよ」

「どうすればいいんだらうねえ」

とここに戻るわけである。

そんなことが先ほどから十回ほど続いていた。いい加減、何とかしたいとは切に願う彼らだが、未だ有効な案を思いつかないのが現状だった。

「こういう時こそものしりブックの出番だろうが……！」

仲間が持つチート本の存在を思い出して、コータは頭を抱えて震える。実際、それを持つボコモンはここにはいなかった。

おそらく、未だ未来世界にいるのだらう。デクスモンの脅威がある場所に。

まあ、ボコモンを始めとした友人たちはそんな危険地帯にいるわけだが、彼らは何だかんだと要領よく生き残っているため、あまり心配はしていない。

というか、彼らが死ぬところなどコータには想像できなかった。

「そういうえば、こういう時こそそのボコモンだよ。いつもくつついて来てたくせに、どうしてこういう時だけいないのかなあ」ドルモンはだらんと尻尾を垂れ下げながら言った。

「ものしりブックさえあればな。まあ、一度も見せてくれないわけだけど。あれ、本当に便利だよな。オレも欲しいわ」

「俺だって欲しいよ」

まあ、あつたところでのこの暗闇の中では読めるかどうかすら怪しいのだが。

「仕方ない、進むか」

「うん」

コータの鶴の一声で、また歩き出す。

まあ、数分も歩かないうちに、

「どうすりゃいいんだよ」

「どうすればいいんだらうねえ」

そこに戻るのだが。

彼らが先に進むのは未だ先の話になりそうだった。

D・C・2018 NEWデジタルワールド

一方その頃のことだ。

ルーチェモン：サタンモードの「消滅の光」によつて、未来世界スクルドターミナルは滅びた。

何もかもがなくなった。街にいた数々のデジモンたちも、栄華を誇るほどに発展した都市も、それらの基盤となる大地や空も、何もかもが消滅してなくなった。

文字通り、未来世界は滅びたのである。

「はっはっはっ。どんなものだ！ 何がデクスだ！ 何が死だ！ 所詮はこの僕に勝てるものはいないんだよ！」

世界の狭間、僅かに過去世界と現在世界が点として見えるその場所
で——ルーチェモン：サタンモードは高笑う。

「気分がいい！ かつてあの女が手を焼いたアレをこの僕があつさりと倒してしまった！ これはもう僕がその座を篡奪するべきでは？ この混沌に乗じて僕が漁夫の利を得る——……ああ、甘美な誘惑だね」

まだ生きている未来世界を滅ぼしておいてこれだけご機嫌になれるのだから、さすがは魔神と言うべきか。

だが、しかし、そんな彼の機嫌はすぐに急降下する。
なぜならば——

「——！」

——そこに未だ活動状態のデクスモンがいたからだ。

「……忌々しい。なるほどね。さすがにそう上手くはいかないと。さすがは偉大なる者、対策もバツチリということか」

ここにはいない者を思い浮かべて、ルーチェモン：サタンモードは苦虫を噛み潰したような声を上げる。

だが、そんな彼の様子を気にした風もなく、またそんな生物らしきもなく、デクスモンは目の前にいるルーチェモン：サタンモードに襲いかかった。

「――！」

「いい加減、消えろよ！」

襲いかかってくるデクスモンを前に、ルーチェモン：サタンモードも応戦する。

ルーチェモン：サタンモードが吐き出した炎をその身に受けながらも、その身が傷つくことも厭わずに迫るデクスモン。

「――！」

「……！」

竜と死が取っ組み合う。浄化の炎に包まれながらも、それさえも決定打にならずに炎の中で両者は取っ組み合う。

「こいつ、まだ出力が上がって？」

だが、ルーチェモン：サタンモードには一つ不利な点がある。

同じ世界を滅ぼす力を持った同士でも、

「違う、これはあれの力が後押しを――つく！」

この戦いは一対一ではない。

デクスモンに負けてもらっては、消えてもらっては困ると力を貸すものがいたのだ。

その何者かがいるから、未来世界滅亡の際に活動を停止するはずのデクスモンは未だ活動を続けている。

その何者かがいるから、死の化身は黙示録の竜さえ容易く殺せる。

「――！」

デクスモンの爪が、ついに竜を切り裂く。

「つく、外装を剥がされた？　だが、まだ！」

とはいえ、ルーチェモン：サタンモードはまだ負けてはいない。

ルーチェモン：サタンモード――黙示録の竜。竜とは力の現れ。多くの者たちが抱く強大な力としてのイメージを、ルーチェモン自身が選び、具現化したもの。だからこそ、この竜の部分は外装であり、影に過ぎない。

その本体は、竜が抱く暗黒球体ゲヘナの中にある。

地獄そのものであるからこそ、地獄の責め苦にも劣るあらゆる攻撃が効かないと、あらゆる攻撃を防ぐ球体。それは盾ではなく、本体を

守る要塞だ。

いくら影が削られようと、所詮は影。本体——蛹のような姿のルーチェモン：ラルバが無事ならば、いくらでもやり直しが効く。

「——！」
だが、そんなことはデクスモン、ひいてはその後ろにいる何者かも知っていたのだらう。

デクスモンの口に緑色の閃光が光る。

それは、デクスモンの性質——あらゆる生命を探知し、殺し、その核を奪い、得た核を内部で分解し、二度と再構築できないようにする、その性質を集中させたもの。

デジモンの必殺技と同じ、できることを最大でやること。皮肉なことだった。デジモンですらないものが、デジモンと同じことをするのだから。

「——！」
放たれた緑の閃光。

槍の如く真っ直ぐに突き進み、極光の如き美しさを誇るそれは、しかし、ただの死の光で。

「つく、ああ、認めよう。憎たらしいほどに美しい光だ」
だが、しかし、それ故にとても美しい。

ルーチェモン：ラルバはその美しさを特等席で見っていた。見ていることしかできなかつた。攻撃を担う竜の外装は剥がされ、修復中なのだから。

そして、暗黒球体ゲヘナに閃光が突き刺さる。あらゆる攻撃を防ぐ要塞とあらゆるものを殺す光がぶつかり合う。

それは矛盾の再現だった。しかし、時間の問題であることもルーチェモン：ラルバは感じ取っていた。

「——！」
「けど、死の美しさに心打たれるのと死を受け入れるのはまた別の話だ！」

いよいよ本格的に馬鹿共の顔が思い浮かんで、ルーチェモン：ラルバは足掻く。その無様さに自己嫌悪で死にそうになりながらも、暗黒

球体ゲヘナを爆発させる。

爆風によってルーチェモン：ラルバは吹っ飛んでいったのだった。

「――」
一方で、目の前の障害を排除したデクスモンは命からがら逃げ出したルーチェモンを追うように、あるいは他の命を目指してか、移動を開始する。命を刈るために移動する。

次に降り立つのは――。

D・C・2018 NEWデジタルワールド？

再びコータたち。

「……」

「……」

もはや無言だった。

別に無言になるほど疲れてなどいない。が、何も変わらぬ中を歩き続けていれば誰だっけこうなるだろう。あまりの変化の乏しさに心が何も感じなくなつて、言葉さえ出なくなるのである。

「……」

「……」

「……」
というか、太陽や星という天に動くものがないから、方向どころか正確な時間さえわからない。

「……」
どれだけの間ずっとこうして暗闇の中を歩いているのか、もはやコータたちにはわからない。

「……」

「……」

だからこそ、

「……」

「……」

「……」
逃すわけにはいかなかった。

コータとドルモンは僅かに頷き合う。

傍から見ているのなら、歩いていることによる頭の揺れと勘違いしてもおかしくないほどの、僅かな動き。だが、彼らは互いにそこに込

められた意図を読み取った。

そして、

「メタルキャノン！」

振り向きざまにドルモンが放つのは、鉄球。もはや懐かしさを感じるほどに弱々しい小さな鉄球、それがまっすぐに突き進んで暗闇の中に消えていく。

「んぎゃー！」

声が聞こえた。苦しそうな声だ。

この様子だと、上手いこと当たったらしい。コータたちは領いて、方向がずれていかなないように慎重に歩いていく。

幸い、真っ直ぐに歩けたらしい。それはすぐに見つかった。

「つぐうううううー！」

上手いこと鉄球がクリーンヒットしたのだろう。

地面に落ちて目を回しているコウモリがそこにはいた。

第一住人発見だ。

「捕まえろー！」

「あいあいさー！」

捕獲。

少し手荒だったかもしれないが、まあ、そこは気にしないことにした。

ずっと自分たちを付け回し、時には不気味に笑い——とこのピコデビモンがよからぬことを企んでいただろうことはコータたちも何となく察していた。

勘違いだったら謝ろう、と万が一を考えてコータたちはピコデビモンが起きるのを待つ。

「う、うーん」

少ししてピコデビモンは目を覚ました。

「あれ、オイラは……」

現状を確認する。

ドルモンにがちちりと羽を掴まれ、哀れにも捕獲されている自分の現状を。

「うつ、うえええええええ!!」

「よお」

「やあ」

やべーやべーとでも言いたげな内心の焦りを隠そうともせず、ピコデビモンはだらだらと汗を流していた。

何か良くないことを企んでいたことを確信しつつ、コータはピコデビモンを問い質す。

「いろいろと聞きたいことがあるけどさ」

「なっ、何も言うことはないゾ!」

「なんでオレたちの後をつけてた?」

「言うもんか!」

強情である。

思わず、ドルモンは羽を握る力が強くなった。いや、わざとではないが。

「いたたたたたたたたた!」

「ドルモン、お前……そんな拷問みたいな」

「わざとじゃないよ!」

わざとやったのではないのにそんな引かれては嫌だ、とドルモンは焦って弁明する。

まあ、焦ったからかまた力んでしまって、

「いたたたたたたた! 言う! 言う!」

ピコデビモンはさらに痛い思いをするのだが。

何にせよ、結果オーライである。

「いってえ……別にオイラは、このダークエリアに変な奴がいたから――」

「ちよつと待て」

「……?」

「ダークエリアって言ったか?」

「そうだゾ」

「ここが? ダークエリア?」

「だからそう言ってるんだゾ」

ダークエリア。それは、あらゆるデジタルワールドの廃棄場。数々の廃棄データ——さまざまな理由で存在できなくなった、あるいは残しておく価値はないと、未来に行けなかった過去の情報が記録される場所。

また、多くの悪魔や墮天使系デジモンなど、正常なデジタルワールドから追い出された者たちの流刑地でもある。

転じて、ダークエリアはデジタルワールドのあの世とさえ言われ、つまりはNEWデジタルワールドの外側の異世界の一つ。

まさかの場所に、コータたちは驚愕を隠せない。

「ええええええええええ！」

「ダークエリアあああああああ！」

「耳があああああああああ！」

そして、絶叫が辺りに響いたのだった。

第四十五話くダークエリアの事情く

D・C・2018 ダークエリア

ダークエリアなどという、ほとんどの者が伝聞でしか聞いたことのない世界に来てしまった。そのことにコータたちは驚きは隠せなかった。

一通り騒いで、コータたちがようやく落ち着いた――

「きゆう……」

――頃には、ずっと耳元で騒がれていたピコデビモンは瀕死だった。

「おーい、起きろー?」

ゆさゆさと振って、ドルモンはピコデビモンを叩き起こす。

その何が何でもな行動にコータは少し引いた。

まあ、そんなドルモンの行動の甲斐もあって、割とすぐにピコデビモンは起きるのだが。

「んああ……やっぱり外の連中は碌でもないんだゾ」

「まあまあ。仲良くし、なくてもいいけどいろいろと教えて欲しいだよ。オレたちとしては」

コータがそう言って笑えば、それが悪魔の笑みに思えたらしい。

ピコデビモンは震え上がって観念して、「何でも話すんだゾ」と言った。その様子は、大口を開けたドラゴンの前に放り出された生贄の娘の如く、といった感じだ。

「ここがダークエリアなのはわかった。オレたちはいろいろと知りたくて、いろいろと知ってるやつを探してるんだけど」

「あやふやすぎて何とも言えないんだゾ」

「その言い方じゃダメじゃない、コータ? とにかくたくさんのことを知ってる人に会いたいんだ」

「あんまり変わってないんだゾ!」

コータたちとしては説明が面倒だったから端折ったのだが、それで伝わるほどピコデビモンは理解能力に特化していない。

しかしながら、コータたちとしても自分で何かを知ろうと思っ

ここに来たのではなく、ルーチェモンによっていろいろを知れとここに来させられたわけで、具体的に何を知りたいのか説明しろと言われても難しかった。

「あのさ、オレたちも言われて来たんだ」

だから、とりあえずコータは端折った部分を改めて説明する。

「言われて？ 誰に言われたんだゾ」

「ルーチェモンに」

「ルルルルルル、ルーチェモン!？」

その名前を聞いた途端、ピコデビモンは面白いくらいに震え出した。携帯電話のマナーモード時の着信の如く震え上がる彼は、ルーチェモンの恐ろしさを正しく知っているのだろう。

一方で、トコモン⇨ルーチェモンなコータたちはその恐ろしさを正しく認識できていない部分がある。

彼らはピコデビモンがどうしてそんなに震えているのか、よくわからなかった。

「だって、ルーチェモンだゾ。ルーチェモン！ その名があらゆる場所に伝わる、最初の暴君！ 墮天の姿は七大魔王に数えられ、最後の姿は世界を滅ぼすと伝えられる、あのルーチェモンだゾ！」

「おお、意外と詳しいな……」

「ダークエリアじゃ情報は必須なんだゾ！」

「それはどこでも同じだと思うけど……——」

まあ、ダークエリアには私の強い者たちが多くいる。ついでにさまざまな権力者もいる。

それらがある種の勢力を作っていて、しかし、それらの中には国やテリトリーを持たない者もあるものだから、どこに地雷があるかわからない。少し歩けば、同じ空間にいるだけで死刑などというような理不尽に見舞われる、理不尽を見舞ってくる暴君に出くわす、それがこのダークエリアだ。

だから、ここににいる者たちはそのほとんどが権力や実力を持つ者の動向に詳しい、と自認している。

もちろん、どこの世界でも多かれ少なかれそういう面はあるのだ

が、ピコデビモンは無意識的に他世界よりもここの方がそういった面に厳しく、その面では自分たちよりも勝るものはないと考えている。まあ、この冷徹な世界に生きる者としての一種の自慢、プライドのよなものだ。

「ルーチェモンと知り合いなんて、お前ら何者なんだゾ……」

疲れたように呟かれた。ピコデビモンはこんな奴らに捕まってしまった自分の不運を嘆いたのだ。

一方で、思った以上に情報を知っていきそうなことに運が良いと笑い合ったコータとドルモンは、尋問を続けた。

「へえ。じゃあ、ルーチェモンの言っていた『すべてを知る者』って誰かわかるか？」

「すべてを知る者お？ そんな抽象的過ぎてわかんないんだゾ。というよりも、魔王レベルならいろいろと知っていて当たり前なんだゾ」
「……まあ、そりやそうかもしれないけど」

コータが困ったように頭を掻いた。見れば、ドルモンも困ったような曖昧な笑みを浮かべている。

やはり情報が足りない。

「つーか、お前らどこから来たんだゾ？」

そう言えば、と思い出したようにピコデビモンが聞いてきた。

「新世界……——NEWデジタルワールドからだけど」

「NEW、ってことはイグドラシルのデジタルワールドからか！」

驚いたようにピコデビモンは声を上げる。

そう、それが重要だった。このダークエリアは廃棄場という役割上、さまざまなデジタルワールドと繋がっている。

つまり、ピコデビモンとしてはコータたちがどんな世界から来たのかわからないのだ。

「イグドラシルのデジタルワールドは確か異変があったって聞くが……っ？」

「あ、ああ、Xプログラムの件だな」

「……」

ピコデビモンは考え込むように黙り込んだ。

小さなことで何か、「イグドラシルの暴挙——七大魔王の一人が知らないことを知る——とくれば——」と呟いている。

酷く聞き取りづらくてコータたちには少ししか聞き取れなかった、が、

「……オイラ、その『すべてを知る者』が誰かわかったかもしんねえ」

ピコデビモンは答えを出したようだった。

「え、本当か!？」

「ああ。けど……——」

だが、わかつたにしては、歯切れが悪い。

一体誰だというのか。少し様子のおかしいピコデビモンの姿に、コータとドルモンは訳がわからなくて顔を見合わせた。

「おかしいと思つてたんだゾ。『あの』ルーチェモンが寄越すなんて。でも、そう考えれば辻褄が……ああああ、厄介事なんだゾー!」

「おい?」

「大丈夫?」

何だか錯乱した様子のピコデビモンは、やがて諦めたように落ち着きを取り戻した。

そして、その者を口にする。

「ルーチェモンが言ったのは、たぶん、グランドラクモン様なんだゾ」
グランドラクモン——それは、七大魔王でさえ手を出せない怪物。

そして、偉大なる者の一人。偉大なる吸血鬼。

D・C・2018 NEWデジタルワールド——ベルサンディ
ターミナル——

その時、レジスタンスは緊急会議を開いていた。

「一体どうなっているんだ!」

この緊急事態で声を荒げるのは、レジスタンスのメンバーの一人——
オオクワモンX抗体
——灰色のクワガタだ。

「わからない」

一方で、それに対して力なく首を横に振ったのは、このレジスタンスのリーダーの一人——ウォーグレイモンX抗体である。

「分からないで済むわけねーだろ！ スクルドが滅びたんだぞ！ スクルドの次はこのベルサンデイかもしれないんだぞ！ 何か情報はねえのか！」

「すまない、ないんだ。突然、スクルドは滅びた。何かがあったのはわかるけど、何があったのかはわからないんだ」

オオクワモンX抗体だけじゃない。最近レジスタンスに参加してくれるようになった何匹かの通常デジモンも、元々レジスタンスにいたX抗体デジモンたちも、全員が不安そうにしていた。

それも当然だろう。

既に廃棄された世界である旧世界が崩壊したのとは訳が違う。絶賛稼働中の世界が滅びたのだ。誰もが何か起きていると感じ取るには十分な出来事だ。

「っ、だから何かしなけりゃいけないんだろうが！ ええ!? オレ様たちがテメエらに力を貸してやってる理由くらいわかってんだろが！」

「もちろんだ」

「なら、わかんねえとかで済ませんなよ！ 何か案を出せよ！」

オオクワモンX抗体は不安と焦りのあまり、滅茶苦茶なことを言っている。誰もがそれをわかっていたが、しかし、指摘しなかった。

指摘できなかつたのではない。不安と焦りに押し潰されそうになる気持ちが理解できたから、しなかつたのだ。

「落ち着いてくれ」

その時、第三者の声が響き渡った。

魔術によつて全員に聞かせるように声を響かせたその者は、最近レジスタンスに参加したデジモン。魔術師のような人形姿の成熟期デジモン——ウイザーモンだ。

「アグモンとガブモンからの報告を受け取った。彼らはまた情報収集に向かっているが……」

「あいつらか。信頼できる情報なのかよ！」

「今はそれしか情報がない。彼らは命懸けで情報を得て来てくれたのだ。情報の精査は我々の役目ではないのか？」

「そういうことを言ってるんじゃないやねえよ！」

「では、どういうことだ？」

ウィザーモンの言葉に、オオクワモンX抗体は黙り込んだ。口喧嘩で負けたことがあって、それから彼はウィザーモンを苦手としているのだ。力で劣っているくせに、それ以外で自分に勝るウィザーモンがオオクワモンX抗体は嫌いなのである。

「では、伝えよう。ウルドに向かっていたアグモンとガブモンだが、先日帰還したのは皆も承知していると思う。彼らは現地でスカウトした者が何者かによつて攫われたと、ベルサンディに辿り着けたものすぐにスクルドに向かったらしい」

「は？ ほっとけよ」オオクワモンX抗体が茶々を入れるが、ウィザーモンは気にしない。

「スクルドに到着する直前、彼らはスクルドが滅びる瞬間を見たとのことだ」

「……！」

誰もが息を呑んだ。

今から聞く情報は重要なものであるということが、否応なしにわかった。

「スクルドを滅ぼしたのは、竜だそうだ。そして、それが戦っていた相手が——」

「相手が？」

「死の化身、だと彼らは言っていた。彼ら曰く、スクルドを滅ぼした竜よりも死の化身の方が危険とのことだが……」

「はあ？ 死の化身だあ？」

オオクワモンX抗体が意味がわからないとばかりに声を上げる。

いや、オオクワモンX抗体だけではない。この場の誰もが同様の思いを抱いていた。死の化身。実に抽象的な表現だ。その前の竜という方がまだ脅威に思える。

「そうか、その死の化身はどうなったか聞いたか？」

ウオーグレイモンX抗体が聞いた。

ウィザーモンは首を振る。

「アグモンたちはそのヤバさからそこで現在世界に退避したらしい」
「つち。使えねーな」オオクワモンX抗体の再度の茶々を、もう誰もが
無視していた。

「だが、世界一つ滅ぼしても両者は争っていたということだ」
「……………」

誰もが震えていた。世界を滅ぼす何者かが、争っている。そして、
実際に世界が一つ滅んでいく。

死の化身とやらが万が一この世界にも来ることがあれば、それを
追って竜もこの世界に来るかもしれない。世界を滅ぼすような相手
と戦えるだけの戦力は、さすがにない。

「…………ウオーグレイモン」

誰かが、不安そうに呟いた。

ウオーグレイモンX抗体は目を閉じ考えて――

「ウオーグレイモンはいるかい！」

――だが、考えはまとめられなかった。

その場に来たのは、焦った様子メタルガルルモンX抗体だ。よほ
ど飛ばしてきたのか、息が荒くなっている。

「アグモンとガブモンの報告にあった、あれが！」

「っ！」

「死の化身が来た――！」

死は往々にして唐突に訪れる。であれば、これも当然の話。
やって来た死が、現在を蹂躪する。

第四十六話く絶望の騎士、再来く

D・C・2018 ダークエリア

予想だにしていなかった大物の名前の登場に、コータたちは怯む。まあ、すべてを知るなどという大層なことを言われているのだから、その時点である程度は予測できるのだが、のほほんとした阿呆のコータたちには気付けなかった。

「コータ、どうする?」

気づけなかったから、こうして怯んでる。

「どうするって……!」

「だって、死に行くようなもんでしょ。だったら、逃げるのが吉だよ」

「まあ、確かに」

そう、グランドラクモンは偉大なる者の中でも世界を害した側の存在。神と戦争をしたとか、神の兵の多くを墮天させ配下としたとか、そんな逸話が事欠かない。

のこのこと会いに行つて、知りたいことを簡単に教えてくれるような存在だとは到底思えないのである。

これが、コータたちが以前出会った偉大なる皇帝のような世界を守護する側の存在であれば、また話は違ったのだろうか。

「……」

「……」

さすがに死ぬ確率が高いとわかっていて、あまり気は進まない。悩む。黙って考える。

そんな沈黙の中で、

「なあ、いい加減にオイラを離してくれよ……」

疲れを隠そうともしないピコデビモンの言葉だけが、暗闇に溶けて消えていったのだった。

「ま、結局行くんだけどな」

数分後、かどうかはわからないが、そこそこの時間の後にコータは

明るく笑って言った。

「行くのかよっ」この先の展開が読めたのか、ピコデビモンが悲鳴と共に叫ぶ。

一方で、ドルモンは穏やかな様子でコータに尋ねた。「それでいいの？」と。

「ああ、いいよ。覚悟はさっき決めた」

「つていう割には長く悩んでたみたいだけど？」

「うるさい。ちよつとビビっただけだよ」

「素直でよろしい」

コータとドルモンは笑い合って、そして、ニヤリと悪い顔で笑い直してピコデビモンを見る。

ピコデビモンは内心で、悪魔に捕まってしまった……と己の軽率さを悔いることになった。

「で、案内して欲しいんだけど」

「嫌だゾ！」

「却下だぞー！」

ドルモンがピコデビモンの真似をする。まあ、ピコデビモンもわかってる。どうあがいても逃げられないことは。

それでも、ピコデビモンは自殺願望はない。傍から見て自殺志願者とは思えないコータたちに付き合う気はないのだ。

だから、

「どうしたって案内なんかしないし教えもしないから離して欲しいゾ！」

頑なに彼は何も言わない。

こうなると困ったのはコータたちだ。

「じゃあ、案内しなくてもいいから行き方だけを教えてくれよ」

「それも嫌だゾ」

「なんでだ？」

「だって、教えたのがオイラってバレたら後々困るかもしれないじゃないか！」

ピコデビモンからしたら、変に教えたり案内したりして後で報復さ

れたら堪ったものではないのだ。

というか、グランドドラクモンは偉大なる者ということ差し引いてもその種族のレベルは究極体。例え偉大なる者ではないグランドラクモンが相手でも、ピコデビモンは鼻息で殺されるほどにレベル差があるのだから、それはもう恐ろしいことなのだろう。

とはいえ、一方でコータたちも引けない。だって、このダークエリアに来てから出会ったのはピコデビモンしかおらず、しかも、出会うまで暗闇の中をずっと彷徨っていたのだ。ピコデビモンを逃したら、それこそ最悪の場合は詰みかねない。

「頼む！ グランドラクモンの居場所を教えてください！」とコータは手を合わせる。

「嫌だったら嫌だゾ！」

「頼むよー！」とドルモンは大口を開けて叫ぶ。

「だから、嫌なんだゾ！」

二人の勢いに少し恐怖を感じないでもなかったが、ピコデビモンは折れなかった。

「……困った」

「困ったねえ」

無理矢理連れて行くという手もあるが、無理矢理連れて行ったところで、という話である。そもそもコータたちとしても好まない。

八方塞がりだ。

「うーん……なあ、本当にグランドラクモンの居場所教えてくださいませんか？」

ダメ元で、コータは聞く。

——「隠しているわけでもありませんし、教えてくださいなさって構いませんよ」

だが、どこからともなく聞こえてきた声はピコデビモンの声ではなくて。

「っ」

「コーター！」

ドルモンはすぐさまピコデビモンを手放し、コータを守るように立

っ。

辺りを見渡す。だが、暗闇ということもあつて見えない。

——「そう警戒しなくても、私はそこにはおりませんよ」
一体どう言うことなのか。一体誰の声なのか。

コータとドルモンは警戒しつつも声を聞いていた。

一方で、心当たりがあるのだろう、ピコデビモンは死が間近にあるかのように恐怖に震えていた。

——「ピコデビモン」

「はっ！」

——「ちようどいいですね。そちらの方々は私の客人です。案内していただけますか？」

「つつ、謹んでお受けいたします……！」

——「では、お願いします。ドルモンと、コータ……でしたね」
「……！」

——「待っています。貴方方の言う、すべてを知る者として」
声が消えた。

コータとドルモンは何故か安堵を覚えながらも、ピコデビモンを見る。彼は間違つて死刑を言い渡されてしまった無実の人間のような、

「なんで、こんな……！」と絶望の顔をしていた。

「今の声、は、まさかグランドラクモンか？」

「たぶん」

証拠はなかったが、二人は確信していた。

声がなくなつた瞬間の謎の安堵。それは裏を返せば、声が出ている間は絶えず何かを感じていたということだ。自分たちが気づけないほど無色で、しかし、なくなつた瞬間に安堵を感じてしまうほど強大な何かを。

押し潰されそうなほど強大な圧を感じさせる者は腐るほどいる。だが、それ以上に強大ながらも何も感じさせない圧——そんなものを放てる相手など数えるくらいしかない。

まあ、とりあえず目的地は出来た。案内もできた。

万々歳だ。一応。

「何か悪いことしちやったかな？」とドルモンがコータに耳打ちする。
「……」

とりあえずコータは何も言わずに待つ。

「ごっちだゾ……」

しばらくして、ピコデビモンは哀愁を背負って歩き出した。

その姿はまさに唐突にリストラされてしまった仕事人間のお父さん。

何となく哀れみを感じなくもなかったが、その後ろをコータたちはついて行つたのだつた。

D・C・2018 NEWデジタルワールド——ベルサンデイ
ターミナル——

それは未来世界に起きた悲劇の再来だつた。

現在の世界に降り立ったデクスモンは、すぐさま行動を開始した。その機能しかないが故の、即時行動だつた。

「——」

どこまでも伸びる爪が世界を切り裂く。森を切り裂き、大地を切り裂き、海を切り裂き、そこにいるデジモンたちを殺していく。

未来世界の崩壊という事実くらいしか知らず、デクスモンという脅威を知らなかった彼らには逃れる術も対抗する術も、またその時間もなかった。

「——」

だから、こうして殺される。

何が起きたのか、と何故を問う間もなく殺される。

どうして殺されるのか、と何故を問う間もなく死んでいく。

何事もなかったかのように、一瞬で多くの命が消されていく。

そうして、未だ殺されてはいない者たちがデクスモンの脅威を正しく認識できたのは、既に多くの命が犠牲になった後だつた。

……デクスモンがこの現在世界に降り立って数分後のことだ。そのたった数分で、現在世界の0.2パーセントの命が消えていた。

その数字をたかが0.2、と見るか。それとも0.2も、と見るか。

それは人によるだろうが、

「止めるぞ」

「おうー」

ここにいる二人——アグモンとガブモンは後者だった。

あの絶望の騎士だった者の責任として、償いとして、またウォーグレイモンX抗体たちへの恩返しとして、何より生きるために彼らはここに立っていた。

この現在世界ではあの絶望の騎士による爪痕も未だ癒えてなく、そしてデクスモンの脅威に対する逃げ場もない。正しく脅威を認識できた者たちは、絶望的な状況に陥っていた。そして、その絶望を前に諦める者もいれば、諦めずに道を模索している者もいる。

だが、決定的に時間が足りない。

アグモンたちは、その時間を稼ぐつもりだった。

「行こうー」

そして、アグモンたちは進化する。

ブリッツグレイモンとクーレスガルルモン——二大究極体に。進化した彼らは単純スペックならともかく、この現在世界屈指の実力者であるウォーグレイモンX抗体とメタルガルルモンX抗体にも引けを取らない。

それだけの力を持って、彼らは死の脅威に立ち向かう。

「――！」

だが、

「『激・氷月牙』」黄獣偃月刀を模した無数の氷がマシンガンの如く投擲される。

だが、

「『サンダーバーニア』！」前方に転回した背中のバーニア噴射装置から放たれた雷が突き進む。

だが、脅威は止まらない。

クーレスガルルモンが無数に作り出した氷刀も、ブリッツグレイモンの雷撃も、死を越えるには至らない。

デクスモンの腕のひと振り、霧散する。

「っ、立ち止まるな！ 捕まる！」ブリッツグレイモンの叫び。

「わかってる！」焦りと共に、クーレスガルルモンは答えた。

そして、デクスモンの腕が迫る。

デクスモンの爪は一撃でデジモンたちを殺していく光景をブリッツグレイモンたちは見ている。それが、即死系の能力なのか、実質的な即死威力なのかは彼らにはわからなかったが、とにかく捕まってはいけないことだけはわかっていた。

「つく——！」

「ぬおおお！」

だから、彼らは必死に逃げる。

爪の動きはすでに生物ができる範囲の軌道を超えている。予測も成り立たない。だから、体力で逃げ切るしかない。

だが、足止め役の彼らが逃げるということは、

「い、いや……い！」

他の誰かが代わりに犠牲となるということだ。

その時、また一つの命が消えた。幼年期デジモンだろう。X抗体もない、小さなデジモンだった。

「……い！」

「……い！」

それを見た時、ブリッツグレイモンたちの心の中に湧き上がったのは怒りだった。

とても強い怒りだ。理不尽に対する、いや、責任だの償いだのいろいろと考えておきながら、結局は恐れや嫌気によって何もしなかった自分への怒りだ。

「ブリッツグレイモン」全力を尽くさず、それで何かを成そうなどと笑わせる。

「クーレスガルルモン」何かを成すのは、いつだって目の前の事に真面目に取り組んだ者なのに。

だから、彼らはこの選択をするのだ。

「大丈夫、行こう」ブリッツグレイモンが言えば、

「ああ。それに例え俺たちが自分を見失っても——」クーレスガルル

モンも領いた。

「うん。あれが真実、生あるものをすべて殺す死の化身なら何とかなら」

「最悪の場合でも、何とかなるよ。俺たちは一度、負けてるんだから」
ブリッツグレイモンが「ここでそれを言うかあ」と笑って、次の瞬間には気持ちを切り替えた二人は覚悟を決めて領き合った。

「行くぞ！」

「行くぞ！」

そして、二つの力が束ねられる。束ねられた力が進化する。互いを補い合って、二つの存在が一つの存在へと進化する。

その進化の名こそ、ジヨグレス進化。合体進化。

故に、ここに現れるのは、ブリッツグレイモンでもクーレスガルルモンでもなく。

「削除する」

現れたのは、最も有名な聖騎士と同じ名を冠する者。かつて、この現在世界を襲った脅威。

絶望の聖騎士が再来する。

第四十七話く偉大なる吸血鬼く

D・C・2018 ダークエリア

どれだけ歩いたことか。

慣れることもない、先が何も見えない真っ暗闇の中をずっと歩いてきたのだ。すでにコータたちの時間感覚は失われていた。

永遠を思わせる暗闇の地獄——まさにあの世と例えられるのは伊達ではないということである。

もしここに人が一人でいたのなら、すぐに狂ってしまうだろう。事実、コータたちだってお互いという話し相手がいたから、この無限地獄のような中を耐えることができたのだ。

もつとも、それでもだいたい精神的に苦しかった時間であったのだが。

「着いたゾ。グランドラクモン様の城だ」

しかし、彼らの苦痛な時間も終わりを告げる。

ついに、たどり着いたのだ。

「けど、真っ暗で全然何も見えないんだけど。城があるのか？ それとも城の中なのか？」

まあ、何も見えないのだが。

相変わらずの見渡す限りの闇。強いて言えば、地面は舗装されているようにも感じるといふことくらいか。

「真っ暗って、そりゃあダークエリアなんだから当たり前なんだゾ。今ちようど城の門の前にいるんだゾ」

門がでかすぎるのか、門のもの字も見えない。

本当に着いたのか、疑わしいほどだった。まあ、案内人のピコデビモンを見れば屈伸運動もかくやといった様子で震えが大きくなっているから、間違いではないのだろうが。

「城も領地も真っ暗とか」コータが哀れみを込めて言う。

「……もしかして、ダークエリアってずっとこうなの？」ドルモンがそう聞けば、ピコデビモンは頷いた。

そりゃあ七大魔王を始めとしたこの住人たちが何かにつけて通

常の世界に侵攻するはずだ、とコータたちはズレた感慨を抱く。

まあ、この世界にいる者たちはその大抵が自業自得の要因で通常の世界にはいられなくなった者たちなのだが。

「とりあえず行くか」

「そだね」

コータとドルモンが歩き出す。

すると、ピコデビモンだけは止まったままだった。

「お、オイラはここまででいいんだゾ！ さすがに無理なんだゾ！」

断固として進もうとはしない。案内人としての役目は果たしたので今すぐにもこの場を離れたい、という気持ちが嫌なほど伝わってきた。

まあ、コータたちとしてもここまで連れてきてくれただけで充分ではあった。

だから、

「そっか。じゃあ、元気でな」

「いろいろとありがとうねー」

あっさり別れる。

そうして、可哀想になるほどに萎縮したピコデビモンと別れて、コータたちは真っ直ぐに歩き出した。

「……！」

「これはー」

違いはすぐに表れた。

地面が変わったのだ。先も見えない暗闇は変わらない。だが、地面だけが自然そのままに体裁だけ整られただけの“道”から、誰かのこだわりによって敷かれたような“床”へと変わっていた。

そこはまるで、氷やクリスタルのような床だった。薄く儂く輝く、土足で踏み入ることが申し訳なく思えるほどの美しい床。

こんな場所が、荒野のど真ん中にあるはずがない。間違いない。ここは誰かの城だ。

「グラントラクモン、様いますか？」

コータは声を上げる。慎重に、恐る恐る、一言一句に気を遣って発

言う。

気を悪くされれば、その瞬間に殺されてもおかしくないのだから。

「ええ、いますよ」

そして、声が聞こえた。静かで物腰柔らかそうな、声だけ聞けば優しそうな誰かだと勘違いしてしまうような声だった。

だが、わかる。そんな単純な存在の声ではないことが。

理解できないほどの強大な格とこの穏やかさな雰囲気はどうやって同居できるのか、と。

ここに来て、この規格外の存在を前にコータたちは震えが止まらなかった。

「そこまで震えなくとも結構。さて、はじめまして。私がグランドラクモン——」

そして、この城の主が姿を現す。

それは、王だった。魔獣だった。獣のような四足に吸血鬼らしい人型がくっついている。シルエットだけ見れば、ケンタウロスに近い。が、そんなレベルではない。さらに四足の内の前足二つには口が付いていて、おどろおどろしい。

まさに魔獣。しかし、くっついている人型が纏う高貴な雰囲気、ただの魔獣として終わらせない。

本当に何から何まで規格外の存在だった。

これが、健在の偉大なる者。

「——皆様には偉大なる吸血鬼と呼ばれる者です」

すべてのデジモンの道標。

デジモンの歴史に深くその名を刻んだ、歴史の作成者。世界の管理者^神をして畏怖を抱き、敬意を払わずにはいられない存在——

！

「楽にしてくださいって結構。敬語も敬称も不要です」

「そ、うか……」

物腰が柔らかなのに、強制的に従ってしまうようなものがそこにはあって、コータも逆らえなかった。

「それで、オレたちを呼んだけど……」

「はい。呼びました。あれだけ人の名前を叫んでいれば誰だって気づきますからね」

遠く離れているところで自分の名前を呼ばれていたとしても、普通は気づけない。

「無視しても構いませんでしたが、傲慢の魔王の差金でしたし、これか
らを考えれば乗るのも一興と思ひまして」

「トコモンが。そうだ、知れって——」

「はい。初めに言っておきますと、彼が彼女ではなく私のところに寄
越したのは、さしずめ彼女の思い通りに動かされなくなかったからな
のでしよう」

「彼女？」

「事態の黒幕、とは少し違いますが、そうですね。この事態に深く関
わっている者ですよ。貴方方も聞いたことはあるでしょう？ イグ
ドラシルの名前くらいは」

イグドラシル。それは、あのNEWデジタルワールドの
ホストコンピュ^神ータにして、世界の元凶。

「元凶……まあ、そうですね。しかし、それだけではない。初めから話
していきましようか」

「初めから？」

「ええ。何故Xの悲劇、プロジェクト・アークが行われたか。イグドラ
シルの真意、それをお教えしましょう。すべてはそこから始まった。
そこから始まり、貴方の存在まで来る」

「……！」

そうして、グランドラクモンは語り始めた。

D・C・2018 NEWデジタルワールド——ベルサンデー
ターミナル——

時は少しだけ遡る。

デクスモンは目の前に現れた強大な命——オメガモンAlter
—Sに釘付けだった。先ほどの黙示の竜には及ばない。だが、それ
も、特上の命であることには変わらない。

命とは眩いものだ。

デクスモンはその熱のような眩さを感じて命を喰らう。

だから、あの黙示の竜やこの聖騎士のような命を前にすれば、眩さに目が眩むようにそれしか見えなくなる。無論、攻撃範囲の広さから見えなくても被害者は出るのだが。

「大丈夫。私は私だ」

言い聞かせるような、オメガモンAlter-Sの眩き。彼は自分を見失いそうになりながらも、彼らだった時のことを覚えていた。

どこからかうるさく聞こえてくる声を空耳だと押し退け、彼は自分を必死に保っていた。

「行く——！」

そして、オメガモンAlter-Sは突き進む。

「——！」

対抗するように、デクスモンが爪を振り回す。

迫り来る爪を、オメガモンAlter-Sは軽々と躲す。爪が空ぶつて、その上にオメガモンAlter-Sは飛び上がっていた。

そして、躲した彼が向けるのは左腕の竜砲。

「『グレイキャノン』ッ！」

放たれたプラズマが走る。線引きでさつと引いたように、世界に一筋の光が走る。

だが、

「——！」

だが、デクスモンには通じない。もう片方の爪が、プラズマ砲を防いでいた。

「……これではダメか。ならっ——！」

防がれるのならば、叩き込めばいい。

オメガモンAlter-Sは駆け出した。飛翔し、空を駆け、突き進む。

「——！」

デクスモンの右爪が迫る。

弾丸のように突き進むオメガモンAlter-Sはその勢いを止

めることなく、それをギリギリで躲す。

デクスモンの左爪が迫る。

弾丸のように突き進むオメガモンA l t e r — Sはその場で急停止、上空に飛び上がることで躲した。

「――！」

再度、デクスモンの右爪が迫る。

オメガモンA l t e r — Sはマントを振り回してそれを防いだ。だが、防ぎ切れるものではない。音がしてマントが破れ、その勢いで彼は回転しながら落ちていく。

そこに向けて、デクスモンの左爪が迫った。

だが、それこそがオメガモンA l t e r — Sの狙いだ。右爪を躲し、左爪が迫っている今、そこだけに僅かに生まれた隙間。

「『グレイキャノン』！」

そこを狙う。

放たれたプラズマが突き進む。爪と爪の間を縫って、真っ直ぐな光がデクスモンの顔に到達する。

「――！」

だが、無傷だ。デクスモンの顔には傷一つない。

「……！ つく！」

倒せるとは思ってはなかったし、無傷である可能性も考慮していたが、こうも目の当たりにすると顔が歪む。だが、顔を歪ませている場合ではない。

オメガモンA l t e r — Sは状態を起こすようにして飛び上がった。

その彼のすぐ下を、先ほど放置した左爪が通過した。

「こうなれば――！」

オメガモンA l t e r — Sは再度始まったデクスモンの爪撃を躲す。

上から迫る爪を前に出て躲す。

下から迫る爪を前に出て躲す。

何もかも、それこそ敵の攻撃さえも置き去りに突き進む。

「う、おおおおおおおおー！」

前から迫る爪——正確には、その五指の間を縫うようにして躲す。勢いを殺さないように。

後ろから迫る爪——自らを握り殺そうと追いつがるそれを、勢いのままに置いていく。

狙うは、ゼロ距離。

「ガール——」

進化してから一度も使用していなかった剣が光る。戦闘の間、ずっとエネルギーを溜めていた狼剣が輝ける。

どんな危険はあっても、どんな壁があっても、

「——ソード——ッ——」

それらすべてを斬り伏せる！

一閃。一瞬で剣は世界を駆けた。光の筋だけが残った。

「よし——」

デクスモンが両断される。その身体がズレる。

ああ、だが、しかし。

「なっ——」

悲しいかな、世界に命がある限りなくならないのがデクスモン^死だ。

デクスモンの身体が元に戻る。完全な形で、何事もなかったかのよう
うに、死は再び動き出す。

「——！——」

「つく——」

デクスモンの爪撃をオメガモンAlter—Sはギリギリで躲した。だが、ボロボロになりながらも残っていたマントがそれで完全に切り裂かれて落ちる。

「……ダメか」

オメガモンAlter—Sの武器は何も通じなかった。その時点で、勝ちはなくなった。

彼は思考する。

デクスモンを倒すことを諦めるかどうか。倒すことに躍起になるかどうか。……すべきは時間稼ぎ。攻撃が通じなくても、何とかな

る。

「――！」

そんな後ろ向きの思考に至っていたことが彼の失敗だった。

確かに、本来の目的は時間稼ぎであって、倒すことではない。そこを見失ってはならない。だけど、積極的勝つために目的を目指すのと、消極的逃げに目的を目指すのは、違う。

そこにある僅かな差異が、パフォーマンスに影響する。傍から見れば、その影響は些細なものなのだろう。

「――！」

だが、弛まぬ糸を繋ぎ続けるような、極限の状況ではその影響が大きく響く。

「しま——っ！」

次の瞬間、オメガモンAlter-Sは緑色の閃光に吞まれた。

第四十八話く真実く

D・C・2018 ダークエリア

イグドラシル^神の真意。初っ端からどエライものが来た、とコータたちは唾を飲む。

「まず、貴方方はどう理解していますか？ イグドラシルの行動、Xプログラムはどうして発動されたかを」

「それは……デジモンが増え過ぎて世界消滅の危機なったから、NEWデジタルワールドを作ってそこに限られたデジモンを連れて行って——」

「——で、残しておけないデジモンを消すためにXプログラムを発動させたんだよね」

コータとドルモンは互いに顔を見合わせながら、言う。

これは常識というほどでもないが、少し世情に詳しい者ならば誰だって知っていることだ。

だが、グランドドラクモンの言い方ではこれが真実ではないのだろう。

「ええ、真実ではありません。正確には、表面的な真実でしかない」「表面的？」

「貴方方は出来事を見て理由と勘違いしています。出来事から推測した理由を、貴方方は間違えた」

グランドドラクモンは「まあ、仕方ないことではありますが。彼女だけでは、それしか出来なかつた」とその彼女とやらを憐れむように、あるいは同意するように呟く。

「増え過ぎたデジモンを消去するのならばわざわざ新世界を作る必要はない」

増え過ぎたデジモン

原 因を消すのなら、旧世界をそのまま稼働させても問題はない。新世界創造は作るために容量を割かなければならない分、手間がかかる。

「増え過ぎたデジモンを消したいのならばわざわざXプログラムを使う必要はない」

増え過ぎたデジモン

原 因を消したいのなら、イグドラシルの部下を使えばいい。XプログラムはX抗体が生まれる分、混乱の種になる。

神と例えられるほどの超演算機能を持つイグドラシルに、それが予測できないはずがない。

「であるのなら、イグドラシルは何故さまざまな問題があることを承知の上で新世界を創造したのか。Xプログラムを発動させたのか」
答えは単純だ。その必要があったからだ。

旧世界では無理だった。部下に殺させるのではダメだった。問題があった。その問題を解決するために、イグドラシルは新世界を造つて、Xプログラムでデジモンを殺した。

「問題……一体？」早く続きを、とコータがグランドラクモンに聞く。
「貴方はその一端に出会っているはずですよ」

「……………」
グランドラクモンの言葉に、コータたちは首を傾げた。

お前わかる？ と互いを見やるが、どちらも首を傾げていることが分かって無意味だと悟る。

「見たはずですよ。貴方が新世界で見た数々の悲劇。その中にXプログラム、いや、X抗体があったからこそ助かった者たちがいたことを！」

「X抗体があったからこそ……？」コータは首を傾げる。一方で、先に答えに気づいたのはドルモンだった。

「まさか、メイクーモン？」

そう、メイクーモンの特性。デジモンを狂わせる病——あれは、何かX抗体には効いていなかった。

「思い至ったようですね。そう。Xプログラムはデジモンを殺すために作られたのではなく、X抗体デジモンを生み出すために作られたのです」

「なっ」

デジモンを殺す機能など二の次だ。XプログラムはデジモンをX抗体持ちにすること、すなわち、X—進化させるためのものだということである。

「なんでイグドラシルはそんなことを？」

「従来のデジモンでは不都合があつたということですよ。だから、都合の良い形に進化させなければならなかつた。従来のデジモンのままでは不都合だから進化させ、進化できない者は適した形で殺すしかなかった」

では、その不都合が何だつたのが問題となる。

こうまでのことを理由があつて行ふのだ。それは相当なものだつたはずだ。それこそ、世界消滅の危機にも等しいような、もの。

そこに思い至つて、コータたちは固唾を呑んだ。

「その不都合って？」

「偉大なる悪の復活、そして世界への侵攻ですよ」

「え、それってグラン——」

「私ではありません。同じ偉大なる者として呼ばれてはいますが」

神でさえ容易に出来ない存在が復活し、世界を侵略する。場合によつては神を以てしても負けてしまうような相手が世界に現れる。

世界を管理する者として、神として、イグドラシルは何とかしなければならなかつたのだ。

「新世界に現れた脅威たち、とりわけて伝達者による狂気はその復活のための行いです。狂気によつて悲劇を起こし、無念と未練をエネルギーとして回収、ついでに彼らにとつて忌むべきX抗体を殺す、そのためのもの」

「エネルギーとして、回収……！」

コータたちが思い出すのは、メイクラックモンVMがラグエルモンに進化した時のことだ。あの時に感じたあれが、回収したエネルギーなのだろう。そのエネルギーを以て、あの時の彼女は進化したのだ。「最も、それも一端に過ぎません。彼らはさまざまな方法でエネルギーを回収しました。多くは殺害による放散感情の採取だつたようですが」

放散感情——死した時や理不尽に直面した時の強い感情だが、それすらもエネルギーとして回収できるという。

それはつまりこういうこととは関係のないことで死んでしまつた

としても、その「敵」にはエネルギーとして回収されてしまうということだ。

ただ死んでもダメ、ただ生きていてもダメ、だから、必要だった。「……XプログラムはX抗体を——「敵」にエネルギーとして回収されないような新しいデジモンを作る為のもの。また、進化できなかった者をエネルギーとして回収されないように殺すためのものでもありました」

Xプログラムに感染した時点で、X抗体を得ようが得まいが敵はそのデジモンからエネルギーを得られなくなる。

エネルギーを得られなくさせることで少しでも敵を弱体化させる、そのためのものだったのだ。

「……だけど、それは」コータはモヤモヤとした気持ちを感じた。端的に言えば、理解は出来るけど納得がいかなかった。そしてそれは、ドルモンも同じだ。

そんなコータたちの姿に、グランドラクモンは苦笑する。

「ええ。世界に生きるものとして貴方方の感情は正しい。しかし、イグドラシルも苦痛……かどうかはわかりませんが、熟慮の末の決断だったのですよ」

偉大なる悪ほどの敵が現れる、またそのための行動をしている。その時点で、もうすべてのデジモンを残すことは不可能になった。というか、下手したら絶滅もありうる。

だから、イグドラシルは世界の管理者として、選択をしたのだ。

デジモンという種を進化させることを、その新しい形でデジモンという種を少しでも残すことを。

「もちろんそんなことは貴方方、生きる者には関係ない話ですが」

D・C・2018 NEWデジタルワールド——ベルサンディターミナル——

オメガモンAlter-Sが見たのは、緑の閃光だった。それはデクスモンから放たれたもので、故にどのようなものであるかなど、考える間もなく理解していた。

範囲が広過ぎて躲すことが出来ないことも、理解していた。だから、咄嗟に両腕を向ける。

「グレイキャノン&ガルルソード」ッ！」

閃光を切り裂かんと狼剣が斬撃を放ち、竜砲が閃光を撃ち抜かんとプラズマを放つ。だが、咄嗟に放ったレベルのものでは無意味だ。

そのどちらもが閃光の前に憐く散る。緑の閃光はその勢いを僅かに減衰させたような気がするだけで、健在。

「っ！」

そして、オメガモンAlter-Sは閃光に呑まれた。

数秒間もの間、閃光は世界を緑色に染め上げていた。

そして、閃光が収まる。

「……」

オメガモンAlter-Sは生きていた。生きていた、としか言えなかったが。

先ほどの咄嗟の足掻きが功を奏したのだろう。直撃を避けられたのだ。逆に言えば直撃していないだけ。それだけで、もう戦闘不能の状況に追い込まれている。

「……」

もはや勝敗は決した。

オメガモンAlter-Sに次を躲す術はない。いや、そもそも躲さなくても彼はもう……。

「――！」

そして、動けないオメガモンAlter-Sに向けてデクスモンの爪が襲いかかる――

「『ガイアフォース』ッ！」

「『コキュートスブレス』！」

――それを迎え撃つたのは、この現在世界における二大勇者――ウォーグレイモンX抗体とメタルガルルモンX抗体だ。

二人の全力の必殺技が、爪を弾く。

その隙に、彼らはオメガモンAlter-Sを抱えて逃走した。

「う、おーぐれいもん……」

力なく、オメガモンAlter-Sが口を開く。

「大丈夫だ」

ウォーグレイモンX抗体は安心させるように言った。

だが、違う。オメガモンAlter-Sが言いたいのはそういうことではない。

「う、しろ……!」

彼が言いたいのは背後から迫る爪、自分たちの命を刈り取ろうとする攻撃。

「それも、大丈夫だよ!」

今度はメタルガルルモンが自信満々に言う。

その瞬間、背後に迫る爪が――

「グレイジ・オブ・ワイバーン!」

――飛竜の如き一撃が、爪と激突する。

凄まじい力の激突だ。

だが、未だ。未だ、もう片方の爪がある。

「……もう、いい!」

だから、最期の力を振り絞ってオメガモンAlter-Sは叫んだ。彼は限界だった。彼は自分の死を悟っていた。

だからこそ、彼は叫んだ訳で。

だからこそ――

「仲間を捨てていける訳無いだろ! それにあのバケモノだって到達者が抑えてる!」

「大丈夫! 君のおかげでレジスタンスや近隣に生息するデジモンの避難も終わった!」

――ウォーグレイモンX抗体たちは彼を見捨てられなかった。

「……!」

その言葉に、オメガモンAlter-Sは僅かに目を見開く。

「そっか。嬉しいなあ……!」

信頼。信用。そんなものは所詮、行為と言葉による形のないものしかなくて。

だからこそ、わかる。

だからこそ、暖かい。

彼らの行動が、言葉が、オメガモン^アとAlter^グモン^モAlter^トモン^ガAlter^フモン^モには暖かった。目を覚ましてからずっと、彼らが得たかったものだった。

ああ、そうだ。二人で一つの彼らは、だからこそ、誰にも信じられない独りきりに耐えられなかった。

「はは」

この期に及んで彼らはそれを得られた。自らの人生を支払ってもお釣りが来ると思えるほどの、人生を対価にしても欲しくなるものを、得られた。

だから、満足して逝ける。生に固執することなく、死を恐れることなく、彼らは逝く。

「ありがとう」

オメガモンAlter^グモン^モのその身体が消滅する。

その両腕が踊るように外れて落ちた。

第四十九話くりブートく

D・C・2018 ダークエリア

偉大なる者——それが一連の黒幕なのだ、グランドラクモンは言う。

「……う？　どうかしましたか？」

「いや、偉大なる者の一人が黒幕……敵ってことはわかった、けど。でも、その場合——」

だが、コータたちには気にかかることがあった。

イグドラシルだけに限らず、世界の管理者は部下を持っている。

当然だ。管理世界で問題が起きた時、管理者が直接出向くのは不都合が多い。不都合の結果、さらなる世界規模の問題が連鎖的に発生する可能性もある。

だから、管理者はその問題を解決させる部下や手段を独自に保有している。

それは例えば、他世界から人間を呼ぶことであったり、例えば神と呼ばれるほどのデジモン集団であったり、とさまざまだ。

イグドラシルの場合、人間を呼ぶよりもまずは自分の部下——ロイヤルナイトと呼ばれる十三の聖騎士団に頼る。

そのどれもが究極体の中でもトップクラスの実力者揃い。さすがに個々の戦闘能力では偉大なる者や到達者には敵わないかもしれないが、それでも総力で言えばそれに匹敵するだけの力はある。

「こういう時こそロイヤルナイトの出番じゃないのか？」

だから、イグドラシルが最も信のおける部下を動かしていないことが、コータにはどうしても気にかかるのだ。

例えその偉大なる者が復活したとして、イグドラシルのサポート付きロイヤルナイトが総出で戦えば、何とかなる気がしないでもないのに。

そんな彼の疑問について、グランドラクモンはあっさりと答えた。

「ああ、彼らならもういけませんよ」

「え？　はっ？」

「彼らは負けました。かなり初めの段階で」

それは驚天動地の真実だった。

個々ならば、あるいはただの同種族デジモンならばともかくとして、ロイヤルナイツとして長年を戦い抜いた経験豊富な者たちが総力戦を挑んで負けたというのだ。

思わず、コータもドルモンも口を開けてアホのように呆然とする。「そうですね。そこら辺も話しましょうか。まず、イグドラシルはその権限を使い、世界をやり直しています」

「まずで言つていい話じゃない……!」

「前提です。受け入れてください。ともかく、やり直しているんですよ。再起動リブートと言うらしいのですがね、世界の危機を乗り越えられる未来に辿り着けるまで幾度となく繰り返ししているんです」

話が大き過ぎてイメージが湧かないが、そういうことらしいとコータたちは自分を納得させる。

しかし、おかしい。コータたち振り回されている側としては良い気はしないが、何度でもやり直せるのならば、それこそロイヤルナイツたちが勝つまで何度でも戦わせればいい。わざわざ負けさせる必要はない。

それとも、やり直した今回で負けたということだろうか。

「ま、相手も馬鹿ではないということですよ」

「……?」

「そうですね……。人間の世界には悪の親玉を勇氣ある者が倒しに行くシミュレーションの遊びがあるらしいですが?」

「ああ、RPGとかのゲームね。……何で知ってるんだ?」

「人間の世界を覗いていたら見つけました」

何で覗いていたのかとか、どこを覗いていたのかとか、その辺を聞くと藪蛇になりそうで怖かったからコータは聞けなかった。

「その遊びでは倒される側の親玉はずっと待っている訳ですが」

「うん」

「普通、自分に仇なせる者がいたら邪魔するでしょう?」

「……」

まあ、そこら辺は魔王は魔王でいろいろと忙しかったからとか、初期レベルが1の勇者に対してわざわざ魔王が出向く必要はないというか、強者故の慢心があったせいだからとか、身も蓋もないことを言えば物語のお約束だというか、いろいろと複雑な事情があるのだが。「そういうことです。お遊びではないのだから、座して待つ必要はない。世界の管理者たちは我々偉大なる者の力を知っていますが、それは我々と同じです」

つまり、イグドラシルが敵に対して策を弄するように、敵もイグドラシルやロイヤルナイツに対して策を弄しているということである。「有史以来、ずっと力を蓄えていたのでしようね。イグドラシルに抗できるまで。イグドラシルが何度でも世界をやり直すのなら、やり直して元に戻らないようにする」

「……？」

「そうですね。少し意味合いが異なってしましますが、死んだ命はやり直せば生き返ります。ですが、やり直しても死んだ命が死んだままになるのならば？」

ようやく、コータたちもグランドラクモンの言おうとしていることがわかってきた。

つまり、敵もイグドラシルのやり直しを利用しているのだ。

「もはや事前の計算も予測も意味を成さず、ただただ流れに任せるしかなく、リブートを利用した両者がそれぞれに都合の良い結果を奪い合っている」

その結果、ロイヤルナイツは負けたのだろう。

負けてしまつて、負けたままになってしまつているのだろう。何度世界をやり直しても、もう甦らなくなつてしまつたのだろう。

「幾度もの流れの中、さまざまな駆け引きが行われました」

例えば、Xウイルスに代わる新しいウイルスを作り、そちらに変える。

例えば、ロイヤルナイツの生き残りたちにわざとデジモンを殺させ、それによりロイヤルナイツに代わる強者を育て上げる。

例えば、新世界に来ることなく旧世界に留まつたままだった偉大な

る皇帝に助力を頼む。

イグドラシルはさまざまな策を試した。だが、そのどれもが失敗した。どんな策でさえ、最善の未来には辿り着けなかった。

「だから、今回のイグドラシルは新しい手を打っています。だいぶ博打のようではありませんがね」

「どんな手なんだ？」

「……敵の策を利用するといいますが……ま、あまり上手くいっていいるとは言い難いのですが」

具体的な内容には触れずにグランドラクモンはコータを見ていた。

その本当の意味を、コータは察することはできなかった。

「上手くいってない？」

「ええ。おまけにあの死の化身が再び現れる始末。……最近は出てきてなかったのに」

死の怪物——すぐにコータたちは思い至って、やや愕然とした顔になる。悪魔の行動から薄々と察していたが、やはりその敵の策だったらしい。

「元々、ドルモンはプロトタイプデジモンと言いましてね」

「ぷろとたいぷでじもん？」そんなことはさっぱりと知らなかった、と当人は首を傾げる。

「古代種のデジモンは感情によって自身の情報を書き換えますが、プロトタイプデジモンは感情さえ不要で自由に自身の情報を書き換えられる。その頭インターフェイスの石を利用して」

まあ、感情さえ不要といっても、そういう「元」があつた方が良いのは難易度的に事実なのだが。

つまりは、簡単に強くなったり弱くなったり進化できたりするということだ。内部から外部へと影響を及ぼしやすく、また同時に外部から内部へと影響を受け易いのである。

その結果が、ドルゴラモン空想の具現であつたりデクス死の顕現であつたりする。

「そして、だからこそプロトタイプはとにかく死にやすい」

グランドラクモンは簡単に言い切った。

「なんでっ!?!」

悲しげにドルモンが叫ぶ。

すると、何を当たり前なことを、と少し呆れたようにグランドラクモンは口を開いた。

「自由に情報を書き換えられるというところと聞こえがいいですが、それってセキュリティが存在しないということですよ？ 内部と外部と繋がりが放題。簡単に影響を受け、情報が書き変わり、致命的なエラーを起こすことが多々あるんです」

古代種にせよ、プロトタイプにせよ、希少種となっているのにはそれなりの理由があるということである。

しかし、そんな事情はドルモンにとっては理不尽なことだ。

希少種というレアであったことに喜ばしいのか、それとも死にやすいことを嘆けばいいのか、そんなことは関係ないと開き直ればいいのか、ドルモンは複雑な表情で頭を抱えた。

「で、それがどういう風に繋がるんだ？」

そこで、プロトタイプだのどうだのはどうでもいいコータが聞いた。

「プロトタイプデジモンは二種類いますが、その両方それぞれにとあるプログラムがセットされていました。未来へと突き進む生命、その試作であるが故の生命自身が課したプログラムが」

「プログラム？」

「ええ。何が生命にとって大切なのか、探ろうと考えたのですよ。他ならぬデジモンという生命自身、デジモンという種の問題が、その未来のために。ドルモンの場合は更なる進化です」

ちなみに、もう片方の種類におけるプログラムは更なる戦闘能力だったりする。

「皮肉ですよ。生命が己が未来のためにした試みが、例え死んだとしても他者を喰らって進化するような、そんな穢らわしいものとして変化してしまっただけですから。いや、それこそが生命の未来を証明してしまっているのかもしれないが」

「……もしかして、それがデクス？」

「まあ、プロトタイプデジモンはほぼほぼ絶滅しましたし、失われたも

のものでしかなかったのですがね」

「失われてはいなかったと」

「はい。今回ではない、いつかのやり直しの最中にそれが発現しましてね。イグドラシルはそれを現行の敵とは別の脅威と断定し、紆余曲折の上に討伐し、さらに手を打ちました」

結果としてデクスそのものはその時に倒された。そして次のやり直し以降、二度とそんなものが世界に誕生されないようにした。——はずだった。

「しかし、それに目をつけたのが」

「偉大なる者……敵か」

「はい。先ほども少し言いましたが、*彼ら*”にとつてはX抗体が邪魔なんですよ。だから、殺さなければならぬ。あの手この手で殺していたようですが、効率を考えて使えると思っただけでしょうね」

自身と同格を相手にすればわからないが、対デジモンとしてはこの上のない性能、ロイヤルナイツクラスのデジモンでさえ殺せるような能力、そこに*彼ら*”は惚れ込んだ。

だから、彼らはもう一度、デクスがこの世に現れるように手を打ったのだ。あの死の化身はその文字通り、X抗体デジモンを殺し尽くすための死の現れとして用意されたということである。

「自然発生はイグドラシルのせいで望めない。だから直接的に声を飛ばし、干渉し、発現させた。これ、プロトタイプデジモンのセキユリテイが無いに等しいなせいですよ？」

「……」

ドルモンは明後日の方向を向いた。

「まあ、そこはわかった。アレは想像以上にヤバイもので、敵の復活以前の話になるかもしれないってことも。以前はどうやって倒されたんだ？」コータは聞いた。

頭の悪いコータでは、今聞いただけの説明だけではデクスモンのヤバさの十から十までをはつきりと理解できたわけではない。

それでも、直接相對した者として、アレの脅威だけは十分すぎるほど悟っていた。

だからこそ、あれがどうやったら倒されるのかが気にかかる。

「そこが貴方の真実に繋がるのですよ」

「え？ オレの？」

「ええ。なら、見てみますか？ ちょうど今くらいですか。皮肉にもかつての焼き回しとなりますよ」

グランドラクモンが腕を翳す。

すると、空中に大きな穴が生まれて、そこから何処かの光景が見えた。まるで未来世界にあった空中投影スクリーンのようだ。

「これは、ベルサンディターミナル？」

見れば、映し出されたのは現在の世界の光景で。

そこに映っていたのはデクスモンと――

D・C・2018 NEWデジタルワールド――ベルサンディターミナル――

デクスモンの爪が荒れ狂う。刃の竜巻のように触れたものを切り裂きながら、たった一人を殺そうと暴れまわる。

一方で、その暴威に抗うのは黄金に輝ける槍。風を纏うそれを振るうのは、赤の到達者だ。メディーバルデュークモン

「――！」

デクスモンの腕が振るわれる。巨大な爪がメディーバルデュークモンを殺さんと迫る。

「はっ――！」

メディーバルデュークモンが黄金の槍を突き出す。風と刺突が巨大な爪を弾き飛ばした。

そのまま槍を回転させ、勢いづけて叩きつける。

デクスモンの腕が宙を舞った。

だが、

「此れでも無駄か」

数秒の後に修復する。

一瞬で修復とはならないのは、それだけメディーバルデュークモンの一撃が効いたからか。

「――！」
一方で、それしか機能がないデクスモンは懲りずにまた爪を振るう。

メデイーバルデュークモンは再び槍撃でもって爪を砕き、防いだ。槍が突き出される。振り回される。

爪が弾かれ、そしてまた狙う。

また、槍が突き出される。振り回される。

また、爪が弾かれ、さらに狙う。

そんなことが、幾度も続いている。

「――！」

「ふっ――！」

金属音、金属音、金属音――！

もはや何度目になるかもわからない、爪と槍のぶつかる音が辺りに広がる。

デクスモンは未だ健在だった。一方で、メデイーバルデュークモンもまた無傷だった。

「――！」

デクスモンの口から緑色の閃光が走る。

さすがにそれはマズイと感じたのだろう。メデイーバルデュークモンの顔が険しいものとなり、その槍が歪む。周囲の空間を歪ませるほどの力が、その槍に集う。

「――！」それは、死の閃光だった。

「グレイジ・オブ・ワイバーンッ！――」それは、飛竜の如き一撃だった。死を為す閃光と解放された飛竜の力がぶつかり合う。

そして、爆発のように世界に放散して消えた。

互いに僅かに汚れた程度だった。

「……」

その気ではないとはいえ、自身の一撃が相殺で終わったという事実、メデイーバルデュークモンは顔を顰める。

久しく自分が敵わないレベルの相手だった。武に生きる者の一人として、その壁の存在は何というか、滾る。彼は凶暴に笑った。この

目の前のバケモノ相手に、本気で挑戦したくなつたのだ。

しかし、結局はその挑戦をすることはできなかった。

「残念だ」

時間切れだ。

「死を齎す者よ、貴様の負けだ」

メディーバルデュークモンは何かに気づいて明後日の方向を向く。

しかし、戦闘中の余所見とはずいぶんと余裕なもの。

「――！」

その隙を、そんなことを考える機能はないから偶然だが、デクスモンは狙う。

特大の爪が、今までにないような速度で迫る――！

「死の化身、死を齎す者――それでも、終わりはある。さあ、貴様にとつての死が来たぞ」

何処からともなく現れたのは魔法陣。

「『デジタライズ・オブ・ソウル』――」そこから呼び出されたエネルギーの塊が、爪を迎え撃つ。

その光景を前にして、「漸くの到着か」とメディーバルデュークモンは呆れて言った。

一方、

「それでも早く来たんだがな」

そう答えたのはこの場にはいなかった者だった。

また、特大の魔法陣が展開される。そこより現れ出たのは、黒の騎士で。

「まさかまたこいつと戦うことになるなんてな」

そうだ。その騎士こそ、かつてデクスモンを倒した者。

黒を基調として金の縁がある丸みを帯びた重厚な鎧、表裏で白と青の色をそれぞれに持つマントを羽織る――ロイヤルナイツにも同じ種の名がある伝説。

神話の聖騎士にして、始まりの名を冠する聖騎士。

黒の到達者、アルファモン。

「やっ」

アルファモンがデクスモンに向かい合う。

迫り来る爪を魔法陣を展開し、迎撃する。その側に、メディーバルデュークモンがやって来た。

彼らは迫り来る爪を弾き飛ばしながら、気楽に会話する。

「貴様はこの死を越えたのだろうか？」

「まさか。一人で乗り越えた訳じゃない」

「貴様なら倒せると踏んで我は待っていたのだが」

「俺一人じゃ難しい」

謙遜することなく、アルファモンは事実を言った。

いくら強かろうと老いや死からは逃れられないように、いくら強かろうとデクスモンは倒せない。

アルファモンは確かにかつてこのデクスモンを倒した。かつて倒せたのは、奇跡があつたからだ。死さえ切り裂く奇跡の一撃を起こしたからだ。

そして、それはアルファモン一人で起こしたわけではない。

「それでも、此処に来たのは此れの因縁を誰にも渡したくないからだろうか？ 此れを越えるのは自分の役目だと、そう知っているからだろうか？」

「……そうだな」

メディーバルデュークモンの言葉に、アルファモンは静かに同意する。

「ならば良し。呼んだ甲斐もあつたというもの」

「……？」

メディーバルデュークモンは槍を振るって鬱陶しい爪を弾きながら、上空を見上げる。

釣られて、アルファモンも上を見て――

「縁があり、道があり、風が吹く。であるのならば何処だろうと届く。何処からであろうと来られる」

――遙か遠くの空の彼方より、流れ星が降って来た。

第五十話くかつてからの進撃く

D・C・2003 NEWデジタルワールド

プロジェクト・アーク——僅かなデジモンたちを旧デジタルワールドからNEWデジタルワールドへと連れて行き、残ったデジモンたちをXプログラムによって滅ぼす。

そんな、まさに神話の方舟のようなことがあつて、その時代は始まった。

それは激動の時代だった。

生き残った者たちは病満ちる旧世界を捨てて、生き延びるために新世界に逃げてきた。

真実に気づかず、そんな者たちを認めないと神の使徒が逃げてきた者たちを殺し回った。

逃げてきた者たちが持っていた病が新世界にも蔓延した。

結果、理想郷だったはずの新しい世界でさえ地獄のような過酷な世界となり、激動の時代が始まった。

そんな中で、

「オレは■■■■■■■■■■って言うんだ。人間だよ」

「俺は■■■■■■■■だ」

彼らは出会った。

何故、この世界に人間がいたのか。何故、パートナーとしてお互いが出会ったのか。そんなことは彼らは興味なかった。

ただ、必死だった。必死に彼らは弱肉強食の世界を生き抜いた。

「に、逃げ場が……!」

「走れ!」

——逃げ場もない状況の中で戦ったことがあった。

「おつ、釣れた釣れた……つてえ!」

「何を釣ってるんだあ!」

——魚釣りをしたら水龍を釣り上げてしまつて殺されかけたことがあった。

「起きろお! 敵だあ!」

「ねむい」

——眠っていたら襲ってきた相手を返り討ちにしたことがあった。

「■■■■。これくらいの敵に手間取っているのか？」

「っ、■■■■……！」

——自分と同じ境遇である銀髪の少年とその相棒の兜をかぶった獣竜と共闘したことがあった。

「お前の食ってる肉よこせえ！」

「何で!? 普通X抗体の方じゃないのか！」

——食事をしてたら食べていたものを狙ってきた輩がいて呆れたことがあった。

「デジモンの削除……貫くは、使命！」

「まさか、■■■■■■■■がX——進化するなんて——！」

——最後の名を冠する白き聖騎士と戦って、負けたことがあった。

「よかった！ 生きてた！ よかったあ……！」

「■■■■……」

——死んだはずの相棒と運良く再び巡り合うことができた。

「行け！ アイツのX抗体を奪うのだ！」

「まずいー！」

——無知故に虫たちのテリトリーに忍び込んで死にかけたことがあった。

「無茶だ！ このままでは死んでしまう！」

「■■■■……何故お前はここにいる？ 何故我々は再び出会った。

……決まっている。生きる為だ！」

——徒党を組んで襲われた時、戦いの最中で知ることがあった。

「まさか、神話の中の——！」

「■■■■、行こう」

——失ってしまった究極の座に別の姿で辿り着けた。

「行こう。最後の決戦だ」

「うん。これ以上、命を失っちゃいけない！ 戦うんだ！」

——銀髪の少年とその相棒と共に、自らが作ってしまった死の化身に戦いを挑んだ。

「伝説の巨龍よ……我が魂、我が心の中で、生きろオ！」

「そっか、そうなんだ。命は受け継がれていくもので。だから、命はいつだって死を越えるんだ」

——命の尊厳と存亡を懸けた戦いの中で命のあるべき姿を知り、ついに命が死を越えた。

「約束だ！ 絶対に勝てよ！ 勝って、いつかまた——！」

「ああ。俺のパートナーが■■■■でよかった。絶対にまた逢おう」

——そして、最後の戦いに赴く相棒との別れがあつて、約束があつた。

それが、デジモンクロニクルD・C・2003のこと。やり直しのせいで歴史に上書きされた、なかったことになった世界。

しかし、この世界の外に帰った者たちは覚えてる。

しかし、至った者たちは覚えている。

だからこそ、なかったことになろうと約束は必ずそこにある。

D・C・2018 NEWデジタルワールド——ベルサンディターミナル——

その時、アルファモンは空を見上げて驚愕した。

空から降ってきた流れ星——否、人間。見覚えがあつた。かつてと同じではない、が、流れた月日分だけデジモンとは違う進化せいちようをした青年。

ああ、彼こそは自らのパートナーだ！ アルファモンは必殺技もかくやというスピードで落下してくるその少年を肩で受け止める。

「っ、ててて……久しぶり……」

落ちないように肩にしがみついた茶髪の青年は気恥ずかしそうに笑った。

アルファモンも、僅かに笑う。

「ああ、久しぶりだ」

ついに約束が果たされた。

お互いがお互いに生き抜く場所があつて、故にもう二度と会えないだろうと心の何処かで諦めていた相手との再会だ。

これほど嬉しい話はない、とアルファモンも青年も笑い合う。一方で、

「感動の再会の最中で済まないが」

そんな彼らに水を差したのは、空気を読んでデクスモンの猛攻を一人凌いでいたメデイーバルデュークモンだった。

「貴様を呼んだのは手を貸して欲しいが為。故に」

「わかってるよ。それにしても、またアイツと向き合うことになるなんてなあ」

青年は頬を引き攣らせながらデクスモンを見た。次いで、アルファモンを見る。

「何でアレがまたいるんだ？」

「それは、少し複雑な事情があるんだ……」

「また死んじまったのか？」思うところがあるように、青年はアルファモンに聞く。一方で、アルファモンは複雑そうな表情で首を横に振った。

「違う。いや、違わなくもないが、死んだのは俺じゃない」

「ふーん？ ってことは、またイグドラシル関係かなあ？」

メデイーバルデュークモンもアルファモンも沈黙を貫いた。

「まあいいや」

話は後だ、と青年は切り替える。

デクスモンがいるということは命が失われていくということだ。それを知っている身として、青年はデクスモンをこれ以上好き勝手させる気にはなれなかった。

「行くこうか、アルファモン！」

「行くぞ、コーター！」

だから、二人は死に向かって突き進む。

けれど、それ死ぬためではなくて、越えるためだ。後ろに続く誰かの為の道を作るため、道を切り開くためだ。

「――！」

デクスモンが叫ぶようにその爪が振るわれる。吹き荒ぶ風が弾き飛ばした。

「あれは……オレ？」

特に、青年の存在はコータを呆然とさせた。

「ええ。堂本光太。かつてやり直しの時代の一回、そこにいた貴方のオリジナルですよ」

「つ、おり、じなる？」

オリジナル。その意味がわからないほど、コータは阿呆ではない。

「貴方は彼のデータ、やり直しに消えた彼の記録を下にして作られた者。彼のコピーです」

「……！」

「コータが？ でも、何で……？」

呆然とするコータに代わって聞くのは、ドルモンだ。そのまま気遣わしげにコータを見やりながらも、グランドラクモンを問い質す。

彼は衝撃の事実に驚いているようではあったが、シヨックを受けている様子はなく、どちらかといえば疑問が先立っていた様子だった。

「ま、敵には必要だったのでしょね。人間という異分子。この世界にはない存在が」

「人間が？」

「ええ。だから、作った。そして、ドルモンという堂本光太と同じ相棒を与え、かつてと同じ状況を作り上げた。ま、何度か失敗したようですが」

幾度のやり直しの中で、失敗は当然あった。

例えばコータたちが未だ存続していたロイヤルナイツに敗北したり、例えば襲いかかつて来た有象無象の相手に殺されたり、と挙げたらキリがない。

デクスに辿り着くことなく終えたことの方が多かった。

「しかし、今回で辿り着いた。わかりますか？ イグドラシルにとつても、敵にとつても……世界にとつてもポイント・オブ・ノーリターンが今回になるでしょう」

「え？ でも、そのためのやり直しじゃ……」

「二つの力がしているのならばまだしも、二つの力が自分勝手にせめぎ合っているのですから、それは長く保つものではありませんよ」

グランドドラクモンとドルモンが話す中、コータは話を聞いていなかった。湧き上がる思考が彼の頭の中にあつて、話を聞くどころではなかったのだ。

自分は偽者だった、誰かの為に作られた代わりだった、という話であるのだから当然だろうが——……しかし、彼には実感がなかった。彼は彼で自分は自分、偽者とかそんなのは意味がない。そんな当然のことをコータはわかっていたから。

「話に集中できていないようですよ、休憩として一旦外に出て気分を変えてきたらどうですか？」

そんなコータを見て、グランドドラクモンはそんなことを言った。

次いで、「真つ暗闇の世界ですが、私がいけない分だけ空気は軽いと思いますよ」と、言外に自分と相対するのは疲れるだろうと言う。

自虐なのか自慢なのかわからない言葉だが、

「そうだな」

コータは、もちろん気分を変えてくるという部分に頷いて出て行った。

心配そうなドルモンもついて行くこうとする、が、「少し待っていただけですか？」とそれを止めたのはグランドドラクモンだ。

「何？」

「いえ。ま、話を進めないと思ひまして。しかし、貴方切り札を失う訳にも行きませんし」

「……？」

「彼なら心配ありませんよ。彼が気にかかっているのは偽物だとか、作られた者だとかそんなことではありませんから。自分が誰にとつてどのような必要だったのか——自分がどんな歯車なのか、ですから」

グランドドラクモンは「強いですよね。ありがちなアイデンティティの喪失に苦しむような悩みは持たないですよ」と笑った。その鈍さを馬鹿にしているような、その心の強さを称えているような、前者の割合が大きい声色だった。

まあ、とはいえ、コータがあんな反応なのも当然だろうか。

アイデンティティの喪失は自分の居場所が居場所ではなかった時に起こるものだ。例えばドルモンのパートナーが実は自分ではなかったとか、そういう話だったらコータも苦しむだろう。

けれど、実際にはコータ（真）がコータの居場所を奪うようなこともなく、自分のモデルがコータ（真）だったというだけの話。例えるのなら自分の名前は近所のお兄さんにあやかっつてつけられたものだったとか、そんな程度の話にしかコータには聞こえなかったのだ。

だから、アイデンティティ云々ではコータは悩みようがない。彼は彼なりに必死に生き抜いてきたのだから、彼は自分を確立させている。

よって、問題はそこ以外なのだ。

「貴方から見て凄く悩んでたように見えましたか？」とグランドラクモンが聞けば、

「……まあ」とドルモンは曖昧に唸る。

「そういうことですよ」

グランドラクモンはそう言つて話を切り、黙つた。

その様子に話が済んだと思つたのだろう。ドルモンはコータを追つて外に出る。

「コータ？」

しかし、コータはどこにもいなかった。

D・C・2018 旧デジタルワールド——跡地——

崩壊した旧デジタルワールド。そこがあつた場所には、もはや何もない。時折僅かな岩塊ゴキータが浮かんでいるくらい、何もない空間だ。

しかし、そんなめぼしいものが何もない空間に一つだけ残るものがある。何もない空間にあつて目を引く、否、そんなレベルでは済まない、視線を釘付けにしてしまうモノがあつた。

それはこの何もない空間に相応しくない、輝き。

世界の果てにあつて輝きを失わない、最後の名を持つ剣。

あの偉大なる皇帝の振るべき聖オメガフレード剣。

持ち主が死してなお、それはそこに突き刺さつたまま何もない空間

で佇んでいた。まるで、それこそが自分の役目だと誇示するように。
「いやいやあ。さすがに手古摺りましたねえ」

そんな中、感慨深そうな眩きを放つのは、あの悪魔——メフィスモンだ。

「しかし、これで終わりですねえ」

メフィスモンがその手に持つのは、過去世界に置き去りにされたはずの抜刀状態の蛇鉄封神丸。

それを、メフィスモンは振り上げる。さすがに戦闘で振り回すようなことはできない。だが、全身全霊をかけて時間をかければ、振り上げて振り下ろすくらいならばメフィスモンにもできる。

渾身の力で振り下ろすべく、旧き世界の幕引きにふさわしい一撃とするべく、魂を練り上げるようにゆっくりと振り上げていく。

「ひっひっひ。イグドラシル、偉大なる皇帝、貴方たちの負けです」

そして、蛇鉄封神丸が振り下ろされた。その先にあるのは、担い手のいない聖剣で。突き刺さっていた聖剣が弾き飛ばされる。

「さあさあさあ、さあつ！ 我が主が復活しますよお！」

聖剣が縫い止めていたものが、始まりに還す剣が初期化し続けたことようやく封印していた者が、ついに動き出す。

「長かった」

万感の意を込めた第一声。

永遠を吐き出し、刹那を吸い込むように、その者は静かに思い起す。

「もはや羨み口を開け見る時は終わった」

何かを成し遂げようとして、何も成せずに死んだ誰かがいた。

志半ばで死ななければならなくなった誰かがいた。

どんな動機があろうとどんな者だろうと関係なく、敗けてしまった誰かがいた。

「これより我々は動き出す」

美しきものだろうと、醜きものだろうと、善きものだろうと、悪しきものだろうと、大層なものだろうと、些細なものだろうと、敗者は敗者。敗者には勝者のように与えられる報酬みらいはない。故に未練が

あつて、後悔があつて、やりたいことがあつて、やるべきことがあつた彼らの念は残る。

その念が声となつて、彼らを産む。否、彼らとなる。美しき者も、醜き者も、善き者も、悪しき者も、大層な者も、些細な者も、すべてが敗者となつた時点で彼らとなる。

「今度こそ」

彼らを突き動かすのはただ一つ。このままでは嫌だという想いだ。故に、彼らは思う。

勝負の仕切り直しを、と。自分たちが持てなくなつたモノみらいを持つているモノたちを殺し、そして今度こそ自分たちが、と。

「そう、今度こそ」

正義が集団の中の多数で決まるものと定義付けるのならば、現存するどんな正義も彼らの正義には敵わないだろう。なにせ、歴史の敗者たちすべてが叫ぶのだから。

故に、彼らの正義こそは歴史の裏側より世界に舞い戻つた大いなる正義で。

「歴史を我々のモノにする」

それを成す。彼らこそ、偉大なる者が一人。あらゆるデジモンの怨念と悲嘆、歴史に存在したあらゆる敗者の化身にして、この時代の悲劇の元凶。

正十二面体の上方の面に人型の上半身を乗せた、二重螺旋状の触手を持つ者。

名を、アポカリモン。

最終章：深世界の敗北者 第五十一話くデジモンクロニクルく

D. C. 2018 ダークエリア

「おーい？ コーター？」

ダークエリアの片隅に声が響く。ダークエリアでは滅多に響かないような、誰かを探す声が響き渡る。

それは、ドルモンの声だ。彼は先ほどグランドラクモンの城から外に出たコータを探していた。が、見つからない。

「コータ、コータあー！」

どれだけ叫ぼうともコータは答えない。まるで、どこにもいないかのように。

まあ、元々からしてダークエリアはどこも見えないような暗闇の世界だ。目視でコータを見つけられないのも無理はない。だから、見えないだけでどこかにはいるのだ、とドルモンは気楽に考えていた。数分前までは。

「コータあー！」

呼び始めて、はや数分。コータの返事はない。その意味が信じられなくて、ドルモンは叫び続ける。

母とはぐれた子供のように無様に呼び叫ぶ。

ここがグランドラクモンの城でなければその声を聞いた悪しき者に拐かされる危険もあるだろうに、それさえ気にできないと呼び叫ぶ。

けれど、やっぱりコータは応えなくて。

ドルモンはその答えを薄々と勘づきながらも、叫んでいた。

「コータ、どこにいったんだよ……」

そして、そんな風に必死に現実逃避をする彼に容赦なく答えを突きつけたのは、

「やはり攫われたようですね」

いけしやあしやあと笑うグランドラクモンだった。

「………… お前っ」

その姿にドルモンは察する。だからこそ、口から飛び出したのは言葉ではなく鉄球だった。

もつとも、グランドラクモンに比べて遥かに小さな鉄球だ。甲高い音と共に弾かれて終わった。

「コータをどうしたんだっ！」

いろいろと教えてくれた相手にする態度としては失礼なものだ。まあ、相棒を害した暫定の相手としては妥当な対応の一つかもしれないが。

「別に私は何もしてませんよ。ええ。何もしなかっただけです」

グランドラクモンはそんなドルモンの無礼な態度にも気にした風はなく、しかしやはり、しやあしやあと答える。

この状況においても余裕を損なわずに何も答えようとしない態度が、何とかしてコータのことを聞き出したいドルモンの気に障り、その分だけ焦りも大きくなる。

まあ、年齢も経験も実力も成熟も状況も、その全てにおいて老人と幼子ほどの差があるのだから、今のグランドラクモンの態度を崩して聞き出すのは容易ではないのだが。

「コータをどうしたあ！」

それでも、何としても聞き出さなければならぬ。ドルモンは吠える。

「ああ、それなら連れて行かれましたよ。件の敵に」

一方で、北極とサウナほどに温度差があるかのように、グランドラクモンはあっさりと答えた。

「なっ、なんで!?!」

「何でも何も。先ほど述べたでしょう。あの彼はすべての元凶が必要だったから作られた者です。故に、必要になったから回収された。それだけの話です」

「お前っ」

「私にかかずにいいんですか？」

「……………」

激昂しながらもグランドラクモンの言葉の意味がわかるのか、ドルモンは齒軋りするだけだった。その顔は苦虫を噛み潰したかのような顔だった。

「貴方が私にかかずに、私に殺され、何もかもを無に帰したいというのなら好きにすればいい。私も無礼者を見逃すなどということはいたくありませんからね」

「……！」

「どうしますか？ 状況は刻一刻と変化していく。手遅れになるかもしれないませんか？」

「……つくう」

「選びなさい。私に殺されるか、それとも——」

ドルモンはすぐに駆け出した。もちろん、グランドラクモンに背を向けて。

敵わないことなど初めからわかっていて、だからこそ、逃げ出した。生き残ってコータを助けに行くことが重要であり、敵わない相手に挑みかかる無謀はしてはならないことだから。

「やれやれ。まさかあそこまで怒るとは。いや、あれこそが生き物として当たり前前の姿なのかもしれないが……私にはわからないことですね」

そんなドルモンの後ろ姿を見ながらも、グランドラクモンは呆れを隠そうともせずに呟く。その呆れはドルモンに対してか、コータに対してか、敵と呼んだ者に対してか、それとも別のものに対してか。

何はともあれ、グランドラクモンは後ろからドルモンの前に道を造ってやる。

真つ暗闇の中にポツカリと穴が空いた。

「えっ——！」

暗闇の中の穴など見つけようもない。

ドルモンはその穴の存在に気づけず、落ちていったのだった。

D・C・2018 NEWデジタルワールド——跡地——

世界は崩壊していた。

アポカリモンが復活し、新世界に侵攻を開始したことで、元々デクスモンやらルーチェモンやらが暴れまわったせいでボロボロだった世界は容易く崩壊を始めたのだ。まるで雪の結晶が掌の上で溶けていくかのように。

そうして過去世界も現在世界も関係なく、何もない空間に砕けて漂っていた。

ダークエリアほどではないが、真つ暗闇の空間に残骸が漂うだけの場所となっていた。ただ、ダークエリアとは違って、遠くに点在する星のような小さな光が見える。まるで宇宙のようだ。

それは、他の世界なのだろう。人間の世界や他のデジタルワールド、それ以外にもさまざまに存在する異世界の光なのだろう。

故に、その光こそは世界という命の光で。

「忌々しい」

故に、アポカリモンはその光を忌々しく見つめる。

もちろん、今すぐに消しに向かいたいところではあったが、彼らはそうしなかった。なぜならば、彼らにはすべきことがあったからだ。

「……」

目を閉じ、その時を待つ。

しかし、その時が来るよりも早くに邪魔が来ることも彼らはわかっていた。

「来たか。いや、ずいぶんと——」

アポカリモンは目の前に視線を向ける。

そこにあつたのは穴だ。そこから飛び出してきたのは、ドルモンだ。

「っ、アポカリモン——!?!」

穴から出るや否やアポカリモンの姿を視界に収めることになったドルモン。

彼は驚くことしかできなかった。このヘンテコな宇宙みたいな場所に出た瞬間、こうして弩級のデジモンの姿があったから当然だろうが。

「デクスの雛形か」

「まさか……コータをさらったのはお前か！」とドルモンが聞けば、「コータ……ああ、さらったというのは適切ではない。返してもらったのだ。我々にとって必要なパーツであったが故に、回収したのだ」とアポカリモンは傲慢にも返す。

「っ」

グランドラクモンの言っていた元凶、コータを作り、誘拐した者――そのすべてが目の前にいるこの偉大なる者だ。ドルモンは理解する。

「我々に挑む気か？」

「……当たり前だ！」

敵わないかもしれない、ということくらいはドルモンもわかっている。偉大なる者の一人を前にしてそこまで樂觀を持てるはずもない。戦えば死ぬだろう、ということもわかっている。生存を望む為に戦い続けてきたドルモンにとって、許されるのなら逃げの一択の場面であることも間違いない。

それでも、ドルモンは戦いを挑む。

なぜならば、

「確かに俺は生きる為に生きてきた。けど、コータを見捨ててまで生きるのは真つ平御免だ！」

ドルモンにとってコータはそれほどの存在だからだ。

「取り返す！」

ドルモンはアポカリモンに向けて、この宇宙のような不思議な空間を駆け出した。

地面がないのに、駆け出せる。その不思議さを気にする間もなく、彼は突き進んだ。

一方で、「かつて友を見捨てた者がよくも言う」とメイクーモンのことを指して、アポカリモンは吐き捨てる。そこには余裕しかなかった。恐るるに足りない、わかりきった事実を前に彼らはドルモンを哀れんでいた。

「絶対に、かあつつ！」

ドルモンは気合を入れた。

グランドラクモンのところで話は聞いている。だから、できる。やり方はわからない。けれど、参考にすべきものは見たことがある。だから、やる。

「進つ化あー！」

プロトタイプデジモンは頭の原始的なインターフェースを通して自己情報の改竄ができる。それはつまり進化先の情報さえわかっていたら、それと同じように改竄できる——つまり、進化さえ出来るということだ。

もちろん、普通はできない。今は退化してしまっているものの、一度進化したことで進化体の情報を記録しているこのドルモンだからできることだ。

「ドルガモン——」

成熟期じゃ無理だ。

「——ドルグレモン——」

完全体でも無理だ。

偉大なる者と戦うのならば、必要なのは力。故に。

「——ドルゴラモンッ！」

今再び、空想の竜が現実に解き放たれる。

その姿を、というよりはその進化の輝きを、アポカリモンは不機嫌そうに見つめていた。

「……忌々しい。その光が、その針の穴ほどの隙間を強引に通そうとする希望が、何とも腹立たしい」

そして、そんなアポカリモンに向かってドルゴラモンは殴りかかっていく。

突き出された触手の上を駆け抜け、正十二面体の面を駆け上り、その本体だろう人型の上半身の下にたどり着く。

「おらあっ」

その拳が唸った。拳がアポカリモンの顔に吸い込まれていった。そして、轟音が響く。確かな感触をドルゴラモンはその腕に感じた。だが。

「……」

だが、アポカリモンは微動だにしない。

微風が当たったかの如く、ドルゴラモンの渾身の一撃をその顔で受け止めていた。

「っ」

「解放された空想の力、この程度か。しかし、だろうな。いかに竜とはいえたかが一体程度の空想が、世界すべての空想を背負う我々に叶うはずもない！」

瞬間、破壊の波動にドルゴラモンは吹き飛ばされた。

知っている。ドルゴラモンはその技を知っている。自らの技の、
「ドルディーン」だ。

「なっ」

「集合体である我々に独りで挑むなど笑わせる」

吹き飛ばされたドルゴラモンを追撃するのは、数々の触手だ。DN Aのような二重螺旋構造の触手が凄まじいスピードでドルゴラモンめがけて突き進んでくる。

「つくー！」

ドルゴラモンは必死に捌いた。

向かってくる触手に拳を叩きつけて止め、尾を振るって逸らし、翼を飛ばたかせて躲す。

数が多い。だが、戦えている。ならば、勝機はある。

「終わりだな」

しかし、その数に気を取られているドルゴラモンは気付けなかった。

勝機など、初めからなかったことに。

「ひっひっひ。無駄な足掻きをしていますねえ」

聞こえてきたその声を、ドルゴラモンは知っている。

あの未来世界、自らに死をもたらした悪魔——忘れ難き、メフィスモンの声だ。

いつの間にかメフィスモンはそこに立っていた。その不意打ちを、ドルゴラモンはギリギリで躲す。

「おやおやあ？ そっちに逃げていいんですかあ？」

「っ」

直後、ドルゴラモンの頭上に影が降りた。

「我が主の命だ。ここで死ね」

聞こえてきたその声を、ドルゴラモンは知っている。

あの現在世界、デジモンたちに絶望を振り撒いていた聖騎士——忘れ難き、オメガモンAlter-Sの声だ。

頭上から振り下ろされたその右腕の狼剣を、ドルゴラモンは拳を叩きつけて防ぐ。

その時、ドルゴラモンの背後に気配。

「終の戦場、ついにここまで辿り着いたかつ。しかし、残念だったな」聞こえてきたその声を、ドルゴラモンは知っている。

あの過去世界、強大な刀を存分に振り回した武者——忘れ難き、タクテイモンの声だ。

蛇鉄封神丸が横薙ぎり振り切られる。オメガモンAlter-Sの攻撃を防御していたドルゴラモンに、それに対応する術はない。

「つく——！」

だが、ドルゴラモンは諦めない。自分の死を認めない。

走馬灯のように脳裏に思い返されるのは先ほどもその姿を目にした、忘れようもないメフィスモンの行い。

「退つ化あ——！」

瞬間、ドルゴラモンはドルモンへと退化する。

退化したことで、その巨大な体躯が一気に小さなものとなった。その直後のことだ。ドルモンのすぐ下を蛇鉄封神丸が通過したのは。

「っ、はあっ、はあっ」

何とか躲した。何とか怒濤の攻めを生き残った。

しかし、ずっと必死を保っていたせい、それとも先ほどの無理矢理な進化のせい、すでにドルモンは疲れ果てていた。

そんなドルモンを見て、

「終わりだな」

アポカリモンが無表情にそう言う。

見れば、ドルモンの周囲には彼が今まで出会った数々の強敵がい

た。メフェイスモン、オメガモンAlter—S、タクテイモン、そして——

「……」

——ラグエルモン。

例えドルモンの体力が万全でも、ドルゴラモンの状態でも、コータが共にいようとも、一度にこの全員に狙われれば勝ち目はないだろう。

「っ、まだ——！」

それでも、ドルモンは前を向く。

「……我々も次のやるべきことがある。諦めろ、とは言わん。さっさと死ね」

アポカリモンの声に従って、オメガモンAlter—Sがその右腕の狼剣を振り上げた。

そして、ドルモンめがけて振り下ろされる——！

「まあまあ待てい」

だが、それを止めたのは第三者だった。今までこの場にいなかった者だった。

「っ、何で……？」 驚きにドルモンの目が見開かれる。

そこにいたのは、ボコモンだった。彼は物理的に、その分厚い本ものしりブックを盾に狼剣を止めていた。

「今更来たのか。この事態になって、もはや手遅れなのに！」

一方で、アポカリモンはボコモンを忌々しそうに睨む。不倶戴天の敵を見るような目で、睨む。

伝説や神話に語られるような偉大なる者の一人が、たかが成長期のデジモンを本気で敵視していた。

一方で、敵意を一身に向けられたボコモンは、そんな彼らを見て泰然として笑った。

「手遅れかどうか、それは未だわからんじやろ。結末はまだ決まっておらん。勝利はまだ誰の手にも渡ってはおらん。ここが歴史の岐路。ここで出てこなければいつ出てくるという話じやろ」

強気に笑っていた。この状況にありながら笑顔で、この状況であり

ながら余裕綽々といった表情で、胸を張っていたのだ。

「ようやく場面がここに至ったんじや。世界がこうも壊れればリブートはもはや出来ぬじやろうが、代償に次に繋がる場面に至れた——」
「貴様……——！」

そこまで言ったボコモンを、アポカリモンたち全員が「この期に及んで邪魔されてなるものか！」と殺しにかかる。

その光景を前にして、ドルモンが「ボつ、ボコモン——！」と思わず叫ぶ。

「——さあ、ここが正念場じや」

しかし、それよりもボコモンの方がずっと早い。

「我が真名、イグドラシルの名の下に解き放とう。これこそは歴史書。我が世界のあらゆるすべてを記録し、歴史として残す大いなる書！」

その手に掲げるのは、「ものしりブック」——否。

「今こそ世界にその価値を示せ！　『デジモンクロニクル』 ツ！」

そして、歴史が解き放たれる。

第五十二話く開戦く

ものしりブックなんて名前は仮の名前。

その真の名前こそ、デジモンクロニクル。デジモンの歴史を記した書物。このデジタルワールドは情報デジタルの世界であるのだから、故に、この膨大な情報が記録された書物はまさに歴史そのものだ。それが解き放たれる。

その価値を、その輝きを、世界に示さんと開かれる。

「つ——」ドルモンは空いた口が塞がらなかった。

そこには、成長期のデジモンたちがいた。成熟期のデジモンたちがいた。完全体のデジモンたちがいた。究極体のデジモンたちがいた。イグドラシルの配下である十三の聖騎士たちがいた。

ドルモンと出会ったデジモンたちもいた。

山の如き竜がいて、眩いばかりの天使がいて、雄々しい獅子がいて、島のような亀がいて、空の覇者たる鳥がいて、壊すことに特化した兵器がいて、堅牢鋭利な虫がいて……。

まさに歴史を築いた者たちが、この場を集っていた。

その中心にいたのは、クリスタルのような結晶体。

「歴史に埋もれた者たちよ。これでもまだ勝ちを確信しとるか？」

イグドラシルだ。もはやアバターには意味がないのか、ボコモンの姿はどこにもない。

「確かに、いつだって我々敗者は貴様勝者に倒されてきた。それこそが世界の道理故に、なるほど。この上ない切り札だな。——……ふざけるな」
声を震わせて、アポカリモンが呟く。

その目は怒りに震え、嫉妬に駆られ、憎しみに染まっていた。

「いつだってそうだ。貴様らは酷薄に言い放つ！ 負けたのだから消えろと！ 歴史は勝者だけのものだ、と！ 認められるか。認めてたまるか。我々だって、いたのだ。この世界に生きていたのだ！ なのに何故、我々だけが消えなければならぬ？ 何故、我々だけが忘れられなければならない？ 何故、我々だけが歴史に参加できない？

何故、何故、何故——！」

アポカリモンが声を発する度に、その身体の至るところから血のような黒い泥が滴り落ちる。

「何故？ そんなもの、負けたからに決まっておるだろ」

イグドラシルは残酷にも言い放った。優しさの欠片もなく、また、向ける必要もないとばかりに、目の前の敗者にその当然を突きつけた。

「――！ イグドラシル、貴様は――！」

滴り落ちる泥の量がさらに増える。

火に油を注いだかのように、その勢いはどんどん増して行った。

「貴様ら勝者の理屈はもう聞き飽きた！ そっちがその気ならば、こちらとてその理屈を押し通す」

アポカリモンの言っていることは、ただの子供の癩癩に近い。敗北の先に対する絶望、勝利の先に対する未練、それらを引つ括めた敗者の声だ。それでも、誰しもが抱く声でもある。

一方で、イグドラシルはそれを認めない。当然だ。ルールの側であるイグドラシルがルールを曲げてまで敗者に寄り添うのは言語道断の話だ。

勝者は勝者で敗者は敗者。勝者は勝ちを抱かねばならず、敗者は負けに浸らなければならない。だから、分かり合うことができない。

しかし、だからこそ。この戦いは当然の帰結でもある。

勝者が勝利に傲る限り、それを放棄しない限り、勝利という座は存在し続ける。そして、そこに座るものとして、その座を奪い取らんとする者たちと戦わなければならない義務を背負う。勝ち逃げなど出来るはずもない。生存闘争による競争を良しとした生命の、絶対の法則だ。

……その戦いが敗者のリベンジか、それとも別の誰かのチャレンジかはともかくとして。

「我々が勝者となる可能性だってある。であれば、我々にだって歴史を作ることができる。……もう二度と忘れられて堪るか。今度こそ、我々が歴史となる。今度こそ、我々が勝つ。敗者だから何だというのだ！ まだ我々は負けていない！」

もし、アポカリモンと相対するのがイグドラシル^ルの^脚では無い誰かであつたのならば、生存闘争を良しとしない^{優し}甘さを持つ誰かであつたのならば、あるいは別の道があつたかもしれない。

敗者に勝者^敵以外の世界を見せる誰かがいたのならば、この世にいるのは勝者と敗者だけではないと教えられる誰かがいたのならば、勝者を称えながらも敗者にも寄り添えるような優しさを持つ誰かがいたのならば、こんな世界の命運を懸けた戦いはなかったかもしれない。

だが、所詮はもしもの話だ。

「あれは？」ドルモンが聞くドルモンの視線の先には、アポカリモンから生まれ出た泥が増殖し、分裂し、形を成していつていた。

「あれはアポカリモンの一部が出てきてるのう。ま、アポカリモンはその性質上、デジモンというよりはもう一つのデジモンクロニクルじゃ。同じようなことはできるじやろ」とイグドラシルから声が発生する。

「え？」

そこには、成長期のデジモンたちがいた。成熟期のデジモンたちがいた。完全体のデジモンたちがいた。究極体のデジモンたちがいた。力を求めた結果で進化したのに間違つた進化と断じられ、忌み嫌われた骨竜がいた。

数々のデジモンのキメラであるが故に、デジモンたちに恐れられた魔獣がいた。

怒りと憎しみによって優しさを押し込めてしまったがために生まれた、特異の獣人がいた。

実験成功作が生まれてしまったために、失敗扱いされている青い半機半竜がいた。

順当かつ正統な進化のはずなのに、特異進化体に踏み躪られることになった魔竜がいた。

憎しみに囚われた余り力を制御できなくなった、破滅の太陽竜がいた。

最後の聖騎士と同じ姿でありながらも、オリジナルによって機会を奪われた聖騎士がいた。

そのどれもがこの世に当然のように生まれながらも、正統なる者たちによって歴史の流れに押し潰されていった者たちだ。

それが個体、種族、関係なくここに存在していた。

「数の有利ないじゃん！ さっきの段階でやっつけばよかつたんじやないのか!?!」

それを見て、ドルモンが叫ぶ。

「いやいや甘すぎじゃろ。アポカリモン^{集合体}が相手の時点で、有象無象がいるかないかの差などあっていないようなもん。大事なはどうすれば最善の未来に辿り着けるか、その道を外れないことじゃい」

一方で、イグドラシルはあつけからんとしていた。

そして、改めてアポカリモンに向けて声を発生させる。

「世界は、歴史は、勝者のもの。苦勞と苦痛の末に勝者となったものだけが得ることが出来る日常。それが積み上げられて歴史となる。負けたくせに欲しがるものたちにくれてやっていいものではない。故に、潔く消えるが良い」

そうやって、イグドラシルはアポカリモンたちに向かって冷酷にも言い放つ。

「ほざいたな、イグドラシル。我々は消えぬ。敗者の未練と後悔、絶望、嘆き！ それがある限り我々は消えぬ。敗者がこの世に生まれ続ける限り我々は生まれ続ける。負けたくせにだど？ 勝手に勝った気になっているのはそちらだろう！」

アポカリモンはそんなイグドラシルに向かって、怒りと憎しみを滾らせて言い放つ。

最後に両者が叫んだ言葉は同じだった。

「消えろ！」

「消えろ！」

そして、戦争が始まった。世界の行く末、歴史の所有者を決める戦いが。

「行くぞ——！」

イグドラシルの部下である十三の聖騎士が先陣を切る。それに伴い、数々のデジモンたちが後に続く。

「勝つぞ——！」

オメガモンAlter—Sを始めとした者たちが先陣を切る。それに伴い、数々のデジモンたちが後に続く。

乱戦となった。事態は混沌を極めていく。

身体の色だけが違う同じような姿の者たちが潰し合うことなど当たり前、敵味方が入り混じる。技と技が乱れ飛び、味方の技で味方が吹き飛び、敵の技でも味方が吹っ飛ぶ。

敵と味方の区別もつかないような戦場の中、しかし、デジモンたちは誰が敵なのかを理解していた。本能で相手が勝者側であるか敗者側であるか理解できているようだった。

「これは——」

負けたのだから消えろ、世界はオレたちのものなんだ、と叫ばれる。それは慈悲も何もない声だ。その声だけを聞けば、誰だっと思うだろう。こちらが悪だと。

消えたくないんだ、世界はオレたちのものでもあるんだ、と叫ばれる。それは、力に勝てぬ弱者の声だ。その声だけを聞けば、誰だっと思うだろう。こちらが正義だと。

しかし、どちらがどちらとも相手を排除するために動いている。自分たち、と区切っている。故に、ここに正しさはない。ここにあるのは、醜さだけだ。

……だから、勝てない。正義は必ず勝つものだから。正しさのない戦いに、勝つ者はいない。

それを知っている者も、知らない者も、誰もが止まらない。止まらない。

「——悲惨じゃの」

そんな光景を、イグドラシルはただ見ていた。クリスタルの結晶体であるが故に、その表情を伺い知ることとはできない。

だが、ドルモンにはどこか悲しんでいるような、寂しがっているような、そんな風に見えた。

「ドルモン」イグドラシルが未だ戦いに参戦していないドルモンに向けて語りかける。

「何？」

「アポカリモンが挑発に乗ってくれたおかげで隙ができた。ま、あやつらがあやつらである以上、乗らざるを得ない言い方をしたのじやが。ともあれ、この醜く混沌とした戦場が出来たことで道ができた」
ドルモンはアポカリモンに視線を向ける。かなり遠くに存在する彼らはこの混沌としている戦場にあつて、しかし、動かない。

否、動けないのか。イグドラシルと同じように。

「儂とあやつらは互いにクロニクルを展開しつつ、互いが動けない。アポカリモンは自らの成したいことを成すために、儂は世界を保つために」

「……それは、つまり？」ドルモンは訳がわからないと意味を問う。

「ドルモン、この戦いはお前さんにかかつとるといふことじやな。コータを助け出して、アポカリモンが成そうとしていることを止められるかどうかという訳じや」

「……」

そういうことか、とドルモンは納得する。

道は出来た、あとは進むだけ。

「なら、問題はないね」

アポカリモンが何を成そうとしているにせよ、この戦いの行く末がどうなるにせよ、ドルモンが相棒を助け出すことは決定事項だ。

アポカリモンに、イグドラシルに、この場を集った者たちに、どれほどの想いがあつたとしても。それを押し退けてさえ、ドルモンはそうするのだ。

だって、あの生存闘争の世界を生き抜いたドルモンはわかってい

る。
どれほどの辛く苦しい世界が目の前に広がっていたとしても、どれだけの複雑な思惑が自分に絡みつけられていたとしても……—それでも、共に生きる誰かがいるということは、これ以上ない幸せなのだ。

その幸せを知る者として、もうドルモンは独りにはなれない。なりたくない。

「今行くよ、コータつ！」
だから、ドルモンは駆け出した。

第五十三話く変異進化く

ドルモンは進んでいく。戦場の中を、しかし、戦場そのものには関
わらないと脇目も振らずに突き進んでいく。

「……！」

だが、やはりこの混戦乱戦の場だ。

いかに上手く進んで行こうとも、必ず壁が立ちはだかる。

初めに立ち塞がったのは――

「何処に行く！」

――あの絶望の聖騎士だ。
オメガモンAlters

彼は別の誰かと戦っていたはず。その誰かに勝ったのか、それとも
誰かに勝つことなくここに来たのか、それはわからない。

だが、現実として彼はここにおいて、

「我が主の邪魔はさせん！」

その右腕の狼剣を振り上げていた。

「やばいっ！」

ドルモンは転がるようにして躲した。躲せた。だが、それだけだ。
二撃目は避けられない。進化しようにも、一番初めの攻防で疲労した
今のドルモンではそれだけの体力がない。

そして、狼剣が振り抜かれる。

「っ！」

甲高い音が響き渡った。

「ブリッツグレイモン！ クーレスガルルモン！」

ドルモンを庇ったのは、ブリッツグレイモンとクーレスガルルモン
――……図らずも、いや、必然としてオメガモンAltersの元
である二人だ。

「ここは大丈夫。だから、行って！」

「前と同じ。適材適所だ！ 大丈夫！」

「頼んだよ！」

ブリッツグレイモンたちに言われて、ドルモンはまた駆け出した。
その後を、オメガモンAltersが追おうとするが、

「させないよ!」

ブリッツグレイモンたちが立ちほだかる。

オメガモンAlter—Sは苛立ったように舌打ち一つして、しかし、次の瞬間には呆れたようにブリッツグレイモンたちを見た。

「クロニクルの展開によって甦ったか。この分ではまだまだいそうだな」オメガモンAlter—Sが忌々しそうに言う。

「だろうね。ボクたちとしては不思議な気分だけど」とブリッツグレイモンが笑い、

「まあ、悪い気分じゃないことは確かさ」とクレーレスガルルモンも笑った。

それが、その姿が、オメガモンAlter—Sの心中にさざ波を立たせる。

それを押さえ込んで、彼はブリッツグレイモンたちを嘲笑した。

「ふん。大丈夫、と言っていたな。勝てると思うのか? 我が主によって私のパーツとして見出されただけの有象無象が」

「時間稼ぎできれば御の字、勝てればなお良し。っていうか、実際にはボクたちとキミたちの状況は互角だ。互いが互いに、クロニクルが展開され続ける限りね」

ブリッツグレイモンの言葉をオメガモンAlter—Sは嘲笑う。

確かに、ブリッツグレイモンの言葉は間違いではない。イグドラシルの「デジモンクロニクル」が発動され続けている限り、それにアポカリモンが対抗し続ける限り、この場に現れたデジモンたちは消滅したところで何度でも現れる。

つまり、この戦争状態そのものに終わりは無いのである。この戦争状態が終わる時は、アポカリモンの成すことが成功するか失敗した時だ。

「だから、安心してキミを倒せるんだよ」とブリッツグレイモンが言い放つ。

「俺たちの力、舐めないでもらおうか」とクレーレスガルルモンが武器を構えながら言う。

「舐めているのは貴様らだろう。私がここにこうしている限り、貴様

らは私にはなれん。その劣った姿でどこまで抗える！」オメガモンAlter—Sが狼剣を向けた。

そして、三者はぶつかり合う。

クーレスガルルモンの『黄獣偃月刀』がオメガモンAlter—Sの狼剣とぶつかり合う。幾度も幾度も打ち合い続ける。

その隙に、ブリッツグレイモンが準備するのは背中の中の『サンダーバーニア』だ。

「クーレスガルルモン！」

「よし！」

呼ばれた声に反応して、クーレスガルルモンが飛び去る。入れ替わり、オメガモンAlter—Sに肉薄するのはブリッツグレイモンだ。

『サンダーバーニア』が雷を吹いた。

「『プラズマ——』」

全力の一撃、腕をオメガモンAlter—Sに叩きつける。

「——ステーク——！」

だが、オメガモンAlter—Sの行動も早い。その背のマントが『プラズマステーク』との間に差し込まれ、僅かに時間を稼ぐ。その僅かな時間を使って構えるのは、左腕の竜砲だ。

「『グレイキャノン——』」

放たれたプラズマがブリッツグレイモンを吹き飛ばす。

撃ち抜かれることはなかったが、かなりのダメージだ。

「ふっ！ 獣狼大回転——ッ！」

回転することによって全身を刃と化したクーレスガルルモンが、技を放った直後ノオメガモンAlter—Sに襲いかかる。

オメガモンAlter—Sは即座に放ち続ける竜砲を止め、右腕の狼剣を振りかざす。

「ふっ！」

耳障りな音と共にクーレスガルルモンは弾き飛ばされた。

「まだだっ！」

入れ替わり、体勢を立て直したブリッツグレイモンがオメガモンA

Alter—Sに飛びかかる。

しかし、遅い。

狼剣を振った勢いで回転したオメガモンAlter—Sはそのまま竜砲をブリッツグレイモンに向ける。

眼前に竜砲があつて、ブリッツグレイモンは目を見開く。

「『グレイキャノン』！」

「ぐあっ」

今度はゼロ距離に近い距離、顔という弱点の一つにプラズマ弾が着弾する。ブリッツグレイモンは吹き飛ばされた。

「っ、『激・氷月牙』」

そんなブリッツグレイモンを横目に見ながらも、ク雷斯ガルルモンは止まらない。氷で作った何本もの『黄獣偃月刀』がオメガモンAlter—Sに迫る。

「『ガルルソード』！」

狼剣から斬撃が飛ばされる。

飛来する斬撃が氷刀を薙ぎ払い、

「っ！」

勢い衰えることなく突き進んでク雷斯ガルルモンに直撃する。

身体を両断されることはなかったが、それでもボロボロになって吹き飛ばされた。

「時間を無駄にしたな」

ボロボロになったク雷斯ガルルモンたち。

そんな彼らから、オメガモンAlter—Sは背を向ける。一刻も早く、邪魔者^{ドルモン}を排除しに行かなければならなかったからだ。

「っ、待て——！」

「待てっ！」

駆け出したオメガモンAlter—Sの背に声を飛ばす。だが、聞かれない。聞かれるはずもない。

まだまだ、とブリッツグレイモンとク雷斯ガルルモンの二人は立ち上がる。彼らは何としても止めたかった。ドルモンを先に行かせたかった。

それがこの場においての勝利条件だとわかっていて、つまりは世界の為だから？ もちろん、そんな理由もある。

オメガモンAlter-Sという自分たちの化身のような敵に負けたくなかった、つまりは自分たちの為だから？ 当然、そんな意地もある。

だけど、それ以上に、

「——まだ行くぞ」

「——行けるね？」

生に固執せずに満足した最期を迎えた者として、彼らは未だ生きている仲間友だちを助けたかった。

未練も後悔もない最期を迎え、安らかに眠死んでっていた者が再び起き上がって戦っているのは、彼らがその人生で得た信頼の為だ。

故に。

その信頼に報いるために、彼らはここにいる。その信頼に報いるために、彼らは満足その気もなかったしていたのに再び蘇った。

その信頼が、力を生む。遙か遠くへ行く為の膨大なまでの力が、なほどと上手いことはいかない。それでも、ほんの少しだけでも先へ行く為の、僅かな力が生まれる。

僅かな力だけでいいのだ。

その僅かな力があるだけで、彼らはまだ戦える。

その僅かな力があるだけで、彼らは変わる。

「キミたちの思い通りにはさせない！ 進■——！」

「お前たちの思い通りにはならない！ ■化——！」

それは、果たして進化と呼べるのか。いや、進化というものが次の世代への変化と定義付けるのなら、それは決して進化とは呼べないだろう。

それはある意味で、特殊な彼らだから辿り着けた姿だ。

オメガモンAlter-Sを生み出すため、アポカリモンに人為的に操作された身体を持つ彼ら。

弄り回され、通常とは違う身体に調整された彼らは、通常の進化など望めない。だからこそ、進化退化を繰り返し、オメガモンAlter

r—Sに連なる系譜のデジモンに自由自在に進化できた。

アポカリモンの思惑通りの性能として調整された彼らは、それから外れようともがいた結果、その身体に異常を起こす。

通常では有り得ない異例の進化。

通常では有り得ない異例の存在。

アポカリモンの思惑を超えて、アポカリモンに持たされた性能をすべて捨てて、そこに辿り着く。

「ビクトリーグレイモン！」

現れたのは巨大な剣を持つ、ウォーグレイモンに似た「豪傑の竜戦士」だった。

「ズイードガルルモン！」

現れたのは数々の実弾兵器を装備した、メタルガルルモンに似た「究極の獣戦車」だった。

「撃つ。『ブローバックブレス』ッ！」

ズイードガルルモンが口から放つ、発射エネルギーがオメガモンAlter—Sを襲う。

「——っ、何？」

ビクトリーグレイモンにズイードガルルモンなどという異常に驚き震えるオメガモンAlter—Sに、ビクトリーグレイモンはその剣「ドラモンブレイカー」を思いつきりに叩きつける。

もはや剣というよりは鈍器のような、豪快な扱いだ。

その重量の乗った一撃を、オメガモンAlter—Sは狼剣で何とか防ぐ。

「つぐ——！」

だが、耐え切れずに吹き飛んだ。いや、ダメージを減らすために自ら飛んだのか。

「まさか、このようなことが。我が主の呪いを振り払ったとでも？」

「知らないよ。お前の主のこととか、何にも。それでもボクたちはここにいて、ここに立っている。それがすべてだ」

「これでもまだ俺たちを無視するのか」

オメガモンAlter—Sは目を閉じた。仕方ない、とでも言いた

げに。そして、「我が使命、邪魔するな——！」と駆け出した。

さつさと終わらせて、ドルモンを追うことに戻るつもりなのだろう。総力で言えば、ビクトリーグレイモンたちはブリッツグレイモンたちだった頃とほぼ変わらないということ見抜いたからこそその対応だ。

だが、そんな彼は見落としている。進化したばかりの新進気鋭の勢いを見落としている。自分の焦りにも似た性急な感情を見落としている。

「ズグレイキャノン」ッ！」

竜砲から放たれるプラズマ砲。

真つ直ぐに突き進むそれを躲そうともせず、いや、敢えてその射線上にビクトリーグレイモンは立つ。

「ズビクトリーチャージ」ッ！」

それはビクトリーグレイモンの剣技の一つ。相手の技を受け流し、逆転させ、跳ね返すカウンター技だ。

もちろん、オメガモンAlter-Sほどの実力者の攻撃だ。返されるものではないし、次からは対応される初見殺しの部類でしかないだろう。

だが、それでいい。今回はこれで決める。

ビクトリーグレイモンは返しきれなかった分のダメージが自らの身体を傷つける、ヒリヒリとした焼ける痛みを感じていた。

一方で、

「——！」

驚くオメガモンAlter-Sは跳ね返ってきた、幾分か減衰した自らの技を右腕の狼剣で切り払った。それは僅かだが隙だ。

その僅かな隙を、ビクトリーグレイモンたちは逃がさない。

「ズズイド——」

ズイドガルルモンの背中から砲筒が現れ、その超弩級の最終兵器にエネルギーがチャージされていく。

「ズトライデント——」

大剣が分割され、ビクトリーグレイモンの両腕に装着。大気に存在

するすべてのエネルギーが剣先に集中する。

「砲」!

「ガイア」!

放たれたエネルギーがオメガモンAlter-Sを押し潰さんと迫る。

「っ、舐めるな! ガルルソード」!

対して、オメガモンAlter-Sは右腕の狼剣より斬撃を放つ。

だが、チャージが足りていない。その狼剣に万物を断つほどのエネルギーは貯まっていない。

「く!」

そして、斬撃は二つの莫大なエネルギーの塊に押し負ける。

オメガモンAlter-Sに、それを躲す術はない。そうして、オメガモンAlter-Sはエネルギーに押し潰されて消えたのだった。

第五十四話く再戦く

オメガモンAlter-Sを倒したビクトリーグレイモンとズイドガルルモン。だが、その表情は浮かれたものになることはない。いやむしろ、険しさを増している。

最も、それも当然だろう。

この事態、つまり「デジモンクロニクル」が発動されている場において、デジモン召喚機能は展開中永続だ。つまり、イグドラシルが召喚した者だろうが、アポカリモンが召喚した者だろうが、

「少し悔っていたようだ」

死んだところで甦る。

オメガモンAlter-Sの死体が泥に変わり、捏ねくり回されたかのように蠢き、もう一度オメガモンAlter-Sの姿となった。完全復活だ。先ほど与えたダメージの欠片も残っていない。

「……もはや私が行くのは遅いか」

オメガモンAlter-Sは横目でドルモンが消えた方向を見る。ドルモンの姿は見えなかった。

彼が今からビクトリーグレイモンたちを殺してドルモンの元へ行くよりは、他の誰かしらに任せた方が効率が良いだろう。

「貴様らの勝ちだ。貴様らは見事、私を相手に時間を稼いだ」

オメガモンAlter-Sは狼剣を構えながら、ビクトリーグレイモンたちを賞賛する。いや、どちらかといえばそれは自嘲の言葉だったのかもしれない。

「ここからだね」とズイドガルルモンが言い、

「ああ、ここからだ」とビクトリーグレイモンが頷く。

意地でもって、ビクトリーグレイモンたちも自分の武器を構えた。

「だが、もう貴様らは勝たせない」

「は。何度でもボクたちが勝つー!」

そのオメガモンAlter-Sとビクトリーグレイモンの言葉を皮切りに、再び彼らは戦い始めた。

一方その頃、ドルモンはえつちらおつちら走っていた。

時折、流れ弾——というには怖すぎる火力のミサイルやら何やらがピンポイントで飛んで来ていたが、何とか無事に彼は走っていた。

未だ目的地アボカリモンは遠い。それでも、前進はしていた。

「カツ。これ以上は先に行かせぬよ」

斬撃。

ドルモンは何とか躲す。が、止まらぬ斬撃はそのまま突き進み、幾人かを敵味方諸共に切り捨てていた。

「つ、タクテイモン——！」

「主、いやさ、相棒を何が何でも助けようとする……その意気や良し。だが、我々の進退が関わる以上、これ以上は進ませぬよ」

立ち塞がったのは、抜刀状態の蛇鉄封神丸をその手に持つタクテイモンだ。

彼もオメガモンAlter-Sと同じく、誰かしらと戦っていたはずなのだが、おそらくは倒してきたのだろう。彼自身はともかく、抜刀状態の蛇鉄封神丸の性能は卑怯の一言だ。底上げされた暴威的な力でもって、誰であろうと蹴散らせるだろう。

抜刀状態の蛇鉄封神丸を持つタクテイモンを倒せるものなど、到達者や偉大なる者を除けば、それこそひと握りだ。

そして、今のドルモンはそのひと握りではない。

「さて、故にここで終わりだ」

蛇鉄封神丸が振るわれる。

先ほどとは違い、はつきりとドルモンを狙った一閃。それを、ドルモンは躲せない。

「つく、メタルキャノン！」せめて、とドルモンは鉄球を吐き出す。それが無為に終わったとしても、彼は諦めたくなかった。

そして、世界に響き渡るほどに重く大きい金属音が鳴り響く。次いで、聞き逃してしまうほどに小さく軽い金属音が鳴った。

「——！」

ドルモンはまだ生きていた。そんな彼が見たのは、自分の前に立つ金色。

「トウエニスト！」

「おう、トウエニストだぜ！」

ああ、そこにいたのは「あの」トウエニスト——剣のデジモン、デユランダモンだ。

ドルモンたちは最後の最後まで剣の姿しか見られなかった彼だが、デジモンとしての姿でそこに立って、両腕の剣でもって蛇鉄封神丸を防いでいた。

「歴史を祝う盛大な祭りって聞いて来たぜ！ 真のトウエニストとして見逃せねえからな！」

楽しそうに、嬉しそうに、デユランダモンは言う。

歴史を愛する者 トウエニストとして、このデジモンクロニクルの発動はそれこそ絶対に見逃せない光景だったのだろう。

だが、一方で、歴史を否定する者 タクティモンの機嫌は急降下の一途だ。

「また、貴様か……！」

「おう、またオレだ。アンタらにや負けねえぞ」

蛇鉄封神丸が音を立てて引かれ、タクティモンに構え直される。

同じように、デユランダモンもその両腕を構え直した。

「ドルモン行け！」

「うん、ありがとう！」

ドルモンは駆け出した。

すぐさま、そんなドルモンに向けて蛇鉄封神丸が振り下ろされる。発生した黒の斬撃が切り這ってドルモンめがけて突き進んだ。

「させるかあつ」

その黒を、黄金が切り裂く。

「思い通りにはさせねえぞ」

「某のすべきことは貴様を殺すことではない」

「だろうな。ってか、アンタ、オレに勝てる気なのか？」

「何？」

「確かにオレという剣はアンタの刀に負けた。けど、今度はどうかな？ 振る者がいない剣は鈍ら以下、だっけ？ 本当にそうかな」

自信満々に、デユランダモンは笑う。

タクテイモンは「是非もなし」と呟いた。どのみち、デユランダモンを無視して逃げ行くドルモンを狙うことなど出来るはずもない。

「今度こそたつた斬ってやろう」

忌々しさを隠そうともしないタクテイモンが蛇鉄封神丸を振るう。

「斬られるのはアンタさ。トウエニストを舐めるなっ」

凶暴に笑ってデユランダモンが両腕の剣を振るう。

真の力を発揮していないLegend Armsと、真の力を発揮している蛇鉄封神丸、両者がぶつかり合う。

甲高い音金属音を世界に響かせ続け、黒と金の剣光を世界に輝かせ続け、両者は何度も交わる。

「はあっー」

「ふっー」

押しているのは、やはりタクテイモンだ。

押されているのは、やはりデユランダモンだ。

それでも、勢いがあるのはデユランダモンの方だった。

「〃無の太刀、六道輪廻〃！」

無数に放たれた斬撃がデユランダモンに襲いかかる。

逃げ場を絶つように広域に飛んでいく斬撃だ。躲すことなど出来るはずもない。

だからこそ、デユランダモンはそう選択する。

躲せないのならば、斬るまで。

「トロンメッサー！」

デユランダモンの全身は剣だ。足も、腕も、頭も、背も。だからこそ、回転するだけで全身による複数対象の斬撃が可能となる。

ブーメランのように彼は己を回転させ、迫り来る無数の斬撃を逆に斬っていく。

「っ」

斬り切れなかった分が僅かにダメージとなって蓄積するが、問題はない。まだデユランダモンは戦える。今度はデユランダモンの番だ。

ブーメランのような彼はそのままタクテイモンめがけて飛んでいく。

「ぬっ」

タクテイモンは蛇鉄封神丸を振るい、飛んできたデュランダモンを弾き飛ばした。

上に弾かれるデュランダモン。だが、まだ距離が近い。

「――！」

デュランダモンは身体を捻り、即座に向きを反転。タクテイモンに向かう。

「……！」

タクテイモンは蛇鉄封神丸を返し、即座に体勢を整える。デュランダモンを迎える。

「ツヴァングレンツェー！」

デュランダモンの闘気が込められた両腕の剣が、

「蛇鉄封神丸――！」

気合と共に振り抜かれたタクテイモンの蛇鉄封神丸が、

「らあっ！」

「はッ！」

互いに交差する。

耳障りな金属音。一瞬の拮抗。だが、それはすぐに終わる。

金属の破砕音が響き渡った。黒が金を食い破る。蛇鉄封神丸がデュランダモンの両腕を斬り裂いた。

やはり、真の力を発揮していないLegend Armsでは真の力を発揮している蛇鉄封神丸には敵わない。

「っ――！」

スローモーションになる光景の中、デュランダモンは悔しい思いが抑えきれなかった。

伝説の剣として、最強の刀にまた負けたのだ。

だが、

「勝負の勝ち譲らねえ！」

デュランダモンはそこで終わらない。

伝説の剣VS最強の刀の戦いは、確かに負けた。しかし、デュランダモンVSタクテイモンの戦いは負けられない、と。

デュランダモンは身体を回転させる。腕の剣はもうない。だが、それでも彼の身体は剣だ。

「トロンメツサーッ！」

回転したデュランダモンがタクテイモンを襲う。

タクテイモンも当然、蛇鉄封神丸で対応するが——距離が近過ぎる。

蛇鉄封神丸はデュランダモンを弾き飛ばせず、その身体を両断するだけに留まった。普通ならば、それでも十分だ。

だが、しかし、トロンメツサー中のデュランダモンは回転して勢いづいている。

つまり、身体が両断されたところで、

「トウエニストオオオオオ！」

回転の勢いはまだ生きている。

デュランダモンの回転したままの身体がタクテイモンの身体に突き刺さる。

「つぐうー！」

そして、タクテイモンの身体は両断された。

そして、光と共にデュランダモンは甦る。再召喚され

一方で、泥からタクテイモンも形作られる。再召喚され

「引き分けか」

湧き上がる感情を隠そうともせず、タクテイモンが吐き捨てた。

「このお……！」

同じように、デュランダモンも感情を隠そうともせずに力む。

引き分けなど、認めない。互いに互いを認められない者同士として、剣と刀の戦いも、デジモンとしての勝負も、どちらも勝たなければ気が済まないのだ。どちらかだけ勝つ、どちらかが引き分ける、そんな中途半端は許せないのである。

タクテイモンはちらりと横目でドルモンの進んでいった方向を見る。その姿はもう何処にもなかった。今から即効で目の前のデュランダモンを片付け、ドルモンを追うのは非効率だ。故に、彼もオメガ

モンAlter-Sと同じ選択をする。

すなわち、目の前の相手を潰すということ。

「斬る！」

「斬る！」

そうして、タクティモンとデュランダモンは再び戦い始めた。

第五十五話く巡り巡って自分へ還るく

戦いは激化の一途を辿っていた。

ビクトリーグレイモンたちとオメガモンAlter-S、デュランダモンとタクテイモン、彼らの戦いなど氷山の一角。

この場所の至るところで因縁や宿命の対決が、あるいは、何にも関係のない者たち同士による対決が行われていた。

「ひっひっひ。終わらずの戦い、繰り返し返される争い、休むことも癒されることもなく続いていく……何ともまあ哀れですなあ!」

敵も味方も、いや、この場で戦い続ける者たちすべてを嘲笑って、その悪魔はそこメフィスモンにいた。

彼はただ待っている。自分の主の下へ行くのならば、必ず最短の道を通り、故にここに現れるだろうと予想して。

そして、その予想通りに、

「っ、悪魔!」

ドルモンは現れる。

「いけませんねえ。ここからは行き止まり。もう終わりですよ。先ほどまでのように手助けしてくれる心優しい誰かなど付近にはいませんしねえ?」

そう、この辺りにはドルモンを助けようとする者たち、ドルモンを知る者たちはいない。もちろん、本能でドルモンこそが勝利の鍵だとわかっている者はいらるだろうが、そういった者さえいない。

この辺に居るのは、ただただ目の前の相手と戦い続ける者たち、あるいは、戦わなければならない者たちだけ。

ドルモンを助ける者たちはいない。オメガモンAlter-Sたちの失敗を嘲笑いながら見ていたメフィスモンは、そういう場所を狙って待っていた。

「さて、貴方にはずいぶんと手を焼かされましたし、殴られもしましたからねえ。珍しいんですよ? 私がこれほどまでに根に持つのは」

「退け!」

「退きませんよお。いいですねえ。その焦った顔! もっと見せてく

ださいよ！」

メフィスモンは嗤いながら、一瞬でドルモンに接近する。

その足が鋭く動いた。前に突き出された足、つまりは蹴り。ドルモンには躲せない。

「ぐふっ！」

蹴りが入って、ドルモンは後方目掛けて吹っ飛んでいく。まるでボールのようだ。何とか体勢を立て直そうと立ち上がろうとしたドルモンだが、そんな彼は見た。

すぐ目の前に、にっこりと笑うメフィスモンがいた光景を。

「えいー！」

音符マークが付きそうなほどの可愛らしい掛け声でメフィスモンは足を振り上げる。

「あはははは。本当にボールのようですねえ。人間の世界ではこういうゲームがあるんでしょう？ 何でしたっけ？ 友達をボールに、でしたっけ？ まあ、よく知りませんがなるほど楽しい！ ええ！ 良い光景です！」

再び蹴りがドルモンに突き刺さって、また彼は後方に吹っ飛んでいった。

「それでどうです？ 必死で進んできた距離がもうこれだけ戻ってきてしまった気分はあ？」

「……！」荒い息を吐き出し、痛みを堪え、ドルモンはメフィスモンを睨んだ。

「何ですか、その顔は。貴方たちにはほとんど苦勞させられたんですよ？ 苦勞には報いがあるべきでしょう。勝ち取った平和には安寧という報いがあつて、得られた食事には満腹という報いがある。物事には報いがあり、苦勞させられた分は私が楽しんでもいいでしょう？」

メフィスモンはそんな戯言を言つて笑う。

いや、言っている内容はそこそこ道理っぽいのだが、ただの言い訳というか、思つてもいないような、それなりに説得力のありそうな言葉をもっと楽しく言つて楽しんでるだけだ。

「さあさあ、どうします？　このままだともっと戻ってしまえますよお！」

三度目の蹴り。

三度目の後退。

ドルモンはまた後方へと吹っ飛んでいく。

「ああ、このままタクティモンやオメガモンAlter Sのところまで連れて行くのもいいかもしれませんがね！　彼らがミスした彼らの仕事なのですから、彼らに片付けてもらわなくてはねえ」

良いアイディアが思い浮かんだとばかりに、メフィスモンは足を後ろに振り上げる。そして、思いつき蹴飛ばした。

今までにないほどの物凄い速度で蹴りがドルモンに突き刺さった。

ドルモンは吹っ飛んでいく。

「うっ！」

浅い放物線を描いて、サッカーのミラクルロングパスもかくやという感じで飛んでいくドルモン。

そう、それはパスだった。

その時、ドルモンは衝撃を感じた。誰かにぶつかったような、そんな鈍い衝撃だ。しかし、それにしても痛くない。まるで強引にだが誰かに受け止めてもらったかのように、先ほどまでと比べて痛みがなかった。

「果たすべき使命があり、成すべき仕事がある。目の前に終わりがあ
るのに、いたぶって楽しむだけか。忠義とは程遠い。いや、貴様ら外
道の者に正道の心を期待するだけ無駄か」

いや、受け止めてもらったのだ。

ドルモンは目を見開いて、自分を受け止めた聖騎士を見る。それは、この世で最も有名な聖騎士の一人だった。最後の名を冠する、聖騎士だった。

しかも、デジモンクロニクルによって召喚されたその聖騎士ではない。
い。

「な、貴方は——！」

驚きと共に、メフィスモンは震えた。

ああ、そうだ。そこにいたのは驚くべき相手だった。

かつてやり直しの最中の一回、黒の者と同じくその時に至った者だった。それでいて、黒や赤とは違ってこの事態において何の干渉もせずに静観していた者だった。

「この事態に至り、我が主が動いているというのに何もしない騎士はいまい。私の再現体も私の模造体もいるようだが、私は未だここに生きている」

左腕に竜頭の籠手、右腕に狼頭の籠手、そして白きマントを身につけた聖騎士。それこそは白の到達者——オメガモンX抗体。

「お、オメガモン……？」

Alter—Sではない、本物のオメガモンだ。しかも、自分と出会っていたということもない。なぜ彼が助けてくれたのかわからなくて、ドルモンは混乱した。

一方で、オメガモンX抗体はそんなドルモンを横目に見ると、すぐに落とした。その目は無機質的で、酷く冷たいものだ。

「私は我が主の真意を履き違えていたようだ。が、私の答えは変わらない。世界の安定と安寧の為にデジモンなど不要。あのような愚かしい存在が生まれ出でるとなれば尚更」

オメガモンX抗体は静かに言った。何の感情も感じさせない声だった。表情も相まって、まるで機械的というか、何も感じていないかのようだ。

もちろん、そんな訳はないのだが。

「それでも私がここに来たのは、我が主の戦場であるが故。しかし、私は貴様がどのような結末の為に走ろうと知ったことではない」

そう言うと、オメガモンX抗体は足を僅かに動かす。後ろに。

それを見たドルモンは次に来ることがわかって、頬を引き攣らせた。

「ちよ、まつー！」

「こんなところで油を売っているな」

そして、メフィスモンのそれ以上の衝撃がドルモンを襲う。

凄まじい速度で蹴られたのだ。よって、凄まじい速度でドルモンは

目的地の方角へと突き進んでいく。星となって消えた彼の姿を見届けて、オメガモンX抗体は改めてメフィスモンの方を見た。

一方で、メフィスモンは到達者という弩級の存在を前に動けずに固まっていた。必死に状況の打開策を探っているようだ。

「我が主の侮辱、酷いですねえ。ひび」

「道化を演じたところで演じているという事実は消えまい」

「演じているのは貴方も同じでしょう。ひっひっひ。そんなに苛立ちますかねえ？ 人間とパートナーという邪魔者が！ 世界の秩序を崩す存在だろう、我々を始めとした生命が！」

「……」

「貴方はもはや自らの思想の間違いを悟っている。それでいて、それを直そうとはしていない。だから、今の今まで静観していたんでしよう？」

オメガモンX抗体はかつて、その思想に至った。

デクスを見たことで、生きようとする生命の意思が世界を汚し、壊していくのだと理解した彼は世界の為に生命の抹殺の思考に至った。

もちろん、それそのものは直後の黒の到達者との戦いとイグドラシルアルファモンによるやり直しリブートで防がれたのだが。

今でも彼はその思想が正しいと思っている。イグドラシル主の真意を知り、そこに至るのは間違いだったとわかっていても。

「命は生きる為にある。確かにそうだ。世界の秩序を壊そうと、世界を崩そうと、命は生きようとする！ それを、私は認めない。命は世界と共にあるべきだ」

「ひびっ。傲慢ですねえ。命の自立を認めないと。到達者らしい、自我の塊です。矛盾ですねえ。そんな突出した自我、力、それこそが貴方という命が自立していることの証明であるのに！」

「そうだな。私は間違えているのだろう。間違っているのだろう。それでも、私は止まらない。止めたければ、殺してでも止めてみる。かつての者たちのように」

そう言うと、オメガモンX抗体は「もういいだろう？」とメフィスモンに聞く。

一方で、メフィスモンは「はい？」と惚けた。

そんなメフィスモンに、オメガモンX抗体は容赦なく突きつけた。

「時間稼ぎに付き合ってやったんだ、もういいだろう？」

「……！」バレている、とメフィスモンは必死に頭を回転させる。

「何か良いアイディアは思いついたか？ 適当な言葉遊びで私を動揺させられたか？」

「……」

だらだらと冷や汗を流しながら、メフィスモンは打開策を探る。

戦えば負けだ。ガルフモンに進化したところで、到達者であるオメガモンX抗体を前にすれば少しも保たないだろう。

何か、何かないか——！ と必死に策を練るメフィスモンに、オメガモンX抗体は呆れて見ていた。

「時間稼ぎをすればするほど不利になるのは貴様の方なんだがな」

「……ひひっ、さて、それはどうでしょうねえ？」

「根っからの道化が。『デジモンクロニクル』に召喚された者ではなく、この場に直接赴いて来ている者が私だけだと思ったのか？」

「ひ？」

「あるいは、『デジモンクロニクル』でさえ召喚に時間がかかるような規格外の存在がいるとは思わなかったのか？」

そうだ、メフィスモンはそれを見落としていた。

事態に静観していたオメガモン^{白の到達者}X抗体がここにいる。では、事態に積極的に介入していた者たちは。

その時、メフィスモンは背後に立った何者かの気配を感じた。

「そういうことだ」

聞こえてきた声を、メフィスモンは覚えている。

この圧倒的なまでの気配を、メフィスモンは覚えている。

「白の到達者。悪いが、コイツの相手は譲ってもらおう」

「皇帝ともあろうものが私情で戦場に出るのか」

「それを言われると弱い。が、何。片手間で済むことだからな」

オメガモンX抗体は呆れたように背を向け、どこか別の戦場へと去っていく。

そんな彼を眺めながら、恐る恐るメフィスモンは後ろを振り向いた。

「久しいな。悪魔」

そこにいたのは、かつてメフィスモンが不意打ちでトドメを刺した者。それを根に持っているのだろう、慈悲深き顔で笑っている。

「いつ、偉大なる——」

「再現体の身ではあるが、借りを返しに来たぞ」

その者こそは最強の聖剣をその手に持つ、偉大なる皇帝——インペリアルドラモン：パラディンモード。

第五十六話く遅れてくる者はく

メフェイスモンは詰みが迫っているのをひしひしと感じてしまっていた。

偉大なる者や到達者の参戦は予想の範囲内だったとはいえ、その数と早さが予想外だった。参戦してくる者はせいぜい黒や赤くらいだと予想していたし、邪魔をしていた為にもっと遅くなるとも思っていた。

だが、現実はどうだ？

メフェイスモンが遠くを見る。

「残念だ。質も数も足りぬ」

メデイーバルデュークモン
赤の到達者が竜巻の如き爆風を振り回して数々の敵を吹き飛ばしていた。

向かい来る風の暴威に抗える者などひと握りしかいまい。

「ガアッアアアアアアアア！」

「惜しいな」

その時、何とか耐えたそのひと握りの憤怒の魔竜は、しかし、メデイーバルデュークモンの金色の槍に貫かれて消える。

メフェイスモンはまた別の方向を見る。

「再現足りえず、本物にも成りえぬ、何にもならぬ模造品。邪魔だ」

「貴様ツ！」

オメガモンX抗体
白の到達者が鬱陶しいとばかりにオメガモンAlter-Sを瞬殺していた。

自らと同じ名前であるだけのお前の力など障害物でしかないと、オメガモンX抗体は左腕の竜剣で突き出された狼剣ごとオメガモンAlter-Sを両断したのだ。

「つく、おのれ——！」

「この程度では私には届かん」

死ぬ間際、一矢報いるとオメガモンAlter-Sは竜砲を突き出

すが、しかし、オメガモンX抗体はそれをわかっていたとばかりに軽々と躲して終わった。

参戦が早過ぎるし、オメガモンX抗体も、メデイーバルデュークモンも、圧倒的過ぎる。

到達者と呼ばれるのは伊達ではない。身体スペックが違う、火力が違う、経験が違う、見えてる視点が違う、何もかもが違い過ぎて彼らだけで戦況が傾き始めている。

「……く、こんなことが」

もちろん、総数は減らない。瞬殺されたオメガモンAlter—Sだつてすぐに復活したし、吹き飛ばされた数々の敵だつて甦つていく。

いかに火力オバケな到達者とはいえ、それでも見れる範囲に限界はあるのだから、彼らの手の届かない戦場も当然のようにある。

だが、それでも。

「我が主は——！」

この勢いは、まずい。圧倒的強者が味方に付いたことよつて勢いづいた彼らは、ダメだ。だつて、彼らは歴史の勝者で、自分たちは歴史の敗者なのだから。

心中で自分たちの現状を正しく認識したメフィスモンは焦りながら、道を探る。策を練る。

目の前にいる偉大なる者の存在に対しての対策を放棄しても、考え続ける。どうせ甦るのだから、勝てない戦いに思考を割かないという訳だ。

「誑かし、墮とすのが役目の悪魔でもこうなればどうしようもないといった感じだな」

そんなメフィスモンを前に、偉大なる皇帝はその最強の聖剣を使うのも惜しいと、その右腕を突き出す。そこに砲筒が装着され、メフィスモンに向けられる。

「久しぶりの全力だ。せいぜい味わうといい。『ギガデス』！」

星さえ砕く一撃が放たれる。

メフェイスモンを消し飛ばし、戦場を横断し、数々の命を散らせる。もちろん、皇帝として味方を吹き飛ばすなどという愚は犯さない。射線上に味方がいなくなるその一瞬を狙い撃った。

やがて、光が収まる。

数秒後、泥からメフェイスモンが甦る。

「こういう時は偉大なる吸血鬼やロイヤルナイツの神馬が便利なのだがな」

片手間で吹き飛ばせる相手ではあるが、何度でも甦ったり再生したりするのは鬱陶しい。そんな至極当然の感情を抱く偉大なる皇帝は、こういう時の対策として有効な者たちを思い浮かべる。

残念ながら、片方はこの戦場に来ていないし、もう片方はこの戦場の何処にいるのかさえ不明なのだが。

「さて。皇帝たるもの、他の者が戦っているというのにこのまま遊んでいる訳にも行かまい。余が動くのは良くないが、世界や歴史の為にあれば致し方なし」

偉大なる皇帝はそのままメフェイスモンの頭を掴む。

そして、

「お前は余に付き合ってもらおうぞ」

そのままぶん投げた。

先ほどのドルモンと同じように、メフェイスモンは戦場を吹っ飛んでいく。

偉大なる皇帝は、メフェイスモンだけに付き合えないから別の戦場にまで一緒に連れて行く、ということにしたのだ。

そうして、偉大なる皇帝も戦闘に参加する。

また一つ、圧倒的なまでの蹂躞劇が展開される戦場が増えたのだ。

一方その頃。

勢いづいたイグドラシル側のデジモンたちは多くいる。だが、その中でも歴史から召喚された者たちではない、すなわち、今を生きる者も——諸々の悲劇のせいで少ないが——いる。

そんな者たちの中でも指折りの実力者であるのは、隠すまでもな

く、ウォーグレイモンX抗体とメタルガルルモンX抗体だ。

彼ら二人が今戦っているのは、

「……死ネー！」

ラグエルモンだ。

彼らは目の前のラグエルモンがあこのメイクームンの進化体であり、自分たちレジスタンスを壊滅させることになった原因の相手だとは知らない。

ここで戦っているのだから、偶然に出会った結果だ。

それでも、彼らは全力で戦っていた。だって、ようやく辿り着けたのだから。

自分たちがここにしているのは偶然で、自分たちの努力の結果ではなくて、それでもここにしている。すべての黒幕がいる、世界の行く末を決める場所にいる。いることができている。

だから、彼らは戦っていた。勝つために、生きるために、戦っていた。

「『ガイアフォース』ッ！」

「『ゴキユートスブレス』ッ！」

巨大な火球が、吐き出された凍結の息が、ラグエルモンを襲う。

「『パーホルス』！」

一方で、ラグエルモンが放つのは両腕と腹部の宝玉より出すレーザー弾。

それは、この時代にいる者の中でも指折りの実力者であるウォーグレイモンX抗体たちの合体技を相殺するほどの威力はない。

だが、それでも相殺できなくても、受け流し、方向を変え、直撃しないようにすることはできる。

一瞬後、両者たちの攻撃は何処にも届かずに彼方に消えていく。

「最新ノ強者、最新ノ勝者！ 才前タチガ、才前タチサエ、イナケレバ！」

瞬間、ラグエルモンは距離を詰める。

その先にいるのは、メタルガルルモンX抗体だ。

「死ネー！」

その禍々しい尻尾と両爪がメタルガルルモンを狙う。

だが、メタルガルルモンだつて負けてはいない。その身体中に装備されている銃火器が火を噴いた。

雨あられ、目の前を隙間なく埋め尽くす弾幕。

「ツクー！」

ラグエルモンは必死にやり過ぎした。爪で切り裂き、尾で弾き飛ばし、また鎧で耐える。一步一步、確実に距離を詰めながら、メタルガルルモンX抗体の猛攻を堪える。

メタルガルルモンX抗体の猛攻がラグエルモンを倒しきるか、あるいはラグエルモンがメタルガルルモンの下に到達するか。

しかし、それは一対一だった場合だ。

メタルガルルモンX抗体はアイコンタクトをする。その先にいるのは、ウォーグレイモンX抗体だ。

自分の相棒が自分にフレンドリーファイアをするなんていうハマなどしないことは、彼自身がよくわかっている。

だから、ウォーグレイモンX抗体は安心して弾丸の嵐の中に飛び込む。

「『ガイアフォース——』集中する。手の痛みを無視して、ただひたすらに圧縮させる。」

放つのは、ガイアフォースを極限まで一点集中した塊。

ガイアフォースと比べてあまりにも小さなそれは、しかし、そのすべてのエネルギーが一点に集中、圧縮されている高密度のエネルギー弾。

巨大な火球と比べて広範囲を攻撃できない分、一点突破の破壊力に長けたウォーグレイモンX抗体の奥義。

「——ZERO——！」

「グ、アッ！」

ゼロ距離で解き放たれた高密度の力の塊がラグエルモンの胴を喰らう。

これには耐え切れない、とラグエルモンは倒れ伏し——なまじ身体の損壊が少なかったからだろう、次の瞬間には泥と共に甦る。

「つく、まだか……！」

「へこたれるな、メタルガルルモン！」

「へこたれてなんかない！ まだまだ行ける！」

ウォーグレイモンX抗体たちはその光景に苦い思いを隠せなかった。

彼らは今を生きる者。『デジモンクロニクル』によつて召喚された者ではない者。故に、他の者たちと違って死ねば甦れない。一度死んで疲労をリセットするなんていう荒業さえ出来ない。

今や彼らは疲労が現れ始めていた。

すでに何度倒したことだろうか。何度も何度も甦る不死身の再生軍団を相手にするには、一度きりの人生を生きている者には辛過ぎたのである。

「ソロソロ死ネ。頑張ルナ。才前タチ勝者ガ頑張ルカラ、イツダツテ我々が負ケルノニ……！」

ラグエルモンが駆け出す。

ウォーグレイモンX抗体の方向に。

「ウォーグレイモン！」

咄嗟に、メタルガルルモンが声を上げた。

もちろん、ウォーグレイモンX抗体はただで死ぬつもりはない。両腕を構えて、接近してきたラグエルモンに向かっていつでもカウンター攻撃を仕掛けられるようにして――

「なっ？」

――だが、ラグエルモンはウォーグレイモンX抗体を素通りした。

ただ素通りする訳がない。何かある。何かを仕掛けようとしている。そんな、至極当然の帰結に一瞬で至ったウォーグレイモンX抗体は振り向く。

ラグエルモンはウォーグレイモンX抗体たちに背を向けていた。まるで、ウォーグレイモンX抗体たちなど敵ではないとばかりに。

いや、正しくそうなのだろう。

敵ではないと言うよりは、敵ではなくなつたと言うべきなのかもしれないが。

「通サン！」

ラグエルモンの視界にあるのは、ウオーグレイモンX抗体でもメタルガルルモンX抗体でもない。

必死にアポカリモン^目の下に走っていた、ドルモンだ。

「っ、ラグエルモン——！」

ラグエルモンの狙いはドルモン。

それに気づけても、ウオーグレイモンX抗体もメタルガルルモンX抗体も気づくのが遅過ぎた。そうだ、ドルモンを助けるには遅過ぎる。

ドルモン自身は気づいたが、ここまでの間でいろいろとあつた彼では躲すだけの身体スペックも無駄な体力もない。

「ココデ終ワレ！」

気づけば、ドルモンの目の前にはラグエルモンの爪があつて。

「させないニヤ——！」

気づけば、庇うように空から毛玉^{ねこ?}が降ってきた。

第五十七話く軌跡によつて奇跡は起こるく

時は少し前に遡る。

偉大なる皇帝が顕現して少し経った頃のことだ。

「星砕の光——……偉大なる皇帝の一撃じやの。聖剣じやないようじやが。ということとは、もうそんなに経つとつたか」

その時、イグドラシルは誰に言うでもなく、ポツリと声を発生させた。

静かな場所だった。遠くから聞こえてくる争いの喧騒が耳に届くだけの、この煩い戦場にあつて珍しい静寂の場所だった。

まあ、それも当然だろう。

イグドラシルや世界に味方する者たちがまだ誰もアポカリモンの下へと到達していないように、アポカリモンの味方もまた、誰もイグドラシルの下へと到達してはいないのだから。

そんな、ある意味では安全地帯な場所でイグドラシルは静かに佇んでいた。

「見たじやろ？ 事態は次のステップに進みつつある。傾きつつある。決定打を、詰みを突きつける段階へと。しかし、それが未だ難しい」

だが、ここにいるのはイグドラシルだけではない。

「力が要て、絆が要て……在るもの、在ったもの、得たもの、得られるもの、積み重ねられたすべてを動員していかなければ結末には届かん。だから、皆すべてを以て戦つておる」

不敬にもイグドラシルの陰に隠れ、戦場にも参加していない者がいた。

「それで、そんな中でお前さんはいつまでそうしてるつもりじやい。わしがわざわざお前さんの支配権をあやつらから奪い取り、率先して再生・召喚させたのはかくれんぼをさせるためではないぞ」

「……」

イグドラシルは自分の身体に僅かな振動が走つたのを感じた。

その身体の影に隠れている何者かが震えているのだ。この場にお

いて動かないとは、イグドラシルも呆れて溜息を吐いてしまう。

まあ、イグドラシルに溜息を吐き出す口はないのだが。

「今、ドルモンは戦っている。直接戦闘することはなくとも、自分のパートナーを取り戻すための戦いを戦っている」

「……」

「お前さんはどうする？ 迷惑をかけっぱなしでそれでいいのか？

まあ、気まずいのはわかる。わかるが、あんな別れ終わりの後に奇跡のような機会が訪れたのに、これでいいのか？」

「……」

そう言うのと、その隠れている者は僅かに恐る恐るイグドラシルの陰から離れた。

まるで幼子が落とし穴を確認して歩くように、ちまちまとゆっくりと歩いていく。いや、本当に確認しているのだろう。恐怖や不安という落とし穴に嵌まって出られなくなることはないように、自分の中の勇気を以て道を確認して歩いているのだ。

恐怖や不安に打ち克とうとする姿勢、それはとても尊いことだ。

だが、しかし、この状況においては焦れつたくもある。

だから、イグドラシルは次の行動に出た。

「お前さん、これを持っていけ。離すなよ」

イグドラシルが“それ”をその者に渡した。

“それ”は人形のように動かなくなっているが、確かに腹巻ゴを腹コに巻いた白い物体ンだった。

「ま、せっかくじゃ。必要じゃろ。短い間じゃったが、そこに確かにあった。冗談のような仲間で行く、奇跡の旅路は。賑やかで、楽しくて、みんなそう思つとるじゃろうよ。わしも、コータも、ドルモンも、トコモンもな」

「……！」

「だから、お前さんもただの仲間として行くといい」

イグドラシルの想いがわかったのだろう。その者はボコモンをしつかりと抱きしめて、小さく頷いた。

そして、

「ニャー！」

あとで。たった一言のそれが、そこに込められたものが、よほど嬉しかったのだろう。

笑ってメイクーモンは鳴いた。

そして、その一方で――

「オ前ハ、オ前ハ――！」

――ラグエルモンは、そんなメイクーモンを睨みつける。

自分だったはずなのに、敗者側だった自分と同じはずだったのに、いつの間にか分たれて勝者側そちらにいるメイクーモンをラグエルモンは許せなかった。

「何が違ウ。私ト貴様、何が！ 何デ貴様ダケガ其方側ニ付ケル。何デ、貴様ダケガ解キ放タレテイル！ 貴様ハアアアアアアアアアア！」
その尾がメイクーモンとドルモンを狙う。

咄嗟、ドルモンとメイクーモンはみっともなく転がって躲した。

「うわ、なんかすごい怒ってるんだけど！」とドルモンが叫ぶ。

「に、ニャー」メイクーモンはラグエルモンのことがわかるのか、猫のように鳴いて誤魔化した。

それが、なおのことラグエルモンには腹立たしく見える。

腹立たしくて、苛立って、ムカついて、だから、壊したくなる。

「死ネー！ 消エロ！ 今スグニー！」

ラグエルモンの振り上げた拳が、再度ドルモンたちを狙って――

「オレたちを忘れるなんて良い度胸だな！ 〴〵ガイアフォース！」

――直後、巨大な火球に背後から押し潰される。

「ツク……！」

「まだだ！ 〴〵ゴキユートスブレス！」

そして、メタルガルルモンX抗体に凍らされる。

いかに再生するとはいえ、それは死んだ時だ。氷像として凍りつかされれば、すなわち、死んでない状態で固めてしまえば関係ない。

氷像と化したラグエルモンは、もう甦えれない。

「ウォーグレイモンー！」

「メタルガルルモンもいるニャー！」

ラグエルモンを倒してくれたことに諸手を挙げて喜びながら、ドル

モンたちはウオーグレイモンX抗体たちと合流する。

「助かったよ。これで一体、仕留められた」とウオーグレイモンX抗体。

「何度殺しても甦るからね。こうやって凍らせる隙もなかなかないし、困ってたんだ」とメタルガルルモンX抗体。

彼らは逆にドルモンたちに礼を言っていた。

礼を言うのは自分たちの方なのに、とお礼合戦が始まろうとしたところで、はたとドルモンは思い出した。こんなことしている場合はなかった、と。

「そうだ、俺行かなきゃ……！ コータを助けに！」

「コータを？」

簡単にドルモンは説明する。コータを助け出せるかどうかがこの戦いの鍵である、とイグドラシルに聞いたことを。

「イグドラシルに？」

「イグドラシルに！」

一時期は黒幕としてイグドラシルを疑っていたウオーグレイモンX抗体たちだ。その名前に半信半疑になりながらも、しかし、コータが捕まっているとあれば無視出来るはずもない。どのみち、アポカリモン親玉は叩かなければならないのだ。

だから、

「よし、オレたちも一緒に行こう」

ウオーグレイモンX抗体たちが同行を申し出るのも当然の帰結であつた。

「本当か!？」ドルモンが喜ぶ。

「ああ。君たちには助けられたしな」頷いて、ウオーグレイモンX抗体はアポカリモンがいるだろう方向を見る。

場所的に、あと少し。

ならば、一気に駆け抜けるのが良い。

「『ガイア——』」

だから、道を作るためにも、ウオーグレイモンX抗体は技を繰り出そうとした。

……初めにそれに気づいたのは、やはりメイクモンだった。

「っ、危ない！」

気づけば、メイクモンは声を上げていた。

だが、遅い。

「ガアッ、アアアアアアアアアアアアアアアア！」

咆哮。氷が飛散する。

咄嗟にドルモンたちを庇うようにメタルガルルモンX抗体が動いて、しかし、技を放とうとした直後のウォーグレイモンX抗体は対応できない。

だからだろう。それを放てるか、放てないか、という微妙なラインとなつたから、彼女^{ラグエルモン}は氷から出たのだ。

「死ネー！」

繰り出された拳がウォーグレイモンX抗体に突き刺さる。

「ぐッ——！」

そして、吹っ飛んでいったウォーグレイモンX抗体のことなど気にすることなく、ラグエルモンはメタルガルルモンX抗体へと向かつて

「っ、舐めるな！」

——当然、メタルガルルモンX抗体も抵抗する。

繰り出されていくいくつもの弾丸がラグエルモンに突き刺さって行った。だが、ラグエルモンは蜂の巣になるのも気にしていない。再生する、甦るといふ特性をフルに活用した強引な押切戦法だった。

「我々ハ負ケン！」

身体の半分以上を銃弾に食い破られながらも、ラグエルモンはメタルガルルモンX抗体の下に到達した。

「っ、ゴキュートスブレスッ！」咄嗟に、ラグエルモンに向かって放たれた凍結の息。

しかし、ラグエルモンは身体を凍りつかせながらも、なおも動く。

「アアッ！」

そして、ラグエルモンはメタルガルルモンX抗体を殴り飛ばした。殴り飛ばして、息絶える。

だが、当然、すぐに復活して――

「ヨウヤク邪魔者ヲ消セタ。次ハ、才前ラダ……！」

――ラグエルモンはその視線をドルモンとメイクーモンに向けた。

「ニヤニヤ。ウオーグレイモンたちが……！」

「彼らならきつと大丈夫！ 逃げるよ！」動揺はあつた。それでも何とか自分を納得させて、ドルモンは叫んだ。

そして、彼らは逃走を開始する。

とはいえ、逃げ場などない。相手は究極体だ。ドルモンはおろか成熟期のメイクーモンでさえ身体スペックに大きな差がある。

故に。

「ドルモン、行くニヤ」

メイクーモンはそれを選択する。

「え？」ドルモンは愕然として聞き返した。

「行くニヤ。何とかしてみせるニヤ」

「メイクーモン！」

「大丈夫だニヤ。ニーはクロニクルで召喚されたデジモンだから」

言外に死んでも生き返る、と言う。だから大丈夫だ、と言う。

理屈はわかる。わかるが、ラグエルモンをメイクーモンに任せるというのが、そもそも無茶だ。

「それでも、ニーがやるニヤ」

上から来るラグエルモンを何とか躲しつつ、メイクーモンは思いを確かめる。

だって、そうだ。かつて、メイクーモンは自分のワガママでコータたちを傷つけた。自分は、自分の身勝手な願いを、彼らに叶えてもらった。

友情の結果などと誤魔化して、無理矢理に、けれど、確かに自分は救ってもらったのだ。

「トモダチ、ニヤ。今度はニーが助けるニヤ」

だから、今度は自分の番なのだ、と。

やっと、他人に不幸を振りまく以外のことが出るようになったのだから。やっと、恩返しができるようになったのだから。やっと、友

達を助けられるようになったのだから。

だから、絶対に成し遂げる。

「絶対に助けるニャー！」

その想いで、彼女は進化しようとする。

進化できる。元々、ラグエルモン先はあるのだ。嫌気があっただけで、けれど、それさえ取つばらえば進化できるのだ。

コータたち友達のためならば、いくらだって嫌気など取つぱらってやる！

「それでこそじゃー！」

その意気に、応える者がいた。

自分が得られるはずもない幻旅の中で得られた絆という報酬を抱き、故に直接手伝いたいと願いながらも、しかし、立場と役目が許さぬことを嘆いた者が叫んだ。

「さあ、わしが力を貸してやる！」

イグドラシルのアバターボコモンの身体が光り輝いて、メイクーモンの中に取り込まれる。進化が、変わる。

それは異なるデジモン同士が融合する進化ながら、ジョグレスそう定義づけられるモノとは似て非なる進化だった。貸し与えられた力が、託されたものが、進化を変えたのだ。

本来の段階を飛び越えて、本来在るべき姿を変えて、メイクーモンが進化する。

「行くニャー！」

そうして現れたデジモンこそ、究極体のラグエルモン。

それは、メイクーモンの新しい未来の可能性だ。

第五十八話〜最後の壁こそ、究極の敵〜

黄金の鎧の上に白衣を着込み、黄金の翼を携えた、獣耳の座天使。

ラジエルモンという名のその天使の姿に、

「イグドラシル、ノ助力ダト——。フザケルナ。フザケルナ。フザケルナ。オ前ダケガアアアアアアアアアア！」

ラゲエルモンは怒りを隠しきれない。

いや、その原動力になっっているのはやはり。

「ドルモン、下がって。大丈夫だからニヤ」

「……うん！」

そう言うと、ラジエルモンは一步前に出た。

ラゲエルモンとラジエルモンの視線が交差する。両者共にそこにあつたのは、嫌悪の感情だった。その感情を隠そうともせず、両者はさらに一步を行く。

「ニヤアアアアツ！」

ラゲエルモンの両腕と腹部にある宝玉から、眩いばかりの光が発せられる。

「ニヤアアアア——！」

ラジエルモンの両腕の籠手に魔法陣が展開され、溢れんばかりの五大元素が集う。

「『パーホルス』——」ラゲエルモンから放たれたレーザー弾と、

「『ノウレツジストリーム』——」ラジエルモンから放たれたエネルギー、

膨大な力の奔流同士がぶつかり合った。

ドルモンは必死に堪えた。余波による衝撃で吹き飛びそうになる中、それでも必死に堪えた。ここだけは見届けなければ、力を貸さなければいけないと、わかっていたから。

「っ、進っ化あ——！」

なけなしの力で、ドルモンは進化する。ドルゴラモンへと進化する。

体力からして、進化していられるのはほんの一瞬だ。それでも、そ

のほんの一瞬で成し遂げる。

「『ドルディーン』！」

友への手助けを。

破壊の衝撃波がラジェルモンの技に加わって、ラグエルモンのレーザー弾を押ししていく。

「ッ——！」

ラグエルモンの顔が醜く歪む。

それは決して疲れたからでも、負けそうになっているからでもなくて。

「『ガイアフォース』！」

「『コキュートスブレス』！」

遠くから、さらに届く。想いが、届く。それはギリギリで意識を取り戻し、戦線に復帰した『彼ら』の手助けだった。

ラグエルモンの顔がさらに醜く歪んだ。原型も止めないほど、その表情は醜く歪んでいる。その表情が、彼女の想いの大きさを如実に現していた。

「——！」

そして、ついにレーザー弾が押し切られる。

ラグエルモンが最後に見たのは、光だ。眩しくて眩しくて、鬱陶しくなるほどの光だ。彼女は何となくそのさまざまな色が集った光を美しい醜いと思ってしまうて。

「ズルイ、ニヤ」

自分の単色の光が酷く唯一の美しいもの寂しくて醜いものに思えて、だからこそ、ラグエルモンは嗤う。

目の前の絆だ何だと戯言を体現する者たちを、独りぼっちの自分を、嗤う。

「——！」

ラグエルモンは莫大な力に吞まれて消えた。

すぐに泥から再生する。が、

「『コキュートスブレス』 ウウウウウツ！」

最大火力でメタルガルルモンX抗体が氷漬けにする。もちろん、す

ぐに剥がされるだろう。が、少しは保つ。

「ドルモン」 ウォーグレイモンX抗体が声を上げた。

その意味を、ここまで来たドルモンは知っている。予断を許さない状況であることも、自分がここにいたところで出来ることはもうないことも、彼にはわかっていた。

だから、ドルモンは有り難くその厚意を受け取る。振り返らずに、駆け出した。

「ラジエルモン、君はドルモンと一緒にいけ。オレたちはここでこいつを抑える」

そして、未だ残っているラジエルモンに向けてもウォーグレイモンX抗体は同じことを言う。

「でも……」

「余計な心配だぞ。こいつと直接戦い続けるのならともかく、復活と再生の隙を突いて足止めし続けておくことくらいはできる」ウォーグレイモンX抗体が肩を竦めて言い、

「情けない話、疲労がたまっていてね。さっきの一撃も効いたし。……直接解決に動けないのは悔しいけど、でも、出来ることから目を逸らすわけにもいかないからね」メタルガルルモンX抗体が苦笑う。

自分の有り得たかもしれない可能性を他人に任せるということに、ラジエルモンは申し訳なさそうにしながらも、結局彼女はドルモンの後を追った。その去り際に、頭を下げて。

ウォーグレイモンX抗体たちと別れたドルモンたちは、目的^{アボカリモン}地めがけて走っていた。目と鼻の先という訳ではないが、ここまでの距離を考えればあと少しと言っても過言ではない距離だ。

「つていうか、ラグエルモンじゃないんだね」

「イグドラシル^{ボコモ}のおかげニヤ。まあ、今回限定だと思うけど……」ラジエルモンは残念そうに息を吐く。

ドルモンは「イグドラシルかあ。いろいろと変な噂あったし、黒幕疑惑もあったけど、実際はそれと同じくらいアレだったよね」と笑う。すると、

「アレってどういうことじゃいー！」

と、ラジエルモンの中から声が飛んできた。

ドルモンはびっくりして目を丸くしている。まあ、一番驚いているのは、ラジエルモン自身なのだが。

「いや、だってメイクーモンに力を貸してるし、後ろでふんぞり返ってるし、いろいろと画策しているみたいだし、だいぶはっちゃけてるじゃん」

「たまにはわしだってはっちゃけるわい！」

当のイグドラシルに、はっちゃけている意識があるのだろう。言い訳のような勢いが飛んできた。

まあ、ドルモンは「そのはっちゃけ具合が問題だと思うんだけど」と呆れたように言葉を締めた。神様クラスの存在のはっちゃけほど面倒なものはないからだ。

そして、それはイグドラシルの方がよくわかっているのだろう。だからこそ、

「……けど、これくらいじゃぞ。わしにだって立場があるんじゃないかな」

と言葉はそれを最後に途切れた。

まあ、いろいろと言ってしまったが、立場を押しでもしてくれた助力だ。素直にありがたいことである。だから、聞こえているだろうという下に、ドルモンとラジエルモンは「ありがとう」と言う。

遠くで空間が震えた。

「さて、急ごう！」

「ニャー！」

そして、ドルモンたちは走る速度をさらに上げる。

だが、

「ニャっ!?!」

だが、

「なっ、まだ泥が——！」

だが、まだ壁が立ち塞がる。

最後の関門とばかりに、壁のように泥が立ち上り形作る。それが、

二つ。

その二つの形は、シルエットだけ見ればほぼほぼ同じものだった。それは、ドルモンにとつて直接は見たことないものの、何処か覚えのある姿だった。

「ここに来てこれが来るニヤ!?!」

というか、覚えどころの話ではないか。

剣のような鋭さを持つ、破壊の巨竜。ドルモンの進化先である、ドルゴラモン。

拘束具によつて形を保つ、死の巨竜。ドルゴラモンが死して墮ちた姿である、デクスドルゴラモン。

「ドルゴラモン——!」

そうだ。最後に立ち塞がるのは、二体の巨竜。

それはドルモンにとつて馴染み深い、彼の力の証。それが、立ち塞がる。

「ゞドルディーンゞ!」

意識はないようにドルゴラモンは暴れる。

破壊の衝撃波が放たれた。

「ドルモン、下がるニヤ。ゞノウレツジストリームゞ!」

破壊の衝撃波を、膨大なエネルギーが迎え撃つ。

しかし、破壊そのものとさえ言える力の塊は、難なく五大元素のエネルギーとせめぎ合つて——

「——! ゞメタルインパルスゞ!」

——ラジエルモンの頭上に飛び上がったデクスドルゴラモンが、死の鉄球を放つ。

衝撃波を迎え撃っているラジエルモンに、それに対抗することはできない。だから、無理矢理に放っているエネルギーを暴走させ、その爆風で鉄球と衝撃波を躲す。

「メイクーモンツ!」

「大丈夫、ニヤ!」

一体だけならまだしも、一撃の威力がバカみたいに高いやつが二体。一体を相手している間にもう一体に攻撃されたらそれでアウト。

ドルモンもラジエルモンも冷や汗を垂らしていた。

ドルモンが進化し、ドルゴラモンになったところで疲労による活動制限がある状態では、結果はたかが知れている。
であれば。

「ドルモン……」

ここまでの者たちと同じように、自分が足止めするしかない。ラジエルモンがその結論に至るのも当然のことだった。

意を決して、ラジエルモンは前に出る。

「アアアアアアア！」

「――！」

二体の巨竜が、そんなラジエルモンを叩き潰すべく動き出す。

そして、

「いけー！」

自分が知るよりもずっと低い、しかし、聴き慣れた声が聞こえた。

「はあっー！」

二体の巨竜が吹き飛ぶ。白いマントがはためいた。

ラジエルモンとドルモンは目を見開いた。そこにいたのは、黒^{アルファモン}の到達者だ。そして、その肩に乗っていた青年こそ。

「うわ。本当にドルモンだ！ 懐かしい！」

青年^{コータ}がドルモンの前に降り立って、興奮したようにドルモンを見る。

一方でアルファモンは白の光剣を手に取り、二体の巨竜を相手取っていた。

「えつと、コータ（真）だよね？」

「（真）って何だよ。いいよ？ 君にとってはオレの方が偽物だろ？」

「え、あ、いや……！」

青年^{コータ}とドルモンの関係は知り合いのようでただの他人という、複雑そうで簡単なもの。だが、その複雑そうというのが雰囲気をややこしいものになっている。

だから、ドルモンはどのように接していいかわからなくて、まるで人見知りの子供のように探り探りに口を開いていた。

一方で青年は苦笑していたのだが。というか、伊達に歳を重ねては
いないのだろう。まるで近所に住むお兄さんのような雰囲気を感じ
ていて、そんな感じでドルモンと接していた。

「ま、あいつの二体はオレたちに任せてくれていいよ」

「え？ いいのか？」思わず、ドルモンは聞き返した。

「もちろん。キミたちは遠慮せずにキミたちのコータを助けに行けば
いい。オレはこれでも一端の大人だからね」

青年はウインクした。

その顔に押されて、ドルモンとラジエルモンは駆け出す。

その後ろ姿を見送って――

「お待たせー」

――青年はアルファモンの身体をよじ登り、その肩に乗った。アル
ファモンは戦っている最中だったのにも関わらず、難なくと。

「見送ってきたのか？」アルファモンが口を開く。

「うん。懐かしい姿だったね」

「それほど良い姿だとは思わないが……――」

「そりゃ、今と比べればそうだろうね。でも、それでも思い出深い姿
さ」

青年は目の前に迫る二体の巨竜を見る。どちらも、アルファモンが
軽々とあしらっている。が、その姿に彼は笑った。本当に思い出深い
姿を見る日だ、と寂しそうに笑った。

「ああ、そうだ。もう全部が昔の話で。もうオレたちは大人なんだ」

「……そうだな」

「心のどこかでオレたちがやらなきゃってさ、帰らないで残ってたけ
ど。でも、やっぱりオレたちは道を歩く側じゃなくて、道を作る側な
んだよなあ」

いつかの思い出を抱きしめて、青年はさっぱりと言い切った。

「はは。大人だろうと子供だろうと変わりはないさ」

そんな彼にアルファモンは静かに言う。

その意味を青年は余すところなく「ああ」と理解して。

そうして、

「そうだな。行こう！」

「おう！」

彼らは二体の巨竜を迎え撃った。

第五十九話く創世く

アルファモンの肩に乗る青年はデジヴァイスXをその手に、アルファモンは魔法陣を展開させる。

「デジタライズ・オブ・ソウル！」

魔法陣から現れ出るのは、黒金の剣——かの死を斬り裂いた剣。

「さあ、さっさと片付けようか！」

「そうだな」

青年の掛け声に頷いたアルファモンは左腕に黒金の剣を、右腕に光剣を構えた。

そして、

「XCASST！ XAIシステム発動！」

青年がデジヴァイスXを振る。

それによってその中に内蔵された運命の振り子が揺れる。

「一気にやるぞ！」青年が果敢に叫ぶ。

アルファモンは頷きつつ、駆け出した。その右腕を、左腕を、同時に振るう。Xを描くように、二体の巨竜を揃って斬り裂けるように、大振りに振り抜く。

その時、青年の持つデジヴァイスXでは天の賽が投げられていた。示した数字は、六。

天運が決まった。否、天運は選び取られた。

「いっけええええええ！」

青年がデジヴァイスXを掲げて叫ぶ。

今のこの場が歴史の再現が集う場所だからだろうか。

そこにいたのは、ただの少年だった。

そこにいたのは、黒の聖騎士だった。

いや。

そこには、銀髪の少年もいた。

そこには、黄金の武者龍もいたた。

いつかの日を思い起こさせる、歴史的一幕の光景だった。その時だけ、この場の何処かと同じように、彼らの中にしか存在しないものが

甦っていた。

そして、

「『聖剣グレイダルファア』！」

ドルゴラモンは光剣によって真っ二つに切り裂かれる。

「『永世竜王刃』！」

デクスドルゴラモンは二つの刀によって四つに斬り分けられる。

後に残ったのはいつかを思い出して寂しそうに笑う青年と、変わらぬ光剣と黒金の剣を両手それぞれに持つアルファモンだけで。

「何か変な感じだな。歴史って」

「だな」

二人は苦笑い合って、泥から生まれ出た二体の巨竜に再び向かい合った。

一方その頃。

青年たちの、いや、此処にいるすべての者たち——直接助けてくれた者たち、アポカリモンの軍勢を抑えてくれたことで結果的に助けてくれた者たち、そんなさまさまな者たちのおかげで、ついにドルモンたちはここに辿り着けた。

目と鼻の先、そこにアポカリモンがいる。そして、その下に黒く輝く卵のようなものがあつた。

その卵が何なのか、ドルモンにはわからない。だが、どうでもよかった。ここまで来たら、コータを助けるのみだ。

「まさかあの中を越えて此処まで来るとは。不快だ」

アポカリモンは静かにドルモンとラジエルモンを見据える。言葉とは裏腹に、いや、言葉通りなのか、その表情は無表情のようで、しかし、よく見れば少し歪んでいた。

まるで、努めて無表情を装っているかのようだ。

「お前の都合なんか知ったことじゃない。ただ、コータは返してもらおう！」

「そうニヤ！ 例えアポカリモンがニーの——」

ラジエルモンの言葉は最後まで続けられなかった。

その時、アポカリモンの触手の一つが二人を襲ったからだ。

「ふん。疲れ果てている子供とたかだか一人の座天使に何ができる。歴史には何万という部下を持つとうと敗れた王もいれば、一騎当千を謳われながらも敗けた英雄もいる。それらと比べて、貴様らは何を成すにしても少ない、弱い。それで何が成せる？」

「確かにここにいるのは俺たちだけだ。でも！」

アポカリモンの前に立っているのはドルモンだけだ。だけど、彼は自分が多くの者に助けられたからこそ此処に来られたということをおわかつている。

何万の部下はいないし、一騎当千の力はない。

それでも、彼らは彼らなりの力と絆でここに立っている。

「……—忌々しい。失われぬその目の輝きが、それが証明している事実が、何とも憎たらしい」

アポカリモンの触手がドルモンたちめがけて伸びる。

咄嗟にラジエルモンがドルモンの前に飛び出した。そして、その両腕に魔法陣を展開させ、五大元素を組み合わせ、エネルギーとして放つ。

「グノウレツジストリーム！」

放たれたエネルギーが触手を迎え撃った。

膨大なエネルギーの奔流に流され、触手は運動エネルギーを失って弾かれる。

「ニャ」

どうだ、とばかりにラジエルモンは誇らしげにアポカリモンを睨んだ。

一方で、アポカリモンはそんな彼女にも反応しない。先ほど以上に無表情だった。先ほどに比べて、これには感じるどころなんてないとはかりに。

「無駄だ。諦めろ」

「それはごつちのセリフニャ。お前は他に手一杯でお前自身の全力は出せない！ さっきのがその証拠ニャ！」

もし、アポカリモンが本来の力であったのならば、先ほどの触手は

ラジエルモンの必^{ノウレツジストリーム}殺 技だけではどうにもならなかっただろう。

だが、現実にはどうにかなった。

それはアポカリモンがイグドラシルに対抗して軍勢を作り出しているために、また、イグドラシルの力を抑えているために、本体自身の力が落ちていくからだ。

だからこそ、ラジエルモンでも対抗できる。

アポカリモンがラジエルモンをどうにかしようとしたら、軍勢の展開かイグドラシルの抑制が上手くいかなくなる。そうなればただでさえ劣勢気味の戦場がさらに傾き、アポカリモンにとって取り返しのつかないこととなるだろう。

「お前の負けニヤー！」

だから、アポカリモンには勝ち目がないのだ、とラジエルモンは言い放つ。

もちろん、勢い任せの出まかせだ。だって、ラジエルモンとドルモンでアポカリモンをどうにかできるという前提、そしてさまざまなかろう”という推測がそこにあるのだから。

「ふん。愚かしい」

それをアポカリモンもわかっている。だから、嘲笑う。

他に力を回していてもドルモンたち如きに負けることはないと理解しているからこそ、この期に及んでも自分たちに“負け”はないと思っているからこそ、彼らはドルモンたちを嗤う。

「貴様らは目的に至る道を知らず、それで良くも言えるものだ。貴様らが助けるなどと宣っている鍵が何処にいるかわかっているのか？ どうやって取り返すのかわかっているのか？ 何もわかっていないだろう？」

「……………」

「何も知らないくせに、わからないくせに、ただ何となく優勢だからと威勢に乗る。愚かだ。実に愚かだ！」

「それは、つく——」

ドルモンは何も言い返せなかった。アポカリモンの言うことが事実だからだ。

ドルモンはコータが何処にいるか知らない。アポカリモンが何のためにコータを連れ去ったのかも知らない。どうすれば助け出せるか、その方法さえも知らない。それはラジエルモンも同じだ。

そんな知らない尽くして勝った気になるなど、それこそ笑ってしまふくらいおかしなことだろう。

「どのみち貴様らでは力不足。潔く諦めろ」

アポカリモンの触手が蠢いて、四方からラジエルモンとドルモンに襲いかかる。

上から、下から、右から、左から、後ろから、前から、ほぼ同時に襲いかかってくる。

それを前にしたラジエルモンは咄嗟にドルモンを抱いて、飛んだ。触手の隙間を縫って、退避する。だが、それで諦めるはずもなく、触手は次々と追いかけていく。ラジエルモンたちを捉えるまで、ひたすらに。

「ニヤ!?!」

ついに触手の一本がラジエルモンを捉えた。その足を、触手がしっかりと握る。すぐさま、他の触手がラジエルモンたちめがけて殺到した。

「ここに至ったのが到達者の誰かなら、偉大なる皇帝なら、また話は違っただらうに」

確信を抱いて、アポカリモンは目を閉じる。

そして、

「『グランドクロス』!」

十の超高熱球が触手を弾いた。

呆然とその光景を見る、ラジエルモンとドルモン。そんな彼らの前に、その天使は降り立った。

「こんな良い余興まで用意してくれたのに、この僕を除け者とはずいぶんと酷いじゃないか」

六対十二枚の翼を持つ、金髪の少年のような天使——デクスモンに敗北したものの、何とか生き残ったルーチエモンがここに降り立っていた。

「っ、ルーチェモン！　ってことはトコモン！」

「え。これトコモン、ニヤ!?　見ない間に凄くなってるニヤ！」

驚きと安堵、喜びを振りまくドルモンたち。

一方のルーチェモンは「ルーチェモン様と呼べ。全く、躰がなっていない」と呆れたように笑った。

「さて。せつかくこの僕が来たんだ。もう終わりなんて、そんなつまらないことはよしてくれよ。せつかくの良い余興なんだ。もつと盛り上げてくれよ！」

「余興、だと？」アポカリモンが苛立ったように口を開いた。

確かに、これは余興だ。少なくとも、アポカリモンにとっては。

だが、ルーチェモンの口にしたそれとアポカリモンにとってのそれは意味合いが異なっていた。アポカリモンにとってのそれは真の計画達成までの時間稼ぎであり、故に余興。

一方で、ルーチェモンにとってのそれは、

「そうそう。だって、そうだろう？　歴代の敗者が、その集合体が、もう一度勝者たちにコテンパンにやられるために集っている。歴代の勝者の栄光を何度も讃え、敗者の敗者たる所以を何度も示している。これほど愉快的な見世物はないからね！」

自分たちの計画を、理想を、理念を、存在を、所詮は敗者の負け惜しみだと傲慢にも嘲笑っているが故の余興。

その敗者を顧みない勝者が故の傲慢は、アポカリモンが嫌うもの。故に、彼らはルーチェモンを許せないし、断じて認めてはならない。

「ほざいたな！」

怒りを顕に、アポカリモンは触手をルーチェモンに殺到させる。

「ほざくさ。だって、君たちは敗者だ。何度やり直そうと、どれだけ強大な力を持つと、どんなことを企もうと、君たちは敗者の集合体である以上、勝者には勝てないのが道理」

ルーチェモンは華麗に触手を躲し、アポカリモン偉大なる者の徒労を嘲笑う。

「ははは！　勝てもしないのに無駄に戦いを挑んで無様を晒そうとしているんだ。嗤われて然るべきだろう？」

わかっていたことだ。アポカリモンは事実を再確認する。今、アポカリモンは追い詰められていた。

ルーチェモンに加えて、ラジエルモンとドルモンだ。

初め、ラジエルモンたちはルーチェモンの傲慢な言葉に思うところがあったようだが、アポカリモンという敵を前にしてそんなことを言っている場合ではないと参戦。今やラジエルモンやドルモンが自分勝手なルーチェモンをフォローする形となっている。

ドルモンとラジエルモンが協力してアポカリモンの攻撃を補足して攻撃、その生まれた隙にルーチェモンが火力をアポカリモンにぶつけていく、という形だ。

誰とは言わないが、らしからぬ連携だ。それでも行われているのは、アポカリモンが敵だからか、それともドルモンたちは仲間だからか。

「……」

強大な敵に、力を合わせて立ち向かう。強大な悪に絆を武器に戦う。

それは歴史上、幾度となく繰り返されたことだ。

だからこそ、アポカリモンにはこの戦いの行く末がわかる。結局、ルーチェモンの言う通りなのだ。

敗者はどうしたって敗者で、敗けている以上は勝てはしない。

わかっていたことだ。だから、アポカリモンはこの計画を企てた。「少し早いけど仕方ない」

敗者が勝者となるためには、勝負をリセットしなければならない。すなわち、勝ちと負けをなかったことに、あるいは新しい戦いを始めなければならない。

だが、アポカリモンは敗者の集合体であり、概念的な存在だ。存在する限りアポカリモンは敗者であり、結果が決まっている以上、勝負をなかったことにも新しい戦いを始めることもできない。

故に。

「今この時、我々は生まれ変わる！」

アポカリモンは世界を作る。

自分たちが勝者となれる世界を、真の世界を、新世界を作り出す。これまでの時代は、そのためのものだった。

あらゆる時代に絶えず存在していた、世界の欠片——

勝者 世界にはワームモンのようなムシ／クサキがあつて、

勝者 世界にはタイガーヴェスパモンのようなキカイ／ヘンイがあつて、

勝者 世界にはギガシードラモンのようなミズがあつて、

勝者 世界にはルーチェモンのようなセイがあつて、

勝者 世界にはメイクモンのようなケモノがあつて、

勝者 世界にはドルモンのようなリユウがあつて、

そして、勝者 世界にはアポカリモン《アンコク》があつて、ニンゲン ターがあらる。

——それは世界を構成する属性。それを、歴史から抜き取る。そして、いかなる時代においてもデジモンに勝利をもたらす者を媒介にして、取り込んだ属性を集らせるのだ。

そうすることで、アポカリモンは生まれ変わる。

「我は」

N.新 E.世 O.界、創世。

第六十話く歴史の証明者たちく

N・E・O——それは果たして生命と云っていいものなのか。

外見だけで言えば、人間の少年のようだ。だが、機械の左腕や悪魔の右腕、天使の翼に竜の尾など、この世界に存在しているあらゆる生命種の性質を兼ね備えている。

さらにその人間大の小さな身体では有り得ないほど、その身体に形容し難い巨大かつ異質な力に溢れていた。それが、彼を見た誰にも理解できた。

「生まれたばかりではあるが酷く頭が透き通っている。我々であった我が我であるのは、変な感覚であるが」

その身体を支配しているのがアポカリモンの人格であることも、同様に。

「ようやくだ。ようやくこの時が来たのだ！」

N・E・Oが両手を挙げて叫ぶ。その声色は喜びの色に溢れていた。

同時にアポカリモンが消えたからか、泥から生まれたデジモンたちが溶けて消えていく。オメガモンA i t t e r s が、タクティモンが、メフィスモンが、ラグエルモンが、歴史に存在したさまざまな敗者たちが——もはや敗者である必要はないと、敗者という存在が必要なくなったとばかりに消えていく。

そして、残ったのはN・E・Oだけだ。

だが、それでも問題はない。なぜならば新しく良きものに、古く悪しきものが押し潰されて消されるのは自然の摂理。

故に、N・E・Oが生まれた時点で結果はもう決まっている。

だからこそ、

「もはや歴史に敗者はない。ここより先に^{敗者の集合体}アポカリモンは存在しない！ ……いや、あるいはここから先は貴様らこそがアポカリモンになるのかもしれんな！」

^ア積み重なった^ボ敗北の塊^カだった者は、生まれて初めての^リ勝利に酔う。当然から解放に喜び、得られるはずのなかつた^北結果の約束に喜び、そ

の喜びが彼を酔わせる。

一方で、そんな彼を睨むのは、

「間に合わなかったか」

イグドラシル^者であり、この場に集った歴史の勝者^者だった者たちであり、ドルモン^者たちだ。

「そうだ。我はここに宣言しよう。貴様らの世界は、貴様らが勝者だった世界は、ここで終わる。ここに我が新世界を創造する。故に」
N・E・Oはその機械の左腕をイグドラシルに——この場に集った誰もに向ける。

そこには敵意が込められていた。どのような形にさえなれるはずの新世界は、旧世界の存在を否定していた。

「ここで消えろ」

瞬間、世界が消え始めた。

「『ジャツジメント』」

瞬間、世界に存在するあらゆるものが崩れ始めた。

光も、闇も、命も、瓦礫も、あらゆるものが崩れていく消えていく。その光景は破壊や崩壊という言葉ではとても言い表せない、すべてが無に還されていく光景だった。

攻撃ですらない。攻撃という言葉を使うことさえ烏滸がましい。迫り来るのはただの無。

ただの無を放ち相手を無に帰す。よくよく考えなくても馬鹿げている言葉遊びのようなそれは、しかし、旧世界の生命には真似できないことだった。N^新・E^世・O^界だからこそ行える偉業だった。

新は古にはない新で以て、古を駆逐していく。

だが、しかし、

「オメガモンー」

「ふん」

新は古にはないものを持つ代わりに、古もまた新にはないものがある。

古き世代には新しき世代にはいない者がいる。それは、偉大なる功績を残す者。その偉大なる功績を追う者。

いかに新しい者が新しきで古い者たちを圧倒しようと、いかに新しき者が新しきで古さを駆逐しようと、古き者たちが成し遂げた偉業が消えることはない。

例え、その偉業は新しき者が嘲笑うようなものであり、その偉業を新しき者が理解できなかつたとしても。

「〴〵オメガ――」

無に立ち向かうのは偉大なる皇帝、インペリアルドラモン：パラ
デインモード。

そして、

「〴〵オール――」

白の到達者、オメガモンX抗体。

「――ブレード――！」

「――デリート――！」

騎士団の始祖たるものが振るうはすべてを初期化する最強の聖剣。
到達せし騎士が振るうはすべてを消滅させる終局の竜剣。

始まりへと返す一撃と終わりをもたらす一撃が合わさって、迫り来る無を迎え撃つ。

終わりと始まりが、無と対消滅していると言えはいいのだろうか。
言葉にすればそれだけで済むものだが、その光景は常人には何が起こっているのかさえ理解できない光景だった。

ただ、

「……」

無表情を極めたと言っても過言ではない表情をしているN・E・
Oがいて、

「あまり余らを舐めてもらっては困るな」

「新世界、か」

未だ偉大なる皇帝と白の到達者を始めとして数々の者たちも生き
ている。

それが、結果だった。

「偉大なる者。到達せし者。我に抗うか」

N・E・Oが飛び出した。

すべてを無に帰す『ジャツジメント』を使って旧き世界を始末することはやめて、面倒でも、嫌でも、確実に一人一人潰していくことを選んだのだろう。

一刻も早く視界から消したい存在が目の前にあるのに、彼は最短の道を諦めたのだ。

「死ね！」

N・E・Oは一人一人、片っ端からデジモンたちを殺していく。かつて歴史の勝者となった者たちだろうが、究極体と呼ばれた者たちだろうが、N・E・Oには敵う様子がない。一瞬で身体を塵にされ、為すすべもなく消えていった。

そして、殺した者たちが『デジモンクロニクル』によって再召喚されるのにも構わず、N・E・Oは前進した。

彼が目指すはただ一つ、

「イグドラシル——！」

この旧き歴史の最後の証明者である、イグドラシルの下。

歴史の証明者
イグドラシルさえ殺せば、デジモンクロニクルは展開されなくなる。

世界の管理者
イグドラシルさえ殺せば、到達者たちが集つていようとも関係なく新世界を始められる。

だから、N・E・Oはイグドラシルの下へと駆けていく。

「さすがにそれはせんよ」

「我が主は殺せん」

しかし、そんなN・E・Oの前に立ち塞がるのは白の到達者と偉大なる皇帝だ。

さすがのN・E・Oでも彼らを一瞬で殺すことなど叶わない。

振り抜かれた聖剣を、竜剣を、N・E・Oは両腕それぞれで受け止める。

「退けえっ！」

そして、彼は邪魔者たちを思いっきり吹き飛ばした。

しかし、まだ邪魔者は増える。

「ずいぶんとまた不安定な」

赤の到達者が、

「ニヤアツ、いい加減にコータを返すニヤ！」

ラジエルモンが、

「ははは。いいザマだね！ お前が旧い連中にかかずらってるのは本当に愉快だ！」

ルーチェモンが、N・E・Oの行く前に立ち塞がる。

N・E・Oは尾を振るう。発生した衝撃波が彼らを一撃で吹き飛ばした。

しかし、まだ。

「ガアアアアアアアアアア！」

「世界ノ為！」

「オレたちが守ってきたもの、絶対に消させない！」

「イグドラシルを守れえ！」

名さえ歴史に埋もれただろう、歴史の勝者だった者たちがN・E・Oに襲いかかる。

「有象無象共め、邪魔だ！」

N・E・Oの腕のひと振りで彼らは死んだ。偉大なる者でも到達者でもなく、またそれに比するだけの力さえ持たない彼らは、N・E・Oの前に立つには力不足。どれだけの数が揃おうとも、一瞬で塵として消えていく。

「ははは！ 勝てない者がいる！ 何と久しぶりなことか！」

「偉大なる皇帝は状況もわからないほど耄碌したか」

復帰した偉大なる皇帝と白の到達者がまたN・E・Oの前に立ち塞がる。

そこからは、繰り返しだ。

偉大なる皇帝が、到達者たちが、ラジエルモンが、ルーチェモンが、ビクトリーグレイモンたちが、デュランダモンが、ウォーグレイモンX抗体たちが、デジモンクロニクルによって呼び出された数々の者たちが、N・E・Oの前に立ち塞がる。

何度吹き飛ばされようと幾度消し飛ばされようと、彼らは諦めずにN・E・Oの前に現れる。

「——貴様らはっ！」

それが、その光景が、N・E・Oには苛立った。

優っているのはN・E・Oの方だ。このまま続けければ勝つのはN・E・Oの方だ。だが、この光景を前にすれば、N・E・Oは否応なしに思い出してしまうのだ。自分がアポカリモン^{敗者}だった頃のことを。

「ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、ふざけるなあっ！」やっとな勝者になれたのに。やっとな勝利を得られたのに。なぜこうも、負ける気がするのかわ——！

N・E・Oは理不尽を認めないと叫ぶ。

「それは明らかだろ。勝利を得ようとしている者よ」

それに返したのは、青年^{コウタ}を肩に乗せた黒の到達者^{アルファモン}だった。

「お前はまだ勝っていないからだ」

「っ！ 貴様ッ」

迫り来るN・E・Oを、アルファモンは黒金の剣で受け止める。見れば、青年^{コウタ}の手に持つデジヴァイスXが光り輝いていた。まるで、アルファモンに力を与えているかのように。

「お前がどれだけの力を持つとうと、俺たちは負けない。アポカリモンではなく、他の誰かでもない、N・E・Oであるお前だけには絶対に負けない。いや——」

そこで、N・E・Oは気づいた。

アルファモンの背後には「それ」があることに。それは、絶望の淵にあつても歩みを止められない理由、彼が相棒と共に歩いてきた道のりの記憶——まさに彼の歴史。

それが、彼の背後にあつた。いや、彼の歴史だけではないか。この場集った数々の者たちが紡ぎ上げた数々の歴史すべてが、彼の後ろに揃っていた。揃って、集って、力となっていた。

……対して、N・E・Oの後ろには何も無い。

「——負ける気がしない」

だからこそ、アルファモンは言い切った。

これがただの種族同士、個人同士の戦いであればまた別だったのだろう。だが、これは新世界と旧世界の世界同士による生存闘争だ。

世界とはそこに在るモノ、生きる者たちによる数々の積み重ね——歴史そのものであるからこそ。どれだけ力があるうと意味はない。積み重ねのない、歴史のない、空っぽなだけの新しいだけの世界では旧き世界には勝てないのだ。

「お前は敗北から脱することを願う余り、大切なものを捨てた。だから、お前は負けるんだ」

アルファモンが、青年が、偉大なる皇帝が、到達者たちが、ラジエルモンが、ウォーグレイモンX抗体たちが、ビクトリーグレイモンたちが、ルーチエモンが、イグドラシルが、圧倒的なまでの力を誇るN・E・Oを前にしても負けを認めず、勝ちを期待し、諦めないでいる。それぞれのやり方で旧き世界の歴史を証明し、N^新・E^世・Oを否定して抑えている。

「勝つのは俺たちだ」そう言ったのは、誰だったか。あるいは、誰もが言ったのかもしれない。

そして、そんな彼らの背後から——

「コータを返せ！」

——世界中に背中を押されたように、ドルモンが勢い良くN・E・Oに向けて飛び出した。

第六十一話く見えなくともそこに在るく

旧き世界の者が叫ぶ。

何も成し遂げられてはいない新しいだけの者に世界は任せられないと。

自分たちの努力を、歴史を、証を、作り上げたものを——自分たちのモノを、お前たちには渡さないと。

そんな、老害めいた言葉を放つ。いつの世にも世代交代があつて、未来を担うのは新しき者で、だからこそ、そんな老害めいたことを言う者たちなど消えた方がマシだと、いつの世も囁かれるのに。

まさに、悪だ。

正義を謳う新しい世代は今まさに、悪である老害に殺されようとしていた。

「俺たちの世界は、渡さない」

アルファモンが、青年が、偉大なる皇帝が、到達者たちが、ラジエルモンが、ウオーグレイモンX抗体たちが、ビクトリーグレイモンたちが、ルーチエモンが、イグドラシルが——旧き世界が、自分勝手な理屈でN・E・Oを抑え込む。

腕力で抑えられているわけではなく、概念的なもので抑えられているわけでもない。なのに、N・E・Oは自分が抑えられているのを感じていた。押されているのを感じていた。

そして、だからこそか、抑圧された彼は見逃してしまふ。

「うおおおおおおお！」

この場で最もN・E・Oに文句のある者が出てくるのを。

飛び出したドルモンは素早く、そして力強くN・E・Oに向かった。勢いのままに突き進む。

「——このっ」

咄嗟、気づいたN・E・Oがドルモンを殺そうとする。だが、それが何故かできない。何故かある僅かな迷いによって、出来ない。その迷いが一瞬の隙を生む。

そしてその一瞬で、

「コータああああああ！」

ドルモンがN・E・Oの下に辿り着く。否、コータの下に辿り着く。

力強くその頭を振り上げて、思いつきり。

「返せっ！」

力強いドルモンの頭突きが、N・E・Oの頭に決まった。

「つくう！」

ドルモンの頭に激しい痛みが走った。N・E・Oは石頭でもあつたらしい。

痛みへのたうち回りそうになりながらも、ドルモンは引かない。痛みにも構わず、頭を押し付ける。

「――！」

言葉が出ない。出す余裕もない。

ただひたすらに夢中だった。

「――！」

もうこれしかないドルモンは考えていたのだ。

だって、ドルモンはわかっている。

自分たちには、「彼ら」のような絆デジヴァイスXの証はないけれど。

証なんてなくとも、それはそこにあることを知っている。

証なんてなくとも、繋がっていることを知っている。

証なんてなくとも、伝わることを知っている。

だから、ドルモンはこれしかないと思うのだ。幸いにして、証に変わる道標をドルモンは持っている。だから、彼はやはりこれが最善だと思ふのだ。

「――！」

それは、プロトタイプデジモンのみが持つモノ。

デジモンの核
デジコアを外部から書き換えられる——言い換えれば、外部とプロトタイプデジモンが直接繋がることができる、旧式のインターフェース。

それを、自分の頭にある石を、ドルモンはN・E・Oに押し付ける。そうすることで、N新・E世・O界にアクセスできることを、コータと繋

がれることを願って。

「繋がれええええっ！」

そして、ドルモンは賭けに勝った。

その時、何も無い空間でコータは目を覚ました。自然に目が覚めた訳ではない。誰かによって起きられた気がしていた。まるで、部屋で眠っていたら誰かが入って来て、その物音で睡眠を邪魔されたとばかりに。

しかし、コータは気づいていた。その誰かは、

「……あいつ」

ドルモンであると。

ついでに、今の自分の状況にも気づいた。というか、知った。今の彼はN・E・Oの一部であり、だからこそ、N・E・Oを通して大体のことがわかったのだ。

「……」

どうするべきか、とコータは一人考える。

目が覚めたからといって、彼に何かが出来る訳ではないのだ。この何も無い空間の中、イメージが彼に感覚を与えているのか、立っている自分を認識できるコータだが、それだけだ。

特殊な能力も、ずば抜けた頭脳も、何かを為す技能もない彼では、せいぜいが考えることが限界だった。

コータは今やN・E・Oの一部ではあるが、だからといって、現在N・E・Oを動かしているアポカリモンから、N・E・Oの行動権を奪い取れる訳ではないということだ。

「困った」

移動してみようにも、どこまで歩いてても何も無い空間から脱せられない。というか、同じ場所をぐるぐるとループしていることがコータにはわかった。内側から自分が瓦解することのないようにするため、アポカリモンの差金だろう。

どうやら目が覚めたからといってそこまで自由があるわけではならしいことがわかって、コータはがっくりと肩を落とす。

もちろん諦める気は毛頭ないが、それにしてもこれは絶望的な状況だ。

状況を把握して、コータは笑った。

「……ま、これくらいはいつものことか」

自分の相棒が諦め悪く足掻いているのを、彼は感じ取った。それこそ、まるで目のないモグラのように。

だからこそ、途切れた道がいつ繋がってもいいように、その時を見逃さないように、彼も諦め悪く足掻く。

同じくモグラのように、彼ららしく。

そして気づけば、ドルモンは真っ白な空間にいた。これが、N・E・Oの中なのだろう。何となくだが、ドルモンにはそれが理解できた。しかし、どうにも寂しい場所だ、とドルモンは思う。

新しい世界だから当然だが、ここには何もない。空っぽな器、空っぽの場所、大層なそれだけが先に用意されただけで、中に入るべきものが何もない。もちろんその部分はこれからなのだろうが、それをわかった上でやはりドルモンは思うのだ。寂しい場所だ、と。

「早くコータを取り返さないと」ドルモンは頭を振って気を入れ直した。

世界そのものに不正アクセスしているのだ。N・E・Oがその気になればドルモンなど吹っ飛んでしまおうし、そうでなくともこのやり方は命懸けだ。気づかないうちに体力が限界を迎えて、息絶えてしまってもおかしくはない。

元々、長々といられる場所ではないのだ。

ドルモンはほんの少しの焦りと共に、辺りを見渡した。やはり何もない。

「コータ……!」

ドルモンは何もない空間を駆け出した。

もちろん、それはドルモンのイメージによってアクセス&サーチがそう感じられているというだけの話なのだが——やはり、これがいいとドルモンは笑う。

書庫で本を捲るイメージよりも、パソコンで情報を検索するイメージよりも、彼にとつては直接歩いて探すイメージがしっくり来る。

なぜならばこれこそが彼らの、ドルモンとコータの生き方だったから。彼らは行き当たりばったりで、その日暮しで、文明的文化的など程遠く、アナログ的に世界に生きていたから。

どれだけ非効率的でも、馴染み深いこれの方が見つけれられるのではないかと、ドルモンは本能的に思ったのだ。

「私を、探るなあー！」

だが、当然だが、在宅中に泥棒に家探しされて気づかない者などない。

その時、ドルモンが感じたのは悪寒だった。

そこにいたら死ぬ、そこにいたら殺される。本能が先立つて感じたそれに従って、彼は避けた。

「っー！」

直後、そこに現れたのは泥。アポカリモンが出したものに似ているそれは、捏ねくりあつて寄り固まつて形作られ、そして、アポカリモンとなる。

「させん、させん、させんっー！」

アポカリモンがドルモンの前に立ち塞がった。

これ以上は探らせないとばかりに、彼らはドルモンを殺そうとしていた。それは裏を返せば、探られたくないものがあるということだ。

「っ。っ。っまで来て——！」

そのことにドルモンは気づけなかったが。

それでも、そこが近いと本能はわかつていたのかもしれない。だからこそ、ドルモンはこの絶望的状况の中、何故か期待が沸き上がってくるのを感じていた。

「旧き世界が何だ。歴史が何だ。ようやく我々の歴史を始められるのに、ここでまた終わらせられて堪るか。終わって堪るか。まだ何も始まってはいないのに——！」

アポカリモンが吠えて、ドルモンめがけて触手が殺到する。

向かい来る一つの触手を、ドルモンは何とか躲した。が、即座に次

が来る。ドルモンに躲しきれぬ量ではない。それでも、ドルモンは諦めなかった。

諦められず、彼は

「うおおおおおおおー！」

触手の一つに飛び乗って、その上を駆ける。そんなドルモンを振り下ろさんと、触手が殺到し、不安定な足場が大地震の如く揺れた。

「つくー！」

立っていられないほどの揺れ。

ドルモンはすぐさま飛び降りて、さらに突き進む。

「ゴオーターアー！」

吐き出した鉄球を勢いに変えて、触手を躲す。

迫り来る触手の余波を受け取って、スピードを上げる。

目の前にある触手を盾に変えて、触手を防ぐ。

アポカリモンに比べて、たかがで済ませられるほどの弱さしか持っていないドルモンは、しかし、アポカリモンの猛攻を凌いでいた。

それが、アポカリモンにとってはどうしてもおぞましく思えてしまつて。

アポカリモンは一瞬だけ気圧された。たかが成長期の小僧に、と。

その一瞬の隙に、ドルモンは自分をねじ込む。

「俺たちは——」

力強く地を蹴って、アポカリモンを飛び越え、その先に向かう。

「——負けないんだー！」

ドルモンの額の石が光る。

道がつながる。伸ばした手が、ついに届く。

「ゴーター！」

「ドルモンー！」

そして、ようやくの再会が果たされる。

第六十二話くそれが世の道理く

その時、コータは自分のために伸ばされた手をはつきりと感じ取った。何もない世界で、見る限りでは誰もいないのに、しかし、それでも何処からか自分のために発せられた声を聞き取った。

どれだけ時が越えていようと、どれだけ場所が離れていようと、確かに繋がっているモノがある。確かに繋がっているモノが形を作つて実を作る。

きっとそれこそが未来であるのだろう、とコータは笑う。

彼はこの時、感じた“未来”を見たのだ。

自分がいても、相棒がいても、自分がいなくても、相棒もいなくても、自分の知る誰もがいなくても——どんな形でも、どんな時でも、世界は変わらないのだろう。自分たちの道が誰かの道へとつながっていく、自分たちと同じような誰かが生きていく、そんな世界だった。

そんな世界こそが良いものだ、見たのだ。

そんな世界こそが未来だと、感じたのだ。

それはあんまりにも眩しくて、美しく、希望に溢れた快いものだった。

だから、コータは手を伸ばし返す。自分もその中にいたい、自分もそれを作る側に行きたいと——多くの歴史の作成者たちと同じように、何も残さず死んでいくのを良しとしなかったから。

そうして、しっかりとその未来の気配を掴み取って、彼は目を覚ました。

ドルモンがここにいる。コータがここに立っている。

アポカリモンはその光景を焦りと共に見ていた。内部分裂によるN・E・O崩壊の危険がいよいよ現実的なものとなってきたからだ。

「貴様ら……い！」

アポカリモンの触手が動いた。

焦りからか、先ほどにも増して苛烈な猛攻をコータを背に乗せたドルモンは華麗に躲した。

「次右、左、その後ろから横薙ぎで、上だ！」

「もつとわかりやすく言つて！」

このイメージを視覚的・感覚的に捉えているこの場所において、外での低スペックなど意味を持たないというのか。

それとも、プロトタイプ独自の情報の書き換え能力によるものか。

はたまた、ただの奇跡か。

あるいは、アポカリモン自身に原因があるのか。

コータの力を得て、ドルモンは圧倒的なまでに差があるはずのアポカリモンの猛攻を躲せていた。

「つく——！」

当たれば殺せるのに。目の前でうろちよろして潰せない羽虫を鬱陶しく思うように、アポカリモンは苛立っていた。

とはいえ、だ。

「このままじゃ——！」ドルモンが焦ったような声を上げる。

そうだ、このままではダメだ。

ドルモンたちはアポカリモンの猛攻を躲せているだけだ。ドルモンたちにはアポカリモンに届く武器がない。力がない。

躲せているだけで、敗北を先延ばしにしているだけで、勝ち目が無い。

「本当にそう思うか？」

だが、それは有り得ないと。勝ち目はある、とコータは不敵に笑った。

「えっ」

「あ、上。左右から同時に来るぞ」

「いや、それよりもどうということ!？」

触手を躲しながら、ドルモンは必死にコータに聞く。

「いいから躲すのに集中してろ。ってか、躲しつつ突つ込め」

「ええええっ」

すぐに回避指示が来て、慌ててドルモンは回避に専念する。

力強くコータは「大丈夫。信じて」とそう言った。何かを確信しているような、そんな言葉だった。この防戦一方の絶望的状况にして

は、随分と勝気の籠った言葉だった。

「わかったよっ！」

もとより、疑ってなどいない。ただビックリしていただけだ。

ドルモンは駆け出した。ただひたすら回避する動きから、回避しつつ前進する動きにシフトする。

「上だ」

「あいよっ！」

上から来る触手を前方に駆けて躲す。

「右だ！」

「おう！」

右から来る触手を、前方に跳んで躲す。

「下だ！」

「うおっ」

下から来る触手を、前方に転がって躲す。

「後ろだ！」

「ぬがっ」

背後から迫る触手を、前方に走ったままで躲す。

そして、

「前から来るぞ！」

「ぬおおおおおおおおお！」

壁のように目の前に突き出された触手、その上に飛び乗って駆け上っていく。

ありとあらゆる方向から来る触手を置き去りに、振り返ることはせず、ただひたすら前へと、彼らはアポカリモンの本体の下へと駆け抜けていく。

「悪いけどオレは、オレたちは——」

アポカリモンの下まであと少し。

現実逃避を続ける子供に事実を突きつける大人のように、コータは声を出す。

「——まだ敗者じゃない！」

そうだ。アポカリモンは過去の敗者の集合体で、故に、敗れたこと

が決まっている。彼らがどれだけ何かをしようと、過去は変えられない。彼らには敗北という結末しかなかった。

一方で、コータたちはまだ生きていて、故に、勝敗はまだ決まっていない。彼らがどれだけ何かをするかによって、未来は変えられる。無論、敗北の可能性もあるが、当然、勝利の可能性もある。

それは決定的な差だ。その差を些細と見るか、それとも重大と見るか、それは人に依るだろうが、多くの者たちは前者と見るだろう。

その差が、希望や期待といった良き可能性を押し潰し、優劣を付け、勝敗を決めるのだから。残酷なまでの線引きがなされるのだから。

これは、初めから決まっていたことだった。残酷なまでに確定された勝敗だった。わかりきったことだった。

だが、それでも、

「我々は」

アポカリモンはそんな世界の道理を覆し、生きたたかった勝ちたのだ。

「うおおおおおおおー！」

アポカリモンの目の前で、駆け抜け切ったドルモンが飛び上がる。そして、

「俺たちの勝ちだあああああー！」

ドルモンがアポカリモンに激突する。

その姿は破壊の竜だった。いや、黒き聖騎士だった。いやいや、それらとも全く違う誰かだった。きつとそれこそは、彼の未来の姿だったのだろう。

どんな姿だったのか、この場の誰にもはつきりとはわからなかった。

ただ一つ言えるのは、それはアポカリモンにはもうないものだということだ。

「――羨ましいな」

結局、道理は覆らなかった。

当たり前のように、大いなる過去は小さな未来に敗けたのだ。

アポカリモンは敗北者であることを、つまり、この敗北を認めてい

た。

敗者や弱者には救いなどないというこの残酷なまでの結果を、いつものように嘆きながら、彼らはこのN・E・Oの内部から消え始めていた。

もう何も言えないと、彼らは静かに消えていつていた。

「おい」

だがしかし、そんな何も言わずに消えていく彼らに、コータはまだ用があった。

まあ、用と言うほど大層なものではないか。それが敗者を死体蹴りする勝利宣言になっても、もう二度と会わないだろう者に投げかける別れの儀式になっても構わない。

ただ、彼は言いたかったのだ。

「オレは生きていく。お前のおかげでな」

コータはその言葉を言いたかったのだ。だって、ここにいるコータはそもそもアポカリモンがいなければ生まれていなかったのだから。「……そうか。お前は生き、残るのか」

僅かに目を見開いて、アポカリモンが小さく息を吐いた。それは歓喜のものか、はたまた悲嘆のものか。

ただ一つわかることは、アポカリモンはやっと気づけたのだろう。誰かたちの集合体ではなく、ただのアポカリモンとして、コータの言葉によって気づくことがあったのだ。

「ああ、本当に——」

すべての命は生きるためにある。

だけど、生きるということは苛まれる苦しみと立ちはだかる壁の連続で、その頂点にあるのが死という終わりだ。いつか死を迎えることは確定されたことで生き続けることなどできはしないし、苦しみと壁のない望み通り思い通りの楽な生を生きられる者などもない。

結果、生まれるのは生の敗北者。志半ば、生を望むのに死を迎えてしまうということ。

でも、だからこそ、こうも言える。生きていられるというのは幸せないことで、死という絶対の終わりに対して寛容になれるほどに良き

結末を迎えられることはとても難しい。しかし、もしそんな結末に至れたのなら、それはきつと幸せなことなのだ。

「――生きる死ぬことは難しい」

自分が消えても、残るものはある。否、残せるものはある。

アポカリモン 自分が消えても、子供コータは残る。

その意味を、どう受け取ったのか。アポカリモンは静かに消えていった。

その姿を、どう見ていたのか。コータは静かに佇んでいた。

エピソード

そして、気がつけばN・E・Oはドルモンと共に宇宙のような数々の光が見える暗い空間に立っていた。

「オレN・E・Oのまんま!」驚きを露わに、コータは自分の身体を何度も弄る。しかし、結果は変わらない。

そんな彼に対して、驚くのは――

「っ、N・E・O!」

――コータが戻ってくると思っていたドルモンである。

戦闘態勢で構えるドルモンに、N・E・Oは慌てて声を上げる。

「待て待て! オレだオレ! コータ!」

「……」

「信じろよ!」

「えー?」

「……そこは信じてくれよ! さっき何も言わずに信じてくれた信頼どこいった!」

「えー?」

「お前わかってやってるだろ!」

まあ、ドルモンとしても自分の相棒を見間違うはずもない。いや、見た目だけで言えば見間違ってもおかしくはないのだが。

ともあれ、これは彼にとって軽い冗談であった。

なにせ、あの数百年分は過ぎたときさえ思えるほどの濃い僅かな、しかし、圧倒されるほどの絶望的戦いを越えられたのだから、そしてもう二度と戻らない可能性もあった自分の相棒が一応は無事に戻ってきたのだから、ドルモンは浮ついた気分になってふぎけなくなったのである。

もちろん、それはN・E・Oも同じなわけで、だからこそ、彼らはこの今の幸せに浸る。

「むう、良いところですよまんのじやが」

一方で、そんな彼らに水を差したのはボコモン――ではなく、それと同じ声を発生させている水晶の結晶体、すなわち、イグドラシルだ。

「イグドラシル！」

「本当に今回は助かった。お前さんたちのおかげじゃ」

いけしゃあしゃあとして声を発生させるイグドラシルに、
N・E・Oは笑う。

「よく言うよ。はじめっから計算尽くだったくせに」

「何を言う。料理と一緒にじゃ。レシピを知っているところで、材料がなければどうしようもならん。此度の結果はようやく辿り着いた結果なのだからの」

イグドラシルのその声は、肩の荷が降りたような、ひと仕事終えたような安堵の声だった。

まあ、イグドラシルも苦労したのだろう。

コータ（真）とその相棒では無理だった。歴史にいた誰がいても無理だった。アポカリモンによって生み出されたN・E・Oがいなければ、どうあがいても「この結果」には辿り着けなかった。

この結果のために、イグドラシルはずっと頑張っていたのだ。

「そういや、他のみんなは？」 思い出したように、ドルモンが聞く。

「ああ、デジモンクロニクルは閉じた。多方は還ったよ。いるべき場所にな。もちろん、訳あって未だ残っている者もいるが」

「訳？」

「それは追々の。さて……——」

ドルモンの問いには答えず、イグドラシルはN・E・Oとドルモンを見た。

そして、問う。

「すべては終わった。これから先には未来がある。お前さんたちもいる、未来が続く。さあ、お前さんたちはどうしたい？」

世界の管理者らしいと言うべきか、イグドラシルは彼らに彼らの未来を聞いていた。彼らが望む未来を問うていた。

その意味を、N・E・Oもドルモンもわかっている。

「人間の世界に行きたいというのなら送ってやろう。わしの世界に生きたいというのなら歓迎しよう。N・E・O、新しい世界そのものよ。旧き世界に未練があるというのなら、姿だろが場所だろがわ

しがどうにかしよう」

イグドラシルの無機質な水晶の姿が、N・E・Oたちにはその時だけボコモンの姿に見えて、

「わかつてるくせに」

N・E・Oは笑った。

そんな彼の姿を嬉しそうに見て、ドルモンも力強く頷く。

「確かに」

イグドラシルは面白そうな声を発生させた。

もちろん、N・E・Oたちはその裏にある感情に気づいて、だからこそ、苦笑する。そして、言い切った。

「オレはここでお別れだ」

N・E・Oは、いや、コータたちはずっとただただ生きてきた。

目の前に生があつて、追ってくる死があつて、それらに向かい合っていただけの今までだった。必死すぎて、それに向かい合うことしかできなかった日々だった。

だけど、今はもう違う。彼はやりたいことを見つけたのだ。

例えばそれがいつかの日、彼らが否定したことであっても。それでも、あの時とは違う心境で、それとは違う形で、成し遂げたいと思つたのだ。

「オレたちは新しい世界を作る」

タイガーヴェスパモンたちが作り上げた理想郷。

そして、アポカリモンが成そうとして、しかし、その過去を引きずるが故に旧世界に対する想いを捨てられず、結果として成せなかったこと。

「N・E・Oの力をフルに使って、誰もが生きられる世界を作る」

彼らと相対し、下し、最期を看取ってしまった者として、N・E・Oたちは思うところがあつた。

同じ形にはなりようがなくとも、それでも引き継ぎたくなつたのだ。

より良い世界を、より良い未来を。そんな誰しもが願うことを——
彼らは勝者として、当然のようにそんな世界に生きたくなつたのだ。

だからこそ、彼らはこの選択をする。

「まあ、わしとしてはわしらの世界に何もなければそれでいいが……いいのか？」

躊躇いがちに、イグドラシルは聞いた。その行く道が大変なものだと知っているからこそその問いだった。

一方で、愚問だとばかりにN・E・Oは力強く答える。

「ああ。やりがいのある良いことだろ。生き残った者は未来に行く。それはつまり、生き残った者が未来を創るってことだ。そんな当然のことを、オレはやるだけだ」

「俺たちは、だろ！」

ドルモンの言葉に、N・E・Oは嬉しそうに笑った。

それはドルモンもそんな彼の「夢」を支持するということ、自分では独りではないということの証明でもあるからだ。

「大丈夫だ。ありがとう」N・E・Oの言葉に、

「大丈夫大丈夫！」ドルモンの言葉に、

「そうか」とイグドラシルは何も言えなかった。

だからこそ、イグドラシルは――

「ま、達者でな。たまには顔を見せるんじやぞ」

――孫を送り出す祖父母のようなことを言った。それはイグドラシルとしての言葉だったのだろう。決して、ボコモンとしての言葉ではなかったはずだ。

それでも、イグドラシルはそれしか言わなかった。

「それじゃ、さっさと行かんか。わしもこの滅茶苦茶になった世界を作り直さなくてはいかんから忙しいんじやい。お前さんらのように手伝ってくれる者たちもいないんじやからの！」

追い払うように、イグドラシルは声を発生させる。もしイグドラシルに人間のような手があったのなら、しっしっしと手を振っていたことだろう。

そんなイグドラシルの変わりようを前にして「そっちがいろいろと引き止めてたくせに」と笑って、N・E・Oたちは背を向けた。

「それじゃあ、元気でな！」

N・E・Oたちは手を振って、イグドラシルから離れていく。どんな世界でもない場所へ向けて、世界の外へと突き進んでいく。そこには迷いも何もなく、未来への期待と希望だけがあつて。まあ、当然だろう。

ただただ生きるために生きるのではない、より良い未来のために生きていける。

獣のように弱肉強食だった今までとは何もかもが違うが、人として日々前進していける。

そんな、彼らの人生はここからようやく始まるのだ。

D・C. ■■■ 新世界

それは、何処かの新しい世界だった。かつてNEWデジタルワールドと呼ばれた世界があつたが、そんな新しきでさえ過去のものとする最新の世界だった。

デジモンがいて、デジモン以外のデジタル生命体もいて、時には人間すら訪れる、従来の世界とは少し変わった世界だ。

それがどのような理念の下に作られたのか、理念理想が成功しているのか、それは誰にもわからない。

だが、他世界からもその世界はそこそこ評価されており、こう言われていた。

—— 未完成ながらも、だからこそか、混沌可笑しなとした世界だと。

いつも忙しく、騒動の種に困らず、他の世界と変わらない一端の世界だった。

だから、今日も今日とてその世界の中心は大わらわだ。

「なんかルーチェモンがトコモン状態で遊びに来て、可愛さ(笑)とカリスマを使ってファンクラブ軍団作ってるんだけど!？」

「メイクーモンに対処させろ!」

「今ラグエルモンだから、そこまで可愛くないよ!」

「ファンクラブじゃなくてルーチェモンを何とかさせろよ!」

管理者は旧き世界から一緒に来た者たち——あの日、イグドラシルにワガママを言って生き返らせてもらった者たち——と協力して世

界を運営していた。

いつの間にかと言うべきか、何だかんだの腐れ縁でと言うべきか。

「つーか、メイク^{ラグ}エ^{エル}モ^{モン}出かけたけど」相棒の言葉に、

「は？ 何も聞いてないぞ。どこに？」管理者は聞き返す。

返って来た言葉は、予想外のものだった。

「三大天使のどこ」

「なんでっ!？」

「なんかいざという時に役に立たないやつと、悪堕ちばっかで仕事増やすやつに愛想尽かした女神様が墮天しちゃって危機的状況だからヘルプに呼ばれたらしい」

「それなんか別の危機にならないか!? 嫌な予感するんだけど!」

酷い有様だ。次から次へと問題が発生し、仕事が増える。

まあ、それは他世界も同じなのだが、やはり若いだけあつて民間の力が育ちきっていない分、この世界は管理者が直々にどうにかしないといけない案件が多かった。

「あ、ファンクラブ軍団が向かって来てるみたい」相棒からの報告に、「なら、ビクトリーグレイモンとズイードガルルモンだ!」管理者は名案を叩き出す。

だが、無駄だった。

「あ、その二人は普通のとか黒いのとかSとかBとかに続く新しいハイパーオメガモンになるって休暇中だよ」

「あいつら本当はサボリ魔だろ!? つーかオメガモンばっかそんなにいてたまるか!」

いつかの日、彼らは休暇といって過去世界にいたことを思い出した管理者が叫ぶ。

ちなみにどこかの世界、慈悲だかなんだかと現在進行形でオメガモンはまだまだ増えているのだが、自分の世界で手一杯な彼には気づけない。

「手紙書いて出しといてくれ!」

仕方ないとばかりに、管理者は今している仕事を相棒に丸投げする。そして、直々に出張った。

そんな彼の姿を見送って——管理者の相棒は、管理者の椅子に座った。せつかなので偉そうに振舞ってみたり、座り心地を堪能したりして、その後ようやく仕事をすする。

手紙を、書く。

「まだ全然書いてないじゃん。えーつと……——うん、シンプルでいいんだよ。シンプルで。あ、この世界の名前決めてないな。うーん、ま、いつか。これで。よし、送信！」

懐かしの世界へと手紙が送信されたのをしっかりと確認して、管理者の相棒はこの世界の中心であるその場所を出て行ったのだった。

——そんなわけで、そちらが出来たばかりの頃のように出来たばかりのこちらはいろいろと大変ですが、まあ、何とかやっています。是非遊びに来てください。

——旧世界へ、新世界より。